小泉先生そのほか

厨川白村著

積善館發兌

小泉八雲

The Yellow Book

An Illustrated Quarterly

Volume I April 1894

London: Elkin Mathews & John Lane
Boston: Copeland & Day

Price 5/- Net

Cover Design of the Yellow Book
By Aubrey Beardsley

ALI　BABA
(A. Beardsley)

(「わかき藝術家のむれ」參照)

自己の文集に名づくるに平漢簡明なる適當の語を見出し得なかつた。そこで卷頭の一篇の題をとつて、之に「そのほか」の文字を添へた。かかる書名は日本に於て全く前例なきものではあるが、西人の詩集や論集に "………and Other Poems" "………and Other Essays" など云ふに同じく、毫も奇を衒ふの意はない。「及び其他」など云ふ感じのわるい言葉だけは、如何なる場合にも私は避けたいと思ふ。

十一月の中旬、本書の印刷成れる時、平和克復の報を聞いて喜びに堪へず、急遽筆を呵して「平和の勝利」一篇を作り、卷末に加へた。世界文明に一新時期を劃すべき此大戰の結末が、人類生活史上の意義が極めて重大なるを思つたからだ。

大正七年十二月上浣京都に於て

著　者　誠

目　次

附　錄

挿畫目次

目次

小泉先生そのほか

厨川白村著

小泉先生

（近刊の講義集を讀む）

一　ラフカディオ・ヘルン

『贈從四位小泉八雲』

と恁う書けば、全く知らない人は日本人かと思ふだらうが、小泉先生の血管には日本人の血は一滴も流れてゐなかつた。美しい神祕と空想との世界に生きるケルト民族の愛蘭(アイアランド)人を父とし、むかし歐洲の花やかな藝術と文明とを生み出した希臘の國人を母としたる純粹の西洋人であつた。愛蘭(アイアランド)に育ち、佛蘭

西に學び米國に人となつて、四海に家なき飄零の孤客であつた先生は、東海のはてにありと傳ふる蓬萊の國にあこがれて、今から三十年ほど前、はじめて我が日本の國土に來られた。それはハアパアス社の一通信員としてであつた。のち出雲松江中學の敎師をして居られた間に、そこの舊藩士の女と結婚し、遂に日本に歸化して小泉姓を名乘られた。八雲の名は之から出たのだ。近代英文學の史上にスティヴンソンやキプリングと肩を比べる散文の巨擘として、歐米の文壇には先生のラフカディオ・ヘルンと云ふ本名の方が轟き渡つてゐる。多少讀書の趣味を解し、或は苟くも日本の存在を知れる英米人にして、先生の名を知らぬ者は殆ど無からう。知らぬのは日本人ばかりだ。敎育ありと稱する邦人が英米へ行つて、かの國人からヘルン先生、――即ち『小泉八雲』の事を訊かれて間誤ついた滑稽を、私は幾たびも見もし聞きもした。

ラフカディオの名は、世界最大の女詩人と呼ばれるサツフオが望みなき戀

に身を投げたと傳へられる希臘（ギリシヤ）のリユカディアの海に因める名だと聞く。またジプシイに緣あるヘルンの姓は、英語の鷺（ヘロン）と音相通ずるといふので、先生は羽織や、著書の扉（タイトルペーヂ）に押す紋どころに、二羽の鷺を圖案化して用ひて居られた。

日本を今日の如く西洋諸國に名高くした者は、必ずしも數次の戰勝と國運の隆昌とのみではあるまい。之には先生の光絢婉美の麗筆が與つて力ある事を思はねばならぬ。見たまへ、唯觀光を目的として來朝する英米人の十中八九までは、先生の著書「こころ」「東方より」「日本、その解釋」「怪談」「日本雜錄」「骨董」「日本瞥見錄」「佛陀園拾遺」「影」等の諸作の愛讀者である、或は少くとも其一二を必ず行李の底に收めてゐる人たちではないか。

朝廷が國家に對する功績を嘉（よみ）し給うて故人に贈位の御沙汰のある時、たとひ歸化人であるとは云へ、純然たる白人を之に加へさせられた事は、未だ曾

てわが國の史上に類例なき聖代の慶事であつた。先生はたとひ長く東京の大學に英文學を講ぜられたにもせよ、其名聲をして眞に世界的ならしめた者は、矢張り文筆の人としてである。――かの俗物輩が動もすれば三文文士と嘲り、新聞屋と蔑み、遊冶郎と同一視せんとする操觚の人としてであつた。この純然たる白人の文士に向つて恁かる恩典を加へさせられた事は、日本の智的文明の進度に關して西人に非常な好印象を與へた。米國の新聞雜誌は、其頃この贈位の御沙汰を特筆大書して、嘆美の辭を以て之を世に傳へた。但し夫れはさきの大隈內閣時代の事である。

二　講義の上梓

今更また何を思ひ出して、また何の醉興で、小泉先生の事を書くのかと怪しむ人もあらう。私が今わざ／＼禿筆を呵して先生の事を書くのは、日本の

一般社會が餘りに先生を知らなさ過ぎるからのみではない。學士とか博士とか云ふ一寸偉さうな人たちが、一かど日本で新しい學問をした樣な顏をしながら、日本の文豪である先生の名をさへ知らないと云つて、外國人の前で赤恥を搔いてゐる珍談が多いからのみではない。私が十四五年前先生の講筵に侍した頃の大學の講義が、一昨年あたりから順次米國で出版せられ、それが彼國で非常な好評を博してゐる近來の好著である事を、唯だ一言したいからである。殊に日本で贈位の御沙汰のあつたのと、偶然にも殆ど時を同じうして、海のかなたで此講義出版の擧があつた事は、尠からず英語國民の注意を惹いた。

東京の文科大學に於ける先生の英文學講義は、前後約十年間にわたつた。勤勉なる先生は每年新しい講義題目を選ばれた。今日まで既に上梓せられたのが四冊。最初のは(一)『文學の解說』二卷と(二)『詩歌の鑑賞』一卷。そして今度

また新しく出たのが『人生と文學』(三)の一卷である。當時聽講の學生の筆記を集めて、今コラムビア大學の英文學教授ジョン・アアスキン君が校訂して、紐育の書肆から出版してゐるのだ。

アアスキン君は私も滯米中に屢々會つたが、詩才學殖ならび勝れた少壯有爲の敎授である。批評家としても詩人としても米國の文壇には廣く知られた人だけに、かの徒らに考證訓詁に耽つて、藝術として文學に何等の理解なき死灰枯木の如き腐儒(ペダント)とは全く選を異にした人だ。私共は小泉先生の講義が世に公にせらるに當つて、先づ最も適當なる校訂者を得た事を、衷心から喜ばねばならぬ。

先生の講義は每週九時間であつた。英文學概論が三時間、作品講讀が三時間の外に、詩歌小說戲曲などに關する色々の題目に就て、斷片的の講義が又三時間あつた。先生の豐かな天分と、斷じて他の模倣を許さない其獨創性(オリヂナリテイ)が

遺憾なく發揮せられ、また其特有の趣味鑑識に基ける批判が十分に聽講學生の前に披瀝せられたのは、主として此斷片的講義の三時間であつた。幸なるかな、このたび世に公にせられた物は、即ち講義の此部分のみである。

校訂者は其緒言のうちに、此講義集を嘆賞して隨分思ひ切つた事を云つた。曰く、『英文の文藝批評としては、コオルリッヂ以後の第一人。否な寧ろコオルリッヂと雖も或點に於て及び易からざる者あり』と。アアスキン君の此の語は彼國の文壇でもだいぶ問題になつた。しかし此言葉に多少の溢美誇張の嫌ひありとは云へ、私は先生の文藝評論が、確かに詩人コオルリッヂの『沙翁講演』と同一系統に屬する者である事だけは斷言して可いと思ふ。

北歐傳說を說き、英國の古謠を論じ、沙翁以後キプリング、メレディスに至る諸星を品隲し、更にまた先生平素の愛讀書であつた佛蘭西の作物からは、近代のモウパッサン、ボドレヱル、ロティ等の諸作を紹介し、是等の書が未だ

今日の如く日本や英米の讀書界に行はれなかつた頃に早くも之を絕東の青年學生に傳へ、西歐新思潮の歸向する所を示されたのであつた。すべてを容れんとし、總てを迎へんとするに急なる若き人々の心に、豊麗なる英佛文學の深き興味をそゝられた者は、極めて廣汎なる範圍にわたつて題目を擇ばれた先生の此講義であつた。

これ等と同じ題目を取扱つた英米の評論は固より汗牛充棟であるが、此書は思想家として、また批評家としての先生獨得の鑑賞眼に映じた純然たる主觀的批評である丈けに、英米諸國に於て他に全く類例なき唯一(ユニク)の評論である。しかし先生は之を文藝評論として自ら筆を下されたのでもなく、況んやまた之を世に公にする意志は少しも持たれ無かつたのである。或人が生前この講義出版の事を慫慂した時、先生は言下に之を斥けて、『あれはまだ十回十五回の改竄を要する。よし改竄を加へても、其丈けの勞に値ひする者では無い』と

答へられたさうだ。文章に非常な苦心をして推敲改竄に細心の用意を怠らないのは、東西古今すべて皆藝術的良心ある名匠の常である。かの紅葉山人の如きは書いては直し、直しては書き、餘白が無くなつて、遂には紙を貼り附けてまた其上を直すと云ふ有樣。其原稿紙は遂に糊の爲め板の如くなり、書き入れと線と、墨で消した跡とが交錯複雜して、眞に活版屋泣かせに成つてゐるのを見て、私はつく〴〵感心した事があるが、小泉先生は自著を世に公にせられる時、いつも其苦心は非常なものであつたと聞いてゐる。一度書き上げた原稿は數日間故意とこれを篋底にをさめ、よほど時を經てのち、更に夫れを取り出していくたびか添删補訂し、十分意に滿つるまでは決して之を公にせられなかつたと聞く。世界を驚かした其一代の名文は悉くの如くにして成つたのである。從つて教室で爲た講義を其儘稿本や筆記によつて上梓する事は、如何なる事情のもとに於ても先生としては眞に堪へ難き事であつた

らう。だから私は今此書を一個の文藝評論集として見るよりも、單に講義として評する事の正當なるを思ふのである。今もし先生を地下に呼び起して此書を示すならば、文藝批評としては先生自らと雖も意に滿たぬ節々が頗る多からうと思ふからだ。

(一) Interpretations of Literature. By Lafcadio Hearn.
(二) Appreciations of Poetry. By the Same.
(三) Life and Literature. By the Same. (Published by Dodd Mead & Co. New York)

三 その特色

批評論としてゞなく唯だ講義として、私は今其內容に就て思ひ付いた二三の特徴を擧げよう。多くの點に於て先生の講義は天下一品であつたからだ。
先生は其稀世の名文を以て我日本の美を西人に紹介せられた第一人であつ

たこと共に、また其趣味饒かなる講義を以て、日本の學生に正しく西歐の思想と文學とを傳ふるに最も成功した外國教師であつた。東西兩洋の間に立つ紹介者として、先生をして其天職を全うせしめたものは、獨り其流麗明快なる筆舌と該博なる學殖とのみではなかつた。徹頭徹尾眞の世界人（コスモポリタン）たる先生の特異なる人格が然らしめたのである。小泉先生は英國人でもなくまた米國人でもなく、さればとて純粹の日本人では無論なかつた。國土や國民に執着せんとする何等の偏見なくして、足跡は世界にあまねく、到る所に美を見出して之に同情し同感し、十分に之を享樂し得る人であつた。西洋人以上に西洋を理解すると共に、日本人以上に日本を理解した人であつた。恁くの如き浪漫的（ロマンティク）な人格を有（も）つた人は、世界に於て先生唯一人あるのみと云つても過言ではあるまい。この點に於て先生の如きは空前にしてまた恐らく絶後の人であつたらうと思ふ。

日本人が日本で西洋文學を講ずる事が至難の業であると同じく、西洋人が日本に來て西洋文學を講ずる事は尙ほ更に困難な仕事である。外國の大學に於ける研究法——しかも舊式な研究法を其儘に應用するなぞは固より言語道斷であるが、西洋の文學評論の受賣をして能事畢れりと爲す如きに至つては、學生こそ眞によい迷惑である。日本を愛し、日本を研究し、日本婦人と結婚せられた先生は、松江中學や熊本五高に敎鞭を執られた長い間の經驗に徵して日本人の物の考へかた、物の觀かたが、西人と全く異れる點を十分に理解せられた。此經驗と此理解とを以て、先生は東京大學の英文學講座を擔任せられた、そして日本人の詩觀日本人の思考法に適する樣に英文學を說かれたのであつた。試みに此講義集中の如何なる一章をでも通讀せられよ、是は日本人の爲に、日本人の美感に訴へようとして說かれた西歐文學の講說だと云ふ事が、特に際立つて讀者の注意を惹くのである。

たとへば耶蘇教を信じなければ、英文學は解らない樣に云ふ人がある。殊に是は西洋人の口癖の言ひ草だが、先生は決してそんな野暮な事は云はれなかつた。先生は聖書が偉大なる宗教文學であること、殊にゼィムス王欽定譯の英文聖書(イングリシユ・バイブル)が沙翁劇に次ぐ文學上の大作である事を諄々として私どもに說かれた。しかし宗教的に之を見る事は必要でないと斷言せられたのみか、そんな考へ方をする事は、文藝作品の優秀を理解するには邪魔になるだらうと迄極言されたのは面白い。(講義集『文學の解說』第二卷第三章『英文學に於ける聖書』參照)。先生は學校へ通勤するとき、わざ〳〵迂回して迄も耶蘇教會のそばを通る事を避けられた程に、耶蘇教嫌ひであつた。

十五六年前大學の講堂で先生の口から聞いて、それ以來不思議に私の頭にこびり附いてゐる批評は、十七世紀の詩人ロバアト・ハアリックが花鳥風月を詠じ、物のあはれを歌つた詩篇を說いて、是は漢詩や和歌俳句に最も近い者

だと云つて比較された事だ（同上、第七章參照）。私は今でも先生の此說には十分の賛意を表する者であるが、日本で英文學を說く外國敎師でこんな講義振りをする人は先づ滅多に無からうと思はれる。

作品や詩人の批判に關する微細なる點にわたつて、一々愿ういふ例を擧げれば際限は無いが、この東洋趣味の鑑賞眼あるが爲めに、古い作品に新しい味ひを求め、西歐の研究者が未だ曾て言ひ得なかつた所を道破し得た點は甚だ多い。此講義集が出版以來英米の讀書界に好評を博してゐるのは、全く此新しい東洋風の見かたがあつたからだ。

人に物を敎へると云ふのは、要するに理智の作用に訴へる事だ。理智にのみ訴ふるが故に殺風景になる、話が理に落ちて了ふ。どんな面白い文學作品でも敎場と云ふ所へ持ち出せば、大抵は乾燥無味蠟を嚙むが如き物となつて、愛想が盡きる。況んや夫れを讀んで點數の種にし、やがてはまた飯のたねに

もしようと云ふ了簡を抱くに至つては、試驗前に讀み直すのさへ眞に苦痛の極である。詩や小說は、矢張り書齋に獨坐して明窓淨几のもとに繙く可き者で、黑板(ボオルド)の前に持出すべき性質の物ではないかも知れぬ。下手(へた)な敎師になると、西洋の批評家の口眞似なんかで、こゝが巧(うま)いの、あの句が有名だのと獨り感服顏をして、其安賣りの感服を生徒にまで强ひるが、聽く者の方では何が有名なんだか巧いんだか、薩張り合點が行かぬ、小泉先生は自身ゆたかな、そして偉大な天分を有(も)たれた人だけに、此點では他の學究輩の斷じて企及す可からざる特色ある講義をせられた。

さらば其特色とは何ぞや。情緒本位の文學敎授法であつた。先生の尺牘集中の一篇に下の語がある。

『情緒の表現として、人生の描寫として、私は文學を敎へた。或る詩人を說くに當つて彼が與へる情緒の力と性質とを說明をしようと試みた。換言

せば、學生の想像力と情緒とに訴へる事を私の教授法の土臺とした』一通りパラフレエズで本文の説明を終り、難解の詞句を釋して後（出版せられた講義集には説明解釋の部分は大抵省畧されてゐる）先生は自分の美しい言葉で美しい詩の句を批評し、其藝術的意義を説かれた。ごて〳〵と理窟や事實を列べ立てるのではなく端的に聽者胸奥の琴線に響くやうな解釋を下された。理智を以て解すべからざる詩を、情緒に訴へて解せしめんと心掛けられた所に先生の講義の大なる特色があつた。かの徒らに西人の筆に成れる註疏の書を辿つて、一語源の説明に二時間三時間を棒に振り、遂には藝術の眞意にだも觸れ得ざる學究先生の爲す所とは眞に霄壤の差であつた。講じ終つて後、先生がいつも獨り言の樣によく云はれた Wonderfully beautiful! と云ふ言葉も、其時は既う能く私共の鈍感な胸にさへ響いて、成程と思はせられた。
旣に理智本位の講義でない丈けに瑣事（デティルス）にわたつては往々にして誤謬もあつ

た。年代などの思ひ違もあつたらしい。また其講義が組織的系統的でないと云ふ難も無いではなかつた。しかし夫は私ども學生が自分で調べれば出來る事であつた。自分で出來ない事を先生は爲て下すつた、それが嬉しいのである。私は外遊中屢々西洋人から小泉先生の事が訊かれた。その時私がいつも答へた What he gave us was not so much knowledge as inspiration の言葉のかげには、先生に對する心からなる感謝の外に、外國大學にうぢや〱してゐる腐儒（ペダント）へのあてつけがあつたのだ。講壇に立つて理を説き事實を傳ふるに巧なる人は多からうが、詩文を説いて貴き靈感（インスピレエシヨン）を與へ、之によつて青年學徒を指導し得る敎授は、天下果して幾人あるだらう。

　圖書館に籠城する者の事を惡く云つて「カン詰め」と云ふが、罐詰でも壜詰でも好いから、私は圖書館で一寸調べれば直ぐ解る樣な事を、敎室でわざ〱筆記させて貰ひたくはないと思ふ。飽くまで自己を發揮して、先人の道を踏

まない丈けの獨創性(オリヂナリテ)を有して居られた小泉先生は、先生の口からでなければ聞かれない多くの事を語られた。重箱の隅を楊子でほじくるアルバイト先生や屋上屋を架して喜んでゐる獨逸の學者は何と云はうとも、先生の講義には先生の人格の煌きがあつた。其個性が名匠の手に成る浮彫(うきぼり)を見る樣に鮮かに現れてゐた。西歐文學の大作が先生の極めて清新强烈なる主觀を透過して說かれた所に、庸劣の迂儒をして愧死せしむるに足る者があつた。

すぐれた獨創性(オリヂナリテ)に富んだ人だけに先生の趣味には偏した所があつた。江戸趣味の通人が頻におつな食べ物を漁るやうに、先生も亦たおつな作物に舌皷を打たれる事が多かつた。夫れがどうも私たち義仲信長そち退けの野武士の味覺に合はない事も往々にしてあつた。面白いから是非通讀せよと先生が薦められた本を讀んで見ても、一向野武士どもには面白くなかつた事も隨分あつた。さう云ふ所が今度出版された講義集にもよく見ねてゐる。たとへば、先

生は多くの怪談の類や、或は少年文學として英國に名高い『アリスの冒險』（リユヰス・カロル作）などを非常に面白いと云はれたが、私共には餘り有難くない物であつた。殊にリツトンの怪談に至つては、先生が最も嗜讀せられた物らしいが、之も今以て左程に思はぬ。先生がまた妖異險奇なる頽廢（デカダンス）の趣味に深き同情を持たれた事も、矢張りこの一例だ。ポウを愛しボドレエルを好まれたのが其何よりの證據である。

從つてまた尋常（かいなで）一樣の英國批評家の言説以上に秀でたる卓見は甚だ多かつた。十八世紀のブレエクが、まだ今日の樣に持囃されなかつた當時に於て、先生は此詩人を激賞して、『その頃の藝苑の荒れたるなかに、色も見知らず、匂ひは尙ほも奇しき不思議のあだ花よ』と云はれたのは、實に快心の事であつた。ウオヅウオスを喜ばずして、シエリイを褒められたのは殊に痛快を叫ばしめた。此の講義集の中に先生がデイツケンズを褒められなかつたと云つて

『ヘルンには「ユウモア」が解らないんだ』と不平さうに云つてゐた英吉利の或る老人に出喰はして、私は苦笑した事がある。

さて以上の如く述べると、先生の學風を、かの天才肌の創作家に有り勝ちな、淺薄な讀書趣味の樣に思ひ誤る人もあらうが、事實は決して左樣ではなかつた。否な左樣は成らない樣にと、先生は特に學生を戒めて居られた。現に此講義集のなかにも正確細心の學風あつて始めて詩文の鑑賞を爲し得べき事を切言せられた一節があるのだ。

先生は所謂學究の徒ではなかつた。從つて、さまで藝術的價値なきベォウルフやケエドモンの古詩の研究に沒頭して、動もすれば文藝の眞諦を逸し去らんとする英米大學の英文學教授とは、全く趣を異にした人であつた事は言ふ迄もない。その代り十六世紀頃以後の所謂近世英文學の全般にわたつて、先生の樣に博洽の識と鋭敏なる理解とを有つてゐる人は、英米第一流の大學

に於てすら餘り多くは無いと思ふ。是は旣刊四册の講義集の目次を見た丈で肯かれる事で、年々歳々題目を新にして、沙翁以後幾百幾十の作家と作品に就て、毫も受賣でない自己の鑑賞（アプリシエション）を語り得る者が、多士濟々たる英米の學界に於てすら果して何十人あるだらうか。先生の講義の中には純文學のみでなく、バアクレイやスペンサアの哲學（先生の樣な頭の人が何故あんなにスペンサアの綜合哲學を尊崇せられたのか今でも私は何だか矛盾の樣に思はれて成らない）の講義もあつた。また英文學以外に於ては、さすがに佛蘭西で敎育を受けた人だけに近世佛蘭西文學にも十分に精通して居られた。かのゴォチエの短篇集や、アナトオル・フランスの『シルヱストル・ボンナアルの罪』の英譯本は、先生の筆に成れる巧妙なる飜譯が、今日旣に標準譯となつてゐるのを見ても、佛文に於ける其素養の程を窺ふに足るではないか。殊に先生の創作の方面では、先づ其纖麗なる筆致からして、旣に佛蘭西文學の感化に負

ふ所大なるは私共の毫も疑はない點である。

言ふ迄もなく英米大學では英文學は即ち國文學の事であるから、之にはうんと力を入れてゐる。多い所では此の一講座に十二三人の教師が掛つて仕事をしてゐる。從つて銘々が分擔する時代とか題目とかは、極めて狹小な範圍であるから勢ひ其學者たちは自分の狹苦しい領分内に籠城して固くなつて了ふ。沙翁時代專門の人にアングロ・サクソンの古文學の話をすると、物理の先生が法律の事でも訊かれた時の樣な間拔面をしてゐるから可笑しい。日本では外國文學に對して慫んな設備をする必要もなく、また周圍の事情も無論許さない。勢ひ或程度までは八百屋店を張つて貰ふ必要があるが、八百屋式文學講座の擔任者としては、恐らく小泉先生ほどの適任者は又とあるまいと思ふ。

何等學府(アカデミツク)の閲歴(キアリア)を有しない新聞記者であつた先生の、著述を讀んだばかりで、其學殖と天分の凡ならざるを觀破し、直に之を東京の大學に招聘した

る人は、時の大學總長外山正一氏であつた。今から十二年前、即ち小泉先生の歿後間もなく出版されたエリザベス・ビスランド編纂『ヘルン傳及び尺牘集』のなかには、先生が友人に寄せられた手紙の二つ三つに、當時の東京文科大學の事を書かれたのがある。なかには讀んでゐて隨分破顏微笑を禁じ得ない節々も多いが、其一節に、自分の同僚の外國人には獨逸文學で萊府大學のドクトル何とか、哲學では獨逸何とか大學の誰々。そして何處の者とも素性の知れない者は吾輩一人であると云ふ文句があつたのを、私は今でもよく記憶してゐる。如何にも夫れには相違なかつた。學歷だの稱號だのと云ふ看板をブラ下げてゐないのは先生一人丈けであつた。それは兎に角、この四冊の講義集を今評壇の驚異として歡迎してゐる英米の讀書界は、恁かる天才を草廬に見出して此講義を爲すに至らしめたる故外山正一氏に對して、先づ大に感謝しなければならぬ。

この講義集に用ひられたる英語は中學卒業程度の語學力を以て、何等の苦痛なしに理解し得る極めて平易明快なる者である。單に詩文のみならず、晦澁なる哲學思想の解說に於てすらも、先生は殆んど難解の語を用ひずに說かれてゐた。評隲論議の書にして悉くも平明なる文辭を用ひたる者は他に多く類例は無いが、是は學殖文才共にすぐれた小泉先生の如き人にして始めて出來る藝當だと思ふ。橫文字の物を縱文字に直した奴を、我物顏に喋舌つてゐる樣な事では迚も恁うは行かない。敎師自分にも解つてゐない樣な外國語の術語なぞを矢鱈に振廻して、言ふ方にも聽く方にも珍紛漢な講義を、決して先生は爲られなかつた。私は平易なる英文を讀み得る凡ての日本の讀者に向つて、この珍らしい講義の書を、最良の文學入門書として、或は手引草として、推薦するに躊躇しない。

四　おもひで

また新しい年を一つ迎へた。既うかれこれ十五六年の昔にもならうか、教室で、師なる此天才の唇を洩れる美しい發音の英語に耳を澄ましながら、ノオトの上にペンを走らして、その片言隻句をも逃さじと書き留めたのは。

私に取つては左様いふ懐かしい思ひ出の附き纏ふ講義が、今海のかなたで上梓せられ新しく舶載せられた。ペーパ・ナイフで書物の縁を切る手さへもどかしう、先づ扉から序文目次へと目を通すうち、いつも新着の書を繙く折には嬉しい者の一つである紙の匂ひが、私の胸には何時に無い不思議の心持ちをそゝつた。久しう別れてゐた友と昔を語る時のやうな、また故郷で聞き慣れた古い歌の節面白きに心を奪はれる様な、我ながら怪しと思ふさまぐの興味に促されて、唯だ一息に全巻を通讀する。通讀し終つて瞑目一番すれば、先師のおもかげは今髣髴として眼底に在る。

先生は如何にも風采の揚らない人であつた。痩身矮軀、實に白人には珍しいほど小柄な人であつた。いつも前屈みに脊を圓うして、ひよこひよこと歩いて居られた。私たちが其講筵に侍してゐた時代には、旣に鬢髮霜をおいた半白の老人（？）で、かの洋袴（ズボン）の折目にさへ氣を配る英米人と異（ちが）つて、衣帽の末にはまた極端に無頓着な人であつた。殊に糊（スタアチ）でしやつちこばつたシャツだの、燕尾服だの高帽だのと云ふ類の物を、ひどく毛嫌ひされたらしい。先生の美しい花やかな文章を讀んで、一たびは其謦咳にも接したいと騷ぎ廻り、はては講演の爲めの渡米を求めて止まなかつた金髮碧眼の美人たちにして、若し先生のあの風采を見たならば、果して何と云つたらうかと、思へば可笑しくもある。いつか『朝日』の文展漫畫に、例の一平さんが、鏑木清方畫伯のむくつけき顏かたちと、其優艶なる作畫との對照（コントラスト）を描いて居られた時、私はこの小泉先生の文章と風采との更になほ著しき對照（コントラスト）に想ひ及ばざるを得な

かつた。

先生の鼻は希臘風の立派な恰好であつたが、南歐の血統の外に、また西(ウエスト)印度(インディース)地方に長く居られた爲か、顏の色は何だか赭顏とでも云ひたいやうな色であつた。兩眼殆ど視力なく、左は盲目、右は眼球が大きく飛び出して、夫れが又強度の近視であつた。時々極めて稀に衣囊から片眼鏡(モノクル)を出して、一寸右の目に當てられる。その稀世の名文に寫された日本の文物人情社會等の精透なる觀察は、すべて此弱い視力に片眼鏡を當てられる其僅か十秒二十秒間の凝視の結果であつたのだ。大きな眼玉をぎよろ付かせながら、心眼盲(めし)ひなる凡物には見ねない或物を、先生は恁うして常に鋭くもまた敏く、觀破せられたのであつた。

西洋婦人と先生の此眼鏡(モノクル)の事とを思ふ時、私の腦裏に深くも印象せられた一つの事件がある。

狷介なる先生は客に會ふ事を非常に忌がられたが、わけて西洋人が嫌であつた。先生歿後の文稿管理者（リテラリ エクセキユウタア）の様になつてゐる米國海軍の主計官マクドナルド氏の斡旋によつて、今度此講義集も世に出たのであるが、先生は平素此無二の親友の外、滅多に他の西洋人とは交際せられなかつた。何しろ先生は西洋の物質文明を厭はれて、早くから此東方の樂土に來られたのだから、かなたの文壇には殆ど其實在をさへ疑はれる神秘的人物の様に見倣され、それが又甚しく西人の好奇心をそゝつて居た。先生の崇拜者、その著書の多くの愛讀者は、はる〴〵此國に來朝して先生の大久保の邸を訪ねるが、みな素氣なく門前拂ひを喰はされたものだ。殊に西洋の女と云へば、それこそ毛蟲よりも嫌ひであつたらしい。ところが或日午後の講義の時間に、英國の女子教育家として可なり有名なH（エッチ）――と云ふ女が、二人の同行婦人と共に私共の背後に在る闥を排して教室に這入つて來た。そして其儘空（あ）いてゐる机のところ

に坐つた。忘れもしない、夫れは先生が私共に小說家シャロット・ブロンテの事を說いて居られた時間であつた。その英國婦人の一人はまた御苦勞にも手帳を引張り出して、私たちと一緒に筆記を始めた。先生が講義のうちに、ブロンテは愛蘭(アイアランド)血統の人だと述べられた時、此一行の英國婦人がにいッと顏見合はせて笑つてゐた其顏付を、私は今でも明かに記憶してゐる。

殆ど視力の利かなかつた小泉先生でも、この思ひ掛けない闖入者(インツルウダア)のあるのには氣付かれたものか、滅多に用ひられない例のあの片眼鏡(モノクル)を出された。それを右の目に當てがつて女どもの方を凝視すること三四秒、また直に夫れを衣嚢に收めて講義を續けられた。

其瞬間、思ひなしか、先生の面には不快の色が現れた。

のち先生が東京の文科大學を去られる樣になつたのは、此H――と云ふ女の參觀が、銳敏なる感性を有たれる先生に、色々の疑心暗鬼を起させたのが

源だとも傳へられてゐる。私も學校を卒業してから長い間教師をして飯を喰つてゐるから、屢次此種の經驗はあるが、一體あの參觀人だの視學員だのと云ふ者が、教室の一隅に恰も蠟燭の如くに突立つて、碌に解りもしない授業を見てゐるのは、教師に取つて頗る快からぬ者である。殊に其男が鼻眼鏡越しか何かで、小生意氣な面でもして居ると、何か御用ですか位は是非とも云つて遣りたくなる。苟くもおのれの學殖と經驗とに自信ある教師ならば、夫れを快しとする者は斷じて無いのである。或る地方の高等學校の外國教師が、日本の學校は何故恁う參觀者が多いのかと私に訊いた事もあつた。滿天下の教師諸君、私の此言には恐らく同感の士も多からうではないか。

H——と云ふ女の來觀は、先生の崇拜者としてゞあつたか、何であつたか、そんな事は茲に記すべき限ではない。唯だ夫れが先生には毛蟲よりも嫌ひな外國婦人であつた事を思ひたまへ。私は心から先生に同情する。鈍感な、利

害打算一天張りの俗輩には、到底この心持ちは解りもしまいが、

五　教室にて

教師は蒲鉾であると或人が云つた。黒板(ボールド)と云ふ板にしがみ附く肉の意だらうが、それならば當り前である。下手(へた)なのになると、黒板(ボールド)も生徒もそちのけにして、自分が一夜漬に拵へて來たノォトに、恰も岩に於ける牡蠣の如くにかぢり附く。そしてもう、斷末魔の迫つた樣な聲を出して絶叫してゐる。憐れむ可きかな私なぞも此仲間であらう。

そこへ行くと、さすが天才の小泉先生は偉かつた。引用すべき詩文の書のほか、紙ぎれ一枚と雖も教室には持つて來ずそらで話された。夫れも十年一日の如く、坊主がお經を讀む樣に同じ事を繰返すならば、私等にでも眞似は出來ようが、前にも述べた如く先生は年々歳々新しい題目で新しい講義をせ

られた。固より準備にも相當に骨を折られた事であらうが、いま次々に上梓せられてゐる此講義集の美しい、そしてよく整つた明快な文章は、あれが皆即座に即興的に先生の口から出た者である。學生に書き取らせる樣に、考へながらゆつくりと、しかし少しの淀みもなく語られた。時々は即興の散文詩とも云ひたい美しい文句や奇抜な警句が、口を突いて出るのであつた。咳唾珠を成すと云へば古からう、錦心繡腸、これを織り成せる五彩絢爛の絲をほごして、繰れども繰れども縷々として盡きざる趣は鮮かであつた。銀鈴を振る如き其聲は、また其文の美しきが如くに美しく、抑揚高低にさへ何の不自然も無かつた。斷續しつゝ、一言また一句、みな能く聽者の胸底に詩の靈興を傳ふるに足る者があつた。ふと目を擧げて先生を見ると、窓外を眺めながら講壇のあたりを、あちこちと靜かに歩いて居られた。

英文學史の講義の時だけは、極めて稀に名刺などの小さい紙ぎれに年代か

何かの覺書をして持つて居られた。しかし是は寧ろ例外であつた。

天才と云へば不規則な怠け者の樣に心得てゐる人もあらうが、勤勉努力の人であつた先生は非常に几帳面で、缺勤なぞは滅多にせられなかつた。講義の時間なぞもきつしりと守つて、鐘が鳴ると間もなく、重さうな風呂敷包みに美しい裝釘の詩集や文集を幾册も入れたのを提げて、あたふたと敎室に遣つて來られる。講壇に上つて先づ一揖し、ごく低い澄み渡つた聲で、Good morning, gentlemen と云ひながら、風呂敷包みを解かれるのが常であつた。書物のうち本文として引用すべき箇處には、各しるしの紙が挿んであつた。時間の終りに近くなつて其日講義すべき部分が終りかける事はあつても、先生は必ず鐘の鳴るまで何か知ら話された。時間ふさぎには隨分詰らない解り切つた事を、お祖父さんが孫にでも云つて聞かす樣に語られたが、夫れが皆の筆記帳に殘つてゐた者と見ゑて、此講義集の中にも其儘に出てゐる箇處が

ある。これなぞも先生が今若し見られたらば不快な思ひを爲られるだらうが、其講義の模樣を有の儘に世に傳へると云ふ上から見て、私は校訂者アアスキン君が之を削除しなかつた事を如何ばかりか嬉しく思ふのである。

先生はいつも俥から下りると直ぐ其儘教室に來られた。偉い學者たちの同僚に顔を合せるのが厭であつたのだらう、滅多に教官室と云ふ所には這入られなかつた。講義の間の休憩時間には獨りで校庭をぶら〳〵と逍遙して居られた。東京の大學には、あの地所がもと前田侯の舊邸であつた時代からの古い古い大きな池がある。この池の歷史には、先生が如何にも好まれさうな舊幕時代の妖艷な物語があつたか無いかは別問題として、とにかく何か由來の有つて欲しいやうな池である。幾百年の齡を重ねた鬱蒼たる喬木に取り卷かれて、よどめる水は、溷濁の色をなして何時も黑かつた。池のかなたの小山の上には、俗に『御殿』と稱する集會所の古風な建物がある。先生が最も好ま

れたのは即ち此池畔の逍遙で、例の前屈みに其あたりを歩みながら、なた豆の日本煙管や葉卷を燻らして居られるのが常であつた。近づいて教を乞ひたい事はあつても、私たちは先生の靜思を妨げる事を恐れて、滅多に側へは行かなかつた。落ち葉を踏みながら低徊して居られる其姿を遠くから望んで、先生の腦裏を往來してゐる美しい幻想の何物であるかを、想像して見る事もあつた。

雨の降る日でも、休憩時間に教官室へは決して行かれなかつた。その儘教室に殘つて好きな煙草も喫まず、唯だ默々として窓外の景色を眺めて居られた。さう云ふ時はお氣の毒だと私は思つた。之を見て天才は孤獨を喜ぶなぞと云つて澄ましてゐるのは、先生の胸底を察し得ざる迂儒の妄語だらう。

景色を見られても、先生には殆ど視力がなかつたから、常に煙靄糢糊たるさながら淡彩一抹の風景畫に對するやうに見ゐたのであらう。目には見ずし

て心に見られた其印象は、遂に全き藝術的表現を得て、色彩ゆたかなる文字に寫されたのだ。鋭敏なる其感性(センシビリテ)は、却つて此極めて烈しき近視眼の爲に幸ひせられ、部分的なる細微(シニユシエ)の點を拂拭し去つて、一幅の全景を心裡に活躍するの効果を收め得た。先生自らも其新聞記者時代に米國で書かれた論文のうちに、ハマアトンの『風景論』に關聯して此事を述べて居られる。(グウルド著『ヘルン傳』一〇九頁參照)。先生の文名を嫉み、或は日本の美を理解し得ざる西人は、ヘルンの描いた樣な美しい日本は何處にも無いと云ふ。いささか癪に障る批評ではあるが、一面から云へば、如何にも夫れには相違なかつた。

六　教師と文筆

教師と文筆とは仲の惡い者である。少くとも日本の學校に於ては確かに左樣だ　是は我國の教育界が噂に聞く頑冥固陋の徒の巣窟である爲か、或は西

洋のよりも遙に進んでゐる爲か、その邊は知らない、誰か閑人が考へて見たら可からう。

夏目さんが第一高等學校の敎師であつた時、其處女作『吾輩は猫である』を公にされた。文名一時に天下に高きを見て、或男が、あんな文は敎育家の書く可き者でないと陰口を叩いたさうだ。或人は飮まず書かず吹かざるを約して、遠く都を落ちのび、田舍の學校に敎師たるを得たと云ふ奇談もある。惩んな珍らしくも無い例を、今更擧げる丈けが野暮な位のものだらう。敎師をして居ながら詰らん事を書き立てるなよと、もう誰か云つて來さうな時分と、十年このかた心待ちにしてゐると笑つてゐた私の或友人もあつた。

小泉先生が異常の天才であり、また世界の文豪であつたと云ふ事は、敎師としての先生に何等の光彩を添へなかつたのみか、色々の意味に於て日本の學校では都合が惡かつたらしい。

文章は人格である。筆の尖の藝當ではない。苟くも一枝の筆を以て天下人心を動かす程の人には、その人格に何處か必ず強烈なる特異の色彩があつて、凡俗とは到底妥協調和の道なき者である事は云ふ迄もない。

これを呼んで變人となし、嘲つて偏屈者と云ひ、半狂人を以て遇し、一本調子として之を蔑視するのほか、眞に天才を尊重して縱橫に其驥足をのばさしむるの道を解せざる者は、即ち窮屈な今の日本の社會である。東西古今、單に文筆を以て衣食する事が至難の業でありとすれば、小泉先生ほどの人でさへも、矢張り敎師の職を忠實にやつて居られた。しかし又先生程に思切つて潔癖な非妥協的態度を以てしては、窮極に於て遂に何等かの迫害は免れなかつたらう。

實用的人物と老人との外は一切何者をも容るゝの餘地なき日本の國は、先生がながく足を留めて墳墓の地とせらるべき所では無かつたのである。さり

とて米國も駄目だ。三十年前のヴ井クトオリア朝ならば、英國も矢張り駄目であつた。こゝに至つて私は先生が米國から再び佛蘭西に戻られなかつた事を深く惜しむ者である。少くとも數年日本を觀察してのち、嘗て敎育を受けられた巴里の地に歸られ、若しそこで生涯を送られたならば、先生の生活と作品とは、更に偉大に、更に光輝ある者であつたらうと思ふ。先生は東京の文科大學を去られ、また米國コオチル大學應聘の事も果されず、早稻田大學に僅に數時間の講義を擔任せられたのみで、その浪漫的にして數奇なる生涯の最後の二年を送られた。此二箇年の先生の生活は決して快き者では無かつたらうと思ふとき、私は先生の爲に暗然として涙を呑まざるを得ない。

政客、俗吏、成金、坊主の輩は文士と云ふ言葉に非常な輕蔑の意味を寓してゐるが、敎育界となれば尙更に烈しい。文學を以て琴書に等しき遊戲なりと罵つた者もあれば、不健全不道德の本家本元だと心得てゐる者も甚だ多い。

生徒に向つて雜誌や小說類の閱讀を禁止し、殊に演劇に對しては殆ど之を蛇蝎視せるが如き學校は、かの開化したる野蠻國たる獨逸の事情はいざ知らず、日本を措いて他の文明國では絕對に見られない事である。また私は外遊中屢日本に於ける英語敎育の盛なる事を彼國人に話して聞かせたが、斷然口を緘して云ふを恥ぢたる一事がある。それは日本の中學に於ける英語敎科書から、ゴオルドスミスの『ヰカア・オヴ・ヱイクフイルド』の全部や、アアヸングの『スケッチブック』中の數章が、二十年來全く敎室に於ける使用を禁止せられてゐる事である。恁くの如き事例を耳にせば、わが國情に通ぜざる外人が直に日本の精神文明の進度に疑ひを挿むを恐れたからだ。

文學書を讀むさへ惡いとすれば、自ら筆を執つて之を書くに至つては罪まさに百倍するわけである。試に思へ、今或中學の敎師が自己の周圍を描いて漱石先生の『坊ッちやん』ほどの作品を書き、之を發表したりと假定せよ、翌日

早速校長室に呼び付けられるは愚か、その首は忽ち飛んで教育行政官の案頭に轉がるを免れまい。作者の運命は即ち主人公坊ッちやんの運命である事は、火を睹るよりも明かだ。

小泉先生にして、若し私共に生きた文學の何者なりやを教へて下さらず、イディオムか文法語源の講釋ばかりするか、當局者の鼻息を窺ふ片手間に、外國文でつぎはぎの日本文學史編纂をでもして居られたならば、天下は頗る太平であつたらう。そしてあの世界的名聲を博した十數卷の著述を爲し給はずに。

日本を愛し日本を信じ、其美を世界に紹介せられた先生も、晩年には此國を餘り快くは思はれなかつたとか聞く。若し果して然りとせば、ここに至らしめたるもの、嗚呼是れ果して誰の罪ぞや。

七　専問家

日本人は英クトリア朝の英人の口眞似をして、頻に『コンモン・センス』とかを貴ぶ樣だが、また同時に驚く可きほど『専門センス』を有難がる。專門とは外の事は何一つ知らず出來もしないと云ふ意味であらう、必ずしも一事一藝に秀でたと云ふ意味にはならぬらしい。其證據には時々法律を知らない法律家があつたり。土木の事を知らない土木技師さへあるさうだ。外の事は何もせず出來もしなければ、それで立派に、專門家として天下を橫行濶步し得るとは芽出度い。

それのみではない、外の事が出來ると云ふ事その事が眞の專門家としての素養力量の程を疑はれる基にもなるのだ。往年高山樗牛氏が此事を憤慨して、森鷗外氏が小說家である爲めに軍醫としての手腕を疑はれ、外山正一氏が教育家として政界に出入した爲め、社會學に於ける造詣を輕んずる者ありと云

ふ例を擧げた樣に記憶するが、敎師學者の社會にも無論この類の事がある。暇つぶしの娯樂を部下に奬勵する校長はあつても、新刊書を讀めと勸める校長は滅多に無からう。基礎醫學の學者に脈が取れるのは、餘り手柄にもならぬらしい。學者に取つて口と筆とは大切なものだと聞き及んでゐるが、餘りに演說をしたり文章を書いたりすると、日本では學者としての信用が墜ちる場合があるさうだ。

　專門學科と云ふ者は、大きい基礎の上に建てゝ欲しい。普通人に普通敎育が必要ならば、學者にも專門學者としての普通敎育があらう。兎の睪丸の硏究に五年十年の歲月を費しながら、學會に出て演說一つ出來ない人も貴い者には相違なからうが、演說が上手だからとて學者の値打を疑ふ理由にはなるまい。文章が巧いからと云つて、淺薄な智識を筆の尖で誤魔化してゐると譏るのは馬鹿げてゐる。話は違ふが、或所に擊劍と俳句と眼科醫術とで有名な

人があつた。世間では其人を目して、あの男は三つのうち一番下手な醫者をして飯を喰つてゐると云つた。是は如何にも日本人が最も喜んで傾聽し信用しさうな評語である。

此點に於て英佛米の學者には趣味能力の甚だ多方面な人の多いのは、學風の然らしむる所として毫も怪しむに足りないが、我國で崇拜せられる獨逸の學徒でも、必ずしも所謂專門式の人ばかりでは無いらしい。特に著るしい一例を云へば、ヘルムホルツの如き、ケニヒスベルヒ、ボオン、ハイデルベルヒの諸大學に歷任した生理學の泰斗として、世界に誰知らぬ者もなかつたが、伯林大學に就任しては物理學の敎授として其方の無數の論文を公にした。それのみか一方政治界に現れては迫の鐵血宰相を手古摺らした程の豪の者であつた。『專門センス』のみの貴ばれる日本の學界からは、恁んな物騷な人物は當分先づ出さうも無いから安心して好い 但し日本にも德川時代には新井白

石のやうに文章も達者で、史論にも考證にもすぐれ、また政治上には經世家として立派な論策を立てた人も尠くなかつたのである。

談は岐路に入つたが、文學の方面に於てすら、文筆に秀づれば學者としての造詣を疑はれるのだから面白い。漱石先生は小説家として餘りに偉かつた爲めに、英文學に於ける素養に就て兎角の評をする者がある事を私は聞いた。そして又かと思つた。さう云ふ人は試みに遺著のうち『十八世紀文學評論』の第五編ポオプを論じた一章を通讀せられよ、外國文學に對してあれだけ手際好く獨創的の論斷を下し得た人を、寡聞なる私は日本に於て未だ一人だも見た事は無いのである。

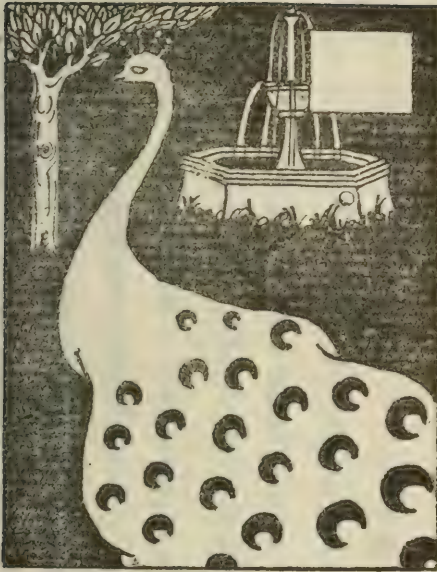
同じく文豪小泉八雲氏が、學者としてまた教師として、如何にすぐれた素養と技倆とを持たれたかは、此數卷の講義集を讀む者の普く首肯する所であらう。教室の人としての先生の努力と文藝批評家としての其鑑識の凡ならざ

るとを語るに、無言の雄辯を以てせる此講義集の出版を、私はまた恁かる意味に於ても賀す可しと爲す者である。

聽講學生の筆記を借り集めて校訂し上梓した此數卷の書を得て、いま太平洋彼岸の讀書界は頻に之を嘆賞し讃美してゐる。優婉の筆を揮うて異邦の風物說話を叙するに秀でた散文家の半面に、今はじめて思ひ掛けなくも、文藝批評家としての勝れた先生の力量を認めたからである。先生が半生の心血を注がれた勞作のかげに、恁くも貴き遺業の今まで世に知られずして潛めるを發見したる西人の喜びは、思ふに古器の愛玩者が珍しい掘出し物をしたよりも以上に、遙に深く大なる意義あるものでは無からうか。

憶ふ、明治三十六年某月某日、先生は遂に東京の文科大學を去られた。これほど立派な講義を爲られた先生、敎師としても精勵恪勤の人であつた先生、學生の尊崇敬慕を一身に集めて居られた先生、此人あるが爲めに當時私たち

の母校が世界に知られてゐた程の此先生をして、遂に去らざるを得ざるに至らしめた者は、……噫、私は之を言ふに忍びない。

文豪としての先生は世界が之を知つてゐる、先生の文を論じ其人を傳したものは、英米はもとより、獨露佛伊の諸邦に甚だ多い。英文の評傳としてはジヨオヂ・グウルド、エリザベス・ビスランド、エドワアド・トマズ等の數種の書がある。唯だ英文學敎授としての先生の一面が未だ多く世に知られざる事を憾とし、講義集の上梓を機として敢て此拙劣なる一文を草した。歳末歳始の忙中に閑を偸み筆を走らして成れる慈かる粗蕪蕪雑の文字は、いま東京雜司ケ谷の天台宗寺院自證院の墓所に、安らかに眠らせ給ふ先師に對しても洵に申譯なき事だと思ふ。（大正七年一月）

Vignette. From "Le Morte d'Arthur." By A. Beardsley.

果して虛榮の罪か

一　賄　賂

又しても九州の收賄問題が世を騷がせた。今なほ私共の記憶に新たな往年の教科書事件以來僅に十數年の間に、かの日糖事件海軍事件の如きを筆頭として、此種の問題は幾たびか天下の視聽を欹てしめた。特に法廷の問題と迄はならずまた新聞紙上には現はれずして、長へに秘密裡に葬り去られ、從つてまた平素閑窓に閑居して閑文字にのみ親しめる吾等讀書生の耳に達しない此種の事件は、たとひ大小輕重の差こそあれ、之を數ふれば實に幾千件幾萬件の多きに上る事であらう。西人にして若しわが日本を目して賄賂公行の國なりと罵る者あらば、吾等果して何と答ふ可きか。

西洋にも賄賂は行はれると人は言ふだらう。行はれるどころか、車夫馬丁の徒を始めとして稅關吏警吏郵便配達に至るまで、比較的下層の階級に在る者が不正の收入を貪る事は日本に於けるよりも西洋の方が遙に甚だしいのが事實だ。然しながら、苟くも政治上社會上に相當重要の地位に立てる公人たる者が其公職を利用して私腹を肥さんとし、恁くも屢次苞苴の問題に關聯して赤恥を天下に曝す事は、現代に於ける世界の文明國に於て斷じて他に類例を見ざる現象である。殊に奇なりとす可きは、上の爲す所下之に傚ふの語が、日本に於て賄賂のことに關しては適切ならざるやの感さへある。即ち日本の警吏郵便配達など微力な階級の人たちは、西洋の同階級の者に比しては稍々廉潔であるにも拘らず、かの大官と稱し有力者と號する者が動もすれば此種の罪惡を犯す事多きが爲め、社會を蠱毒する事も更に一層甚だしい。思へば西洋の下級者の收賄癖と日本の上流者の夫れと、此點では西洋と日本とが殆

ど正反對である事は、民族生活に於ける一個の注目す可き現象ではないか。見よ彼國では多くの警吏門番の徒の犯し易き罪を以て、日本に於ては、堂々たる一國の宰相が嫌疑を受けたのである。役所の長官までが首を縊つたのである。所謂名譽の軍人と稱する者も、一國の選良なりと云ふ代議士も、之が爲には縲絏の辱めを蒙つた。否子弟の前には聖人君子を粧ふに巧なる教育家までが、袴地一反で法廷に罪を問はれたではないか。尙更に驚くべきは、法官の痛快なる剔抉を見て、此類の事を一々荒立て、罪を糺すは、事業の進運を妨ぐなぞと公言して憚らざる有力なる實業家さへ有りと聞く。如何に黄金熱にうかされたる病者の囈語なりとは云へ、今の時節に是は又隨分途方も無い事を云ふ男があつたものかな。敢て問はん、爾は果して文明國の民なりや。

私はさきに現代の文明國に於てと云つた。何となれば過去に於ては、西洋に於ても賄賂公行は、希臘羅馬の時代から近世に至るまで、殆ど日本の現狀

と大差なき有様であつたからだ。かの立憲政治の模範國たる英國に於てさへも、或時代には議員買收が毫も珍らしくなかつた腐敗墮落の時代もあつた。然しそれは英國の政界が眞に民本政治の實を擧げ憲政の完美を致すよりずつと以前の話である。即ち千八百三十二年の議院改善案通過以前の時代に屬する事實である。哲人ベイコン廟堂の樞機に參して收賄し、罪を得て汚名を千載に傳ふるに至つたのは、エリザベス女王朝の事ではないか。宰相ロバアト・ウォルポオルが自己の政策を行はん爲、盛に黄白を散じて議院政治を腐敗せしめたのは、遠い〳〵十八世紀の昔物語となつた。二十世紀の今日に於ては、宰相ロイド・ジョオヂが自己の財產の出所に疑を挿まれた時、直に其資產の内容を天下に公表して憚らなかつた程に、英國の公人は今日金錢問題、廉潔を貴ぶのである。日本は德川時代の老中と云ふ者から明治大正の高官議員に至るまで、今も昔も種々の美名のもとに行はれる賄賂を以て、殆ど公然の秘密

なりと心得てゐる國である。此有様ではまた武士道も絲瓜もあつたものかは。赤穗義士の美談にすら、收賄漢吉良上野介の行動が其動機を爲してゐるではないか。

東海君子國の民、由來金錢に潔癖なりと稱せらる。勞力にする正當の報酬を求むる場合に於てすら、士人は猥に黄白の事を口にせざらんと欲する程のわが日本が、恁くも賄賂公行の國たるは、一見大なる矛盾であり撞着であるかの如き觀がある。而も恁くの如き、或は是れ大慾は無慾に似、大奸は忠に似たるの類であらうか。はたまた石部金吉を粧へる道學先生に、徘々の如き好色漢多きの類か。あゝ君子國の民よ、爾はまた竟に僞善の民か。

二　時代錯誤の喜劇

收賄事件の續發は確に聖代の恨事また國民の恥辱であるが、其原因を尋ぬ

れば、之には色々の事があらう。曰く黃金崇拜の餘弊、曰く法律萬能の謬想、曰く官吏の薄給、曰くサイシの跋扈(『才子』ではない。世に敏腕家なぞと云はれてゐる或種の俗漢、學名をホモ・サピエンスと呼び、和名をサイシと名づける類人猿の樣な一種の動物だ)、曰く秘密主義の弊、曰く職業敎育の結果、曰く寵商の弊害、曰く女子虛榮の罪、曰く何、曰く何。恁ういふ色々の事が、今まで原因として世の論者の口に上つた。如何にも皆尤もであらう。

しかし今此種の事件を文明批評の問題或は思想上の問題として見たとき、果して如何なる事が考へられるだらうか。日本現代の文明の根柢に潛める一大缺陷とも云ふ可きものがこゝにも亦極めて露骨に其の醜惡なる、而かもまた猿芝居の樣に滑稽な半面を曝け出してゐるのではなからうか。

私は此缺陷を假に名づけて形式に對する內容實質の時代錯誤(アナクロニズム)と呼んでおく。元來時代錯誤(アナクロニズム)とは、時と處を得ない二つのものが一緒に置かれた爲に生

する不調和を意味するのである。文學上で云へば沙翁が古代希臘の雅典の事を書くのに、平氣でエリザベス時代の町人を使つてゐる樣な滑稽を指すのである。

今の日本人の生活或は文明は、其形式的方面即ち制度法律なぞの上に於ては、西洋の非常に進んだ文明國の夫を燒直して出來た者である。また其形而下的方面或は物質生活の方を見ても商工業の發達と云ひ經濟組織といひ、總てが皆先進諸國のそれに一歩も後れざらんとする健氣な努力によつて中外の耳目を聳動した程の進歩改善を見た。換言すれば外形上には總てが皆最新式のハイカラに出來上がつてゐる。ところが更に目を轉じて文明の他の半面即ち國民の內的生活、形而上の方面、また思想道德など、文明の實質の側を見ると、茲にはまた驚く可きかな、依然として二三世紀以前に既うとくに黴の生ゑて了つた樣な古臭い者が、非常な執着力を以て今も猶頑張つてゐる。頑冥固

陋と云はうか保守退嬰と云はうか、眞にお話にもならない天保錢か一文錢見たやうな者が、牢乎たる權威を以て思想界を支配せんとしてゐる。多少新しがつてゐる樣な人ですら其人の腹の底の奥の奥の方を見ると、矢張りこの天保錢を大切に仕舞ひ込んで、尊重する氣味がある。首は飛んでも是ばかりは放さぬと云はぬばかりに、傳家の寶物とでも心得てゐるらしい。殊に怪しむ可きは、大正の御代になつて封建時代の骨董人物は大抵凋落し去つたにも拘らず、後から後からまた同じ樣な種類の頑冥黨がどこから出て來るものか、いくらでも〳〵飛び出して來るのは不思議と思はれる程だ。かくて現代の日本は其内的生活に於ては確に佛蘭西革命以前の西歐諸國、即ち先づ精々十八世紀位のところにのそのそして動かずにゐるのである。即ち十七八世紀頃の内的生活や思想狀態の上に、二十世紀最近の物質的形式文明を借用して來て、そこに多くの喜劇を演じてゐるのが今日の有樣だ。是が時代錯誤でなくて果

して何であらうぞ。醜態暴狀見るに堪へず、眞に識者をして面を背けしむるものあるは、即ち此の一大缺陷があるからだ。

ベルグソンは滑稽を說明して、生命の絕えざる進化流動に逆らふ所に生ずる者だと云つた。動いて止まない生命の流れに背馳して、固定し硬化せんとする者ある時、社會現象のうちには喜劇が生れる。內容よりも形式を重んじ、精神よりも物質を先きにせんとする如き場合も其の一つで、假面をかぶる者の滑稽に見える所以は即ち是だと說いた。また昔から他の多くの學者も、滑稽の詩味を說明するに、不調和なる二物の併置を以てした。猿猴にして冠するも此類だらうが、若し田吾作杢兵衛をして最新式のハイカラ仕立ての燕尾服を着用せしめたらば、恐らく今日日本文明の好個のカリカチユアをなすであらう。そして此種の喜劇滑稽は、其半面に於てまた往々にして深刻なる悲劇である事も、人生の一つの反語（アイロニイ）ではないか。日本に多い收賄事件と云ふ樣

な事も、考へ方によつては、そこにショウの戯曲を讀むより以上の皮肉が味はれると思ふ。

私は先づ具體的な一二の例を擧げよう。日本の憲法政治と云ふものは元來西洋の最も進んだハイカラな政體を燒直して出來たものだ。形式だけは旣に備はつて、立派な議會が出來てから旣に幾十年に及んでゐる。ところが國民の内的生活にある政治思想に至つては、依然として二三世紀前の妙なところに固定沈滯して、少しも動かうとしない。今頃になつて歐洲戰爭で何を思ひ出したものか、急に民本主義（デモクラシー）の言葉爭ひをする必要を生ずる程に、時代から後れた者である。徒らに形式上物質上にハイカラがる眞似は、猿にでも出來よう。しかし形式に伴ふ内容がいつ迄も骨董的古物だから、日本の立憲政治は十年經つても二十年經つても物にならない。國民の政治的生活の眞の精神（スピリット）とまでは成り得ないのである。時代の合はない二つの物を一緒に並べた錯誤

の喜劇とは先づ此通りのものだ。かの遠からず日比谷原頭の偉觀たらんと傳へられる最新式の議院建築の如きも、かくてまた遂に時代錯誤の新しき一大象徴たるに終らずんば幸である。

更に教育界に就て見ても、一方には西洋の最近の科學的物質的智識を授け一般の學校制度その物も、昔の德川時代とは似ても似つかぬ新式に出來上つたのはまことに結構だ。ところが生徒の內的生活を指導する段になると、十年否百年一日の如く舊思想の一天張りで、昔の頑固老爺の說法見た樣な事ばかりを云つて聞かせる。そして新しい文學や新しい思想は不健全だの怪しからぬのと云つて、青年が、燃ゆるが如き必然の內的要求に迫られて切に之を求めても、決して與へようとはしない。從つて教育は極めて內容の空疎な形式一方の束縛教育に走つて、人物養成の實効は少しも擧つてゐない。一時喧しく言はれた普通教育に於ける立憲思想の養成なぞも、其の後どうなつて了

つたのか一向聞かないではないか。

恁かる意味の時代錯誤の實例は、我國現代のあらゆる社會に於て見出されるが、收賄事件なども亦同じ立場から考へる事が出來ると思ふ。

今の日本の事業界が其形式や組織に於て、西洋の最新式のものと異る所なきは云ふ迄もない。それにも拘はらず、之を運轉してゐる當事者の頭は、今も猶昔ながらの古い所に停滯して、容易に進まうとはしない。

日本には昔から特別の意味で有力者や官人に接近する寵商と云ふ者がある御用達と云ふのがある。是等の人たちの周圍に纏綿紛糾せる内情に至つては固より神祕の帳の蔭ふかくも隱れて、私ごとき門外漢の知る所でもなければ亦言ふ可き限りでもない。しかし恁かる舊弊な者の存在を許せる内的原因、平たく言へば、さう云ふ人たちを暗々裡に動かしてゐる因襲觀念の如何なる者なるかに想ひ到る時、聰明なる讀者は早くも私の言はんと欲する時代錯誤

の意味を察せられるであらう。

今日日本の一切の社會組織經濟組織は、外形上全く新しいものに變化してゐるに拘らず、金錢道德の上には、不思議にも封建時代からの因襲が、恰も頑强なる黴菌の如くにこびり附いて離れない。云ふ迄もなく、今日の經濟組織から云へば、社會の爲に自己が盡した正當な報酬としての外は金錢に受けられない譯である。しかし日本の昔からの因襲觀念から云へば、主君より賜はる拜領と名の附く物は無論のこと、或は他より受くる役得、附け屆けと稱する物の如き、實はゐたいの知れない物であるにも拘らず、之を受ける事がたとひ或場合には是認せられなかつたにもせよ、さまで大なる社會的罪惡なりとは見做されてゐなかつたのである。私情を以て謂れなき黃金を收受する事が、社會の一員として犯せる罪惡たる點に於て泥棒と異る所なき者なる事を、決して痛切には感じてゐなかつたのだ。たとひ幕夜ひそかに門を叩いて

近づかんとせる寵商佞人の手より阿賭物は受けようとも、形式上君に忠親に孝ならばそれで立派な男一匹だと、人も許し我も信じてゐるのである。ちつとは彼奴もやり居るわい位な所で、先づ無事に濟んだのである。一方に於ては正當な報酬を要求する塲合にすら猶金錢の事を口にするを憚る程潔癖でありながら、他方に於ては平氣で不正の阿賭物を收めると云ふ事は、昔風の舊弊な日本人でなければ斷じて出來ない矛盾の藝當である。出所の知れない金で衣食は愚か、贅澤三昧をしてゐる怪しげなサイシの多き事、日本の如き國は、他の文明國に一寸例が無いのは、全く此矛盾の藝當を、何等良心の呵責なしに演じ得る者が多いからである。察する所世に多き收賄者も贈賄者も、若し全然法律の示す所が無かつたならば、賄賂を以てさまで罪惡とは考へて居ないのではないかと思ふ。袖の下や附屆けとはそんなにまで惡い事かなあと今更のやうに呆れて驚いてゐる人も、廣い日本には百萬人や二百萬人では

あるまいと思ふ。

忠孝の問題とでも云へば、口角泡を飛ばして激論し憤慨する程の人でさへ平素收賄者流を目して、あれは融通の利く人、少しは話の解る人、腕のある人、さう云ふ言葉で批評して平氣でゐるのが多い。

日本人の金錢道德と云ふものは斯の如く時勢後れの舊弊な者である、鎖國攘夷の時代を距る事未だ遠からざる程度のものである。ところが一方に於て今日の法律は西洋文明國の比較的新しい所を學んで出來たものである。それが恰も時計の機械の樣に遠慮會釋なく動いて行く。因襲的な舊思想の人たちの上へ寸毫の假借もなく此の最新式の法律を適用して、所謂秋官獄を斷ずるの態度を以て臨めば、醜態百出するのは當然の次第である。法廷に持出さるる收賄事件の如き、寧ろ其數の少きをこそ怪む可きだ。

今の日本では一切萬事がすべて此流儀だから、日常の卑近な事にも時代錯

誤の喜劇は到る處に見られる。それがまた形式的物質的方面を新しくすればする程、益々際立つて目につくのである。花見時の汽車電車の旅の不愉快な事はどうであらう。個人同志の間では無闇に丁寧な日本人が、車中或は停車場(ステーション)での不行儀はお話にもならないものだ。醉漢の暴狀と云ひ押し合ひへし合ひの亂雜といひ、まるで無政府狀態だ。汽車電車或は鐵道規則その物は、いくら新式のハイカラに出來上つても、乘客の頭が少しも文明的でないのだから、日本の花時の旅行には西洋の汽車電車の旅で決して見られない多くの不愉快を覺悟せねばならぬ。

私はまた日本で自動車に乘る毎に、是も時代錯誤の好標本だと思ふ事がある。日本では自動車は何だか一種の贅澤物の樣に見做されてゐる丈けに、國に最も多いフオオドの廉物の樣なのは少い。ピアスの最新式にも劣らない程の立派な車(カア)さへ尠からず輸入されてゐる。しかも日本では其乘心地の惡い

こと甚だしいもので、夫れも其筈、自動車だけはいくら新式の上等でも、肝腎の道路の方が封建時代その儘のでこぼこ式である、市街に車道の區別も無ければ、況や郊外にドライヴの設備はない。だから埃が立つ、がたぴしする、タイアは損む、はては行人をして顰蹙せしめる様な事になるのは當然の結果である。

日本今日の文明は總てが此自動車式だ。封建時代の野蠻な物の上へ二十世紀の最新式の物を無理無體に運轉させやうとしては、到る所に色々の喜劇を演じてゐる。是で萬事が圓滿に健全に進捗して行く理が無いではないか於是乎、形式上物質上の新式を全然撤廢し去つて、鎖國攘夷のチョン髷時代に逆戻りするか、若しそれが出來ずとあらば、内的にも外的にも、また形式にも内容にも、物質にも精神にも、兩方とも思ひ切つて新しくなるか、二者孰れか一を選ぶより道は無い筈だ。

然るにまた怪しむべきかな驚くべきかな、現代の日本人は物質上形式上の進歩改善に其の全力を傾注しつつ、滿身の精力を傾け盡して惜まざる觀はあるが、夫れにも拘はらず精神上內容上には、殆ど何等の眞面目な努力をも拂つてゐない。物の考へかた見かたは依然として大名行列の時代その儘であるのみか、甚だしきに至つては思想や道德に於ては、無理やりにでも昔の時代に逆戾りさせようと苦心焦慮してゐる人さへ稀ではない。二十世紀東海のはてには、シルク・ハットの下にチョン髷を据ゑて見たらば、さぞ日本に固有か特有の結構な物が出來上らうと日夜苦心してゐる頑愚固陋の徒があることは、實に文明史上の奇觀だ。世界共通の新思潮に對してあらゆる反抗を試みはては罪も咎も無い文藝上の新思想に對してまで、盲滅法な排擊を試みる者さへ多いのが、何よりの證據ではないか。かの時勢後れの侵略的武斷主義を謳歌せんとする者の如き、また此徒の亞流たらずんば幸だ

今の日本では、政治でも教育でも宗教でも實業でも、何でもかでも皆此種の時代錯誤に惱まされてゐない者は無い。從つて總ての事がのんびりと發達しないで、畸形となり、不具となり、そこにまた衝突も起れば破綻も出る。まるで及の缺けた出刄庖丁で鰹節をかく樣なものだ。かくては遂に開化したる野蠻國とも云ふ可き滑稽な者が出來上がるだらう。

三　女の虛榮

筆が滑つて、思はず前置きばかりが長くなつた。さらば本題に入らう。收賄問題に聯關して日本婦人の現狀を考へたとき、私はこゝにも亦同じ時代錯誤の病弊を見たのである。

今回事件の衝に當つた某法官の語れる所として傳へられる所によれば、かゝる事は婦人の虛榮が原だとある。世間一般、殊に男子には左樣信じてゐる

人が頗る多いらしい。折も折とて春さきに細君が花見衣裳の一つも新調しようと云ふ矢先、之が亭主に取つて屈竟の反對理由に利用せられた場合も多からうと思ふと、ちよと破顔微笑したくなる。

暴君の樣に我儘な主人が、座敷に在つた花瓶を落して破ると、早速下女か細君かを呼び付けて、お前たちの置き樣が惡いからだと怒鳴る。自分の不注意と失策とは棚に上げて顧みず、先づ弱い者に罪をぬすり付けようとする。今度の女子虛榮問題にも多少此趣が無いではない。

或る不祥の事が起ると必ず何者かに罪を歸しようとする。其何者かは抽象的或は非人稱(インパアストル)的な者では承知が出來ないから、必ず或る人(パアスン)にぬすくる。そして其人(パアスン)は弱い者である事が最も好都合なのである。平生無事の日には殆ど無能力者同樣に蔑視して、其言にすら耳を傾けずに置きながら、一朝恁かる不祥事の起るに當つては、眞先きに女と云ふ弱者を捉へ來つて槍玉に擧げ

ようとする。日本の男子の婦人に對する横暴なる態度は遺憾なく此際にも現れてゐる。さきに教科書事件の時にも、海軍事件の時にも、同じ事が世人の口に上つた。

私は妻君の虚榮が、收賄事件の背後に伏在してゐる一小原因であつた事を認める。また極めて特殊な場合に於ては、夫れが主要な原因であつた事をも否定する者ではない。しかし世上多くの論者が言へる如く是を以て重大原因なりと見做し、甚だしきに至つては、妻君が虚榮の爲めに犯したる罪を亭主が背負つてると云はぬばかりに誇張する者あるを聞いて、その餘りな出鱈目に驚かざるを得ない。想くの如き暴論は、婦人の地位の確立されてゐる米國は勿論、英佛等の先進國に於て、恐らく耳にする事の出來ない性質の者であらう。

前段既に述べた如く、想かる事件には虚榮なぞと云ふ事よりも遙に重大な

る多くの原因が他に在る事は勿論だが、單に虛榮と云ふ點のみに就て云つても、男子の虛榮心は其馬鹿馬鹿しさ加減に於て、女子の夫れと毫も異る所なきのみか、遙に惡む可き惡性の者であるため、社會に流す害毒も從つてまた、女子の虛榮心よりも更に甚だしいのである。襟飾の模樣を氣にして見たり、鍍金の金時計をブラ下げて見たりする點は婦女子と何の選ぶ所なきのみか、勳爵にあこがれ、肩書を珍重し、徒らに門戶を張らんとする者の如き、政界に於て學界に於てまた事業界に於て、其一世を蠱毒せる事の如何に甚だしきかを見よ。之に比すれば女子の虛榮の如き、其淺薄なる點に於て無邪氣なる點に於て、殆ご問題にならないと云つて可い。

似たもの夫婦と云ふ俗諺には眞理がある。犬も喰はぬと云ふ喧嘩をしながらも一緒に暮して行けるのは兩方がどこか似てゐるからである。また一緒に暮せば兩方から接近し同化し合つて、おのづから似て來るのである。若し虛

榮と云ふ事が今回の如き事件の場合に問題となるとすれば、主人の虚榮も細君の夫れと似た者で、男子だけに却つて女のよりも更に惡性の者であつたに相異ない。極端に女尊男卑である米國の如き國ならばいざ知らず、男子の權幕の恐ろしく烈しい此日本に於て、亭主は二宮宗で、細君ばかりが虚榮の權化だなどゝ云ふ場合は、千人中恐らく一人と雖も無からうと思ふ。單に此點から見ても、女子の虚榮をのみ咎めるのは、我儘勝手な男子の言ひ事に過ぎない。

裝飾美は女の女たる生命の一半である。また其社會的義務の一端だと云つても差支ない。徒らにお三どんの如く、また乳母の如く、なりふり構はずに眞黑になつて働くばかりが、女の能でもあるまい。出來るならば、身に綾羅を纏ひ珠玉をちりばめ、阿彌陀如來の樣に光らせる事も、決して咎む可きではないのである。世には道學先生と云ふ者がある。王宮の庭に、さながら己

が天成の美を誇る者の如く、舞へる孔雀の絢爛たる羽毛を剪り去つて、色彩ゆたかに美しかるべき人生を、灰色に塗り潰さうとしてゐる惡魔がある。呪ふ可きかな、彼等。

勿論唯だ女子の虛榮心を滿足させると云ふ事ならば、夫れは親孝行のやうに結構な事ではあるまい。しかし今日の實業界なぞには、親孝行をせむが爲に泥棒同然の金儲けをしてゐる人間は、必ずしも珍らしくないのである。否な貧民間には親に孝を盡さんが爲めに、隣家の米俵を盜んで法に問はれた者さへある。かゝる場合、其罪の源をなしたからとて親孝行その者をも惡いと云つて咎むべきだらうか。若し女房孝行の爲に罪を犯した人間がありとすれば、罪は固より大に惡むべしと雖も、其志や寧ろ憐むべき者がある。收賄の一つも爲ようと云ふ橫着な「サイシ」に、そんな優しい、殊勝な心掛けの男が果して一人でも居るだらうか。尠くとも左樣いふ男が日本には多いと云へる

であらうか。

若し收賄事件の起れるに際して、婦人に關する事が問題になるとすれば、論ず可き點は他に幾らもあらうと思ふ。即ち今日日本の男女關係には、文明の進度と全く不調和な時代錯誤があるからだ。

四　不思議な賄賂

不思議な一種の賄賂、と云つたつて、日本では別に不思議な物でも何でもない。今更そんな話を不思議さうに書く者こそ、餘程不思議に見ゆる位は、私と雖も承知だ。承知で之を書くのは、順序として書かざるを得ないからだ。

日本には黃金の外に一つ不思議な賄賂がある。之を賄賂として用ふることは、近代の文明國に於て多く例を見ざる日本特有のものである。それは即ち男子の獸性に附け込んで、賣笑婦の腐れた肉を與へる事だ　我國固有の者の

一つとあらば、是も亦誇る可きであらうか。

一夫一婦で滿足し得ないと云ふ男子の獸性の存在する限り、東西古今いづれの國にも避け難き社會的害惡として、私娼もあれば公娼もあらう。しかし日本には一種特別の藝者と云ふ者がある。此の特種な賣笑婦は、すべての社交的會合には云ふ迄もなく、公人が公事を議するとき、何人の出入をも許さない場合にすら、其席に侍する程の大なる特權を有する者である。西洋人が富士山と共に、之を日本の名物として數へるのも無理はない。

西洋にも古代希臘には「ヘタイライ」と云ふ者があつた。源平時代の白拍子、舊幕時代の傾城遊女、現代の藝者と同じ性質の賣女で、歌舞と色とのほかに、また學問技藝をさへ賣り物にした。女子教育の全然度外視された古代希臘に於て、彼等の間には才色兼備の女も多かつた。プラトオンやエピキユラスのお弟子になつて氣焔をあげた者もあれば、ソクラテスと交つて、世界に於け

る女權論の第一聲を放ち、千載のもと青史に名を留めてゐる豪の者もあつたこしかし恁ういふ不思議な一種の賣笑婦は、近代の文明國に於て全く其影を潛めた。二十世紀の社會に於て、恁くの如き者に存在の餘地を與へてゐる文明國は、恐らく日本だけであらう。西洋の女優や舞姬とは、甚だしく趣を異にしてゐる。

武士を骨拔泥鰌に拵へ上げて國內の平和を保たうとした德川氏の政策は、賣笑婦に直接の保護と特權とを與へてゐた。遊里を、自由戀愛の行はれる地上樂園に拵へ上げてゐた。從つて之を封建時代の社會と云ふ環境の中に見ればこそ、そこに詩美もあれば、また一種の道德もあつたのだ。今日一切の社會狀態をハイカラに仕上げて置きながら、依然として恁くの如き者の存在を許すのは云ふ迄もなく因襲に執着せる時代錯誤である。封建時代は去つて資本主義立憲政治の世となつても、男子の婦人に對する根本思想は少しも進轉

して居ない。兩性關係に現れた時代錯誤の現象と云へば、是なども其一つであらう。

罪惡のかげに女があると云ふのは、山嶽と共に古い話だ。しかし今度の收賄事件に限らず、假かる場合若し罪が男女關係に基因する所ありとすれば、そは細君の虛榮などを問題とするよりも、此の日本特有の藝者と云ふ者の存在の方が、色々の意味からして遙に有力な原因である事は、事新しく云ふ迄もなからう。然も之を咎めずして彼をのみ咎めると云ふのは、明かに男子の得手勝手な議論だ。弱者に罪をぬすくらうとする卑怯な態度でなくして何であらうぞ。

英語の「賄賂(ブライブ)」と云ふ字の語源は、「乞食に與ふる一片の麵包(パン)」の意である。日本では獸慾に餓ゑたる乞食に與ふる一片の腐肉の意ともなるだらう。讀者はまた沙翁の『ジユリアス・シイザア』の中に、賄賂を欲しがる者の事を『痒い

掌』an itching palm と云つて、是が日常の俗語にも轉用せられて居る事を記憶せられるだらう。封建時代や希臘時代の兩性關係を平氣で今の世に持續しつゝ、藝者に關係する事を今も猶『粹』だの『通』だの『いき』だのと心得てゐる時代錯誤の人たちには、痒いのは掌でなくて、……一寸是は言葉に窮した。

ピエル•ロティの『お菊さん』を讀んだ西洋人は、日本を賣女の國だと思つてゐる。また私は讀んだ事はないからよく知らないが、支那人が日本人の性慾生活を描いて『留東外史』とか云ふ本を書き、日本を賣淫國だと罵つてゐるさうだ。罵られても仕方のない缺點の存する以上、反省すべき餘地はあるだらう。

賣淫國である事と賄賂國である事と、二つの間には關係がある。否定すべからざる此の原因結果の關係、……そんな事までも、くだ〳〵しく私は書きたくない。

五　夫婦生活

係かる事件あるに際して、若し妻たる人を咎む可しとすれば、そは眞に妻たるの責務を果し得なかつた點にある。然し夫れと云ふのも日本人の夫婦生活には、今も猶主人と奴隷との如く、依然として封建時代の因襲を脱し得ない色々の時代錯誤がある爲だ。

默々として亭主の亂行を傍觀しつゝ、之を男の『かいしよ』として許してゐた者は誰であるか。夫が賣女に溺れてゐるのを、忠告もせず諫爭もしないのが新時代の妻として立派な淑德だと考へられるだらうか。

七去三從の奴隷の道德が婦人に向つて說かれた舊時代の因襲が、今日なほ破壞せられない結果として、亭主の亂行を默視する事を女の『たしなみ』の一つとさへ心得てゐる人も尠くはない。たとひまた夫れ程でなくとも、亭主

が外で道樂をする代りに衣物の一枚も造つて呉れゝば、それで滿足してゐる樣な婦人も珍らしくないのが事實である。――亭主と云ふ者は、よく色々の賄賂を妻に贈るものだ。

　更に他の方面から云ふと、罪惡の結晶とも云ふ可き不淨の財が、神聖なるべき家庭に這入るのも知らず、或は知りつゝも之を默視してゐたといふ點にまた確に妻たる人の罪がある。

　云ふ迄もなく男子が外にあつて爲てゐる仕事を、或程度まで理解してゐる事は妻たる人の義務である。賢母良妻の眞意義は單に家庭の中の問題として終始するのではなく、夫と云ふ者を通はして、女の力が外部の社會に及ぶ所に價値があるのだ。夫が收賄の罪を犯し、或は米の買占と云ふ樣な殘忍な行爲を敢てする場合に、敢然として之を制止する事は女としての義務である生存競爭の烈しい時男子は動もすれば功名利慾の念に驅られて、不知不識の

間に罪を犯し易い。殊に日本のやうに社會制裁の嚴格でない國では、男子は何を爲でかすか分らない。さういふ場合、女の敏感なる情性を以て之を矯め之を制する事は、妻たる人の當然の責務ではないか。『お前なぞに世間の事が解るか』と云ふ亭主の一喝に葬られて止む如き人は、新時代の賢母良妻ではないと云ふ非難を免れまい。是では婢妾下婢と何等選ぶ所がないからだ。

私は今夫婦生活に現れた時代錯誤に就て、一々是等の事を指摘するの煩を避けよう。唯だ婦人の眞の覺醒とは先づ信くの如き點に起る可きもので、それが軈て女としての存在をして意義あらしめる第一歩である事を言へば足るのだ。現代に於る日本婦人の地位が餘りに低く、その勢力が餘りに弱い事は時代文明の形式的方面と全く調和を得てゐないからである。あの變挺な『新しき女』なぞと云ふ者が世を騷がしたのも、畢竟するに時代錯誤が生み出した畸形兒であつたのだ。

極端なる壓迫を加へた結果は、其者をして萎縮せしめ自屈せしめ、遂に本來の能力を失ふに至らしめるか、然らずんば殆ど自暴自棄に近い反噬的態度を執るに至らしめる。日本の馬は多年の動物虐待の結果、猛獸に近い物になつたと評した人があるが、日本婦人の中にも稀には悍馬御し難き類がある。街頭で少女を蹴殺す荷馬車の馬の樣なのも無いではない。しかし多くは幾百年の自屈の結果、女としての本來の能力をさへ失つて了つた婦人が、妻として正當なる責務を盡し得なくなつてゐる事が、今回の如き事件に際しても特に痛切に感じられる。

之を救ふ者は女子教育の任であらねばならぬ。然るに今日の女子教育は男子の職業教育と同じく、徒に目先きの事にのみ役立つ實用品を造るに忙しく思想方面の教養を與へる上には何程の事をも盡してゐない。飯炊きや按摩の稽古も結構な事ではあらうが、そんな事で賢母良妻は出來るだらうか。また

『ベカラズ十條』式の消極的敎訓もさる事ながら、更に女子の眼を開いて眞の向上と覺醒とを促すに足る可き積極方針を執るに、何故躊躇するのであらうか。私は先頃新聞紙上に掲げられたる、將來の希望に對する女學生の答案と云ふ物を讀んだ時も、矢張り同じ事を考へさせられた。

米國に於ける婦人の地位が餘りに高いため、多くの弊害があると同時に一方にまた、あの極端な功利主義の文明の餘毒を除きつゝある者も亦婦人の勢力である事を、わたくしは曩に『北米印象記』の中に說いた。日本の黃金文明の進步の急速なると共に、思想や宗敎や道德や藝術や、總て文明の內容の方面に於て、婦人の責務が益々重きを加へつゝある事を眞面目に考へて貰ひたいのである。意思にのみ生きんとする男性を中和する事は、感情に生きんとする女性の天職であるからだ。

六　虚榮の半面を見ずや

此稿を起す初めから、書かうと思つて私の腦裏を往來してゐた二つ三つ主要な點には、まだ少しも觸れてゐなかつた事に氣附いた時、早くも豫定の紙數は盡きんとしてゐる。かくて龍頭蛇尾に終らんとするを自らも苦笑しつゝ、今大急ぎで簡單に其二三の點を書いて此稿を了らう。

日本では罪惡のかげに貴女あり娼婦ありとは云へよう。しかし同じ筆法を以て罪惡のかげに妻ありとなし、之を妖孽に比するが如きは誣ふるの甚だしきと云はんよりは、寧ろ殘酷である。

女には感じ易き涙脆き情性がある。おのが愛する夫をして罪を犯さしめ、囹圄の人たらしめてまで、自己の虚榮心を滿足せしめようとする程に、女は一否少くとも日本の婦人は、冷酷無情な者だとは考へられない。しかしながら

今假に女の虛榮心が犯罪の素因であつたと見るにしても、それは女が虛榮心に煽られて不知不識に犯した罪である事は云ふ迄もない。ところが係かる場合、其半面を見ると、そこには確に女子をしてこゝに到らしめた男子の方にも、咎むべき點がある。

男子の淫蕩は單に金錢や肉體の上ばかりでなく、色々の意味に於て精神的にも亦恐るべき惡影響を妻に與へてゐる。其中の一つは、棄てられたる者、孤獨なる者の悲哀である。愛に生きんとする女性としては、最も堪へがたき痛ましき悲哀である。たとひ夫婦關係は持續されつゝも、夫が他の女に溺るゝ時、妻として深刻痛烈なる哀愁に心を惱まさない者があるだらうか。そして其刹那、女は殆ど病的に、自暴自棄に近い行爲を敢てしてまで、此悲愁から逃れようとし、自ら慰めようとする。女の方外なる虛榮、女の亂行は多此く危機に生ずる。私は此事實を、今回の事件の中心にあつて虛榮の化身の樣に

攻撃せられてゐる某氏夫人の場合に就て考へて見たい

某氏の夫人には子がなかつた。某氏は他の女に關係して遂に一子を設けた。其子を養子とはしたが、夫人は如何しても其子を愛する事が出來なかつた。係かる場合、敏感なる女性に取つて極度の悲哀は、彼女をして遂に鬱憂病者たらしめた。此悲愁を免れる唯一の果敢なき手段として彼女は之を虚榮心の滿足に求めた。社交界の女王となつて、しばしたりとも此悲みを免れようとした時、隼の如き眼を有てる惡魔は機に乘じた。姦商の手は彼女に捧ぐるに黄金を以てした。

自己の生命とも云ふべき情性に培ふ可き愛の對象を見出し得ない時、女は必ず他の何者かを求める。何者かを求めて得られざる時、遂に分別と思慮とを土芥の如くに棄てゝ、自暴自棄となる。夫は他の婦人に溺れ、また自己が母性を滿足せしめむにも子がないと云ふ場合、孤獨寂寞の悲愁に鎖ざゝれた

憐れむ可き彼女に取つては、虚榮の毒盃を一息に飮み干す事が唯一の慰めであつた。毒酒の醉に自己を忘れるのであつた。

右に述べた某氏夫人の如きは、固より非常に極端なる塲合である。しかし是ほど迄には至らざる他の類似の例は、私共が單に戯曲小説ばかりでなく、社會の實際に於て屢次目睹する所ではないか。假くても猶ほ男子に罪がないと言へるであらうか。虚榮の裏面を見よ、多くの塲合そこには必ず愛せられず愛し得ざる者の悲愁が潜む。他の正當なる方法によつて己が生活を充實せしめ得なかつた女の暗愁が見出される。假くても猶ほ忍べと求むるは、ボツカチオが書いたグリセルダの樣な女でない以上、出來ない仕事である。

愛は男子に取つては其生活の一部に過ぎないが、女子に取つては其總てゞあると或英國の詩人は云つた。ところが女が生命よりも大切な此愛を子にも夫にも見出し得ない塲合、換言すれば自己が總てを捧げて愛し得る何者をも

見出し得ない場合、それが必ずしも常に皆男子の罪だとばかり私は云ふのではない。即ち周圍の事情に制せられて誤れる結婚をした場合とか、または稀に見る或種の女の如く、性情の然らしむるところ何者に對しても自己の全部を捧げて愛し得ざる人とか、是等種々の異つた場合は甚だ多からう。しかし係る場合に於ても、虚榮は彼女に取つて感情生活の空虚を滿たすに最も手近な最も容易な手段である事だけは、否定するを得ないと思ふ。論じてここに到れば、更に根源に溯つて、結婚問題に言及し個人主義の思潮にも觸れねばならぬ。しかし夫れは此文の主題ではないから、他日に讓る事としよう。

日本の形式文明黄金文明の發達が急激なると共に、時代錯誤の病弊は從つて益甚だしく暴露せられるのであらう。簡單に云へば古い頭を以て新しい社會に臨み、新しい仕事をしようとするからだ。官吏であつたからこそ法廷の問題とはなつたものの、私營事業の場合には、收賄と云ふ罪惡は、今日殆ど

白晝公行の有樣で問題にはならないのである。新社會の新道德に人の心が目醒めざる限り恁くの如き醜事件は將來なほ幾たびか識者をして顰蹙せしめる事であらう。女子虛榮問題の如きは末の末であつて、原因は全く他に存する。

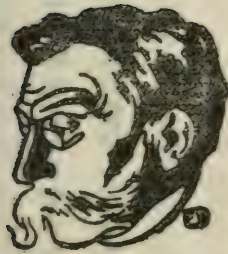
平生は女に向つて唯だもう引込んで居ろと云ふ。しかも勝手な時には眞先に女を鎗玉に擧げて罪を塗り付けて了ふ。專制主義武斷主義の舊思想は、また婦人に對する暴壓思想となつて現れたのだ。個人の自由を尊重するデモクラシイの發達は、必ずや先づ兩性關係の改善より始まらねばならぬ。――たとひ夫が米國のやうに突飛に極端にはならなくても。

疾風電擊、迅雷の耳を蔽ふに暇あらざらしめた法官の行動は、一國風敎の爲め眞に社會が感謝す可き所である。しかし法律が遂に萬能の者でない以上、文明の內容實質の上から見て、民族の內的生活に存する時代錯誤の大なる缺陷には、世人が更に十分の考慮を要す可き者があるだらう。單に婦人の虛榮

と云ふが如き、男子にのみ都合の好い議論をして、自ら安んず可きではないと思ふ。固より是等の點に就て警告し論斷するには、私の如き門外漢ではなしに、世おのづから別に其の人ある可き筈だ。唯だ今回の事件に際して、いまだ兩性關係に就て多く此事を言ふ人なきを見て、後れ馳せながら私は柄にもない此一篇を草した。『われ豈辯を好まんや』。

擱筆しようとする時、さる婦人雜誌に矢張り同じく此問題に關し婦人の爲に辯じた或人の文があつたと云ふ事を聞いた。私はそれを讀む機會の無かつた事を遺憾とする。おもへば深更燭を剪つて肝癪と神經とで脫線しつゝ、書き上げた私の恁んな文は恐らく思想の進運の爲何の効果も無からう。もつと複雜な、一本調子でなく三本調子にも五本調子にも出來た、そして表から裏から、上げたり下げたり、宥めたり賺したりした、上品で穩健で老巧な、また世俗の珍重する形式論理から見て筋の通つた文によつて。女子虛榮論の非を

説いた物でもありとすれば、私は其方をお薦めしよう。

（大正七年五月）

Verhaeren
(F. Vallotton)

病的性慾と文學

上

人類が原始時代から其儘に傳へてゐる男女兩性の關係、少し廣く云へば性慾の問題は、現代人の生活の上に様々の醜い暗黒の影を投げて、文明の爛熟と共に、今までに無い重大な意義を有するに至つた。從つて現今に於て英吉利のハヹロック・エリス氏や、瑞西のアウグスト・フオレル氏などの碩學を始めとして、獨、佛、伊、諸邦の多くの學者が、此方面に向つて着實なる研鑽の勞を吝まないのは、決して謂れなき好事の業ではない。特にまた此性慾問題は人間生活の記録（ドキユメント）たる文藝とは、直接に淺からざる關係を有するに至つて、前世紀の中頃自然主義の勃興以來、詩文界に於て殆ど其中心問題たるの觀を呈するに至つた。

すべての英雄豪傑も、また思想上藝術上の天才も、一切皆是れ精神病者に他ならぬと喝破して、一世を驚かした有名な伊太利の犯罪學者が世を去つてから、早くも既に數年を經た。が其名著『天才と狂氣』は、この頃遂に日本譯も出來た。彼の所說に對しては、たとひ多くの辯難攻擊はあるにせよ、其の極めて大膽なる論斷の半面に、牢乎として動かすべからざる眞理のある事は疑はれまい。それは兎に角、精神病理學の見地からして詩人の閱歷を研究し或は作品を解剖しようとした學徒の試みは、決して徒勞には終らなかつた。其最も極端なる一例としては、かのマクス・ノルダウ氏が其著『頹廢』に於て一切の近代文藝を以て精神病者の囈語に過ぎずと斷定し去つたごとき、私共はその燥急なる結論と、無鐵砲なる僻說とに對して全然不同意を表しながらも、なほ且彼が根氣よくも調べ上げた研究の價値に對して、相當の敬意を表せざるを得ない。

病的心理現象のうち、特に性慾に關係したものは、單に文藝の上に現れたもの丈けに就て云つても、其種類は甚だ多い。學者は病的性慾心理を分類して其一々にむつかしい言葉で拵へた何々イズムの名稱を附けてゐるが、私は今それを片端から皆受賣しようと云ふのではない。唯最近に於て新聞雜誌の上に屢その事實を傳へられ、或は文壇の新作家たとへば谷崎潤一郎氏の作品などに描かれた二三の病的性慾の現象に就て、文藝史上の著るしき事實の一斑を語らうとする迄である。

近頃同性の戀といふ事、即ち此道の學者が所謂性慾倒錯（コントレーレ、セクシユアル、エムピンドウング）の現象が、屢世人の注意を惹いた。殊に女子の間の同性々慾（ホモセクシユアリテエト）に就ては、一部の教育家なぞをして今更のやうに目を聳てしめたが、是は遠い希臘の昔、女詩人サツフオの、今僅に斷章として殘されたる熱情の歌の背後にあつたと傳へられる女同志の戀、即ちサツフイズムである。此女詩人はその酒頭美しい

酒と女の產地として知られたレスボスの島の生れだと云ふので、その地名を取つて、英語ならば『レスビアン・ラヴ』と云ふ言葉が、女子同性間の或る極めて不自然な病的現象を意味する事になつてゐる。

女子の同性性慾は最も多く貴女の間に見られると云ふのが凡ての學者の說だが、中には有名な女傑や女王の中にも其例が甚だ多い。歷史上の人物で二三の例を擧ぐれば、瑞典の女王クリスティナは君主として非常に英邁な人であつたのみならず、十七世紀の詩文學藝の上からも忘れられない人であるが、この女王は飽くまで結婚を嫌つた。そして性慾倒錯の人だとして傳へられてゐる。また露西亞の女王エリザベスは彼得(ピイター)大帝の子で、七年戰爭などに英名を轟かした美人であつたが、之も性慾倒錯の人であつたさうだ。おなじく露西亞のカザリン二世、英國の顯理(ヘンリー)八世の五度目の皇后カザリン・ハワアドなど、皆この病的性慾の人に數へられてゐる。

純文藝の方で女同志の戀を書いた最も著しい作は、十八世紀のディドロオの『修道女(ラ・レリジヨオズ)』で、是は尼寺の内部を寫して、性慾倒錯の尼院長(アベッス)が若い一人の尼を苛責する、隨分細い所まで突込んだ描寫である。また性慾研究では殆ど其あらゆる種類を網羅してゐるバルザックの小説には『こがねの目の娘(ラ・フイユ・オオ・ジウ・ドオル)』があり、ゴオチエの傑作『マドモアゾル・ドウ・モオパン』や、ゾラの『ナナ』にも是が寫されてゐる。そのほかモオパツサン、ブルゼエ、ドデエの作にあらはれ、詩ではラマルテイヌ、スヰンバアン、ヹルレイヌの集中に、女同志の相思が美しく歌はれてゐる。

しかし此性慾倒錯の人は、古今東西共に男性には甚だ多い。徳川時代の小說たとへば西鶴の作『男色大鑑』に描かれたやうな話は、更に戰國時代の昔に於て武士や僧侶の間に少しも珍らしくなかつた。試みに平出氏の『近古小說解題』によつて調べて見ても、秋夜長物語、鳥部山物語、松帆浦物語、嵯

峨物語等の小說は、皆この性慾倒錯の物語である。是等より後の時代の作品に就て調べたらば、もとより枚擧に遑なき程であらう。

天才或は英雄と云はれた人物の性行には、動もすれば常軌を逸した傾向の多い所から、例のロムブロゾオ一流の論では之を病的なりと見做す。そこで性慾倒錯の人であつたと速斷されてゐる偉人も甚だ多いが、中には明に後人の牽强附會だと思はれる者さへ尠からずある。希臘の大哲ソクラテスやプラトオンは普通に同性性慾の人であつたと認められてゐるが、眞僞は果して如何であらうか。唯だ希臘時代に於ては、性慾倒錯といふ事が公然世間から認容されてゐて、近代の英米に於ける如く、それが罪惡視されたり法律の制裁を蒙つたりする樣な事は全く無かつた。否な公然と憑かる不自然な愛に惑溺しながら、例へばエパミノンダスのやうに、一世の尊敬を得てゐた人すら決して珍らしくなかつたのである。希臘藝術に於て特に男性の肉體美が貴ばれ

たと云ふやうな事も、此現象と淺からざる關係があつたらしい。

この病的現象は北歐よりも南歐に多い。中にも希臘などでは、流行に促されて自から此風習に惑溺する者も多かつたが、既に先天的にさういふ性癖を有つてゐる者の方が遙に普通であつた。殊にそれはドリアン人種の中に多かつた。また南歐のうちでも伊太利はその最なるもので羅馬時代には殆どそれが社會の常習であり風俗であつたかの如き觀があつた。殊にその頽廢期であつた帝政の末年に於て烈しかつた事は、多くの史家の考證が示す事實である。羅馬歷代の皇帝にはその例甚だ多く、ジユリアス・シイザアを始めとして、オウガスタス、テイベリアス、カリギユラ、ネロ、トラジヤアン、ハドリアン以下、殆ど枚擧に遑なき程である。いつも自分の肉體美を誇りとした該撒(シイザア)が陣中の逸話は多く此事實を傳へ、またハドリアン皇帝が美男の奴隷アンテイノウスとの相思はさまざまの傳奇的色彩に飾られて有名なる史實となつてゐる。恐

らくは是は後世のフレデリック大王と共に最も著るしき例であらう。羅馬帝政が頽廢の極にあつた頃在位三年に及んだ皇帝ヘリオガバラスの如きは自ら女裝して自分の愛してゐる男子に身を捧げたと云ふ。恁ういふわけだから、羅馬の文學には勿論深い關係があるので、大詩人ヴァジルにも此性癖があつた事を學者は傳へてゐる。そのほかカトウルラスやオヸッドの作品にある美しい牧童の讃美をも、皆この性慾倒錯によつて解釋する人が多い。

中世から文藝復興期へかけては、この風習がまた甚だ盛であつたらしい。ダンテの『神曲』地獄界十五章の終の方に、

『この人々みな學高く、譽も高かりしが、地上にて、同じ一つの罪に身を穢したり。』

といふ句があるが、此『一つの罪』といふのは即ち西鶴の好色本などにある『衆道』を云つたのだ。當時才學一世にすぐれた學者が、弟子たちの美男に

思を懸けた者の多かつた事が之れで知られる、

いふ迄もなく文藝復興期（ルネッサンス）は、中世禁慾時代の後を承けて肉の解放された時代である。從つて人々の性慾生活（ヰタ、セクシユアリス）の上にも、色々の意味に於て注目せらるべき事柄が多かつた。即ち當時の古典學者（ヒユウマニスト）のうちには同性性慾に溺れた人が尠からずあつたので、其著るしき例としては佛蘭西のミユレエ（又はムレトウス一五二六―八五）の如きがある。彼ははじめ巴里で多くの青年の爲に哲學と法理を講じた頃、名聲一時に高かつたのが、例の不自然な愛に耽つて遂に獄裏の人となつた。後ゆるされて、今度はトウルウズに行つて、そこで羅馬法を講じたが、又もや或る青年と關係が出來たため、罪を宣告されて、二人共に火刑に處せられようとした。ミユレエは身を以て漸く逃れて伊太利に奔り、そこでまた同じく不自然な亂行を續けて、遂に世を終つたのである。なほ當時の藝術家で云へば、レオナルド・ダ・ヴンチも、ミケランゼロも皆この性癖

があつたと傳へられてゐる。殊に後者に至つてはすべての傳記者が皆この事實を立證し、かれが男性美に對する感性の特に鋭かつた所以を語つてゐる。

英文學で云へばエリザベス朝、なかでもかの豪放の生活と熱烈の詩才とを以て後世に聞こえたる大學才人（ユニウアシテ・ヰツツ）の第一人マアロオこそ、最も著るしき例であらう。其作では悲劇『エドワアド二世』に王と嬖臣との關係を描いてゐるが、是は作者も、また描かれた王エドワアド二世も、共に史實の上に於て性慾倒錯の人であつたのだ。また哲人ベイコンに至つては、毫も疑ふ餘地も無い『ペデラスト』であつた。沙翁にもこの嫌疑がある、と云ふのは、あの名高い小曲集（ソネツト）の中に詩聖が熱烈な愛の言葉を捧げてゐる相手の美男が、疑問の中心になつてゐるからである。しかし沙翁が女性との關係の甚だ深かつた事を思ふと、この性慾倒錯といふ點はどうも私共には受取れないやうに思はれる。たゞ僅に此小曲（ソネツト）に現はれた位の事を以て嫌疑の材料とするならば、處女

王朝の抒情詩人の作には、それかと思はれるやうな詞句は毫も珍とするに足らない程多いのである。

感情生活の豊かな詩人の常として、友愛の情も殆ど常軌を逸して濃かな場合が多い。それを例の枯淡な學究的觀察から、性慾的關係でもあつたやうに誤認する例は決して尠くない。たとへばバイロンの學生時代の友情や、或は彼が二十二歳の時に親交のあつた一青年の爲に遺産の一部を分たうと考へた事實を捉へて、直にバイロンにも此性癖があつたと斷定する人がある。またもつと極端な例をいふと、テニソンが大作『イン・メモオリアム』に其死を哭した親友ハラムとの關係にも、性慾分子が這入つてゐたかのやうに速斷するに至つては、寧ろ滑稽の感がある。

近代の所謂頽廢文學の徒に至つては、此病的性癖の顯著な例が最も多い。先づ『惡の華』の詩人ボドレエルを始めとして、ヱルレイヌが、美少年詩人

アルテュル・ラムボオとの戀に落ちて、妻を棄て家を去り、二人相携へて放浪の生活に入つた話は特に名高い。ヹルレイヌは後に此ラムボオとの間に不和を生じて、遂に拳銃(ピストル)騒ぎと迄なつて獄に投ぜられた。詩集『靈智(サゼノス)』は實にこの時の製作である。また英吉利のオスカア・ワイルドの有名な男色事件に至つては、既によく邦人の間に知られてゐる事で今更云ふ迄もなからう。唯だ最後に一言したいのはホヰットマンである。熱烈なる肉體の讃美者として彼の詩篇には男性美を歌つたものが甚だ多い。殊に詩集『草葉』のなかに出る『男の愛(マンリ・ラヴ)』といふ言葉の意味は、熱烈な友情が肉體の接近によつて情緒の快感を伴ふの意を含めて云つてゐる。然し此詩人は他の場合に於て、明かに同性性慾を自然に背ける罪惡なりと明言してゐるので見ると、夫と是とは或は別問題として考へたのかも知れない。此點は確に疑問として殘るべきだ。

昔からよく、一切の色慾を絕つた道心堅固の人、或は高德の士と云はれる

人々に、自分では全く無意識にこの同性性慾の性癖を有し、是が變化して慈悲博愛の美德となつてゐる樣な場合も尠くない事を、エリスなぞは說いてゐる。また多くの天才の中には、女色と共にこの同性性慾にも溺れた人たちが尠くない。專門學者は之を名づけて『兩性性慾心理』と呼んでゐるが、先に擧げたマアロウやヱルレイヌは即ち此適例である。又ドストエフスキイが描いた西伯利亞囚人の生活にも、兩性慾兼備の例が澤山出てゐる。

下

だいぶ以前に雜誌『スバル』の紙上で、或る若い作家――誰であつたか今名は忘れたが――の小說に、女を傷け血を流して、それを見て男が快感を覺ゆるといふ『サディズム』の事が書いたのを初めて見たとき、私は日本にも恁ういふ類の作物が出るやうになつた事を珍らしいと思つた。それから後谷

崎潤一郎氏の作などを見てゐると、屢次この性慾の變態現象が材料になつてゐることを見、最近に於ては同氏の作『饒太郎』(中央公論大正三年九月號所載)に作者自ら銘打つて『マゾッヒズム』を樂む主人公を描いたのを讀んだ。今多くの病的性慾のうちで、ことさらに『マゾッヒズム』と『サディズム』との二つが西洋文藝に現れた例を私が說くのは、我國文壇の近頃の作品に多少の關係があるからである。先づ『マゾッヒズム』の方から云はう。

『マゾッヒズム』といふ言葉は獨逸の性慾學者クラフト・エビングの命名であるが、彼は其著『病的性慾心理(プシコパティア、セクシュアリス)』に於て、この病的現象に下の定義を與へてゐる、『心理的性慾生活(ヰタ、セクシュアリス)の一變態にして、之に罹れる者は己を威壓し屈辱し虐待する異性の人の意志に、全然無條件に服從すといふ觀念によつて、其性的思想感情を支配せらるゝ者なり』と恁う云つてゐる。元來このマゾッヒズムといふ名は、墺多利の小說家ザッヘル・マゾッホ(一八三六——一八九

五）の作品に此病的性慾を描いたものが多いから、其名を取つたのである。しかし是はマゾツホのみならず、ゾラにもあれば、ルッソォの『懺悔錄』にも出てゐる。バルザックが巴里生活の暗黑面を描いて、凡る醜穢な寫實の極致を盡した『貧しき親』の第一卷『従妹のベット』の中にも描かれてゐる。
異性の者から苦痛を受けて、それを甘受するのみか却て肉的快感を得るといふ此病的狀態は、女子よりも男子の方に多い。元來病的と云ふのも要するに程度の問題であつて、戀愛といふ事には、多少みな異性から受ける苦痛を喜ぶといふやうな心持が伴ふものである。これは古くから文學の書物にはよく〳〵出てゐる事で、中世の浪漫的な戀物語などに屢次ある話だ。後世のものでも、たとへば十七世紀の英文學に忘れられない名著になつてゐるロバアト・バアトンの『憂鬱の解剖』は、當時の書物としては、人の心理をなか〳〵巧く解剖し透察した面白い本であるが、其中に戀する者の心理を說いた條に、「かれ

らは大抵は奴隷であり捕虜であり、進んで奴僕となる者で、カスティロが云つた如く、戀人は女の奴隷に外ならぬ。女のために囚人となり、勞役者となるものだ』（同書第三卷、第二部第三章）とあるが、是が常軌を逸して烈しくなれば、約り（つま）マゾッヒズムだ。

古い昔の事をいふと希臘のアリストオテレスなども有名なマゾヒストで、この大哲が四つ這ひになつて、鞭を持つた一人の女が其上に馬乗りになつてゐる繪がある。羅馬の方では詩人オヴィディウスに最もよく出てゐる。近代ではゲエテにもあれば、ハイチやプラアテンの詩篇にも明かにマゾヒズムの痕跡があると評家は云つてゐる。も一つ新しいところで振つた例を云へば、鐵血宰相比公（ビスマーク）が戀人に送つた手紙にも、確かにこの病的な文句がいくらも出てゐると、是は私は讀んだ事がないが專門家がさう云つてゐる。しかしビスマアクなぞは例外として、恁ういふ病的傾向は概して神經質で多情多恨で謂はゞ

詩人肌の人に多く、また野蠻時代には少くして文明の進步と共に增加する事も今更云ふまでも無い。また女が頻に暴威を揮ふ西洋では、今もなほ男尊女卑の風の烈しい日本などよりも、怎ういふ病的傾向が多からうとは、誰が考へてもさう思はれる。實際私は自分の狹い讀書範圍の中から、日本文學に於けるマゾヒズムの例を見出さうと思つても、一つも思ひ出せないのである。

次に此の名の源をなしてゐるザッヘル・マゾッホその人に就て云ふと、彼は今度歐洲戰亂で有名になつたガリシアの人で、レムベルグ市の生れである。其作中、英譯になつてゐる『猶太人物語』に收められた二十餘種の短篇は、東歐の此地方に住む猶太人特有の風俗を描いて、隨分醜穢な描寫を試みた物であるが、之によつて見てもガリシア地方の女は極端に男子を抑壓して之を虐待するか、或は男子に向つて全く奴隸的服從の狀態に滿足するか、この兩極端の何れか一方である事がわかる。マゾッホは元來幼少の頃からして、所

刑の圖を見たり悲慘な殉敎者の話などを讀んで、殘忍な血なまぐさい事柄には無上の快感を覺ゑたさうであるが、その十歲の頃に旣に下のやうな話が傳へられてゐる。即ち彼の父かたの方の親類に淫奔な美人の或る伯爵夫人があつたが、幼いマゾッホは頻りにこの夫人を敬慕した。夫人の方でもそれを憎からず思つて、左右に侍らせて色々の用事をさしてゐた。或時の事である、マゾッホは夫人の前に跪づいて貂の皮の上靴を穿かせ樣として其足に接吻した。夫人は微笑して、マゾッホを蹴つたので、少年はひど〳〵快感を覺ゑたさうだ。この類の話はマゾッホの傳記にいくつも出てゐる。貂の皮に限らずすべて毛皮を愛するのは懲ういふ病的天才によくある事ださうだが、マゾッホは毛皮を着て鞭を持つた女が何よりの好物であつた。

マゾッホが結婚して間もない頃或る時細君に、鞭韃して吳れよと求めた、細君が聽かなかつたので、それならば女中にやらせようとした。細君にはご

うしてもそれが眞面目だとは受け取れず、遂に女中が猛烈に笞打をやつたのでマゾッホも滿足したさうだ。しまひには釘の附いた鞭を特別に拵へて、いやと云ふ細君に無理にそれを持たせ、自分を鞭打たせた。殊に創作に從事してゐる時などは、毎日のやうに女性から此鞭撻を受けて、その興奮で筆を走らせ、彼の作中にお定まりの男子虐待の女を描くのを快心の事としたさうである。或る批評家は、イブセンが例のノラ式の女を出して、一方にはまた甚だ意氣地の無い男子を描くのを見て、この近代の大戲曲家をもマゾヒストの仲間として論ずる人があるが、それは勿論あまりに極端な僻説である。

性(セツクス)といふ點から見ると純粹な男性もなければ女性もない、大抵の人間は皆兩性混合であると云ふ事を嘗てワイニンゲルの本で讀んだが、マゾヒスムの性癖の男子などは頻に女裝を喜び、之に對する女子の方は煙草を喫んだり乘馬鞭を振つたりして、昔の女兵(アマゾン)のやうな勢ひになるといふ話だ。日本でも

近頃若い生白い面をした男だか女だか分らない奴が、長繻袢を着て喜んで見たり、女の癖に男子類似の服裝をして都大路を横行濶歩する風が流行るが、是等は追々にマゾヒズムの方に發展して行く事であらう。

可愛さと憎さと、愛情と苦痛と、極端に相反した是等ふたつの者の間には不思議の關係があるらしい。時々は無理を云つて、手荒い事の一つもする樣な亭主をこそ、此上もなく嬉しと思ふ女房もあらう。ボッカチォの『十日物語』や、チョオサアの『カンタベリ物語』の中の『學者の話』に出て名高いグリゼルダ堪忍物語と云ふのがある。良人から有ゆる虐待を受けて、少しも不平な顏をせずにそれを忍んでゐる女の話であるが、あれなども一種の病的狀態だと見れば見られるであらう。

さて苦痛を受けて喜ぶマゾヒズムとは正反對に、苦痛を異性の者に與へて喜ぶ心理狀態をサディズムと呼ぶのである。詳しく言へで自分の戀人を打擲

し虐待し負傷せしめ、殊にその血を流すを見て肉慾の快感を得る者である。普通は引掻いたり嚙み附いたりするか或は鞭韃(フラゼレイシヤシ)の法によるのが精々だが少し病勢の昂進したのになると、必ず血に渇して來る。そして遂には相手を殺して仕舞ふのが所謂性慾殺人(ルストモオルド)である。また死屍を弄すんで快感を貪らうとするのみか、之を寸斷してはじめて性慾の滿足を得る者を、學者は名づけて『子クロフイル』と云ふ、是等は犯罪者に往々見られる病的心理である。

東洋でこのサデイズムの例を、寡聞なる私は今直ぐに思ひ出さないが、かの紂王の寵妃妲妃の話などは、確かにこの一例とすべきだと思ふ。紂王が炮烙の刑を設け、銅柱に膏し之を炭火に加へ、罪人をしてその上を行かしめ、炭中に墮つれば妲妃は乃ち快げに笑つたといふ類の話がそれだ。西洋史の方では羅馬の皇帝子ロ、テイベリアス、カリギユラなどが、確に恁ういふ性癖を有してゐたと考へられる。女性では十六世紀のカザリン・デ・メヂイチが、聖

バアソロミウ祭日の夜の新教徒大虐殺を見て快感を貪つた話を、此病的性慾心理に歸する學者もある。古くは羅馬の皇帝クロオディアスの皇后で、淫蕩と悖德とを以て古今の史上に名高いメッサリナも、矢張りサディストであつたと見做されてゐる。

文藝の方では、十八世紀の佛蘭西のドゥ・サッドの作品に此病的性慾が描かれてゐると云ふので『サディズム』といふ名稱は出來たのである。オスカア・ワイルドの『サロメ』が銀盤の上に置かれたる、血汐したゝる戀人の生首に接吻するなども此方の傾向がある。また獨逸のハインリッヒ・フォン・クライストの傑作である『ペンテジレエア』のうち、狂亂の女主人公が、自分の手で殺した戀人アヒルレスの、まだ体溫ある屍體に犬と一緒に咬みつく深酷痛烈の場面をも、或批評家は此サディズムだと解してゐる。さてはまたニイチエの『ツアラトストラ』のなかに、『爾女に行かんとするや、さらば鞭を忘る

るな」といふやうな、どうも夫れらしい文句が澤山あるといふので、ニイチエも此病的性慾の人だと斷定されてゐる。現代の詩人ではエデキントが屢次その詩篇のうちに性慾の恁ういふ病的興奮を歌つてゐる。又ずつと古い處で云へば、十七世紀の末に出來た『青髯』の物語の主人公ラウウルといふ武士も、矢張り此サデイストであらう。彼は若い妻に城内のすべての鍵を渡したが、或る特別の一室だけは開ける事を嚴重に禁じて置いた。併し恁ういふ時に禁制の木の實を食べたいのは女の常である。そこで主人の不在中を見計らつて、其一室を開けた。見ると驚くまい事か、今までの幾人かの先妻が皆慘殺されて、死屍は此一室に累々たる有樣であつたといふ。是等は或は上に述べた『チクロフイイル』の仲間であるのかも知れない。なほ日本の德川文學の中をよく調べたならば、此種の性慾描寫があるだらうかと思ふ。

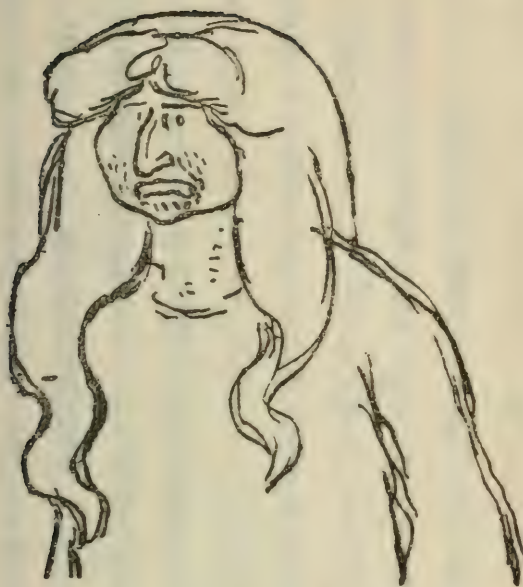
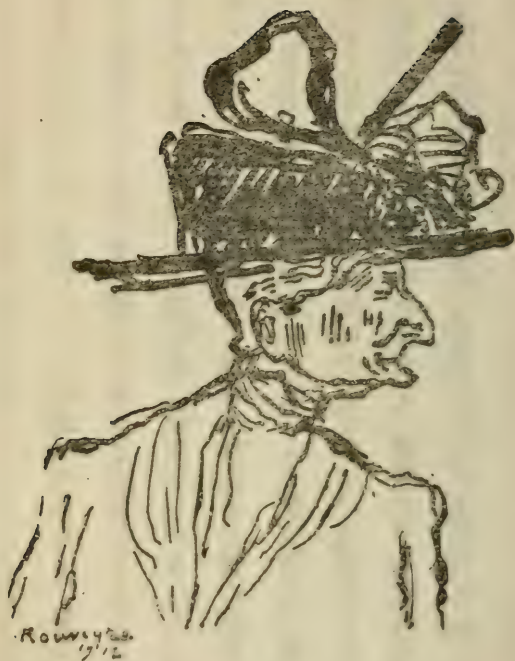
（大正四年一月）

ルウヱイルの漫畫

日本ででも人氣役者の似顔繪なぞは、江戸時代から隨分行はれたものであるが、しかし西洋ほどの流行は明治になつてからも見られない。元來西洋人といへば何故（なぜ）またあんなに似顔（カリカチユル）を喜ぶのだらう、私どもには不思議と思はれる程だが。それだけまた此方面で繪も十分發達をしてゐる。眞面目くさつた英吉利人までが、評判の Max（マクス） Beerbohm（ビアボオム）（本書『若き藝術家の群』の條參照）のかいた戲畫を、やんや云つて面白がる。人氣を一身に集めてゐるやうな政治家や俳優は勿論のこと、詩人でも小説家でも、ひとたびマックスの戲筆に描かれるといゝさん〴〵な目に遇ふ、それをまた皆が面白がつて喝采するのである。

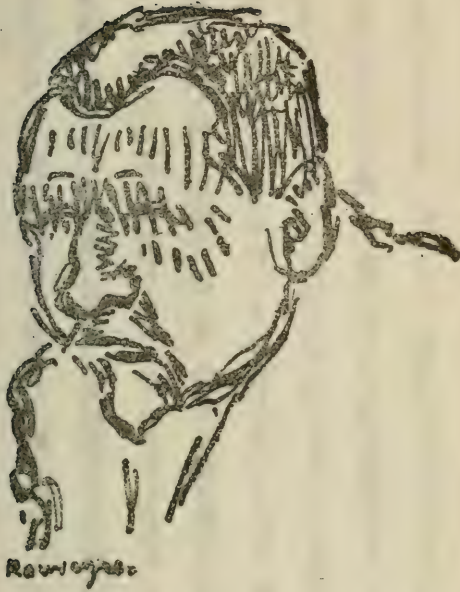
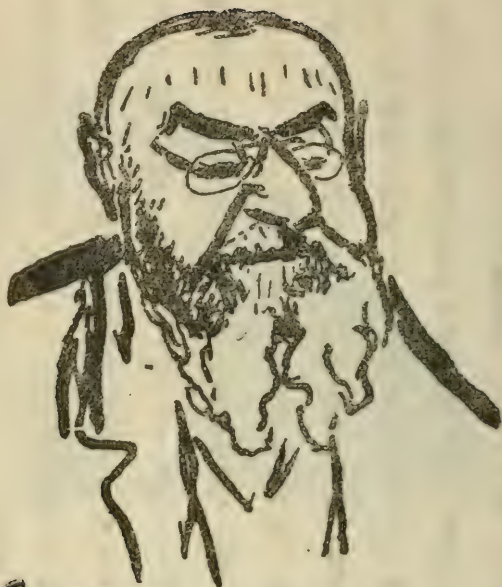
佛蘭西の方では今 André（アンドレ） Rouveyre（ルウエイル） の似顔繪が最近の評判物であるが、奇拔な、人の意表に出でるといふ點では眞に痛快を極めた、また類の無い面白

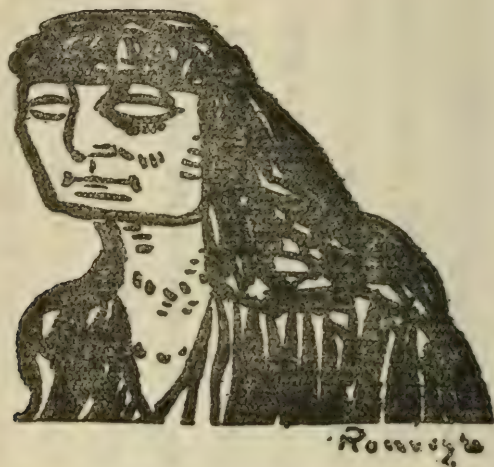
いものである。批評界では Brandes をはじめ、André Gide や、Remy de Gourmont のやうな名家が盛にその提灯を持つし、詩人の故 Jean Moreas なども美しい散文で、この一派の漫畫を世に紹介した。一時畫壇を風靡してゐたあの奇矯な後期印象派はいふ迄もなく、立体派 Cubism それからまだ進んで後期立体派 Post-Cubism の破壞的な奇抜の畫風までが、追々はこの漫畫の方面へも這入つて來るものらしい。

どんな美人でも名優でも、ひとたびこのルウヱイルの毒筆に掛つたが最後、さんざんな目に遇はされる。中にも一番ルウヱイルからひどい目に遇はされるのは婦人である。評判の女優やオペラの歌ひ女をわざ／＼撰び好んで、猛烈な毒々しい得意の畫筆で飜弄するのは眞に痛快で、かゝれた當人さへ苦笑を禁じ得ないだらう。數年前物故した彼の名高い詩人 Catulle Mendès の夫人を、ルウヱイルが描いたのを見ると、むやみに肥つたまるで豚のあたまの

Natalie Clifford Barney

Marquise de Mac-Mahon

樣な物にして描いてあるが、嘲弄も甚う迄になつては餘りに烈しいと云ふので、ルウヱイルは遂に法廷に訴へられようとしたと云ふ名高い話がある。かう云ふと、ルウヱイルも何だかあの北歐の有名な女嫌ひの文豪Strindbergのやうにも聞こゑるが、よく調べて見ると必ずしもさうではないので、つまり彼は平凡を忌む結果、女の顏の異な特徵をつかまへて、極度にそれを誇張して描くため、あゝも思ひ切つて殘酷に醜化する事になるのだらうかと思はれる。勿論この畫家の頭にアイロニカルな、厭生的な、强いて物の暗黑面を梟のやうな目で見ようといふ傾向のある事は、否定する事の出來ない事實である。ブランデスは彼の畫筆を評して、野獸がその獲物を弄ぶやうに、さんざんに銳い爪牙で引裂く殘忍な描きかたをするのだと云つたのは面白い評語である。

ルウヱイルの畫は、雜誌などに出てゐた物のほか、纏つた一冊の畫集とし

て私共がはじめて見たのは、千九百〇七年に出た『聖き骸』(Carcasses Divines といふので、是は現代名士の似顔を集めたものだ。そのボドレエル式の表題の附け方からして既に面白い。全巻を三部に分けて、第一部は Portraits で、今の佛蘭西の詩人、小說家、女優、批評家などの似顔が五十四枚、第二部は或る女優(名はわざと內證にして)の monographie で、六枚のデッサン、第三部はまた或る別の女優の似顔、同じ女優を色々の姿勢や位置に置いて、それを三十五枚のデッサンにかき分けたものである。同一人の顏ではあるが種々さま〴〵な表情といひ氣分といひ、それを一々巧みにかき分けて、一枚ごとに全くちがつた感じの畫に仕上げた其伎倆に至つては眞に驚嘆の外はない。日本の毛筆で墨くろ〴〵と一刷毛なすつたやうな、馬鹿に粗い太い線を使つたのも多い。之こそ奔放と云はうか、殘酷と云はうか、眞に評しようのない奇拔な畫風である。(本書一二八頁以下の數葉、及び後段『アナトオル・フランス』の挿畫に、此『聖き骸』の畫風を示さんが爲め揭げた)

Docteur Doyen

Francis Jammes

それから數年のちに出たのが『女部屋』"Le Gynécée"といふ一卷で、これは女の裸體の習作八十枚を集めたもの、その官能的な畫風が先づ著るしく世の注意を惹いた。ジヤン、モレアスは此畫集を、戀愛の Danse Macabre（扮鬼舞蹈）だと評し、其序文を書いてゐるレミ・ドゥ・グルモンも、『これは生の書である、夢の書ではない』と云つた。またブランデスに云はせると、この畫集は戀愛における婦人の肉的方面を赤裸々に描いたもので、遺憾なく其獸性を表はしてゐる。婦人のあらゆる動作を仔細に觀察して行儀よくしてゐる所から、いいいはしやいだところ、何でも常人の目に付きそうもない一擧一動の末まで、その特徴を誇大して寫したものだそうだ。勿論これは日本の公刊物などに紹介する事を許されないものだらうが、私みづからまだ見る機會を得ないのである。或人が折角佛蘭西から持つて歸つたのを、横濱で沒收されたといふ事を聞いたが、殘念でたまらない。

Comtesse de Noailles

最近にまたルウヴエイルの新畫集が、巴里のMercure de France（メルキュル ド フランス）社から出た。今度のは題して『現代の肖像』Visages des Contemporains といふので、歐洲現代の名士八十六人の畫像である。例によつてレミ・ドゥ・グルモンの熱心な推賛の序文が附いてゐるが、それには下のやうな事が書いてある。

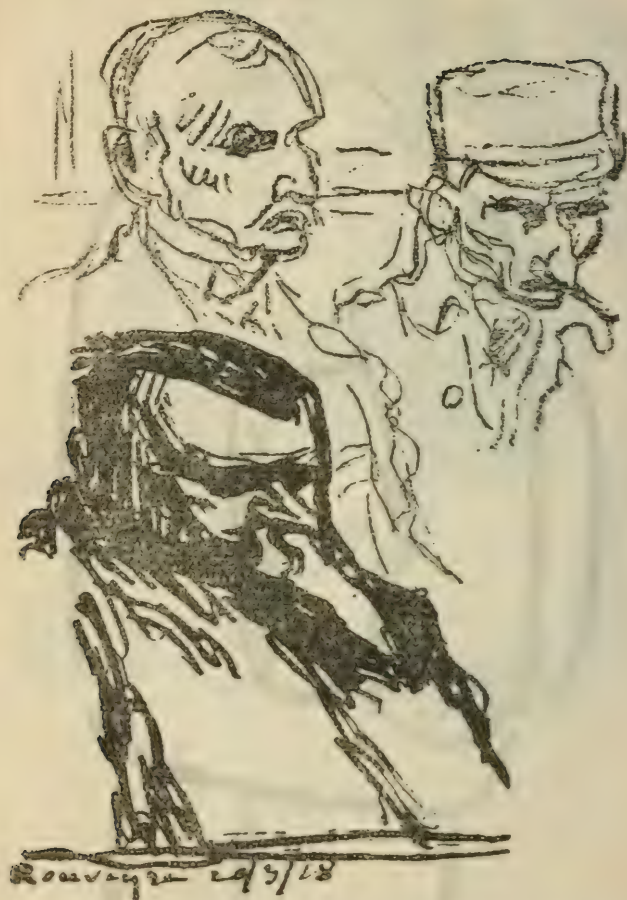
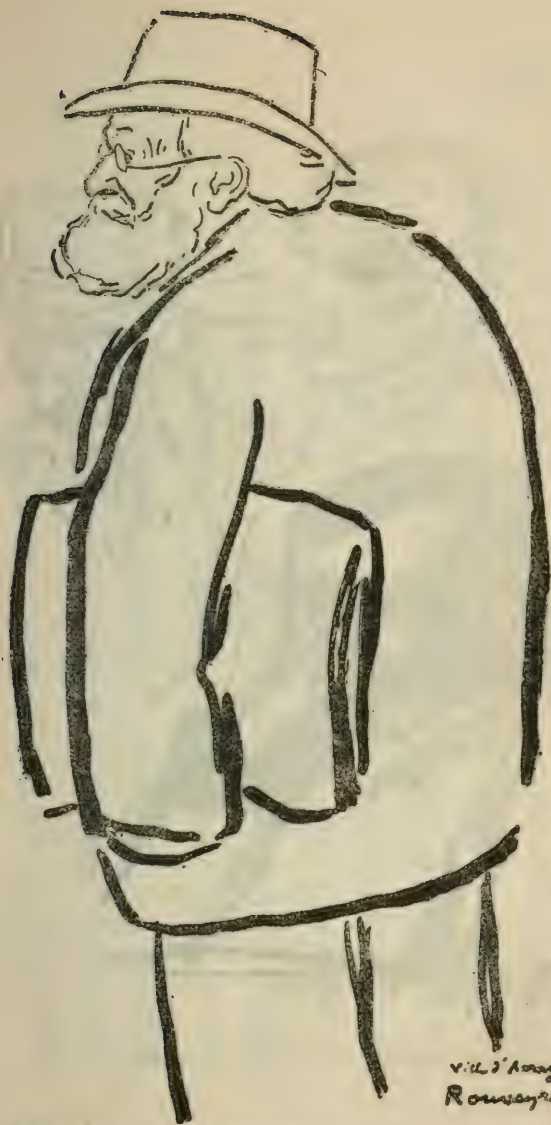
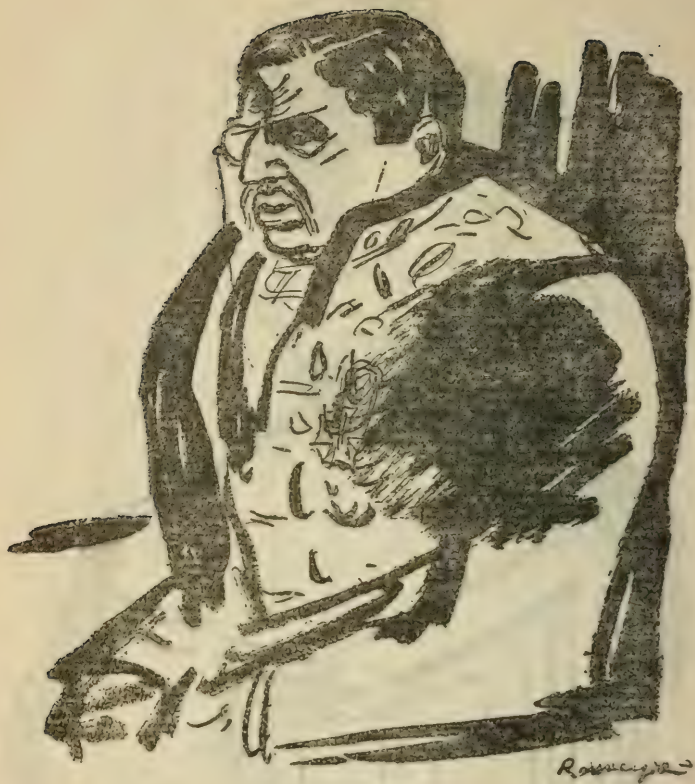
ルウヴエイルの繪には、寫眞といふやうな分子は微塵も無い、さりとて普通のカリカチユウルのやうに、單に人を笑はせるのでもない。かれ獨特の技倆ともいふべき解剖と構造との力で、つまり吾々をして考へさせるやうな繪をかくのである。ちよつと見ると、壁に映つた影の輪廓だけを、木炭か何かでさら〳〵となぞつたやうなごく簡單なものだが、その一線一劃ことごとくルウヴエイルその人に特有のものである、斷じて他人の模倣を許さない生き生きしたところがある。グルモンの言葉その儘を引用して云ふと、『かれが見る顏は獨り彼によつてのみ見られたもの、それを描くに先だつて彼は先づそれを

理解しようと求める。線でも陰影でも目鼻だちでも凹んだ所でも、また色一も、みな全くルウヴエィル獨得の我流で描いてあるが、それがまた此畫家のよく合點してゐる言葉で語られてゐる。考へてゐる頭のなかで、すべてのものが考へてゐるのである。實際ルウヴエィルのかいた顏で、一つの心狀の象徵になつてゐないものは一つも無い。その生命や言葉が、皮膚の皺一つ〳〵の中からも出てゐるやうに見える。』

ルウヴエィルの繪をよく見てゐると、あの無造作にかきなぐつたやうな線のなかに、一つ一つ生命の流れが溢れてゐて、それがみな張り切れるやうな力で躍動してゐる。時にはあまり心理を透察する力が鋭いために、殘忍だとも云ひたいやうな繪も出來るが、それがまたなか〳〵痛快だから面白い。

いやに澄ました Anatole France 燒鳥のあたま見たやうな Bergson の顏、紙屑を丸めたやうなブランデス、目ばかり大きくかいた D' Annnzio 瘦せつ

ぼちの露西亞の舞踊女優 Rubinstein（ルウビンスタイン） の姿なぞ、みな嘗て雜誌『メルキユウル・ドゥ・フランス』に出てゐた面白いものであるが、今こゝに複寫する事の出來ないのを私は遺憾に思ふのである。

此一篇は數年前東都の或新劇團の機關雜誌の爲に草した物であるが當時私の手許に在つたルウヹイルの繪が今見當らないので、更に文藝雜誌『メルキユウル・ドゥ・フランス』に在る數葉を採つて茲に掲げた。Natalie Clifford Barney と Marquise de Mac-Mahon の二枚は、此畫家が婦人を描く殘忍な毒筆の一斑を示してゐる。其次の Docteur Doyen は佛蘭西現代の外科學婦人科學の泰斗。 また Francis Jammes は自然美を歌ふ新詩人の翹楚 Noailles 伯爵夫人は佛蘭西第一の女詩人。一二七頁の Dounic は文藝批評に於て現代佛蘭西文壇一方の旗頭だ。誰でも彼でも皆此ルウヹイルの筆に掛つてはかなはない。

RENE DOUMIC (en bas), à une conférence de

(128) Docteur Metchnikoff
(Rouveyre *Carcasses Divines*)

(129) Paul Bourget
(Rouveyre, *Carcasses Divines*)

(130) Une Comédienne Tragique et Comique
(Rouveyre, *Carcasses Divines*)

お伽噺の話

一 鉢かつぎ

物語に對する興味は人間の本能性である。個人としては子供の時からまた民族としては原始時代から色々な荒唐無稽の談に耳を傾けて興がつてゐる、小むつかしい近代の文學も遠く源へ遡れば矢張り昔の武勇譚や童話や怪談の類から進化したものに過ぎない。わが室町時代に出來た『お伽草子』は多くの古傳説を集めた童話集であるが、それがまた後の德川盛期の戯曲小説の起源をも爲してゐる。

此『お伽草子』の中に收められた『鉢かつぎ』の話は、爾後幾世紀の間『桃太郎』や『文福茶釜』と共に日本の子供の心を樂ませた名高いお伽噺である。私はいま比較說話學に於ける此話の意義を語るに當り、先づ原本の『お伽草

子』によつて其荒筋を述べよう。

河内の國片野の邊に備中の守さねたかと云ふ人があつた。何一つ足らぬ事なき富有の身であつたが、長らく子供の無いのを嘆いてゐた。ところが如何した拍子でか一人の姫君が生れた。姫は肩の隱れるほどの大きい鉢を冠つてゐた。母親が詠んだ歌に、

さしもぐさ深くぞ賴む觀世音
　誓ひのまゝにいただかせぬる

姫が十三の年に母は死んだ。あとに來た繼母が姫を虐待し父に讒誣した爲め、姫は遂に家を逃げ出した。河に身を投じたが鉢を冠つてゐる爲めに顏ばかりは沈まず、遂に漁船に救はれる。それから人里へさまよひ出た時、ふと國守の山蔭の三位中將の目にとまり、鉢を脫いで顏を見せようとしても鉢は如何しても取れない。そのまゝ國守の館に風呂たき女として置かれた。

此の中將殿には四人の子があつた。三人には既う嫁があつた、四番目の子の大將殿御曹子と云ふのはまだ獨身で『優にやさしき御妻、むかしを申せば源氏の大將在原業平かとぞ申すばかり』であつたが、ふと此風呂たき女の鉢かつぎに想ひをかけて、深くも契つた。

御曹子の父君は恁かる見苦しい風呂場女の不具者を、息子の嫁にする事には無論反對であつた。母君もまた鉢かつぎは變化(へんげ)の者で必定若君の身に禍ひするだらうと邪推をして恐れた。しかし御曹子の熱愛は變らなかつた。

父母は二人のなかを割くべく一計を案じた、御曹子ら四人の兄弟の嫁競べをすれば、鉢かつぎは見苦しき我身の妻を恥ぢて自ら逃げ出すだらうと。御曹子は鉢かつぎと共に此話を聞いてから苦悶した揚句、さらば二人で家出をしようと云ふので、曉近く急いで家を出ようとする時『いただき給ふ鉢はかつぱと前に落ち』て割れた。

驚いて鉢かつぎ姫の顔を見ると『十五夜の月の雲間を出づる』に異ならぬ美くしさ。そして落ちた鉢の中からは金銀珠玉のほか『十二ひとへの御小袖紅のちしほの袴』まで出たのである。是は姫の母が初瀨の觀世音を信心した御利生であつた。そこで姫は御曹子に伴はれて嫁競べの席へ出ると、其のあでやかさ美しさは、滿座の人を驚かしたのみか、三人の嫂をして顏色なからしめた。そして父なる中將は喜びの餘り、家產の大部分を御曹子夫婦に與へた。これに引變へ、嘗て鉢かつぎを虐待した繼母は、人々から見棄てられて悲慘なる一生を送つた。

二　世界的傳說

日本民族が昔から語り傳へた此『鉢かつぎ』の話は、世界各國民の有する說話の比較硏究者に取つては、たしかに我國寶の一つである。此話は種々に

形を變へて遠い古代から世界中到る處に傳播してゐる。歐洲の文明國は云ふに及ばず、阿弗利加のホッテントットの野蠻人も印度の山奥のサンタル人も芬蘭人も、セルビア人も、皆これと同じ昔噺を有つてゐる。かの深遠の學殖に加ふるに能文健筆を以て名高かつた英國のアンドルウ・ラングが主宰した傳說學會の研究によると、之と同型の說話は世界に三百四十五種傳へられてゐる。專門學者がリップ・ヴン・井ンクル式と呼ぶ浦島太郎の話や、白鳥處女說話として分類した羽衣傳說と同じく、『鉢かつぎ』も亦吾々が五大洲の諸民族と共に遠い祖先から語り傳へた物語である事を思へば、一篇の此童話には重大な世界的意義が見出される。

『鉢かつぎ』の話の起源は、他の多くの童話と同じく固より有史以前にあるのだが、西洋の文獻に現はれた所で云へば、紀元後第三世紀羅馬の史家アイリアンの書いたロドオピスの話がそれだ。しかし尙之よりも二世紀遡つて、

地理學の方で有名なかのストラボオの『地誌』の中にも見江てゐるが、此方は埃及の話になつてゐる。降つて歐洲の中世となると獨逸あたりでは最も流行したもので、今日グリムの童話集(メエルヘン)に出てゐる『アッセンプッテル』は即ち是だ。

英米のは、佛蘭西十七世紀のシャルル・ペロオルの有名な『仙女物語(コントドフエエ)』から取つたもので、英語國民の子供で、お伽噺に之を聞かない者は殆ど無いと云つて可いほど名高い『シンデレラ』の話は、即ちわが國の『鉢かつぎ』の一變形である。

『シンデレラ』の字義は『灰掻きの女』といふ意味で、『お伽草子』の『鉢かつぎ』の中に、『湯殿におけとありければ、未だ習はぬ事なれど、時に從ふ世の中なれば、湯殿の火をこそ焚かれけれ』とあるに一致してゐるのも面白い。唯だ西洋の方のは風呂焚きではなく、いつも爐の隅にしよんぼり坐つて

ゐるエラと云ふ女の義である。

いま英國の劇壇にバアナアド・ショオと並び稱せられる人氣作者はジエムス・バリイであるが、小說や普通の劇の外に、此人の名を最も重からしめてゐる者はお伽芝居だ。バリイの作『ピイタア・パン』と聞けば、英國の子供は直ぐにやつと笑ふ程に喜ばれる物であるが、最近に此作者はこゝに云ふシンデレラの話を戰爭の際物に作り變へて喝采を博してゐる。此人の脚本はいつも女優のモオド・アダムスが演るに定つてゐるが、私は夫れを一度滯米中に紐育の大劇場で見た。相變らずの大評判であつた。お伽芝居とは云ふものゝ觀客は子供よりも大供の方が多數で、バリイ物を演ずる此女優の收入は一興行幾十萬弗に上るときさへ聞いた。

三　シンデレラ

西洋のお伽噺の流行する此頃、シンデレラの話も『黄金の靴』と題して既に我邦に傳へられてゐるさうだから、私は茲に唯其梗概を述べて我國の『鉢かつぎ』との比較に便しよう。

娘の母が死んだので、父は後妻を迎へた。父の存命中は意地惡の繼母も此娘を可愛がつたが、程なく父も死んだ。繼母の腹に生れた二人の娘よりも先妻の子のシンデレラの方が遙に美しく遙に愛らしきを憎んで、繼母は此可憐の少女を虐待し酷使した。いつも襤褸の衣物を着せて、屋根裏に押し込めて置いた。

或る時、王の宮殿に舞踏會があつて他の二人の娘は夫れへ行つたが、シンデレラだけは固より行く事を許されなかつた。爐邊に獨り淋しく取殘されて留守をしながら獨りしく〳〵泣いてゐた。すると不意に此少女の教母である仙女がやつて來たので、自分も舞踏會に行きたいと云つて訴へる。仙女はそれ

を慰めて、

『よろしい、それでは庭へ行つて舞踏靴を一足取つてらつしやい』と云つた。むすめは舞踏靴の一番大きいのを持つて來ると、仙女(フエアリ)は直に魔法の杖を使つて、之を立派な馬車に變へた。また鼠を六匹取つて六頭の馬に變じ、別に一匹の大鼠を立派な馭者に仕立てた。杖を少女の體(からだ)に觸れると見苦しい衣物は忽ちにして、まばゆきばかりの舞踏服となり、また特に美しい上靴(スリツパ)を一足與へた。

シンデレラが出掛けて行く時に、仙女(フエアリ)が與へた大切な注意があつた。十二時までに王宮を出て來ないと、美しい衣裳はまたもとの通りの襤褸になり、馬車も馬も皆初めの鼠に歸つて了ふと言ひ聞かせて置いた。

舞踏の場では此少女の美しさが滿堂の目をそばだてた。王樣の一人しきやない王子は忽ちこの少女の手を取つて踊つた。片時も其側を離れなかつた。

十二時近くになると、シンデレラは王子と、他のお客にも別れを告げて歸つた。そして仙女(フエアリ)に深く感謝した。

二人の異母妹(いもうと)は遲く歸つて來たので、シンデレラは眠(ねむ)い目をこすつて戸を開(あ)けに行つた。今晩の舞踏に一人すぐれて美しいお姫樣が來て居られたと云ふ話を聞いて、シンデレラは何喰はぬ顏をして、

『それはどなたでした?』と訊いた。

誰であるか全く見當てが附かないので、王子は殊に夫れを悲しまれたと云ふ話であつた。少女は異母妹(いもうと)らに、明晩は自分も行つて其美しいお姫樣を見たいから、あなたの古着を貸して下さいと云ふと、意地の惡い妹らは怒つて言下に之を斥けた。

次の晩もまたシンデレラは王宮の舞踏會に出る事が出來た。王子は夢かとばかりに喜んだ。時の過ぎるのも忘れて、二人が手に手を取つて踊つてゐる

と、まもなく十二時の刻限は來た。お姫樣のシンデレラは慌て、王子の側を去つて一目散に駈け出した。王子は夫れを追ひ掛けて行つたが、遂に及ばずして影を見失つた。

シンデレラが慌て、駈け出す拍子に、上靴が片足脫げた。王子は後から夫れを拾ひ、自分は此靴の主を見付けて妃にしようと皆の人々に告げた。シンデレラは美しい上靴を片足だけ穿いた儘歸つて了つたのである。

翌日王子は使者を遣つて戶每に此靴の持主を搜させた。王族や貴族の姫君はもとよりの事、ありとあらゆる女に穿かせて見たが、誰の足にも合はなかつた。使者は終にシンデレラの家に來て、先づ二人の妹娘に穿かせて見たがとてもうまく適合らなかつた。

最後にシンデレラが進み出て、手に持つ箒木を棄てゝ、其片足の上靴を穿いて見せると、不思議や、しつくりと足に適つた。ふたりの妹娘の驚きは之

に止まらなかつた。シンデレラは衣囊から更にもう片足の方の靴を出して、夫れを穿いて見せた。

その場へ再び姿を現したのは仙女である。はにかむシンデレラを忽ちにしてまた美しい服裝の氣高いお姫樣に變へた。使者は此吉報を齎して王子に傳へる。いつもシンデレラを苛めてゐた二人の娘も今はその膝下に跪いて許しを乞ひ、いつまでも實の妹と思つて呉れよと賴んだ。

シンデレラはめでたく王子の妃となり、後には女王となり、異母妹たちは女官としてかしづいたのである。

四　比較研究

五大洲に擴がつてゐる三百四十五種の『鉢かつぎ』の說話は、傳說學者が分類の根本としてゐる其趣向に於ては無論同一であるが、形には種々の變化

がある。ラングの說によると、野蠻人の國では此フエアリ、即ち日本のには初瀨の觀音になつてゐる所が、山羊だの牛だの羊だの、或は犬などであつて夫れが可憐の少女を助ける事になつてゐる。少女が男子になつてゐるのもある。

たとへばカフアア土人の傳へてゐる『黃金の角』と云ふ話では、或る男の兒が母に死に別れる。固より一夫多妻の事だから、父の他の女房たちが此子供を苛めて、終に牛の子に遣つて了ふ。此子は牛に乘つて家を出て行くと、長い旅の間牛の右の角から食物や衣物が出て何の不自由もない。或時敵に出喰はして、牛は身を以て子供の爲めに戰ひ遂に殺されたが、其角からは依然として衣食が得られた。恁うして得た美しい衣物を着て、此子は遂に美しい女と結婚するに至つたと云ふ。

恁ういふ動物說話になつてゐる物の外に、また植物說話の形を取つて、死

んだ母の墓から生れた樹木が子供を養ふとなつてゐるのもある。露西亞のカレリア土人の如きが此一例だ。セルビヤや獨逸のは此樹木が鳩になつてゐる。

此說話は、之を傳へはじめた時代に各の民族の文化の程度や或は氣風の相異などによつて、剛壯なのもあれば詩的なのもあり、趣向も簡單なのと複雜なのとの違ひはある。しかし、母に死に別れた子供の可憫な境遇、觀音とか仙女(フエアリ)とかまた何等かの超自然力の救濟、最後に王子或は美女との幸福なる結婚、この三つの要點に於てすべて一致してゐる。學者は之を天然神話の一つなりと見做し、少女を黎明、繼母を暗雲と解し、雲を拂うて現るゝ太陽を王子と釋した。そはともあれ、原始時代に於てすべての人類が思想發達の同じ階段に在つたとき、同じやうな事を同じ樣式で考へた所に、ラング一派の比較說話學の興味が在るのだ。

遠い祖先の代から、親から子へ子から孫へと語り傳へた傳說神話は、彫琢

を加へず修飾を用ゐなかつた古代民族の自然の儘の詩歌である。その自然觀人生觀が、文字に現された文學のやうに定形を取らずして、流動の形の儘に傳へられた貴き遺物である。考古學者が太古の石器や土器を研究すると同じく、荒誕無稽の民族傳説、郷土傳説も亦、學者の眞實なる研究に値ひする事は云ふ迄もないが、わが國では斯學の進歩が今日なほ萎靡して振はないのは遺憾である。往年高木敏雄君が『比較神話學』の好著を公にして、日本に於ける斯學の建設に最初の貢獻をせられてから、『山島民譚集』の著者柳田國男氏等の『郷土研究』となり、近くはまた日本傳説學會の出版物となつたのは眞にわが學界の慶事である。しかし日本の現在では斯學は未だ研究材料の蒐集時代に在るのだが、更に進んで、人類學比較宗教學民族心理の研究と相俟つて、眞の組織的比較研究の時代に入るの日は果して何時の事であらうか。

わかき藝術家のむれ

（大正二年一月『三田文學』所載）

一

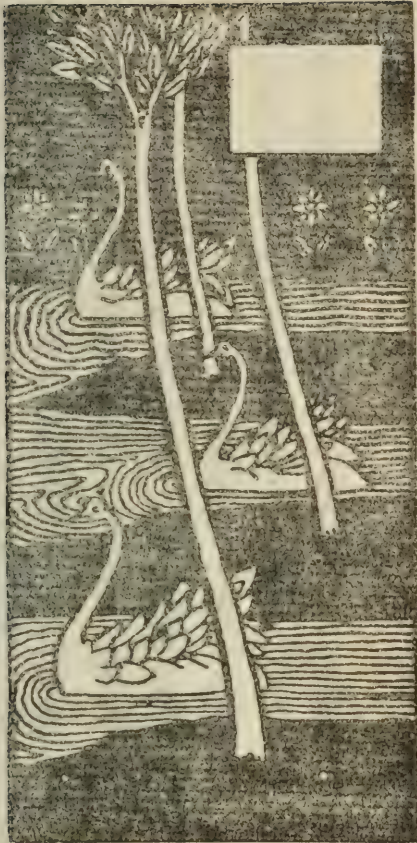
數年このかたわが文壇の異彩であつた『スバル』『白樺』『朱欒』などに續いて、近頃はまた新しく恁ういふ類の雜誌の數が殖ゑた。『創作』『峡灣』『奇蹟』など、廣告に見ゐる文藝に關する新雜誌の名だけでも決して二三に止まらない。そしてどれを見ても全く商賣氣を離れた、いかにも詩文藝術そのものを愛する人の手に成つたものだといふ事が一見してわかる。私はかういふ雜誌を手にするとき、たとひそこに出てゐる作品の價値如何は問はずとも、先づ若い人々が藝術に對する熱烈な愛慕、新思潮に對して少しも躊躇し逡巡することの無い雄々しい態度、また製作の上にあらはれたわか〳〵しい努力の

あとを見て、尠からず心を動かされると共に、また之に對する十分な敬意を表せずにはゐられないやうに思ふ。

私は日本の文壇に恁ういふ現象を見るとき、今から十四五年も前、英吉利の藝苑に生れ出でた同じやうないくつかの雜誌のことを想はずにはゐられない。The Savoy, The Dome, The Pageant, The Yellow-Book といふやうな澤山の雜誌の名は、今ではもう此道の人の外には餘り記憶されてもゐない。どれもみな長くは續かずに廢刊して、今日では既に珍本として値の出たのさへある。そしてちやうど日本で文藝の雜誌が海外新思潮の輸入者であり鼓吹者であるやうに、英吉利でこれらの雜誌はまた大陸文學の紹介者であつて、最近英國文壇の一面をなしてゐる新傾向を生み出すためには、みな與つてたに力あるものであつた。なかでも最も人の注意を惹くに至つたものは、例のJohn Lane社から出てゐた年四回發行の The Yellow-Book であつた。

近代の文藝史の上に重要な意義をもつた雜誌では、是等よりもずつと以前に、ロゼッティ等ラファエル前派の The Germ や The Oxford and Cambridge Magazine などがあつた。また大陸文學の方で偲ういふ靑年文士の機關雜誌が續出して、新氣運を鼓吹した最も著るしい例といへば、先づ千八百八十年代に出た白耳義のヹルハアレン一派の La Jeune Belgique をはじめとして、なほ La Semaine, Le Type などの類がいくつも出た。佛蘭西のレニエがやつてゐた La Wallonie マラルメやヹルレイヌの關係してゐた La Basoche などもみな同じ類であつたが、中にはわづか三四號で廢めたのもあつた。が、それが皆各々新文藝に貢獻したところは決して尠くなかつた。しかし是等は皆多くは一黨一派の機關であつて、或る主義を標榜した新運動の代表であつた。從つて隨分こちたい propaganda 的のものも無いではなかつた。が、今私がこゝに說かうとする英吉利の諸雜誌、ことに The Yellow-Book などは

全くさういふ一派の主張や傾向を代表したものではなかつた。唯だ世の俗衆を離れて詩文藝術を愛する人々が集まり、自分たちの製作を公にし意見を發表するための艸紙に過ぎなかつたのである。だから同人のなかには小說家もあれば詩人もある。畫家もあれば批評家もある。傾向から云つても、寫實主義の人も浪漫的な人も耽美派の人も色々あつたといふ風で、唯だ皆が藝術に對する熱烈な愛慕といふ一點に於て相合し、例の常識と道德とのほか何者をも顧みない俗衆に反抗しようといふ態度に於て一致してゐたと云ふだけである。どこまでも作家の個性と作品の獨立とを重しとする文藝の本質から云つても、全く主義流派の如何を問はずに、各々みな自己の特色を發揮した作を寄せてゐたのは面白いとおもふ。

『黄表紙』——假に恁う譯しておく、表紙が毎號黄いろのクロス綴であつたから此名がある(口繪參照)——がはじめて出たのは一八九四年、それから十

Vignette. From "Le Morte d'Arthur." By Aubrey Beardsley.

三號まで出て廢刊したのだから、わが國の文壇ではちやうど是と似た雜誌の『文學界』に、透谷、天知、柳村、藤村、禿木、秋骨、孤蝶の諸家が、盛に筆を揮つて清新の趣味を鼓吹された頃に相當するだらう。先づ繪畫意匠などの方は Aubrey Beardsley. 詩文の方は Henry Harland が主になつてやつてゐた。これに筆を執つてゐた者は眞に十人十色で、A. C. Benson のやうな人もあれば Saintsbury や Gosse の名も見える。皮肉屋の Max Beerbohm. いつも氣の利いた評論を書く Waugh. 詩人では Davidson, Dowson, Symons, Yeats. 小說の方では Gissing のほかに Crackanthorpe. それから詩でも批評でも小說でも何でも達者な Richard le Galienne など、數へて見ると英吉利の新文學に關係のある大抵の名は出てゐた。これらをいま一々批評することはとても紙幅が許さないから、私は唯だこゝにその中の著るしい數人に就て紹介ともつかず感想ともつかぬ事を書いて見ようとおもふ。主としてケチ

The Dancer's Reward.
By Aubrey Beardsley.

The Toilette of Salomé,
By Aubrey Beardsley.

ディ氏の新著に據つたので、色々しらべて書き上げた elaborate な評論の類ではない。ただ當時まだ歲わかく意氣甚だ盛であつた此一群の詩人や畫家の名をだけでもわが文壇に傳へて、動もすれば輕浮な俗論に動かされようとする一部の人々に、眞に熱意ある藝術家のおもかげを忍ばせたいのが私の願である。

二

この『黄表紙』の聲價を貴からしめたものは先づ第一にビアヅレの挿畫であつて、かれが退いてから他の畫家が代つてやつたが、どうも以前ほどにうまくは行かなかつた。七つの歲から既に肺患に侵されて、僅に二十六歲で死んで了つたこの薄倖の天才が、世に遺した作品の數は隨分に澤山あるが、それは皆前後わづかに六年間の努力に成つたものである。子供のときから音樂

と畫とが好きで、中學生の頃によく教師の似顔をかいて、あまりの巧さに人を驚かしたさうだ。また病身なのにも拘はらず隨分本を澤山讀んで、文學の方の素養も實に大したものであつた。もし健康が許したならば、確に文筆の方でも不朽の作を殘す人であつたらう。詩文の遺稿は後になつて出版されたが、それには羅甸の古詩の譯や小說の斷片などの非常にうまいのが出てゐて、たしかに此方面にも奇才世を驚かすに足るものがあつた事を示してゐる。十八の頃から斷然畫ばかりを專門にして、マアロオ、コングリイヴの戲曲の插繪をかいたが、先づ出世作といへば一番名高いアアサア王物語の插繪（四八頁及び本章の插畫參照）であつたらう。これは既にいくたびか丸善の店頭にも飾られたから見た人も多からうと思ふ。また彼が一生の傑作は、かつて雜誌『白樺』に載せられ、その版畫の展覽會にも出てゐた『サロメ』の插畫で、近代藝術史におけるビアヅレの地位は全くあの十六枚の作にあると云つても

差支あるまい。ジョン・レエン社から出た『サロメ』の英譯本（ワイルドはあの戯曲を佛蘭西文で書いた）は一八九四年の出版だから、是はまさにビアヅレ二十二歳のときの作であつたのだ。

　ビアヅレの畫は陰森の氣全幅を蔽ひ、神經の微動を筆端に迸らせた實に奇抜な人の意表に出でたものである。どう見ても全く獨創的な天才の作物だといふことが一見してわかる。だから『サロメ』のは勿論、ポォの短篇小説の挿畫でも、皆決して唯だ本文を説明するといふ類のものではなくて、畫家その人の鋭い感性を表現し、飽くまで自分の強い個性を發揮したところに特色がある。なかには餘り大膽で私共には何だか亂暴だとも見れるやうな意匠もあるが、あの細かい力の這入つた筆法で、筆數を少くして、而かも能くあれだけの強い effect を出した技倆に至つては、たしかに藝苑の驚異であると云つてよい。たとへばかの『舞姫（ダンサアス）の得たるかづけもの（リワアド）』の如き、一度見た者に

どうしても忘れることの出來ない強い印象を與へる畫であるが、よく見るとヨカナアンの目とサロメの髮のあたりに點々がある、あれがどれ位あの畫の感じを強くしてゐるか知れない。その代りまた才にまかせて隨分亂暴をやつた點もあるので、例へば『サロメの化粧』の如き、舞臺は勿論東洋の昔でなければならぬのを、今の化粧道具や香水瓶がかいてあつたり、下の方の棚に佛蘭西小說が二三册載つてゐるし、衣物も十七世紀頃の風になつてゐると云つたやうな類のところがある。しかし畫の與へる感じがあまりに強烈なために、恁ういふ缺點が殆ど吾々の目に着かないのは、さすがビアヅレの偉いところであつたらう。(一五二、一五三頁參照)

肺病がひどくなつて『黃表紙』の方をやめてから後、かれはなほアァサア・サイモンズ等が出してゐた『サヴォイ』に寄稿してゐたが、それもわづか二三年で死んで了つた。今から十四五年前のことだから、其頃の英吉利では耽美派

Merlin. From "Le Morte d'Arthur." By Anbrey Beardsley.

運動(ムウブメント)に關係したものはみな不德漢のやうに思はれてゐた。詩文の方ではオスカア・ワイルド、繪畫ではビアズレをその代表者のやうに云つて、隨分いろいろな點から攻擊を加へたが、とにかく線畫に一新機軸を開き、他の模倣を許さない獨得の畫風だけは、確かに近代藝苑の異彩であつて、此點に於て彼はホ井スラアとならび稱せられるだけの天才であつた。(卷頭挿畫參照)

三

詩文と繪畫との兩方にわたつてすぐれた才を持つた人は昔から隨分多い、日本の蕪村は云ふ迄もなく、ブレエクやサッカレやデュ・モリエや、或はまたかの詩を畫き畫を歌つたと云はれたロゼッティのやうな例は別としても、現に手近なところで、石井柏亭氏が以前『明星』に時々出された詩や、さきごろの本誌(三田文學)に出た佛蘭西西班牙あたりの紀行、また近頃よく『白樺』で

見る南薫造氏が田園生活を寫された文などは、其人の畫の方と見くらべて、私はこれらを讀むとき、ゐも云はれぬ興味を感ずるのである。それで今云つたビアヅレもさうだが、同じこの一群のわかい藝術家のなかに、筆も達者なら畫も巧いといふ才人がも一人ゐた。その人はよく『剃刀のやうだ』とまで云はれたほどの鋭い諷刺家――また、あゝいふ輕快な才人は佛蘭西でなくては見られない、英吉利人には先づ珍らしいと云はれたマックス・ビイアボオムである。何しろ英國劇壇舊派の大立物であつた名優ビイアボム・トリイの弟だから、それだけでも優に人の視聽を聳てるに足るのだ。今漸く四十になるかならずの年輩、『黄表紙』の一二號あたりに奇抜な文を寄せて、辛辣な皮肉を世間の俗物や評家に浴びせかけた頃は、まだ二十あまりの若盛りであつた。縱横の奇才忽ちにして一世を驚かし、それからといふもの、かの"More"や"Yet Again"などの數卷に收められた奇警な漫筆やすけつちの類もかけ

ば、また時々の批評もかいた。芝居の方はもとより一かどの通であるが、畫の批評などはホヰスラアを論じた文など名高いものである。別に「The Happy Hypocrite」のやうなお伽噺もかく、そしてまた諷刺畫で以ていつも盛に喝采を博してゐる。眞に才人行くところとして可ならざるなしの觀があるから偉い。いつであつたか彼は今の男子の服裝は野暮だと云つて、別に同好の士を語らひ、緋の上衣に眞白の長靴下、それに派手な靴を穿いて都大路を練つて行つたことがある。ちやうどかの佛蘭西のゴオチエが淡紅色の胴衣を着て自作の詩を歌ひながら街を歩いたり、オスカア・ワイルドが中世風の派手なきものに向日葵や百合の花をつけて倫敦のペルメルあたりを歩いた話と同じて、之だけでも風流才子マックス・ビイアボオムその人のおもかげが目に見ゐるやうである。

是はむしろ餘技であらうが、彼の筆に成つた漫畫といふ物がまた天下一品、

誰彼なしに古今の人物をつかまへて來てその似顏(カリカチユア)をかいて、そこに鋭い皮肉な寓意を寄せる。たとへば昔からの詩人の顏をかいた畫集には、バイロンが靴で英吉利を蹴つてゐる所をかいたり、帝國主義の詩人キプリングが玩具(おもちや)の笛を吹いて女神ブリタニアと手に手をとつて得意で踊つてゐる圖なども面白い。殊に恁ういふ調子で、現代の名士を誰彼の容赦なく諷刺畫でやつゝける所は眞に痛快である。ヰリアム・アアチヤアが跪いてイブセンの靴の尖(さき)に接吻してゐる圖なぞは、日本の文壇にも苦笑を禁じ得ない人が多いことであらう。また今の政界の大立物が、みな彼の諷刺畫にお定(きま)りの題目であるなどは云ふまでもない。

以前倫敦で青年才子の三人男と云はれたのがあつた。警句と皮肉でいつも論壇を賑はすチエスタトンを筆頭に、次はかの健筆縱橫のエツセイスト、評家としてはまた一かどの佛蘭西通である政界の名士ヒレイア・ベロツクがあつた

か、それに此マックス・ビイアボオムを加へて名物男の三幅對に數へた、三人ともに十年後の今日、健筆益その力を加へるのは眞に英國文壇の慶事である。

(ビイアボオムが最近の著は "A Christmas Garland." と云つてハイネマン社から出た、例によつて現代文壇の名流を諷罵した十七篇の文を集めたもので面白さうだが、僕はまだ見ない。)

四

ビイアボオムの文集には、都會生活の美しい方面を面白をかしう、ヒウマアに富んだ筆ですけつち風に書いたのが多いが、それと全く正反對なのは小說家のクラッカンソオプであらう。かれは社會の裏面に潛む醜惡な毒々しい暗黑界を赤裸々に描き出して、少しも憚るところがなかつた。文體といひ敍事の法といひ、全く佛蘭西流の書きかたである。或る評家が之を評してモオパッサンを英語で行つたものだと云つたのは、單にその冷靜な寫實の風に於てのみならず、巧に省筆法を用ひた敍事の體までも二者相似た所があつたから

だ。この人ほどに大膽な自然派の描寫を試みた人は、英吉利の小說に在來その例はなかつたので、彼は遂に世のみとむる所とならず、僅に "Wreckage" "Last Studies" など二三の小說集を世にのこした丈けで、遂に自殺によつてその短い一生を終つたのである。

五

當時『黃表紙』に關係してゐた若い人たちのなかで、詩人といへば先づアアサア・サイモンズの名が一番ひろく知られてゐる。此人の筆に成つた評論の方は、日本でも既に多くの讀者を有してゐるから、詳しく說くまでもなからうが、人の云ふ通りいかにもペイタアの衣鉢をついだ、含蓄の深い詩趣に富んだ文章である。こちたい論理をのみ辿つて行く議論の類ではなくて、惩うふのは批評その物が既に詩的な創作に近いもので、ちやうどペイタアの

『文藝復興(ルネサンス)』や『鑑賞論(アプレシエシヤン)』などの文集を讀むのと同じ趣がある。また之は評論ではないが、かの威尼斯、羅馬、莫斯科など歐羅巴の重な都會のことを紀行文の體にかいた『都市(シテイズ)』の一卷の如き、恐らくはサイモンズが散文の作中での白眉であらうと私は思つてゐる。

さて詩歌の方でいふと、サイモンズの作には夢のやうな情調や氣分を、巧みに單純な言葉で歌つたのが多い。讀んでゐると、何だか恁う春の朧夜を獨りさまよつて行くと云つたやうな柔かな感じが胸に迫つてくる。『春のたそがれ(スプリングトワイライト)』と題した詩のなかに、『たそがれは日をさへぎりぬ。壁の上なるかの君の繪姿、色あせて、ほのかなる闇のうちに消ゆ』といふ句があつたが、ちやうどさう云ふおぼろげな、解けて行くやうな心持がいつも此詩人の作に味はゝれる。『私の詩は事實の記錄ではない、謂はゞ海のさゞ波のやうな束の間(ま)の情調 moods これが藝術の領分であつて、また私の詩の題目である』と自分で

もさう云つてゐる。

サイモンズが最も多く歌つた題目は戀愛と女性とであつて、それがいつも此詩人の鋭い感性(サンシビリテ)に觸れて、極めて官能的な肉感的な詩句となるのである。實際肉の歡樂と放醉とを大膽に歌つた點に於て、かれは英國古今の詩人に多く類例が無いと云つてもよい。かつてキイツをさへ官能的なりと難じ、ロゼツテイ、スヰンバアンを肉感詩派なりとまで罵つた評家のゐる英吉利のことだから、サイモンズの詩篇は勿論諸方から手ひどい攻撃をうけた。之に對してかれは詩集 "London Nights." の再版の序に於て、下のやうな斷乎たる態度を以て答へてゐるが、そこによく彼が藝術觀とも云ふべきものが現はれてゐて、殊に道學先生に一喝を喰はしたところが甚だ痛快だから、こゝに引用する。

私は今まで道德といふ論據から攻擊をうけた。世には、わたくしの作が藝術上つまらないからといふわけではなくて、道德上いけないと思ふと云つて攻擊した人が多い。さういふ人は道德上と藝術上との批判を混同し、藝術を助けずに却つて藝術を狹くしてゐることに氣が付かないのだ。どこま

でも私は藝術の自由のために爭ふ。そして道徳が藝術の上に審判權をもつといふやうな説にこそ反對するのである。藝術が道徳によつて仕へられることはあつても、それの奴僕となることは斷じて無い。何となれば藝術の根柢は永遠のものであるが、道徳の根柢は時代の變化に伴つて動搖するを免れないからだ。試に諸君がいま服從してゐられる因襲的道徳の或る一箇條をでも取つて示されよ、私は諸君の祖先が服從してゐた或る別な道徳の箇條の中に、必ずそれと正反對のものゝある事を何時でもお目にかけやう。なほお望みとあらば、その道徳を破つた方を正しとしても諸君も不本意ながらに推賞せざるを得ないやうな例を、早速お目にかけよう。恁んな昨是今非の定めなき指導者のために、私共は果して藝術の確固不變な指導を見すてるべき者だらうか。人間界にある如何なるものでも――情熱でも願望でも、精神または官能でも、また人の心の天國にせよ地獄にせよ――それは皆永久的な藝術の一部分であつて、自然がざつさ織つておいたのを、藝術がうまく美しい型にそれを結合させて行くべきものだといふ事を示してゐる。

六

近代人の胸奥から洩れるかすかな憂愁の聲を美しい音樂のやうな詩のなかに聞かうといふ人には、詩人アァチスト・ドオソンの名こそ忘れがたき者の一

つである。かれはよくサイモンズとならび稱せられる人であるが、既にはやく世を去つた人だけに、ドオソンの方を一層なつかしう思ふのは私ばかりではなからう。戀にやつれ詩に痩せたこの薄倖の詩人、肺患とハッシッシュと藝術とそして女性との外には何者もなかつた此人の短い生涯には、その世に遺した幾篇の詩文に見られると同じ深い悲哀の影が漂うてゐる。わづか三十三年間の生涯そのものが、既に一篇の哀歌であり、悲劇であつた觀がある。

かれは今から十二年前に死んだが、性行にも閱歷にも、世紀末の天才に免れがたい頽廢的傾向が著るしかつた。牛津大學を中途でやめてから後しばらくは倫敦に居たが、英吉利の氣風はどうしても此詩人におもしろくなかつたのか、大抵は佛蘭西の方で暮らした。オスカア・ワイルドのやうに巴里の都を好んだのは勿論だが、それからなほブリタニイ、ノルマンディのあたりを放浪して一生を送つた。いつも沈鬱なろくに他人とは話しもしないやうな人で、

窮乏を救うてやらうといふ親類にさへ全く交際をしなかつたさうだ。肺患が重つて命は旦夕に迫つてゐるのに醫者に會ふことをすら厭うたといふのも、必ずしも死を願つたからだとは思はれない。

かれの詩のうしろにいつも見ゑがくれの一人の女性があつた。さる亡命の客の娘、もとは相當な身分の女であつたが倫敦の外國人街で母親と一緒に小さい料理屋をしてゐた。そこへドオソンはいつも毎日のやうにやつて來た。自分の作つた詩を歌つて聞かしながら、その間に纏綿の情を洩らしたことも屢次であつた。が、この女は遂に給仕の女房になつたので詩人の美しい戀の夢は果敢なく破れてしまつた。それからといふもの、強いハッシッシュの酒に憂愁を忘れようとして、かれが生活は益々荒むのみであつた。倫敦の居酒屋にも飽いて後は佛蘭西白耳義をさまようて、益々不羈放縱の生を送つた。その間、酒と女と詩と病とが彼のすべてゞあつた事はいふ迄もない。

此天才が世にのこした作品はまことに少い。一八九六年に出た詩集と死後に出た"Decorations"の二卷のほか、短篇小說が五つ六つと韻文劇の一幕物が一つあるだけだ。勿論英語で書かれてゐるもの、、全體の色調はすべて佛蘭西風であつて、どう見ても全く拉甸趣味の詩文である。これはドォソン一代ばかりでなく、かれの父が既に佛蘭西にながく住んで、その國の文學に造詣が深かつたといふやうな事がよほど影響してゐるらしい。

かれの名をながく後世に傳ふるものは、散文の作ではなくて詩歌であることは勿論だが、その方でかれは多くのデカダン詩人のやうに、ポォの影響をうけること最も甚しき一人であつた。サイモンズのいふ所によると、

"The viol, the violet and vine"

といふポォの一句を目して、ドォソンは詩美の極致をつくしたものだ、Vぐらゐ美しい文字はほかに無いから詩にはいくら澤山これを用ゐても足りない

と云つたさうだ。然ういふ言葉から推しても直ぐわかるが、かれは明かに近代の象徴派詩人と同じく、全く詩を歌ふものとして、その音樂的方面にのみ重きを置いた人である。詩は決して思想とか哲理とかを内容とするのみではなく、音の感覺を通じて或る情調を暗示する純粹な藝術だと彼は見做した。最も名高い次の一首の如きはよく然ういふ主義を實際に示したものだ。

"Exceeding sorrow
　Consumeth my sad heart!
Because to-morrow
　We must depart,
Now is exceeding sorrow
　All my part!

（大意）
たゞならぬ悲みに
ほろび行くわが心
あすこそは
ふたりがわかれ
たゞならぬ悲みぞ
いまわがつとめ。

Give over playing,
Cast thy viol away:
Merely laying
Thine head my way:
Prithee, give over playing,
Grave or gay.

Be no word spoken
Weep nothing: let a pale
Silence, unbroken
Silence prevail!
Prithee, be no word spoken,

弾くなやめよ
君が琴おかせたまへ。
たゞこなたに
君がかうべを横たへて、
願はくば君、弾くなやめよ
悲しきもまた楽しきも。

語りたまふな一ことだにも
泣かせたまふな。
色あせたる「沈黙」の、絶間なく
ここを領ずるにまかせよ。
願はくば語るなやめよ。

Lest I fall!　　われは堪へざらむ。

Forget to-morrow!　　翌日(あす)を忘れよ、
　Weep nothing; only lay　　泣かせたまふな
In silent sorrow　　ただ沈默の悲みに、おかせ給へ、
　Thine head my way:　　こなたに君がかうべを。
Let us forget to-morrow,　　翌日(あす)なわすれて、
　This one day!"　　唯だけふの日をこそ。

サイモンズは此歌を評するのに『沈默の音樂』といふ言葉を用ゐたが、かういふ捕捉しがたい何とも云へぬ沈んだ情調を、斯くも巧みに音律の美にうつし得たものは、現代の英詩に稀だと云つても必ずしも過褒ではないとおもふ。

彼が詩を作つたのは全く自己の爲であつて、他人に認めて貰はうなどいふ氣は更に無かつた。自分の苦心の作で自分さへ滿足すればよかつた、だから生前は殆ど世の認むる所とならなかつたが、近代の英吉利の詩人のことを想うて、スヰンバアンからイエエツ、サイモンズと數へてくると、私なぞはどうしても此ドオソンの詩才を同じ列のうちに入れずには濟まないやうな氣がする。

七

なほこの『黃表紙』に關係してゐた詩人で私どもの忘れることの出來ない名は、ライオ子ル・ジヨンソンとジヨン・デヸッドソンとであるが、ふたりとも既に故人となつた。ジヨンソンが酒のために健康を損つて、之もまたわづか三十歲あまりで世を去つたのは、今からちやうど十年ほど以前だ。その詩

集には、哀音ひとの胸に迫ると謂つたやうな佳什が、比較的短い作に多い。散文の方でいふと、トマス・ハアディイを論じた一巻が特に觀察の精緻と文章の流暢明快なのによつて著るしい。恐らくこの一冊がジョンソンの名を不朽ならしむるものだらうと思はれるが、私はそれよりも此人の輕妙な漫筆(エッセイ)ものの方を一層おもしろく思ふ。たとへば『黃表紙』の第三號に『煙草の雲』と題して、

煙草の雲、雲また雲、その渦卷く青い煙草のなかに人生のおもかげが在るとおもへば、さうおもつた人生こそ面白からう。空中での美しい變化、ゆたかな動搖、遂には靜に消えて行くそのありさま、さういふところに申分のないのどかさ以上の或るものが表象(あらは)れてゐる。雲また雲、どうも今云つたやうに私はおもふ、さう思ふのがまた愉快である。

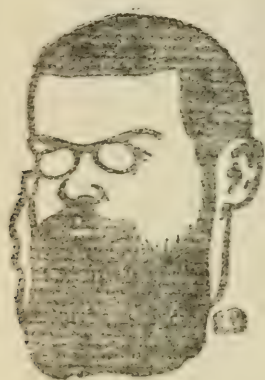
かういふ調子の文で人生を觀じた此一篇などは、たしかに彼の傑作の一に數へらるべきだらう。

またデヸツドソンに就ては其詩に著るしくあらはれた自然科學の影響、ま

たニイチエにうけた感化、それから基督教に對する熱烈な反抗的態度や、一九〇九年に自殺するまでの一生の波瀾曲折など書くべき事は甚だ多いが、餘り長くなるから是は他日に讓ることにした。

『黄表紙』に詩文を寄せた人々には以上のほか、なほ Austin Dobson, Vernon Lee, Arnold Bennett のやうな第一流の名家をはじめとして、種々さまざまな人が澤山あつた。從つてまた出てゐる作品にも隨分玉石同架の氣味はあつたが、それは恁ういふ艸子の常として致方もない事だらう。殊に最初六七號までは一番佳作が多くて賑かであつたが、それからあとはひどく見劣りする感があつた。

短いそして花やかな生涯は天才の常だ、『黄表紙』の壽命が短かゝつたやうに、之に關係してゐた同人も不思議に三十歳前後で此世を去つた人が多かつた。その頃から今に至つてなほ藝苑に花を咲かしてゐる人といへば、五指を

屈するほども無いとは云ふものゝ、かの保守的にしてとかく藝術問題に道學先生風を免れなかつたヴヰクトリア朝の終ごろ、恰も世紀末の英國文壇に、自由清新な大陸の思潮を導き入れ、來らむとする新傾向の基をひらいた點に於ては、これら多くの若い藝術家の努力は決して徒爾ではなかつたのである。

Adolphe Retté
(Vallotton

詩人ヴン・レルベルグ

日本に廣く知られてゐるヱルハアレンやマアテルリンクと共に、白耳義文學の將星として歐洲の諸邦に認められた詩人は、ヴン・レルベルグ Charles van Lerberghe（一八六一年生—一九〇七年歿）である。殊にその歿後は英佛各國で彼の作品を研究する人益々多く、

Albert Mockel, Charles van Lerberghe. Paris: Mercure de France. 1904.
Albert Heumann, Le Mouvement Littéraire Belge d'expression française depuis 1880. Paris: Mercure de France. 1913.
La Parnasse de la Jeune Belgique. Paris: Vannier. 1887.
Jethro Bithell, Contemporary Belgian Literature. London: Fisher Unwin. 1915.
Jethro Bithell, Contemporary Belgian Poetry. London: Walter Scott. 1911.
G. Turquet-Milnes, Some Modern Belgian Writers. London: Horace Marshall. 1916.

等の諸書を見れば、近世文學に於ける此詩人の地位が明かに知られる。一試に白耳義の文人に向つて其國最大の詩人の誰なるかを問へ、答へてヴン・レルベルグなりと云はむは確なるべし』と書いた批評家もある。

詩人の作品を鑑賞する爲に、其背後に在る閲歴の研究を忘る事の出來ないのは言ふ迄もないが、私は讀者の倦厭を恐れて、これを前掲の諸書に譲り、唯だ二三の注目すべき事項をしるすに止める。

ヴン・レルベルグは千八百六十一年グントに生れて、そこの耶蘇會の學校で教育された。其以前エルハアレンやロオデンバッハも同じ學校に學んでゐた。マアテルリンクとは固より竹馬の友で、マアテルリンクの伯父がヴン・レルベルグの後見人であつたさうだ。

藝術的良心に富んだ人は決して濫作をする者ではないが、ヴン・レルベルグも決して多作の人ではなかつた。劇二種、詩集二卷と短篇雜文數種とが其全

集をなしてゐる。僅かの收入に甘んじて、專心一意その生涯を詩文に捧げ何の職業にも從事しなかつた。暫く市府の博物館員をしてゐた事はあつたが、詩人として思想や行動の自由を束縛される事を恐れ、僅に二ヶ月にして職を棄て、友人を驚かしたと云ふ話がある。苟くもおのが意に滿たなければ自作を公にする事を肯んじなかつた彼は、その彫心刻骨の餘に成れる貴き二三の作品に不朽の名を留めたのであつた。

彼が最初の詩作は千八百八十六年雜誌『スバル』La Pléiade の誌上に發表されたが、後三年にして短い三幕物の劇『嗅ぐ者』Les Flaireurs と題した物が公にされた。是は『死』の近づくのを象徴したもので、或る老婆が臨終の床に就いて、そこには娘が附添うてゐる。『死』の使である『水の人』『屍衣の人』『棺の人』の三人が室外に來て。代る／＼戸を叩く。堅く鎖ざした戸を隔てて、內と外とで對話がある。外から迫る三人は室內に這入らうとし、娘

はそれを拒まうとする。老婆は漸く死に瀕して、其戸を開けよと求める。こ
との『死』の使と内なる娘との問答、

戸外の聲　（烈しく敲く、戸の破れる音）

さあ時が來た、時が來た。

娘　（臥牀から起き上らずに）

這入つちやならんの。あなたも他の人も。

戸外の聲

這入つて見るんだ。　（前にも増して烈しく敲く音）

娘

お母さん、お母さん。まあ／＼、あなたは戰慄へて、手は氷みたいだ
恐がつちや不可いのよ、守り神の私が附いてゐる。恐がらないでね。
あの人たちに酷い事はさせないから。もうよく私が見れないの？あら、

そんなに目を据ゑて私を見ないで下さい。ね、お母さん、私は何だかあなた迄が恐（こわ）くなるから。

（馬の嘶く聲す）

母　親　微笑みながら娘を抱き寄せる。そして右手で戸の方を指す。

馬車（くるま）が來た。　　重い馬車の止る音。戸の割れ目から光が射す。喧噪の聲。

夜半の鐘がゆるやかに響くと共に、戸は破られて死の使の者どもが恐ろしい聲を立てて室内に闖入する所で幕。

此荒筋だけを見ても、讀者は此劇がマアテルリンクの『闖入者』と極めてよく似てゐる事に氣付かれるだらうが、果して千八百九十二年それが巴里に上場せられたとき、作者はマアテルリンクを模倣したと云ふ非難を受けた。マアテルリンクは直に一篇の公開狀を作つてヴン・レルベルグの作品が剽竊に非ざる事を辯じた。寧ろ實際はマアテルリンク自らの作の方が後に出來た

の一つであるから、劇曲の罪は自分一人で之を負はねばならぬとまで斷じた。是は固より親友の爲に寃を雪がうとして、マアテルリンクが極端な事を言つたのであらうが、とにかく親交ある此二詩人に當時屢次相會して象徴劇の事を語り、また『死』と云ふ者を如何に舞臺上に取扱ふべきかに就ても論じ合つたのであらう。其結果作品の上にも二人は殆ど前後して、相似た此二つの作を公にし、新劇の爲に新しき道を開いたのであつた。

しかしヴァン・レルベルグの本領は、劇よりも詩歌にあつた。飽くまで美にあこがれる理想主義者(アイディアリスト)として、其詩は形と色との讃美であつた。音樂よりも、また他の何れの感覺よりも、先づ視覺に訴へる事が彼の特色であつた。『天使の靈と雖も、若し美を以て蔽はるゝに非ざれば、我をして首(かうべ)を回らさしむるに足らじ。我に在つては、天使は純なる形象に過ぎず、また之を以てわが思想を蔽へる美しき女人なり』と云つた位で、英國で云へばキイツとか、或は

また其流れを汲んだロゼッティ一派の藝術に近いものであつた。さながらラファエル前派の繪を見るやうな彼の詩篇の一例を擧ぐれば、

Elle dort dans l'ombre des branches,
Parmi les fleurs du bel été.
Une fleur au soleil se penche.........
N'est ce pas un cygne enchanté?

Elle dort doucement et songe.
Son sein respire lentement.
Vers son sein nu la fleur allonge.
Son long col frêle et vacillant.

Et sans qu'elle s'en effaroucha,
La longue, pâle fleur a mis,

Silencieusement, sa bouche
Autour du beau sein endormi.

女は青葉のかげに眠れり、
美しき夏の花かげ。
日ぐるまの花、枝を垂れたり……
こはそも不可思議の白鳥か。

甘睡(うまい)して女は夢む、
その胸はしづかにも呼吸(いき)す。
裸形(らぎやう)の胸のうへ垂れたる花の
なよなよと長きうなじの搖(ゆら)ぎかな。

女はおびゆることもなかりき。
眠りたるうつくしき胸のあたりを、
長きうなじの白き花は、
音もなくて口づけしたれど。

――詩集「エバの歌」より

かれの生涯は理想に對する不斷の憧憬であつた。然しさう云ふ人にはいつも免れ難い現實に對する絶望と憎惡とが、遂に彼が晩年の生を痛ましき慘澹たる者にした。千九百七年かれが世を去る前數年間は、烈しく憎人的(ミサントロプ)となり、厭生的となつて、日ごろの親友とさへも全く交遊を絶つた程であつた。

かれは天外漂遊の孤客、四海に家なき人であつた。ブリュクゼルから倫敦、伯林、民顯、羅馬、フロレンス、それから巴里へと、國から國、市(まち)から市へと、さすらつた。その名作の大部分を收めてゐる詩集「エバの歌」La Chanson

三年の間は、時々故國のアルデンヌに歸つて筆を執つたものの外、商業の花の都（フロレンス）に旅杖をとどめて、朝は博物館や寺院を訪ね、午後は宿に歸つて、アルノオの流れを見渡す丘の上で書き上げた物であつた。夢幻の理想郷に生きる此詩人に取つては、伊太利の自然と藝術とが、いつも新しい靈感をそそつたのであつた。

同じ白耳義の詩人セヴランは、かれの作に英國的の色彩の著るしい事を指摘した（雜誌『メルキュル・ド・フランス』一九〇八年八月號所載のヷン・レルベルグ論參照）しかし果して英文學の奈何云ふ作家から感化を受けたかは、一寸斷言し難い。キイツやロゼッティの影響は誰にも氣付かれるが、恐らくはまたコオルリッヂの夢幻境をも窺つた事であらう。沙翁を讀んでは特に『あらし（テムペスト）』と『眞夏の夜の夢（エミドサマア・ナイツ・ドリイム）』を好んだと云はれるのも、成程と首づかれる。そして佛蘭西の詩歌は餘り喜ばず、ボオドレエルなど近代の作品の外は多く讀まなかつたさうだ。

しかし佛蘭西の國語で歌ふ詩人である以上、佛蘭西古詩の影響が無いとは思はれない。彼の作中最も名高く何れの詞華集にも載せられ、また苟くも彼を論ずる者の必ず引用する『黄金舟』Barques d'Or の美しさは、確に其一例として見られる。

Dans une barque d'Orient
S'en revenaient trois jeunes filles ;
Trois jeunes filles d'Orient
S'en revenaient en barque d'or.

Une qui était noire,
Et qui tenait le gouvernail,
Sur ses lèvres aux roses essences
Nous rapportait d'érnges histoires

Dans le silence.........

Une qui était brune,
Et qui tenait la voile en main,
Et dont les pieds étaient ailés,
Nous rapportait des gestes d'ange,
En son immobilité.

Mais une qui était blonde,
Qui dormait à l'avant,
Dont les cheveux tombaient dans l'onde
Comme du soleil lavant,
Nous rapportait, sous ses paupières,
La lumière.

東邦の小舟に乘りて、
三人のわかきをとめは歸り來ぬ。
東邦の三人のをとめは、
黃金の小舟にのりて歸り來ぬ。

黑なる一人
舵をとれり。
薔薇のにほへる唇に、
奇しき物語をつたへぬ、
語はなくて。

褐色の一人

帆を持てり。
その足につばさをそなへ、
かれは天人の手振を傳へぬ。
身動きはせで。

また金髪の一人あり、
船首に眠れり。
波のうへ丈なす髪の垂れたるに
あけがたの空にも似たりや。
眼瞼のしたにかれは持て來ぬ、
光明を。

——[illegible]

幽韻微趣を傳へむが爲に、ヴン・レルベルグは人並すぐれて用語の選擇に細心の用意を怠らなかつた。殊に、つばさ、かげ、ばら、黄金、花、おぼろ、ひかり、そら色、さう云つた言葉は、いくたびか彼の詩篇に繰返されて、少しも單調でないばかりか、或物は纖麗、或物は燦爛、巧に人を夢幻の郷に誘ふ者であつた。

用語選擇のことに就て彼が筆に成れる一短篇『超自然の選擇』Selection surnaturelle と題したのがある。人間の靈が自己表現の爲めの言葉を見出し得ず、遂に沈默のうちに死なうとしてゐる。その時サテュルンの神の忠告に從つて、人々は一切の言葉を船に積み込み、船中で王子は暇に任せて言葉を撰ばうとする。色々のわけで氣に入らない言葉は皆海へ投げ棄てる。第一には醜惡な言葉、第二には運動を現はす言葉、第三には具象的の言葉、その次には抽象的の言葉、それから感覺を現す言葉、と順々に次から次へと海中へ投

げ込む。最後に神と云ふ言葉も棄てて了ふ。もうおほかた船中は空つぽになつた。残れるものは唯だ一語それを深くも船底に隠して置いた『あこがる』J'aspire と云ふのが夫れであつた。『さても王子は跪きて合掌し、静に唱ふるやう「われあこがる、光明のうちに」Dans la lumière: J'aspire と』此一篇の物語はよく作者自身が詩作の風を語る者であつた。

美は眞なり、眞は美なりとはキイツの言葉だが、同じく美の宗教の使徒としては、ヴン・レルベルグも亦この唯美主義を歌つた。詩集『エバの歌』の中に下の一篇がある。

Le Seigneur a dit à son enfant:
Va, per le clair jardin innocent
Des anges, où brillent les pommes
Et les roses. Il est à toi. C'est ton royaume.

Mais on n'éveille des choses
Que la fleur ;
Laisse le fruit aux branches,
N'approfondis pas le bonheur.

Ne cherche pas à connaître
Le secret de la terre
Et l'énigme des êtres.
N'écoute pas la voix qui attire
Au fond de l'ombre, la voix qui tente,
La voix du serpent, ou la voix des sirènes,

Ou celle des colombes ardentes
Aux bosquets sombres de l'Amour.
Reste ignorante.

Ne pense pas ; chante.
Tout science est vaine,
N'aime que la beauté.
Et qu'elle soit pour toi toute la vérité.

神その子に告げたまはく、
行け、天人の淸らなる園生に。
木の實うつくしく、花ざかりの園生、
そは汝が有なり、汝が園なり。
されどまことに心うきたつものは、
唯花あるのみ
木の實は枝に殘せよ。
幸福を深くも求むる勿れ。

また知らんとて求むる勿れ、
世界の神秘を、
人生の謎を。
聞くことなかれ、幽暗の深みに
爾を誘ふ聲を。
蛇の誘ひ、sirenes(シレエヌ) が歌をも聞く事勿れ。

ほの暗き『戀』の森にて、
情熱の鳩の聲をば聞く勿れ。
無智にてあれよ、
また物思はざれ、唯だ歌へよ、歌へ。
智識はすべて空ならずや。

たゞ『美』を愛せよ、
爾がためすべての『眞』は何かあらん。

――詩集『エバの歌』より

彼がキイツを學んだか否かは問ふ所ではない。唯だ此の最後の句の如きは二詩人の思想が極めて相近き者であつた事を示すに足る者だらう。

『エバの歌』に現れたエバは基督教思想のそれではなく、誘惑の聲に耳を傾け肉に醉ひ、美にあこがれる異教思想のエバであつた。此詩人にニイチエの影響ありといふ評家は恐らく是等の點を重く見たのであらう。裸形の女――不思議の聲に耳傾けつつ、目は懷疑と驚異の色に輝き、百花繚亂の庭に立てるエバ。若し英吉利のビアヅレをして此女を描かしめたならば、無聲の詩と有聲の畫とは相俟つて幽峭險奇の新意は更に一段の精彩を加へた事であらう。ビアヅレの畫筆こそ最も此詩人の集にふさはしき物であつたからだ

筆の序に私は、夏の雨を歌つたエバの歌一章を譯して此稿を終らう。

Ma sœur la Pluie
La belle et tiède pluie d'été,
Doucement vole, doucement fuit,
A travers les airs mouillés.

Tout son collier de blanches perles
Dans le ciel bleu s'est délié.
Chantez les merles,
Dansez les pies !
Parmi les branches qu'elle plie,
Dansez les fleurs, chantez les nids ;
Tout ce qui vient du ciel est béni.

De ma bouche, elle approche
Ses lèvres humides de fraises des bois ;
Rit, et me touche,
Partout à la fois,
De ses milliers de petits doigts.

Sur des tapis de fleurs sonores,
De l'aurore jusqu'au soir,
Et du soir jusqu'à l'aurore,
Elle pleut et pleut encore,
Autant qu'elle peut pleuvoir.

Puis, vient le soleil qui essuie,
De ses cheveux d'or,
Les pieds de la Pluie.

わたしの妹、夏の雨、
あたゝかい美しい夏の雨、
しめやかな空氣のなかを
そつと靜に驅けてゆく。

白い眞珠の頸かざり、
ぱつとほどけた、青空で。
歌へや、つぐみ、
舞へよ、かさゝぎ。
しだれた枝の葉がくれに、
舞へよ花ぶさ、歌へや鳥の巣も。
うれしさは、空から來るもの何もかも。

妹がわたしの口へ持つてきた
濕つた唇、いちごのやうに、
莞爾と笑うて一時に
わたしに觸る小さい指は、
幾千といふわらい數。

花ばたけの上へ音たてゝ、
朝から晩まで、
晩から朝まで、
降つて降つて降りつゞく、
力のかぎり降りつゞく。

今度は出て來るお月さま。
黄金の髪でさらりつと、
雨の素足を乾すお日さま。

——詩集『エバの歌』より

現代英國文壇の奇才

（チェスタトン氏の散文）

近頃の新聞雜誌によく『無駄話』といふ事が流行る。固より深遠の義理でも無ければ精緻の論述でもない、多くは文藝の時事或は尋常一樣平凡の事を敍して、肩の凝らぬ所に一種の妙味があるのみか、其輕快と皮肉と、或はその奇警は、却てこちたき評論の類や下手な實驗小說よりも、遙に多く讀者を動かす。僕の如きも好んで此種の文字を讀む一人である。ところが西洋で是と類似の物を求むれば、先づ causerie であらうか。而かも、かの佛蘭西近代の一大評家が每週の評論を集めた『コオズリイ・デュ・ランディ』の諸篇とは勿論趣を異にしてゐる。さらば gossip と云はうか。是はかなたの雜誌では、寧

ろわが『近事片々』と云つたやうな物に近からう。寧ろ新聞の feuilleton に見ゆる雜文の類か。是にも特殊の名が無いとすれば、眞の意味に於ていふ essay こそ最も此無駄話に近い物であらう。エッセイは既に其語源が示す通り本來の性質に於いて決して四角張つた treatise では無い。日本の學生が思ふ如き、こちたき獨逸の書をあさつて書き集めた『論文』のみとは限らぬ。或題目をとつて、作者がその刹那に得た感想を書きしるした、手短な即興の文だ。精論細敍するのでは無くして單に暗示した物である。だから作者は飽くまで自己を中心として、讀者をさながら心おきなき親友の樣に思つて書く。愚にもつかぬ身の上ばなしも出れば、宇宙人生の大問題にも觸れる。一度讀めば忘れられないやうな皮肉や警句で人を釣り込んで、そこにユウモアもあればペイソスもある。嘗て無駄話の巨擘ラムが言つたやうに、所謂 a sort of unlicked, incondite things で、勝手な出鱈目を列べたと見えて而かも實は

一個の藝術品としての統一もあり中心もある。昔のモンティヌやベイコンのはいふ迄もない、サア・トマス・ブラウンが稀世の名文も、今日から見れば多くは此類の物である。早い話が此間漱石さんの『三四郎』に名が出てゐた『ハイドリオタフィア』などでも、生眞面目に、埋葬した死人の講釋などをしてはあるが、畢竟是れ作者ブラウンが骨董癖から出た一種の無駄話である。それをあの音樂的な花々しい散文で書いて、三世紀後の僕等をまでも感服させるのである。誰でも持囃すスティイル、アディソン、前世紀に入てはハズリット、ラム、ハント等の無駄話こそは、とこしへに讀書人の心を動かすものであらう。またスティヴンソンが此種の文をのみ集め、わざ／＼ホレスが古歌の文字を借り來つて、特に『少年少女に』（ビルギニブス、プエリスクエ）と題したのにも、おのづから作者の意が覺られるではないか。すべて此種の文は日常平淡の坐談と見せかけて、そこに奇警の觀察を寄せ、縱横の才藻をほのめかした所に妙趣がある。謂はゞ

一種のつや消しの文章だ。從つて背後に淵博の學殖と、群を拔くの識見とを有し、眞に咳唾成珠と言つたやうな人の作でなければ到底物に成らない。

是れでは下手な無駄話になりさうだから本題に入る。こゝに言はうとするチェスタトン氏 Gilbert Keith Chesterton は、即ち此の無駄話流の筆法を以ていま英國文壇の耳目を聳動しつゝある新進氣鋭の士である。相手構はず鋭い皮肉と警句とを浴せ掛けて、まるで他人(ひと)と喧嘩をする爲に此世に生れ出たやうな人だ。評論は云ふ迄もなく詩も作れば小説も書く。(舞臺にのせる戲曲だけは、バアナアド、ショオの熱心な勸告あるにも拘はらず、今日迄はまだ書いて居ない)そして皆是を烈しい論戰の武器に使つて、政治宗教文藝等のあらゆる方面にわたつて、常に辯難攻擊の筆を絕たない。そのG・K・Cといふ署名は、さながら文壇の怪異であるかの如くに思はれてゐる。

僕がはじめて氏の文に接したのは、まだ角帽を冠つてゐた學生のころに、恩師某先生より氏が當時の新著『ブラウニング傳』を借りて讀んだ時である。

今にして想へば此一卷の評傳こそは、氏をして今日の英國文壇に於ける地位を得せしめた最初の名著であつた。之より以前單に新聞記者として知られてゐた氏は、此時より初めて文藝批評家として一方の覇を稱するに至つた。はじめジョン・モオレイ氏は此青年記者が凡ならざる才筆を認め、自分の主宰せる『英國文豪叢書』のために、特に此ブラウニング傳一卷の著を囑した。稿成つて世に出づるや、忽ちにして文壇を驚かしたのは、此近世の大詩人の剛健にして熱烈なる樂天觀が、チェスタトン氏の主張に近似し、從てよく著者の手に入つた者であつた事も確に一原因であらう。同書第八章ブラウニングの哲學を論じた章などを見ると特に此感がある。しかしなほ此外に別に大なる理由があつた。人の知る如く、ブラウニングは近代の最も難解といはる、詩人である。之を解剖し批判するに多くの學徒が頭を惱ます難物である。汗牛充棟といふ程ある此詩人の研究書は多くはやかましい議論をして、其爲め

左程でもない物までも益々難解にして仕舞つた。それを今突如として現はれたチェスタトン氏は、徹頭徹尾無駄話の論調でやつて退けたのである。他人が裃を着けて講釋する處を、浴衣がけの坐談で說いた。愚にもつかぬ逸話を書いたり突飛な論斷を下したりして、而かもブラウニング其人がよく紙上に活躍してゐる。評論の嚴正な形を打破して、氏が從來鍛へ上げた新聞記者の筆法其儘を用ひたのは、窮屈な批評家をして一驚を喫せしめた所以である。毀譽褒貶忽ちにして此一書に集ると共に、氏が名聲は英國文壇を動かした。如何なる人の作でも、其人でなければ書かぬと思はれるやうな文句が頁ごとに必ず一つや二つは出るものだと、ブランテスは言つたが、チェスタトンの此書物などは最もさうである。文豪評傳中どの卷にだつて無いやうな突飛な文章が到る所に見ゐる。例へばメレディスの難解とブラウニングのそれとを比較した一節がある。（同書一五七頁）。前者のは常人の觀察し得ないやうな深い

處を書くのだから、從て內容の複雜な爲に晦澁となり、後者の方は餘りに性急で、意餘りあつて語足らぬに因るものだと論じ、さて其說明が頗る振つた者である。即ち一人の男が嘘をついたと言つて、も一人の男を二階から叩き落す。恁んな事を書くにも、メレディスならば、雙方の複雜な心理狀態などを書いてむつかしくするだらうし、ブラウニングの方ならば、一刻も早く階下に落ちるやうにさも性急らしい文句でわからないものにして仕舞ふだらう、と云つてわざ〳〵ブラウニング口調を眞似た文句まで書いてある。之等は極端な例であるが、終始すべて皆此筆法で出來てゐる。恐らく此類の評傳の書としては最も奇拔な物であらう。氏か後に出した『ディッケンズ論』の方も傑作の一つであるが、全然これと同一な無駄話流の敍述である。嘗てマコオレイ卿は史論といふ固苦しい形を打破して、歷史を、碎けた面白い讀み物に變じたと同じく、慣習を破棄して評論の文に此新機軸を出したのは何事にも保

守的な英國に於て殊更注目すべき事であつた。

今より十年前即ち千九百年の春、チェスタトン氏が初めて世に公にしたのは『野武士』(The Wild Knight) と題した一卷の詩集であつた。英國の讀書界では此時『G・K・C とは果して誰だらう?』といふ疑問が口から口へと傳へられた。そして同じ年のうちに此署名は早くも文界に喧傳せられて、老大家をさへ凌ぐに至つた。日本の文壇ならばいざ知らず、英國で斯くも速に名聲を擧げた、めしは、バイロンの昔はさておき、最年五十年殆ど絶無と云つてよい。現にさる名高い評家のごときは極めて熱心に此一卷を批評した後、G・K・C こそはデヸッドソン氏が世を忍ぶ假の名であらうと云つたといふ話がある。いかにもデヸッドソン氏が豪放不覊な詩風とは、互に似通つた所があつたからだらうが、いかに此時までチェスタトン氏の名が世に知られなかつたかが此一事で、もわかる。僕はまだチェスタトン氏の詩集を手にせず、外の書

物や雜誌で唯だ二三を讀んだに過ぎないから、此方面に就ては多くを語り得ない。唯だホヰットマンの影響既に此處女作にも著るしかつた事だけは、何人の意見も一致してゐる。『草葉（リイブス、オブ、グラス）』の詩人が、信仰に安むじて眞に實人生を樂しんだ剛壯な樂天主義の感化は、氏が後の散文の諸篇にも確かに現れてゐると思ふ。とにかく此詩集は氏が文壇に認められた最初の作で、具眼者の注目を惹いたのだ。現にメレディスなども之を激賞した一人である。但し部數は餘り多く出なかつたさうだ。

併し氏が批評家としての手腕を見るべき最初の作は、『十二種』("Twelve Types") と題した一卷であらう。勿論これより以前にも、『防禦者』("The Defendant") といふ論集が出てはゐるが、それは文藝に關する物の外、主として帝國主義などを論じた文を集めたので僕はまだ見てゐない。さて此『十二種』といふ本は、文學史上最も興味ある人物、即ちポオプ、バイロン、カ

アライル、スコット、シャロット•ブロンテ、トルストイ、スティヴンソン、モリスなどを論じた文を集めたのであるから、たゞ是等各作家に關係ある題目をとつて、氏が自分勝手の說ばかりを書いたものだ。之を讀んで各作家の特色を知らうなぞと思へば、それこそ大間違である。表題に出てゐる名は單に道具に使つた位のもので、著者は例によつて盛に喧嘩腰の奇論を吐く、その元氣は實に凄まじい。そして人の言はないやうな突飛な論旨は、奇抜な警句と相俟つて、常に讀者の感興を惹く。例へばバイロン論十四頁、何が書いてあるかと思へば慿うだ、彼は厭世家ではなくて樂天家である。何となれば彼は自分の詩歌を樂しんでゐた人であるからと。勿論ブロンテとスコットとの論だけは眞の批評ではあるが、之とても此二大作家の唯だ一面だけを書いたのに過ぎない。

どうも氏の態度には前後の二期あつて、其間に尠からぬ變化があつたやう

だ。たとへば帝國主義に關しても、初の詩集『野武士』のなかには

That all our seed be gathered,
　That all our race take hands,
And the sea be a Saxon River,
　That flows through Saxon lands.

すべて吾等が人種は相集まり、凡べてわれ等が民族は相提攜し、斯くて海はサクソンの國を流るるサクソンの河とならん

帝國主義の代表詩人キプリングにでもありさうな恁んな文句がある事を見れば、氏は嘗て明かに此主義の味方だつたのだ。それが今日では正反對に、國民主義の方の側の代表者になつてゐる。また信仰の方でも初期の詩人時代には烈しい正教（オーソドックス）の攻撃者であつたが、今日では全く然うではなくて、寧ろ固い舊信仰の人である。凡べて恁ういふ風に、今日の氏は政治文藝宗教等あらゆる方面に於て、猛烈に進歩主義近代主義に反抗してゐる。おもふに烈し

い喧嘩好きの人は、常に他人の反對ばかりを考へる。つむじの曲つた人間に限つて、人が左といへば必ず右と云ふ。そのうちには不知不識の間に、自分の説までが、前後反對になつたりする事は、日常吾々のよく見る處である。チェスタトン氏なども矢張り此方で、人が然りと言へば否と言ふ、人が信ずれば疑ふ、人が疑へば信じて見せると云つた風だ。だから初期には慣習に反抗し舊弊な頭の固い連中に鋒を向け、後には無政府黨、無神論者、非愛國者と戰ふ。即ち喧嘩の相手次第で自説にも自ら著しい變化を來したのだらうと僕は勝手に解釋してゐる。併し英國の論者は之には別に外部の事情があるといふ。即ち一は氏の細君の感化である。今から九年前氏はフランセス・ブロッグといふ婦人と結婚した。此女は慣習を非とする方の側にある一種の慣習といふものに對する保守的な反抗者で、(之は英語で云つ方がよくわかる、the conservative rebel against the conventions of the unconventional)これは今日新教育を受けた英吉利の婦人によくある型だ。そこでチェスタトン

氏も其感化をうけて、あの通り變つたのだといふ尤もらしい話しである。他の一原因はかのヒレイア・ベロック氏との交情である、此人も矢張氏と相並んで今の英國文壇に新進の天才と仰がれる名家で中世藝術の崇拜者として知られ、佛蘭西革命を論じたり、「羅馬の旅」といふ本を書いたりして、盛に近代的傾向に反對する人である。冷罵を逞しうする點に於ても、まさにチェスタトン氏とは伯仲の間にある。この二人が落合つたのだから、忽ちにして兩方から意氣投合してしまつた。どちらかと云へばベロック氏の方が先輩で、その思想もさきに固定してゐたのだから、チェスタトン氏は早くもその感化を受けたのである。

チェスタトン氏が近代思想を攻撃する要點は懷疑思潮を難ずるに在る。或少數の思想家が懷疑説を出すと、誰も彼も之に雷同して、其結果は疑ふべからざる事をまで皆が疑ふ。一代の民心は遂に全く歸趨する處を失つて渾沌の狀

態に陷り甚しく破壞的に虛無的になつた。イエツの戲曲に『物なき所にこそ神はあれ』といひ、ショオが道德に永久的分子の存在を疑つて『法則とは即ち法則無きをいふ』と喝破したる類は皆然うである。ところが不思議にも、世間の人は皆異口同音に進步々々と唱へてゐる。進步といふ以上は何處に行くといふ事を十分心得ての上でなければならぬ。民心其歸する處を失つて而かも進步を唱へる、これこそ眞に無意義の極である。かくて此懷疑の暗潮は遂に人々をして益々理想と信仰とに遠ざからしめ、眼前の物質的現實方面にのみ急がせる。かくて今日の如き墮落に導いたのだと氏は說いた。

抑も前世紀ダアヰンが出てからといふものは、世は其進化論を誤解した。世界は必然よい方にばかり進んで行つて、『善』は『惡』の上に終極の勝利を占めるといふ風に、詩人も歌へば論客も說く。之に對して氏は前に述べたやうな見地からして烈しく反對するのである。人皆現在の狀態を持續して行く以

上、世界は將來に於て必ずや退步する。進步が人生の原則にはならずして却て墮落が原則となる。遂に此世界を支配する者は大魔王であらう、と言つて攻擊する。もとより氏は明確の論理を推すやうな思索家ではない、寧ろ一種の神秘論者で直覺の人である　マアテルリンクなどのやうに眞理の標準を主觀に置く方の人だ。氏の說は勿論その方面から觀るべきだと思ふ。

僕はまだ見ないが、昨年氏は『正教信仰』といふ書を公にした。是は以上述べた氏の信仰の變遷を自傳的に告白したものらしい。ニイチェだのショオだの、凡べて近代思想家の說では、とても滿足が出來ないから、自分は矢張り結局舊信仰に逐ひ込まれて仕舞つたといふ意を洩らしたのだ。次に引用する譬喩談を參照したならば、這般內部の消息が略ぼ會得せられる。

現今氏が近代的傾向のあらゆる方面を攻擊する態度を最も明瞭に示した者では、『異端』（"Heretics"）と題した論集がある。是はショオ、キプリング

ホ井スラア、イブセンなどを捉へ來つて、例の無駄話流の評論を試み、之によつて近代文藝とその背景たる近世生活とを非難したものである。劈頭第一先づ此書が所謂文藝批評に非る所以を述べて

余は茲に現代の最も顯著なる人物を論じたいが、それは個人に就てでもなく、或は文學的のやり方によるのでも無い。唯だ其人々の唱ふる說の實體に關して論ずるのである。自分は活氣ある藝術家或は剛壯な人物としてのキプリング氏に用事はない。余は單に氏を一個の異端として——即ち其人の見解が余の見解と相容れざる丈けの勇氣ある人物として論ずる。自分はまた現存の最も異彩ある正直な人物としてのバアナアド・ショオ氏に用事は無い。余は單に氏を一個の異端として——即ち其人の議論は全く堅固で全く實着で、そして全く誤つてゐるさういふ人物として論ずるのだ。

とある。是が即ち飽くまで無駄話的筆法で行かうといふ著者の意である。また序論の最後に次のやうな面白い譬喩談が出てゐる。之によつて著者が保守の見地に立つて近代の思想界に反抗する態度が、極めて明かに分るだらうと思ふ。

何かの事で街に一騒動もちあがる。まあ假に有力家が寄つて街燈を一つ引き倒すんだと想像する。そこへ鼠色の衣を着た者――是は中世の僧であるが、ひとり出て來て、中世哲學其儘の切り口上で說き出す、『吾君、先づ第一に光といふ物の値打を考へて御覽なさい。若し光がそれ自らに於て良いものであるならば……』こゝまで喋舌ると早速僧は背から打ち倒されて仕舞つた。そして皆の者は忽ち街燈に飛びかかつて、僅に十分間にして之を倒す、中世的でなく實際的だから此方がいいと云つてお互に祝ひ合ふ。しかし物はさう容易く解決は出來ない。第一街燈を倒すにも、或者は電燈が欲しさに、或者は古鐵が欲しさに、或者は自分が惡事を働らいてゐるから、暗闇が欲しさにやつたわけだ。ひとりが街燈で不足だと云へば、ひとりはそれで餘ると云ふ。市の道具を壞したさにやつた者も居れば、何でもいいから破壞しろといふ男も居る。そこに夜中的喧嘩が始まると、闇の事だから盲滅法に相手かまはず打擲する。さあ然うなると必ずや今日明日明後日と漸々下の樣な事を思ひ出す、どうも結局あの僧の云つた事が正しかつた、何事も皆光明の教に倚るものだ。瓦斯燈の下で論じられたものを、今では然んな闇のなかで論じなければならぬ、と然う遂に皆が思ふ。

中世信仰の光をかき消しわざ／＼渾沌たる思想界を造り出した近代人こそは、即ち此瓦斯燈を壞した『異端』の徒である。此書に論じられた人々のうち

で、キプリングを最もひどく喧嘩腰で攻撃してゐるが、一つ困つたものは書中のイブセン論である。氏が此近世の大戯曲家を論ずるや、あたまから"The Negative Spirit"と呼んで散々に非難してゐるが、之には隨分誤解もあるらしい。なかには、あのいやな、猶太人の老漢マクス・ノルダウの言ひさうな淺薄な論も出て來る。蓋し氏はイブセンそのものを精讀せずして、寧ろショオの書いた『イブセン眞髓』などを讀んで、唯だ一概に毛嫌ひしたものではなからうか。

以上述べた如く氏の態度には前後二期の變化はあるが、依然として變化しないものは其論調である、其喧嘩腰である。氏は人に喰て掛らなければ自説を吐けない人である。靜思冥想獨り高遠の思索に耽るが如きは斷じて其長所ではない。敵が居ない時にはわざ〳〵敵を假想してまでやる。前述の『防禦者』『異端』などいふ書名が既によく之を示してゐるではないか。だから今少

しく此點を解剖して見よう。

第一氏は決して一本調子で無闇に吠わ付くやうな無能漢ではない。それには屈強な武器を持てゐる、即ちパラドクスといふ飛び道具を使ふ。或人が氏を冷評して恁う言つた。

He gravely argues No means Yes,
He shows that joy is deep distress,
He tells you soap is made from cheese.

『否』といふは『然り』の意だと氏は眞面目に論ずる、喜びとは深き苦みであると說く、………石鹼は乾酪で造る物だと云つて聞かせる。

氏の說は實際恁う云つたパラドックスで滿ちてゐる。英國では氏の事を『今ジョンソン』といふさうだが、それは堂々たる風采が此十八世紀文壇の覇王に似てゐるといふだけの話だらう。昔のジョンソンは物を考へるのに、眞直に考へた人だ、誰にもわかるやうに正面から說いた人で、否を然りなど、は

決して言はなかつた。所謂 spade を spade だと露骨に言ふ人であつた。併しチェスタトン氏は何でも裏から物を考へ、逆に物を言ふ人である。すべて眞理といふものには忘れられた一面がある、此隱れた一面を知らさうと思へば、勢ひ裏返へして見なければならぬと氏は信じてゐるらしい。例へば『單純は複雜よりもなほ更に神秘的なり』だの、『靑年作家が文章外面の晦澁は內部の明晰なるを示す』などの文句を見れば、確かに此感がある。

近代の英國で此點に於て氏と似てゐる者は、蓋しオスカア・ワイルドであらう。併しワイルドのパラドックスは單に人の意表に出でるばかりでなく、其縱橫の文才をこれ見よがしに振り舞はして、辭句などは實に洗鍊し上げた完璧である。だから夫れ以上說明の文句などを入れる餘地は無いが、チエスタトン氏のは、謂はゞ荒削りで、甚しく蠻的なところがある。從つてまた滔々數萬言を費して更にそれを敷衍すると云つた風だ。そして更に著るしい相異は、

氏のやうな喧嘩腰がワイルドには殆ど見えない。かの通俗な諺を轉倒して、一種のパラドックスを作る事は警句家のよくやる慣用手段である。例へばワイルドの『セバスティアン・メルモス』のなかに "Punctuality is the thief of time" といふ警句があつた。是は云ふ迄もなく、俗諺の "Procrastination is the thief of time"(遲延は時間の賊)のもぢりだとは、誰にでも氣が附く、一寸奇抜で面白いが、唯だそれ丈けの事である。ところがチェスタトン氏は "A good bush needs no wine" などゝいふ。之も無論古諺の『良い酒には廣告の看板は要らぬ』といふのを逆に、『廣告が良ければ酒なぞは要らぬ』とやつたのだ。一寸氣の利いた皮肉な冷罵に一種の妙味がある。とにかく二人の差は恁んな處にもあらはれてゐると思ふ。

　次に氏の喧嘩腰で僕が面白いと思ふ點は、飽くまでも面憎く、相手を怒らせずんばやまないといふ風がある事だ。手加減なぞは固より藥にしたくと

も無い。初めから人好きのしないやうな説を大袈裟に、而かもまた極端に言ひ張る。アナトオル・フランス氏の樣に柔和な顏をして上品な皮肉をやるでも無ければ、誰かのやうに滿面朱を濺いで稚氣滿幅の罵言をするでも無い。自分は澄まし込んでゐて突飛な極端な事を尤もらしくいふ、そして相手が十分腹を立てるやうに仕向ける、從て隨分思ひ切つた事をいふ。例へば論集『異端』の中に、キプリングには愛國心に微塵も無いのが特徴だなぞと云つてゐる。バアナアド・ショオは此點を見て、氏は佛蘭西的であるといつたさうだが、それは何とも僕には判斷が出來ない。

藝術家として、氏は最も奇抜なるユウモリストである。讀者の思ひもかけないやうな所に突如として變挺な飛び離れた事物を持出して人を驚かせる。眞面目な議論をしてゐるかと思へば、その眞最中に奇想天外から落ちるやうな事をいふ。さうかと思へば下らぬ話の途中へ仰々しい聖書や、或は天下國

家の大事を擔ぎ出して、巧に人の意表に出でる　此點に於て氏は蓋し端倪すべからざる絕倫の天才と云つて可い。或人は、氏が眞面目になれば成るほど文は滑稽的になると言つたのも、よく穿つてゐると思ふ。

氏はその眞髓に於てつまり論客である、ジヤナリストである、眞の藝術家ではない。詩人としても小說家としても乃至批評家としても、終始一貫して其論客たるの態度を改めない。かの藝術の爲めの藝術主義に對する氏の攻擊論は甚だ有名なものであるが、氏自らも其說の通りに出來てゐる。

例の『異端』のうちに

最上の短篇小說は、帝國主義を宣傳しようとする人によつて書かれた。最上の戲曲は社會主義を唱へようとした人によつて書かれた。凡ての藝術家は凡ての藝術に、主義宣傳の副產物たる之等の藝術に比して、いかにも小さく、つまらなく見えるではないか。

是は暗にキプリングとショオとを引合ひに出しての氣焰で、僕は全く首肯し難いと思ふが、それはとにかく實際上氏自身も此說の通りを實行してゐる。

誰の言であつたか、人は直接間接みな自己の辯解をしてゐる者だといふ事があるが、氏の藝術觀などは全くそれだ。だから氏の作品は自分の主義宣傳の副産物たるに過ぎない。畢竟文藝を論戰の武器だと見做してゐるのだ。

　だから氏にして若し藝術のために藝術をやつたならば、尚更に一段の光彩を増す事であらうと或人は評したが、僕は必ずしもさうは思はぬ。氏が神來の興に任かせて一氣呵成に書き上げた文章には、實に非常に立派な物があると共に、隨分また缺點も多い。だから藝術品として完璧では無いかも知れぬが、其短所はやがてまた長所である。生氣潑溂たる點に至ては斷じて他人の模倣を許さない特色がある。氏の如きは是非とも一瀉千里の勢でなければ文章の書けない人だらうと思ふ。强いて之に洗鍊を加へしめたらば、却て根本を打壊すのみならず、氏が無駄話の妙味は殆ど失はれるだらう。僕なぞの自分一個の趣味から言へば、藝術家としての氏には餘り感服しない方であるが、

氏が此特得の才筆だけは、確に現代英文學の異彩だと思ふ。

氏の文の缺點をいへば、小さい點はさておき、誰にも氣付くのは、議論でも敍述でも平氣で問題外の岐路に入ることである。是は健筆の人によくある缺點だが、氏のは之が最も甚しい。興に乘じ筆に任せて書き立てると、本題とは全然沒交渉の方角へさつさと行つて仕舞ふ。而かも書く當人だけは獨り大に得意でゐるらしい。從て光彩陸離たる名文も却てさういふ處に現はれる。一例をいへば、人物を描くのに其背景の方に身が入ると、本尊に無關係の事を長々と書き立てる。氏の『ブラウニング』傳のなかに、此詩人が伊太利を愛し夫婦共にこゝに住んだといふ事を書く。そこで千八百四十年代の伊太利の國情を敍するに當つて、當時此國の自由獨立運動の事を想ひ出した。固より是は女詩人ブラウニング夫人の方には大に關係はあるが、ブラウニングにはさまで必要の無い事だ。然るにひとたび此問題に觸れるや、著者の頭は忽ち

にして熱し來つて滔々數萬言先づ佛國革命に溯り、那翁、神聖同盟の勝利より伊太利の自由を論じ、いつの間にか肝腎のブラウニングはお留守になつた氣味がある。而かも此數頁は卷中の白眉とも云ふべき壯快暢達の文であるから面白い。其他ブラウニング夫人の父の事を長々しく書いたなぞも同じ例である。つまり氏は自分にさへ興味があれば、前後の關係だの釣合だのいふ事を無視して仕舞つて、思ふ存分書きたい丈け書くといふ流儀だ。

其の外氏の文中に前後の重複などは勿論、また烈しい矛盾撞着があつたり論理に合はない斷案なども決して珍らしくない。煩はしいから今一々例證は省く。實際或る評家が云つた通り、氏の文を讀むのはさながら道路講釋を聞くやうだ。盛に長廣舌を弄して奇抜な言を吐くから行人は誰でも歩をとどめる。そして聞いてゐるうちには面白くなつて、辯者の言ふが儘に引きづられてゐるが、後になつて考へれば何だか少々馬鹿にされたやうな氣がする。氏

は此點に於ても確に天成の無駄話家であらう。

おもふに世間で皮肉屋といはれる人の多くは理想家である、畢竟自分の理想が高いから世のなかの缺點ばかりが目に付く。從つて反撥的になつて、動もすれば喧嘩もしたくなるのだ。氏も恐らくは此種の人であらうと思はれる。それはとにかく、氏は非常に浪漫的な性質の人で、此醜穢な物質萬能の近世生活の中に在りながら、自分のみは獨りそこにロマンスの境地を求めて、絶えず憧憬してやまない風の見えるのがゆかしい。

眞に精力絶倫の人、詩文に演說に、最近數年間に於て世に公にした物の分量は實に驚くべきものである。それさへ氏の手に成つた物の一部に過ぎないので、筐底に藏せられた原稿は尙ほ之以上に多いと聞いては、殆ど噓のやうである。氏は蓋し口に筆に其潑溂たる生氣を外に發し、自己を表白する事を以て無上の愉快と感ずるらしい。必ずしも名利を求むるでもなく、或る

一派の主義のためにするでもない。唯だおのれ一個の胸裡欝勃の氣を吐いて、狷介自ら高うすれば足るの人であらう。それも其實氏はなほ少壯氣鋭の士で、今年まさに三十五歳、千八百七十四年五月十八日の生れである。

十年以前私が此文を草してチエスタトン氏の奇才を紹介した頃から後に、氏は更に幾多の著作を公にした。詩に小說に、或はまた劇にも、其エツセイに現はれたと同じ天分を發揮してゐる事は、今では平素英書に親しむ日本の讀書子の間にも知られてゐる。評傳の書としては、倫敦の Martin Secker's Series of Critical Studies のうち "G. K. Chesterton" By Julius West を參考として薦める。

奇文一篇 (チエスタトン作)

チエスタトンの筆致を紹介したいと思つて、其文集を繰返したが程よいのが見當らぬので假に此一篇のエッセイを選んで譯した。原文は『帽子を追ふ事』と題し、私の編纂した『英文論集』English Essays(寶文館發行)に採錄して置いた。

元來氏の文章はジャナリズムの產物だ、從つて政界や文壇などの時事問題を捉へて、奇拔な觀察を下したのが大部分を占めてゐる。だから今日私どもがポオプの諷詩などを讀む場合と同じく、時處を隔てゝ、其特殊の題目たる事實に興味を持たなくなつた者の目から見ては、さまで面白く感じないのが隨分ある。從つて氏の文名をしてながく後代に傳はらしむる物あらば、それはあまり時事に關係の無い

題目に就て感想を書いた文であらうかと思ふ。こゝに譯したのなどは寧ろ此類のもので、氏の短いエッセイを集めた『感想録』（オール、シングス、コンシダアド）のなかの一篇だ。洪水を詩的だといふ奇論は、デイ・クインジの論文『美術として見たる殺人』にでもありさうな說だが、同じやうな事でも、是は飽くまでパラドクシカルに出來てゐる所に氏の特色が見られる。そして恁んな下らない話をさも眞面目らしく滔々と述べ立てて、巧に人の意表に出る處にまた一種の面白味がある。

かつて氏が口を極めて、詩人ポオプを激賞した論文がある。一寸考へると氏のやうな浪漫的な人が、此十八世紀の冷かな古典詩人を讃するといふのは甚だ奇妙である。しかしそれは外でもない、ポオプが最も巧に駢儷（パラレル）の句や對偶（アンティセシス）の法を用ひた點を讃賞したものである。昔から鋭い警句家といはれる人は、東西古今を通じて皆好んで

此語法を用ひてゐるが、特にチェスタトン氏などはその最も著しい者である。氏の文の妙所に至ては、皮肉やパラドックスが殆ど皆對句駢儷ばかりで出來てゐるのがある。茲に譯した文などは寧ろこれの稀な方であるが、末段に近き "An adventure is only an inconvenience rightly considered. An inconvenience is only an adventure wrongly considered." の文句などはよく氏が筆法の特色を示したものだと思ふ。

左に譯した一篇はその奇警な逆説に富める點に於て、また氏が樂天的な浪漫的な觀察の一端をも示してゐる。殊に小供が停車場で汽車を待つ一節などは、氏自らが近代の事物に對する態度を飾りなく現した者だらう。風に吹き飛ばされた帽子を追掛ると云ふ話は氏が崇拜するディケンズの名作『ピクヰック』から思ひ付いた者がと思ふ。

日本の文壇には恁ういふ眞のエッセイを書く人も少いが、讀んで味ふ人は尙更少いやうだ。眞理を背後から見て出來た逆説(パラドクス)の面白味や、極端な誇張や皮肉の妙味を解せずに、唯事實と理屈をのみ求めようとするからであらう。試に東京か大阪が大洪水の最中にチェスタトンのやうな恁んな文を書いて公にする人があつたとすれば、世人は之を馬鹿だと云つて罵らなければ、恐らく之を不謹愼だとでも云つて咎め立てする事だらう。倫敦が水害で大騷ぎの最中に、平氣で此文を公にするチェスタトンと云ふ男も面白いに相違ないが、之を讀んで破顏微笑してゐる英吉利の讀者は尙更に面白いではないか。

嘗てラムの名文中にある「書物といへば詩文小説など創作の類をいふので、他の書物は單に書物の形をしたもの、書物にして書物にあらず、biblia a biblia だ」と云ふ奇抜な言葉が日本に紹介せられた時、

い、むきになつて之を正面から御苦勞にも辯駁した一文が出た事を今だに私は記憶してゐる。さう云ふ人は、いつになつたら眞のエッセイの妙味が解る事であらうか。

自分が下らない田舍に來てゐる不在中に、倫敦では洪水だと聞いて、ひどく羨ましい感じがする。聞けば吾輩のバタアシイの邊では特に諸方から出水が落ち合ふといふ、世にもありがたい話だ。いふ迄もなくバタアシイは既に人間の住居として最も悲しい場所である。その上にいま一面の大洪水で更に壯觀を加へたのだ。從てあの風變りな都の景色——否な水の景色——には、必ずや他に類なきものがあるだらう。恰度それがヱニスの光景で、屠牛場から肉を運ぶ小舟が銀波瀲灔たる小徑を苦もなくすら〳〵と走るのは不思議なぐらゐ、全くゴンドラを見るやうだ。ラッチミア街の角まできやべつを持てくる青物屋が櫂を操つる樣にも、さぞゴンドラの舟夫の脫俗な趣があらう。

元來島といふものが既に申分なき詩的なものである、そこへ洪水が出ると一地方忽ちにして群島になるんだから尙更面白い。

火事だの洪水だのをつかまへて恁んな太平樂をならべると、それは實際に遠いと思ふ人もあらう。併し恁ういふ災害に對する此觀察は、その實際的な點に於て之と反對な觀察と少しも變りは無い。恁ういふ災害を見て樂まうといふ眞の樂天家は、之を苦情の種にしようといふ慷慨家に比して、論理的な點に於て少しも讓らないのみか、更に數倍物の分つた處がある。眞の苦痛、たとへばスミスフィルドで火刑になるとか、齒痛で惱むといふやうなのは退引ならぬ塲合で、是は辛抱は出來ても樂しむといふわけには行かぬ。然し齒痛などは實際除外例であるし、スミスフィルドの火刑なども滅多にある話ぢやない。男が文句を云つたり、女が泣き出したりするやうな災難といふのは大抵みな感情的乃至想像的のもので、全く氣の所爲である。いま一例をいふ

と、大人が若し停車場でぶらついて汽車を待たされると、頻りに苦情を並べる。しかし恁んな場合に小供が苦情を云つた例は未だ曾て聞かないではないか。それも其筈、小供に取つては停車場の構内にゐるのは、お伽噺にある不思議の洞や、歡樂の宮殿にゐると同樣、信號標の赤い光や青い光が、皆新らしいお日さま、お月さまに見ゆる。信號標の木の腕ががたんと落ちると、それは王樣が笏を振り下げる合圖で、ぴいと汽車の試合が始まるんだ位に思つてゐる。僕自らも矢張り此小供と同じやうにいつも考へる。ぼんやり立つて二時十五分發の列車を待ち合はしてゐても、それでまた何かの役に立つものだ。恁ういふ時に得られる冥想こそは豐かでそして實もある。現に僕が一生のうちで一番樂しい時間は、大抵クラパム驛で過ごしたものだ。――さうだ、此驛も今ぢや洪水に浸かつてるだらう。自分は彼處で、いつも一心不亂に不思議な心持でゐたから、恁んな時でも腰の邊まで水が來る迄とてもそれと氣

が付かなかつたかも知れぬ、然し實際前にも云つた通り、すべて慫う云つた災難の場合は全く感情的の觀察次第である。日常生活上最も迷惑な事だと云つて世人の騒いでゐる大抵どの事柄に適用めて見ても、大丈夫これは間違ないと思ふ。

例へば吹き飛ばされた帽子を、ひた走りに追掛けて行くなども、不愉快だと人は皆思つてゐる。亂れず騒がぬ敬虔な心を持つた人にそれが何故不愉快であらう。必ずしも走るから、――そして走ると疲れ切るからといふ故でもあるまい。現に同じ人が競技とか勝負事とかいへば、まだ／＼迅く走るではないか。綺麗な絹帽を追掛けて行くよりも、くだらない小つぽけな皮の球を追掛ける方に、遙か熱心に走つてるではないか。どうも帽子を追掛けるなぞは、甚だ以て器量を下げると、思つてる。一體、器量を下げると人がいふのは滑稽だといふ意味だ。それはいかにも滑稽だらう。然し人間其物が既に

滑稽な代物に出來てるから仕方がない。まあ人間のやつてることは十中八九みな滑稽だ。——例へば物を食ふ、是なども滑稽の一つだ。そして一番滑稽な事が恰度また一番仕甲斐のある事なのだ。——例へば求婚なぞがそれだ。帽子を追掛けるのは、妻女を手に入れようと追掛けてゐるその半分も可笑しくは無いと思ふ。

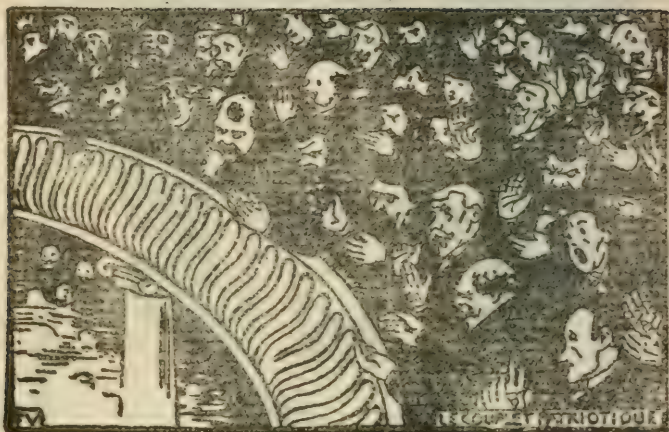
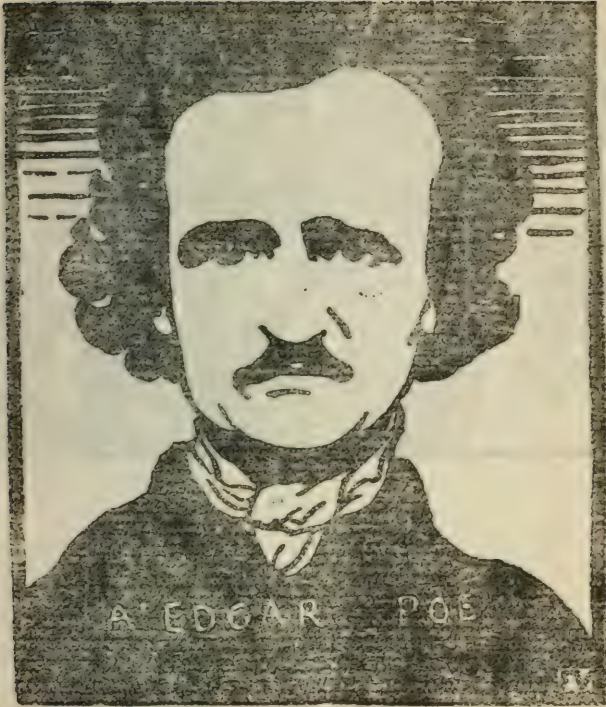
だから若し正しく物を感ずるならば、帽子を追掛けるなぞは最も男らしく熱冲して、また神聖な愉快を以てやれるものだ。吾輩は荒れまはる獸を追ふ壯快な獵人だと、恁う自分で思つてゐればいゝ。實際またどんな動物でも吹き飛ばされた帽子ぐらい奔放な奴は無いのである。風のひどい日の帽子獵、此は他日必ず上流社會の遊戲になるだらうと僕は思ふ。風のひどい朝にはどこか小高い處に紳士淑女が集まる。すると此道の專門家の者ども斯々の叢に帽を放ち候とか何とか、まあ術語は何だか知らないが、觸れまはる。見たまへ

是は確に最も完全に慈悲人道の精神にかなつた競技であらう。此遊戯こそ、苦痛を他に負はせる事の斷じて無い者だと獵人も感じてゐる。否な見物人に愉快――殆ご躍りたくなるやうな愉快を與へてゐると感じるだらう。先日もハイド・パアクで或老人が帽子を飛ばしてしきりにそれを追掛けてゐるのを見た事がある。そこで僕は恁う云つてやつた。君の其時の一擧一動といふものは、どれ位群集に無邪氣な愉快を與へたらう。それを思つて見たまへ、仁慈の心ある君たるもの、須らく意を安んじ、感謝して可なりだと。

家のなかででも氣のいら〳〵するやうな事はよくあるが、どれにでも皆同じ理屈が適用る。牛乳のなかに蠅が一匹陷つたのや、酒の盃に木栓の切片の落ちたのを摘み出すのに、よく人はじれつたがるものだ。然しさういふ時には、薄暗い淵のそばに腰を卸ろして釣をやる人の辛抱を一寸考へて見るがいゝ。すると直ぐに氣が靜まつて、ゆつたりする。僕の知人に宗教上極めて近

代的な考へを抱いてゐる人がある。その癖抽斗に物が緊とつまつて引き出せなくなると、じれつたさに神の名なぞを唱へる。勿論此男の事だから、宗教上の辭なぞに何の意味もあるんぢや無い。殊に或る友人と來たら、並はづれて恁ういふ事に氣短だ。毎日抽斗がつまる、すると毎日それに拍子を合はせて何か畜生呼ばはりする。それで僕は云ふんだ、恁ういふ立腹は全く主觀的相對的のものである。抽斗は容易に抜き得るもの、また抜かるべきもの、乃至抜けるだらう位に、自分で假定て掛かるからいけない。試に君が或る強大な勁敵を相手に引ぱつてるんだと想つて見たまへ、益々奮鬪はしても、腹の立つ事はあるまい。たとへば海中から救助船を一艘引き上げるとか、アルプス山中の絶壁に仲間の者を綱で釣り上げるとか考へて見たまへ。また自分が小供だと思つて、英佛競爭の綱引をやつてゐると想像したら奈何だ。と恁う云つてから僕は直ぐに此男と別れたが、此言は確に後になつて十分の効果が

あつたに定つてゐる。思ふにそれからといふもの、此男は毎日々々抽斗の把手にしがみつき、必死になつて、顔を赤くし目を瞋らして、わいや／＼の掛聲で自分を勵ましながら、まるで衆人環視のなかに喝采の聲でも聞くやうな風にやつてゐる事、更々疑なしである。

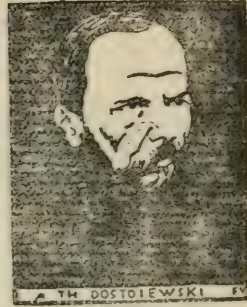
恁ういふわけだから倫敦の洪水でも、之を詩趣あるものとして喜ぶ事が出來ると想像するのは、馬鹿げた話だとか、信じられない事だなぞとは、僕は決して思はぬ。洪水のため生ずるのは不便といふ事以上には出ない。して見れば前にも云つた通り、「不便」とは物の一面だけを見た話で、それすら或る浪漫的な狀態の最も平凡な偶然的な一面に過ぎない。畢竟「冒險」といふのは「不便」を正しく考へたもの、不便といふのは「冒險」を誤つて考へた者だ。倫敦の家や店に更に一層の奇觀を添へ、妙趣を加へただけの事だ。かの物語のなかにある舊教の坊さんは、『酒は水のほか何物とあるもよし』と云つたが、水は酒のほか何物とあるもよしと云つてもつまりは同じ道理である。

Le Couplet Patriotique
(Vallotton)

Edgar A. Poe
(Vallotton)

ヴロットンの版畫

此篇は、大正二年の春、京都に『詩と散文』といふ雜誌が出來た時、その創刊號に寄せたものである。

一

近頃の佛蘭西の藝苑に、Felix(フエリクス) Vallotton(バロツトン) の版畫は一種特異な地位を占めてゐる。ながく勢を失つてゐた木版畫といふものに新しい力と生命とを與へ、その歷史に一新時期を劃したからである。

いつもFVといふ落款のあるかれの繪を見ると、私は人を魅するやうな一種の強い力が畫面に動いてゐるのを感ずると共に、そこにまたこの畫家獨得の表現によつて人生の姿が深刻に寫し出されてゐるのを何よりもうれしく思

DOSTOIEWSKI

ふのである。もし單に自己の好惡を以て批判の標準として差支ないものならば、私は現代藝術の最もすぐれた天才の一人としてこのバロットンの名を擧げるに躊躇しない。

バロットンのことは、さきに雜誌「白樺」の第一卷第二號（明治四十三年五月發行）に里見氏の忠實な紹介があつて、それには九個の木版畫が添へられてあつた。その九個のなかには特にかれの傑作として名高いヹルレイヌ、ポオ、ドストエフスキイの肖像なども出てゐたこの畫家の閱歷等に關しても既に「白樺」の方に要を得た記述があつたから私は單に茲に載せた版畫數枚の解說を兼ねて、かれの作の著るしい特色に就て一言するだけに止めようと思ふ。普通の畫とちがつて色の面倒のない black and white のだから、模寫によつて比較的十分に畫の眞味を知ることが出來

る。たゞ大きさが原圖は縱六七吋から横九吋乃至十一吋あるのを、ずつと小さく縮寫するのだから、細かい點はどうも旨く行かない。

二

はじめ彼はエッチングや油畫をやつて見た、もとより其方でも出色の技倆はあつたが、どうも思はしくなかつた。自分の見た人生の美と悲痛とを、何とかしてもつと直截明白に表現する法が別にありさうなものだと思つて、かれは遂にこの木版畫をはじめた。黒と白とだけで、ごく僅かな線を使つた此上もない簡單な版畫に、彼は遂に自己獨創の領域を見出し得たのである。

恁うして出來た彼の版畫は、その發達の階段に從つて色々の group にわけて見ることが出來る。先づ第一には茲に掲げた「愛國歌」Le Couplet Patriotique のやうな類のもの、あの繪を見るとバロットンが如何に群集をゑがく

BOULEVARD.

のに巧く、またその中の人物の個々の性格から態度までを、いかに分明と描きわけるかに感服せざるを得ない。奏樂堂でさる評判の高い歌ひ手がfootlightのところに進み出て、片手に旗でも持つて、情をこめた美しい愛國の歌を今しも聲を絞つて歌ひ出したところだらう、高棧敷の方では、群集が口を開き顔を歪め手を拍つて熱心にそれに唱和してゐる。群集の顔といひ表情といひ、一つとして同じのは無い。此畫家獨得の正確な手法でいかにも活き〳〵と各人の銘々の性格や表情があらはされてゐる。ことに左の端から二番目に頬杖をついた男が拳を欄干にもたせて、獨りつんと澄まして默つて

ゐる所なぞは、すつかり僕の氣に入つた。

沙翁劇のなかには、どんなつまらぬ人物の性格でも、それが巧みに描きわけられてゐる。群集のなかの甲乙の對話のはし〴〵にさへよく其者の個性が出てゐて、同じやうな人間は決してふたりと居ないといふ事を評家はよく云ふが、バロツトンの爲がく群集に就ても同じことが云はれるだらうと思ふ。この點になると昔からの日本畫なぞは實に拙いもので、群集をかくとどの人間も大抵みな同じやうな間の抜けた面をしてゐるのが多い。私は何故だかいつも群集の顏といふものに興味を覺ゐるので、たとへば講演會の夜などに、電燈の光に照らされた聽衆の顏を見ると實におもしろいと思ふ。或る英國の詩人の作に、火事場で大勢の人の顏が火に照らされて見ゐるところを非常にうまく寫したのがあつた、文學の方でも日本にはあゝいふ巧いのが甚だ尠いやうである。

恁うしてバロットンは好んで群集をゑがいた。人道を大勢の人が通るのを巡査が見てゐる圖や、醉漢が交番に引張られて行くのに後からぞろ〳〵澤山の小供が跟いて行く繪なども面白い。また「買ひもの」Le Bon Marché と題したのは、大きなデパアトメント・ストアで澤山の奥樣や令孃が押しあひへし合ひして、番頭を相手に熱心に買物をしてゐる所が實にうまく描かれてゐる。また「驟雨」L'Averse の繪はやゝ趣はちがふが矢張り同じ類のもので特に正確な彫塑的なところが此一枚の特徴であらう。なほここには「大通り」Boulevard をも此類に属するものとして揭げた。

三

第二には、さきのと稍々畫風を異にした「お出かけ」La Sortie「骨牌戲」Le Poker のやうなたぐひの繪がある。畫面全體に眞黑な背景をおいて、それ

L'AVERSE

に少しばかりの白を非常に強く利(き)かして巧みに畫面の統一を作つたところが面白い。「お出かけ」の方は、婦人が夜の装束で馬車に急いで乘らうとするところ。馬車の輪にはかすかな光が反射してゐて、戸のところには暗中に馭者がぢつと立つて待つてゐる。ほかに何も見えないが、胸の金釦だけが目につくのである。「骨牌(ポオカ)戯(ア)」の方も同じ描(か)きかたであるが、頬鬚のある老紳士の顔が特に面白く出來てゐる。隣のわかい男はこの老紳士から睨まれて、どの札を行つたものかとよほど當惑してゐる思案顔が、わづか單(モ)眼鏡(ノクル)一つかいた丈けで明かに寫し出されてゐる。これら二枚の作を見ただけ

でも、バロツトンがいかに省筆法(シムプリフイケイション)にすぐれてゐるかゞわかる、即ち十分に筆數を少くし、唯だ事象の中心になる要點だけを捉へ、他の細かい處は一切略してしまふといふ描寫法で、是は日本の文人畫によくある淡彩一抹の粗畫に見るやうな、また文學で云へば、モオパツサンの多くの短篇小說に試みられたのと同じやうな描きかたである。一目して其刹那に事物の中心となる部分を觀取して了ふだけの銳い觀察眼と、その上に、よほど手法(テクニク)の熟した所とが無くては、とても出來ないわざである。

四

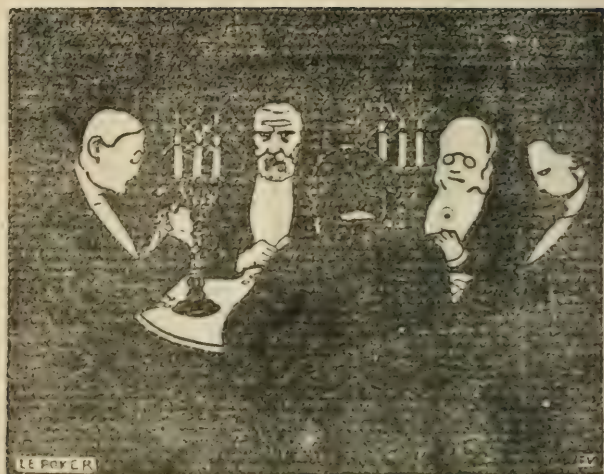
次に第三の部類には、詩人音樂家政治家などの肖像畫が澤山ある。どれを見てもその巧みな省筆法の妙に驚かされる事は同じだが、單に目鼻だちがよく似てゐるといふばかりでなく、その人物の性格がこのわづかな筆數のうち

LA SORTIE

に鋭く暗示されてゐる。ボオやドストエフスキイの肖像なぞは、バロットンが是等の詩人小説家の作を深く味うてそれから得た自分の印象を畫面にゑがいた物である、日の落ちくぼんだ、額の廣いボオの肖像(二四四頁)を見ると、誰しも此詩人の悲慘な一生を思はずには居られないではないか。何だか犬養木堂氏の寫眞に似て居るあのドストエフスキイの肖像(二四六頁)を見ると、其異様に光る眼と寂しい口もと、に、私は「罪と罰」や「死者の家」のやうな作を蔽うてゐる近代的憂愁の暗影を、そこに認めないわけには行かない。ま

た本書に載せたマアテルリンク、ヱルハアレン、ヘロルド、レニエ、レッテマラルメ、サマン等佛蘭西詩人の肖像はみな Le Livre des Masques（「假面集」上下二卷）の中に出てゐる。是は近代の象徴派詩人殆ど五十餘人の評論で、本文の方は、現代佛蘭西文壇第一流の作家であり評家でありまた詩人でもあるルミ・ド・グルモンの筆に成り、それに此バロットンのかいた各詩人の肖像一枚づゝを挿んだ物だ。（本書九〇頁、一七七頁、二七二頁二九三頁等參照）

五

最後に私は、かれが現代人の生活と心理とを巧みに解剖して、その苦悶悲痛の一面を活寫した一例として、「信ずる人」Le Confiant と題した一枚を紹介しよう。女が長椅子（ソオフア）に腰をかけてゐると、男は跪かないばかりにして女の兩手を自分の顏に押し當てゝ、啜り泣きをしながら衷中を語り、身の上を打

LE POKER

ち明けてゐる。男は女を信じ切つて滿腔の赤誠を致してゐるのに、女の方の顏には、それとはなく、掩ふべからざる輕侮と嘲笑の色が明に見える。かういふ女に意中を語りあかすのは敵に武器を借すの類であるとは男みづから氣づかないのである。恁んな皮肉な觀かたは、たしかにバロットンが人生に對する厭生的な一面のあることを證するもので、やはりモオパッサンなどの自然主義的な態度であ

る。かのストリンドベルヒにはあらずとも、恁ういふ畫を見ると誰しも女嫌（ミソジニスト）ひになりさうではないか。

六

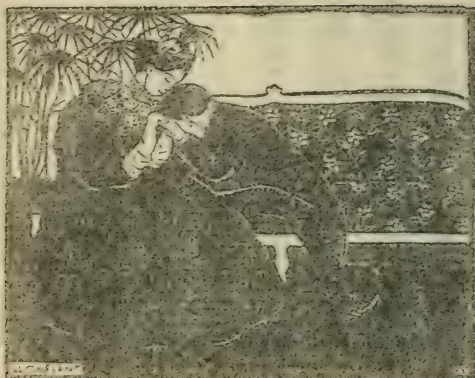
「藝術は性格の追求である」とティヌは云つた。人の顔一つでも景色一つでも其特徴のあるところをしつかり捕捉（つかま）へて、力強くそれを描き出すことが藝術家の任務であるとすれば、バロットンの如きはあの簡單な black and white によつて最もよく此任務を果し得た一人である。かれの成功がめざましかつただけに獨佛諸國には今やかれの模倣者は甚だ多いが、バロットンの作にあらはれた鋭い強い個性の力に至つては、遂に何人も之を學ぶことを得ないものであらう。

私は終りにブリントン氏の評語をその儘引用して、讀者の參考に供しよう

"A few incisive lines and the savant apposition of black and white tell his story.

One does not need, after all, to be modiste or upholsterer in order to probe the souls of men. Though there is nothing here which suggests the golden yellow of Rembrandt or the silver gray of Van Dyck, there is something in each of these heads which recalls the greatest of masters, one who, in the dim chambers of the Alcazar, posed his figures against a neutral ground and painted them with matchless unity of effect. It is only the immature who crave externals; the disdainful Velasquez was content with essentials."

是はまた隨分思ひ切つて褒めた者である。

Stéphane Mallarmé
(Vallotton)

Le Confiant
(Vallotton)

神祕思想家

（フランシス・グリイアスン）

——新しい普遍な神祕的精神が全世界に行き渡るまでは、詩文藝術の偉大なる復活はとても望み難い。さういふ精神が勃興する時は、信仰とか國土とか制度とかいふものを超越して、殆どすべてを風靡するが、それは決して如何なる物質的勢力によるのでもなく、教養あり學問ある人の智的想像の上に活氣を與へる感化によつてである。——

これは『唯物論と罪惡』と題した論文の一節。また

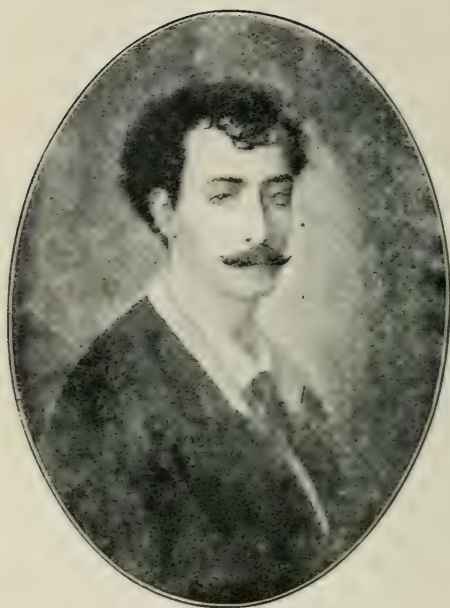
——神祕的なる靈感は、詩歌美術音樂或は哲學のいづれを問はず、すべての作品をして不朽不滅のものたらしむる要素である。

靈感的の思想が取り得る形式中最も生氣あり且つ美しきものは、藝術の形

式と軌を同じうする者である。その故は是が一番神秘的だからだ。最高の靈感は藝術と叡智との結合を要求する。また近代の神秘思想は、かの中世に現れたものよりも更に廣く更に深い。何となれば過去の時代には、叡智が屢次教義(ドグマ)によつて弱められ、實行し難き理想の爲に力を失つてゐたからだ。――是は論集『近世神秘思想』卷頭の一節。その筆者は懷疑を斥け唯物論を棄てて直感(インテユイシヤン)を重んずる新神秘主義の鼓吹者として、確かに最近思想界の一面を代表してゐるフランシス・グリイアスン Francis Grierson である。かれが思想の一端はこの數行のうちにも窺はれる。

珍らしい天才として、かれが名聲はいま歐洲の騷壇に高い。マアテルリンクはかれを現代に於ける最大のいつせいすとなりと稱し、故シユリ・プリユドンムは嘗て彼の論集を讀んで、思想の力強い獨創性(オリヂナリテ)に深くも感服したと言つた。なほ故ヰリアム・ジエイムス教授や詩人のマラルメをはじめ、エドヰン・

マアカム、アァノオド・ベヲツト、リチャアド・ル・ガリアンなども、皆かれの文章の熱心な賞讃者である。近頃佛蘭西譯も西班牙譯も出來た。露西亞譯はいま着手してゐるさうだ。殊に伊太利ではさる批評家の筆に成つた彼の評傳が旣に一小册子となつて出來てゐるとさへ聞いた。

米國の藝術的天才は、不思議にも歐羅巴の藝苑に移されてそこで花を咲かした例が甚だ多い。繪畫のホヰスラア、小說のヘンリ・ジエイムスは云ふまでもないが、佛蘭西の象徵詩派のうちに、并イレ・グリフィンやステュアアト・メリルの樣な純粹の米人が重きをなしてゐるのも、奇異な現象ではないか。ここにいふグリイアスンも、今でこそ英吉利の片田舍に住まつて自然の風物を樂んでゐる英人のやうだが、元來は亞米利加人で、殊に周圍の感化を蒙ることと最も多く何事にも印象を受け易い青春の年頃を米國のイリノイ州で過ごしただけに、後年のかれの思想と趣味とにも、おのづから英佛のそれならぬ特

異の色が著るしいやうに思はれる。
かれが生れたのは千八百四十八年、英國に於てであつたが、すぐ其翌年から兩親に連れられて米國に行つた。ちやうど南北戰爭の騷ぎの頃をそこに過ごして、二十歲のとき再び歐洲に渡つた。それから今日にいたるまで殆ど四十年の彼が閱歷こそ、まことに數奇をつくした浪漫的なもので、謂はば天外漂浪の孤客がコズモポリタン・ライフであつた。先づ杖をとどめたのが巴里の都、そこにはじめて彼を世に紹介したのはアレクサンドル・デュウマであつたしかしそれは決して文筆の人としてではなくてピアノの名手として、又歌ひ手として、其奇才をみとめられたのであつた。別にこの方面に特殊の修業をしたわけでも無いのに、かれはよく各國近世の音樂に通じ、また巧に昔の希臘や埃及の古樂の精神をさへ傳へ得たと云はれた。現に詩人シュリ・プリュドンムの如きは、かれが歌ふのを聞くと懷疑思想などは消ねて了つて、どうして

も靈魂の不滅を信ぜずには居られなくなる、畢竟かういふ音樂は之を心靈的に説明するほか途が無いからだらうとまで評した。それからといふものこの若い美しい樂人は歐洲の國々を遍歴し、羅馬から伯林民顯ドレスデンへ、それから遠く北の露京までもさすらひ、そこに暫く旅杖をとどめた。到るところ彼が天才は樂壇の驚異として迎へられたが、名聲の最もあがつた頃、ふと彼はピアノを棄てて文筆の人となつた。そして暫くの間に五六冊の著述に文名をなしてから、今日ではまた英吉利で、もとのピアノを彈きながら、時々は昔なつかしい巴里へ出掛けて、そこに滿ち滿ちた藝術的空氣の新味を飽かず樂しんでゐるさうである。

ここに五六冊の著述と云つたのはおほかた皆短い論文(エッセイ)を集めたもので折に觸れてのかれが感想を錄したもの、ちよつとマアテルリンクの『貧者寶』や『花の敎』などに似た類の本である。最初出たのが『近世神祕思想』"Modern

Mysticism"（一八九九年）、次のが『ケルト氣質』'The Celtic Temperament'（一九〇一年）、それから一番新しいのは昨年出來た 'The Humour of the Underman'（此「アンダマン」と云ふのはニイチエの超人即ち「スパアマン」に對して云つた言葉で、譯しやうが無いからここでは其儘にしておく）といふので、三冊とも皆卷頭の文の表題をとつて書名としたのである。それから之も昨年の秋ごろに出來た『巴里のおもかげ』"Parisian Portraits"といふ一冊には、前世紀後半の佛蘭西の名家に著者が親しく會つた折の思ひ出を美しく書いた物で、象徵詩人のことを書いたものなどがよほど參考になるやうだ。以上は勿論英語で書かれた物で、なほ別に佛蘭西文で書いた『生と人々』"La Vie et les Hommes"といふ一卷があるが、是はまだ私は見てゐないから知らない。

かれの神秘說は矢張りマアテルリンクのそれと略ぼ相似た行き方ではある

が、さりとて心靈の境を奥深く尋ねて、ひたすら高遠幽玄の理をのみさぐると云つた風の人ではない。よし轗軻不遇とまでは云はずとも、とにかく漂浪の四十年を、或時は王侯の宮殿に出入し、或時は陋巷に窮居する藝術家の群にも交つて、過ごした人である。さすがに變化極りなき世態人情の曲折を味ひ盡した人だけあつて、その說くところは飽くまでも現在當面の事實問題を離れない。いつもその神祕觀を提げて眼前俗界の事象に解決を試みようとする風がある。世にかれを呼むで「實際的神祕主義（プラクティカル、ミスティシズム）の豫言者（プロフエツト）」といふのは即ちこれがためである。之をマアテルリンクなどに比して淺薄なりと見る人もあるだらうが、その代り說くところは遙かに明快で解（わか）り易い。一例を云へばかれは國際の外交關係などをさへ論じて、之に對しても矢張り獨得の神祕說で行かうとする。かれが嘗て英米の親和を說き、一方には英獨の關係があり、他方には米國の極東に對する問題があるとき、英米の兩國をその間にある自然

な心靈の引力 psychic attraction によつて相結ばなければ、文明世界の平和は保たれないと論じた文などは名高いものになつてゐる。

グリイアスンは斯く神祕的信仰を持する人だけに、懷疑否定の態度に對しては隨分ひどく攻擊を加へる。かつて或る論文のうちに恁う云つた、――『不可知（アグノスティク）』の態度は千八百六十年から九十五年あたり迄の間は夫でよかつたらうが、今では物質上にも精神上にも世界の大勢が一變してゐる、ティンダルやヘッケルやハクスレイなどの功績は化學や生物學の證明に限られてゐる。さういふ科學は今ではもう古い科學となつて了つた、と言つてさて下のやうに論じた。懷疑は精神界物質界に於けるすべての事業を破壞するものである。苟くも何か偉（えら）いと云はれる程の事を仕遂げた思想家ならば、その人には必ず信がなくてはならぬ。第一先づ自己を信ずる、第二には他人を信ずる、第三には永遠の神祕のうちに一定の法則があり力があつて、それは即ち直覺によつて

知ることが出來ると信じてゐる。第四にその人は世界が靜止してゐないことを知る人である。常に新しい發見と發明とに向つて希望し努力する人こそ勝利を得る人である。そして將來の大競爭場裡に於ては、物質上の黄金萬能の勢力は、やがて智力上心靈上の目に見えない勢力に壓倒されて了ふに相違ない、さういふ日の來るのも決して、遠い未來のことではなからうと彼は斷言した。

かれの英文は調子の好いすら〳〵した、そして割合に飾り氣のない文である。のみならずエッセイの常として甚だしく氣の利いた言ひまはしの警句に富んでゐるから、毫も讀者を飽かしめないといふ妙味がある。その代り如何にも思想の連絡が惡るいといふ缺點もあるが、是は昔のベイコンからしてさうであるから、憖ういふ類の文章には免れないことかと思はれる。

以上は主としてグリイアスンの論集に就て述べたのであるが、外になほ一

種の自叙傳ともいふべき『幻影の國』"The Valley of Shadows"と題した作が一九〇九年に出て、これが歐米に跨つて非常な評判になつた。一卷二十六章の文は皆、ミズウリ州イリノイ州で、彼が幼時を送つた追想錄に外ならないそれを非常に面白い傳奇めいた筆で書いたものである。その中には作者の親兄弟から周圍の人物は勿論、黑奴やリンカアンの話も出る。當時まだよくは開拓けてゐない荒蕪の地であつたミシシッピイ河の沿岸を背景にして、そこにlog-house の小屋住居をした頃の生活が、いかにも自然をなつかしむやうな筆で精細に描かれてゐる。

私ははじめグリイアスンの論集の卷頭に、彼が露西亞の畫家にゑがかせたといふ若い時の肖像を見た。いつも詩人や文豪を先づその容貌で判斷して見ようといふ癖のある私は、彼の眉目清秀なそして品のいい、どこか貴公子のやうな、——何だか恁うバイロンをやさしくしたやうな顏を見たとき、この

人が文筆と音樂との兩方にすぐれた神祕思想家だなと思つて、云はうやうなきなつかしさをさへ覺ゑた。まことに彼は米人だと云つても米人ではなく、無論英國人でもなければ佛蘭西人でもない、謂はば本當の世界人（コズモポリタン）であつて、唯だ眞に「藝術」の國を以て自己の鄕土とする一個の天才である。かの parochial patriotism の人たちには、恁ういふ人の偉らい所も或は合點の行かぬことであらう。私は此點に就て、グリイアスンが、天才の反地方的、非民族的の者である事を喝破した一文を引用して、此篇の跋としよう。

――『自分だけで納まつてゐる樣な人は、地方的の名士に過ぎない。通りすがりの人をして微笑（ほほゑ）ましむる丈けだ』と、マアテルリンクは言つた。是れ、天才は地方的感情と相反する者で、決して一民族或は國民の典型ではない所以である。ハムレットを書いた沙翁は、英國詩人中最も英人らしくない者である。彼の靈感の根本的要素は廣濶と云ふ點に在つて、是は、若し沙翁にして

地方的な感情や熱意理性の動かす所となつて居たなら、決して存在し得ない者であつた。同じく、また二三の名を擧げるならば、ダンテ、ミケランゼロベエトホベン、ゲエテは其國々に於ける代表的の典型(タイプ)では無かつたのだ。彼等の思想は神祕的であつて、方法的(メソディカル)では無いから、世界的(ユニブアサル)である。英吉利人の感情に反した者と云へば、沙翁の神祕思想ぐらい甚しい者は、ちよと考へ及ばない程だらう。而かも未だ嘗て詩人が英國の思想家によつて悉くも深く鑑賞せられ、大陸の批評家によつて悉くも充分に理解された時は無かつた。眞の人とは內部生命に生きる人である。淺薄な人とは地方的の心を有つて、外部の影響に屈した人を云ふのである。さう云ふ人は、其中で自分は發展し進歩してゐると自ら信ずる其一圈內に在つて轉々してゐるに過ぎない。だから自分の天地では有力ではあるが、其力は因習的であり、その感化力は一時的である。(グリイアスン論集『近世神祕思想』一五—一六頁參照)。

グリイアスンの前掲の諸著は倫敦の John Lane 社及び Stephen Swift 社の出版。また此思想家の評傳として、特に彼の人生觀に就て說ける物にては、

Voices of To-morrow: Critical Studies of the New Spirit in Literature. By Edwin Bjorkman. New York, Mitchell Kennerley. 1913.

の中にある簡にして要を得たる一文を薦める。

A Ferdinand Herold
(Vallotton)

老女優サラ・ベルナアル

一

それは降誕祭の翌日であつた。鬱陶しい午後の半日をピイボデ・インステイテユトの讀書室に送つてから、手控(ノート)を衣嚢(ポケツト)に仕舞つて、たそがれ時に私はふら〳〵とその門を出た。

ボルテイモアのまちは詩人ポウが終焉の地として年來わたくしの記憶を去らなかつた土地である。この地へ杖をとゞめてから既う三月、船つきの都會に似合はず落ちついた、そしてどこか古風なところのあるのが私には氣に入つた。かねて覺悟はしてゐたもの、米國には隨分と凄まじい都會がある。私は大陸を西から東へと横斷するとき市俄古といふ所を覗いて見て、俗惡の二字は之を形容すべく餘りに陳腐であるのに驚かされた。そして其時はミシガ

ン湖畔の宿に一晩とまつたきりで早速引き上げた。紐育へ來て見ても、こゝはまたビジネスと利害の打算のほか何者もない樣な土地だ。落ち着いた氣分になつて、ゆつたりと物を考へたりする事の出來さうもないのに閉口して、半年の後にはこゝをも去つた。華盛頓に來て見て、之はさすが大國の首府だけに美しい立派な都であると思つて、初めて感心した。そして遂にはそこから程ちかいボルテイモアの地に縁あつて杖をとゞめる事になつたのである。

こゝはエリザベス女王の頃から開けたのであるから、北米の都會としては古いもの、一つである。土着の人が家庭生活のまちだと云つて自ら誇るだけに、紐育のアパアトメントに住みなれてゐる人たちとちがつて、人情の温みもあれば風俗の淳朴な所もある。殊に郊外、上流の住宅地たるロオランド・パアクなどは、京の嵯峨や御室あたりを西洋式にした趣もないでは無い。市中にお寺の尖塔が殊に澤山見ゐることも、此まちのゆかしさを増すものだ。

マルベリ街の大伽藍は亞米利加で一番古いお寺だと聞いたので、私は降誕祭の朝に參詣をした。

時々私が調べ物に行くピイボデ・インスティテュトには、音樂堂と美術館と圖書館とが一つになつてゐる。よく演奏會などのある處で、その階上には繪畫の展覽會がいつもある。こゝの圖書館は通俗向きのものでは無いだけに入館者が少くて靜かなのが何よりうれしい。館員の親切なのも氣に入つた。(餘計な話だが、米國の圖書館は公私いづれを問はず、館員は實に親切で行屆いた者である。私は此國の多くの圖書館へ這入つて見て、未だ曾て一たびも不快な思ひをした事がない。華盛頓の國立大圖書館の如き、中にも最も叮嚀親切を極めたものである)。

圖書館の門を出た私は寒い夕風に外套の襟を立てゝ首をすくめながら、鼻さきに突立つてゐる高いモニユメントを見あげた。天空に聳ゆることまさ

に何百尺かは知らないが、その頂上に華盛頓の巨像がある。之だけ高い所に置けば、日本に澤山ある大抵のまづい銅像でも少しは立派に見ゐるだらうと獨り感服する。こゝの廣場(スクエア)を南北に貫く大通りがチャアルズ街(ストリイト)で、この邊一帶がボルティイモアの目貫きのところである塔(モニユメント)のそばのマウント・ヴァノン會堂(チャアチ)は美以教(メソヂイスト)のお寺だが、此建築がまた此場所には言ふに言はれぬほど好い。朧月夜の晩などに人通りの少い折、このあたりをうろつくと、私は未だ會て紐育などで味はゝなかつたしんみりした氣分になつて、はじめて心の落附きを見出し得たやうに思つた。

チャアルズ街(ストリイト)で本屋へ一二軒立寄つてから、その邊で夕飯を濟まさうと思つて、あちこち見まはすと、ふと「和蘭茶屋(ダッチ、ティ、ルウム)」といふ小綺麗な一風變つた家が目についた。私はこの和蘭といふ名前が何となう好きなのである。むかし日本の長崎へ傳へられた和蘭風は、異邦趣味の古雅なところを先づ我國に傳へた

唯一のものであつた。ワシントン・アアギングの『ニツカアボツカアの紐育史』にあらはれた和蘭は、亞米利加人の心が今の樣にけはしく尖つてはゐなかつた素朴な、そしてヒユモアに富んだ、遠い殖民時代の、ごかさを想はせるものである。

ドアを開けて內に這入ると、室の有樣が想つた通り極めて上品で、裝飾も何もない淸楚なのがうれしかつた。ぴか〳〵した飾りをこれ見よがしに澤山列べ立てた近代式に見飽いて了つた私は、恁うした simplicity を一しほまた懷かしく思ふのである。ちよつと澁い好みの俱樂部や料理屋によくある樣に暖爐には瓦斯や電氣を使ふ代りに、態と無雜作に薪をくべてあるのも好い。坐るべき空席がなく、さりとて婦人のゐる卓子へ割り込む事もならず、ちよつと躊躇つて立つてゐる。日本人が這入つて來たからとて、ぢろ〳〵人の顏を見る樣な行儀の惡い人たちもゐないが、男三分に女七分の客でぎつしりつ

まつてゐる。給仕の女に、坐る所は無いかと聞くと、二階があいてゐますと云ふので階上へ行く。食卓は蔽ひも何もかけず、たゞ doilies をいくつか敷いてその上に食器を置く此風も私は好きだ。羊の肉を一皿食つてから「和蘭茶」といふのを飮んで食事を濟ます。

佛蘭西の老女優サラ・ベルナアルが、亞米利加には之でお別れの巡業とあつて、今晚一晚だけこの市の抒情詩座で演るのである。かねて切符を買つておいたので、八時二十分の開幕といふのに時はまだ少し早いが、電車に乘つて此茶屋を出かけて行く。

二

近世歐洲劇壇の花形と謳はれたこの名優も今は七十一歲の婆さんである。一昨年手術を受けて一脚を切斷し、まだ舞臺の人として活動をやめない所は明治初年の名優田之助が鉛毒の爲の兩脚を失つて、猶は劇界を去らなかつた

壯烈（ヘロイズム）を想はせる。

『……であらうとも』Quand meme! と云ふのが勝ち氣な此女優の金言（モットオ）である。片脚は失はうとも、年は寄らうとも、戰爭の危險はあらうとも、恐れもせず屈しもしない。爲さんと欲する所をなし、行かんと欲する所に行く、病院を出てからまた戰地へ出かけて出征軍人の爲めに其技を演じては愛國の熱誠を示し、巴里倫敦の飛行機の恐ろしさを物ともせず、更に潜航艇の危險を冒して大西洋のこなた加奈陀米國に渡つて最後の興行をしようと云ふ。之が子もあれば孫もあり曾孫（ひまご）まであつて、齡すでに古稀を越ね立派な樂隱居の出來る老婦人のわざとは信じられない程の壯烈である。剛勇である。生の力の底までを汲み盡して、自己の偉大を之見よがしに誇れる此女を、世は目して超女（シユルフアンム）なりと云ふのは至當の言であらう。暇さへあれば、酒色か圍棊謠曲に安逸を貪らうとする如き有髯の男子、これを見て若し愧死せずんば、吾は其

厚顏に驚くと云ひたくなる。

之が他の仕事ならばとにかく、身體の動作を主にする俳優として、老齢と不具とを物ともせず、むかし其名聲の全歐を動かした頃「豹の動くがやうに」と謳はれた其美しい身のこなしは出來ずとも、おのが絕代の天才の殘りの面影を今一度世に示して、われながらに自分の妙技を惜む者の如く、また誇るもの、如く、かれがいま舞臺に現はれること夫れ自らが旣に大なる悲壯美であり、また悲劇である。人生そのものを一つの藝術として見るとき、名優が別れの興行は、行く春を惜むよりも、ゆふべの空に殘紅を望むよりも、なほ更に哀切なる「詩」ではないか。

死を恐れずに無鐵砲をやる此女には色々と面白い逸話がある。佛蘭西のブリタニィのベル・イイルに彼女の別莊があるが、そこでの生活の事を書いた物を讀むと、だいぶ以前のことだが海岸から隨分思ひ切つて遠くまで沖の方

へ泳いで行つておほかた溺死しようとした。その時この女優の命を救つたのが、あの『シラノ・ドウ・ベルゼラク』の作者であつたさうだ。恁ういふ事だけを聞くと彼女は何だか男まさりの極めて殺風景の女のやうに聞こゑるが、それでも矢張り世間なみのお婆さんのやうに、子や孫や曾孫に圍まれて小供のやうになつて樂しんだり、また信心が深くて、お寺詣りを缺かした事もないさうだ。この別莊から荒野原を十五哩もへだてた小さい加特力教のお寺まで怠らず參詣をして、そこの住持に寄依し、わざ〳〵名工に賴んで造らせた窓の繪硝子（ステインド、グラス）を二枚寄進して獨り喜んでゐると云ふ事なぞを書いてある。

今度のかれの巡業のレペルトアルに出てゐる物は、どれも皆その不自由なからだで動き廻らなくても濟む樣な場面のもの丈けを選んである。當夜私の觀たのは『クレオパトラの臨終』La Mort de Cléopâtre『まことならぬモデル』Le Faux Modèle『劇場より名譽の戰場へ』Du Théâtre au Champ d'Honneur

といふ三つの一幕物であつた。英語國民の觀客を相手にして全部佛蘭西語で演るのだから、開幕の前には若い女優が出て來て、その度ごとに英語で筋を說明するのである。序の話だが、こちらでは時々奇怪至極な日本の芝居を演られるので頗る恐縮するが、若し恁んな風に通譯說明の方法を執るならば、本當の日本の一座が西洋へ出掛けてそして日本の臺詞で演つても、物によつては或る程度までは成功するだらうなど丶も思つた。但し私の坐つてゐた後の方の席では或る男がぐう〳〵鼾をかいてゐたなどといふ滑稽もある、おほかた妻君にせがまれて無理にお伴をして來た男でゞもあらう。（此女優の名を英語流に平氣でバアンハアトなど丶發音して誰の事を云ふのかとちよつと私を面喰はした亞米利加人なども此仲間であらう）。

三

最初の『クレオパトラの臨終』は、この女優の長子モオリス・ベルナアルの

筆に成る脚本であつた。
幕があくと、ふたりの侍女にかしづかれ、虎や獅々の毛皮に包まれた派手やかな褥に眠れるは埃及の女王クレオパトラである。ふと目をさまして、マルクアントアンからの消息は如何にと訊く。「まだ」Non, pas encore, maitresseといふ返事を聞いて、待ちに待つてゐる女王は煩悶する。ひそかに奸計をめぐらし女王を欺いて、二人の戀なかを割かうとするファアロスは實はおのれが女王に戀して、わがものにしようと云ふのである。こゝは危うければ早くわれと共にリビイへ來らせ給へと云へば、女王は赫と怒つてQu' oses tu dire? Chien! tu t'es trahi!……と一喝する。そこへ負傷した使の者が來てマルクアントアンの敗報を齎らす。やがて女王は侍女の手から短劍を受取つて、おのが足下に跪けるファアロスの肩を打つて殺して了ふ凄まじさ。
マルクアントアンが來るといふので、女王は侍女や奴隷に命じて花を撒き

散らさせ樂を奏し、自分は急いで手に鏡を取つて身づくろひをする。そこへ這入つて來るのがマルクアントアンで、二人は相抱く。『われは君を戀ふ。さされどわれは埃及の女王、如何なりともおのれの治むる此の國を去るには忍びず』と言ふ。マルクアントアンは遂に最後の接吻を殘して去る。

派手な服裝をした隊長(センテユリオン)が這入つて來て、いよ〳〵オクタアヴの勝利を傳へると、女王も今は之までと、毒蛇に自分の胸をかませて鋭く叫ぶ。この前後は長い〳〵獨白(せりふ)である。おのが領土たりし美しき埃及の國をあとにして此世を去るを嘆き、マルクアントアンの戀を言ひ、花のなかに埋めてある毒蛇を取つて自分の胸にあてがふ間も最後の運命を嘆く、死にかけてゐる所へ羅馬の兵を率ゐたオクタアヴが這入つて來る。女王は『戰車(シャル)のうしろに曳かれ行くわが姿を羅馬の人には見せず』といひ、Inclinetoi romain, devant celle qui meurt ...... encore, et toujours Reine! ...... Salut! Imperator! ...... 叫んで死ぬ

ところで幕に

女王のベルナアルは全く步行といふ事をしないで、褥の上に坐つてゐる外は、アントアンと相抱くときに身を起すだけで、あとの二幕とも皆惩ういふ場面ばかりに出來てゐる。そして全くベルナアル一人の藝を見るだけの芝居で、それも胴から上と兩手を動かすだけ、つまり此女優の獨誦(デクラメイシヨン)を聞くだけである。しかし驚くべきは昔ながらになまめかしい其聲である。是が七十一歳の老女優の聲とは何としても受取れない樣な美しい、よく通る聲が棧敷の隅々までもとゞく所はさすが偉いものだと思つた。流動物と野菜と水との外は何も食べないと、あんな聲が出るものかと獨りで感服する。此聲と上體の運動とだけに、舞臺面を少しもだらけさせない丈けの力がこもつてゐるのである。

次の『劇場より戰塲へ』は戰爭の際物であるが、藝としては此方が面白いと

思つた。舞臺面は激戰のあとの森のこかげ、負傷した一人の佛蘭西兵（女優ベルナアル）が足腰もたゝずに樹下に蹲踞まつてゐる。ふとわれに歸つて、自分は旗を放さなかつた。仆れるときには確かに持つてゐた。……自分は旗手の直ぐうしろにゐたのだ。……獨逸兵が來て旗を裂いたから銃劍で其男の喉を突いてやつた筈だ。旗はたしかに取り戻した。……が夫れからあとの事はもう記憶がない。恁う獨語つてゐる所へ、之も負傷して頭に繃帶をしたわかい英吉利の士官が出て來て、自分の水筒から水を飮ませる。そして病院車の來るのを待つのである。

此兵士はもと俳優で、名をマルク・ベルトランと云ふ。無理に志願して父と共に出征し、父は既に戰死して了つた。旗の行衛を氣にしてひどく煩悶するのを英吉利の士官が慰める。

『君は塹壕で佛蘭西の詩人の歌を聲高らかに吟じて、大に士氣を鼓舞したと

云ふではないか』と士官が云ふと、それは「敵のために捧ぐる祈」La prière pour nos ennemis と云ふのであつたと云つて、瀕死の兵士はそれで長い〳〵朗吟をやる。敵を呪ふ歌で

Vous qui voyez, Seigneur, leur âme jusqu'au fond,
Ne leur pardonnez pas, ils savent ce qu'ils font.

主よ、人の心の底をまで見たまふ神は、
自らおのが爲せる事を知れる彼等を許し給ふなかれ。

といふ言葉が幾たびも繰返される。旗の行衛を氣にして兵士がなほも煩悶してゐると、そこへ看護婦になつてゐる公爵夫人が來て、『舞臺で屢々勇士を演じたお前は今まことの勇士となつて此戰場で手柄をした』と云ふ。兵士は益々煩悶し激して旗を失つた事を嘆き、再びそれを取りかへす迄は死すとも死せずと云つて、公爵夫人の慰めるのも聽かない。出血は益々甚しくなる。再び『わが戰友なりし旗手よ』Portedrapeau mon comrade! といふ長い歌を歌

ふ。其終の邊はもう死に迫つて息も絶え〴〵に苦んでゐるところへ、英吉利の士官が樹の後にあつた佛蘭西の三色旗をさがし出して渡すと、瀕死の兵は夫れをひろげて兩國の萬歳 Vive l' Angleterre, vive la France を叫ぶ。滿場の喝采を得て、兵士はそのまゝ三色旗に包まれて死ぬのである。

芝居としては固より簡單な戰爭物で、云ふに足るほどの者ではないが、女優みづから戰場へ出掛けて行つた剛勇を諷し、時節がら此三色旗がよく利いてゐるところも面白かつた。老體に似合はぬ身振りと聲とには、十分人を引きつける丈けの力がこもつてゐた。脚本は戰地で或る士官が作つた事になつてゐて、はじめて倫敦で正月の三日に演つた物ださうだ。

次の幕は輕い滑稽物で『話す通りの英語』L' Anglais Tel qu' on le Parle と題したもの、佛蘭西の或るホテルで英語の通じない爲めに起る一塲の喜劇。この幕には女優ベルナアルは出ない。兵士の絶叫に疲れた老體を休ませる爲

であらう。

最後のは『まことならぬモデル』舞臺はシイモア・ベルといふ英吉利の畫家のステユデイオで、細君のマデレイン（ベルナアル）が手にライアを持つてサツフオの姿でモデルになつてゐる。これが嫉妬ぶかい女で、モデルの女を夫が使ふのさへ好まない、そして子供がない。そばでサツフオの曲をピアノで彈いてゐる弟のレイモンと三人の間に滑稽な問答が一しきりはづむ。戰後には男子の數が足りなくなるから、五十歳未滿の男子には一人に四人の妻を持たせる法律が出來るといふ。それならシイモアはいくつかと云ふと五十三だといふ。それでも構はない、もう外に三人女房を持たせたらば十人や十二人の英人を生む事が出來ようと云ふ。はじめ此の說を出したマデレインは『私は佛蘭西人の事を云つてゐるんですよ』と云ふ。畫家は英吉利だつて佛蘭西だつて同じだと云ふと、細君は『英吉利には海があるからそんなに澤山人

間は要らない』と答へる。魚では兵隊に成らないからねと亭主が茶化すと、あなたは眞面目に物の言へない人ねと云ふ。こんな對話をしてゐる處へ、和蘭の金持ちの男爵ヴアン・ハアド夫妻が畫を買ひに來る。その男爵夫人といふのがまた突飛な女で、自分がモデルになると云ひ出して肌ぬぎになると云ふ騒ぎ、恁う云つた滑稽が殆んど動作といふ程のものなくして進行し、最後にマデレインがシエリイの詩『戀の哲理』(ラブ フイロソフイ)を英語の儘で吟ずる

The fountains mingle with the river
And the rivers with the ocean,
The winds of Heaven mix for ever
With a sweet emotion;
Nothing in the world is single;
All things by a law divine
In one spirit meet and mingle,
Why not I, with thine?
See the mountains kiss high Heaven
And the waves clasp one another;
No sister-flower would be forgiven

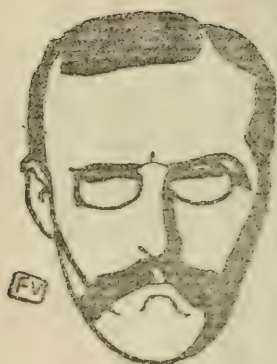
If it disdained its brother;
And the sunlight clasps the earth
And the moonbeams kiss the sea;
What is all this sweet work worth
If thou kiss not me?

といふのを朗吟して幕。之はたゞベルナアルの聲を聞くだけの芝居であつた幕のあとで觀客の喝采に應へる時にはベルナアルは立つてはゐるが、左手を輕く他の役者の肩において、それに凭りかゝつてゐた。四たび五つたびと幕をあげさせる滿場の喝采は光榮ある彼女の過去の歷史に對する敬意を示すもので、辛うじて名優が殘りの面影をしのばせるに過ぎない當夜の演技に對してゞはなかつたであらう。唯だ多年練へにきたへ上げて其テクニックの上に、少しの危げもない老練は驚くばかりである。

こちらの新聞記事で見ると、ベルナアルは素顏を見ても（舞臺顏は勿論だが）四十歲位にしきや見ねないさうだ。一行のうちには固より抱への醫者が

ゐて、養生の事などは一々その指圖に從つて非常な注意を拂ふといふ話、英語はあまり達者でないので記者に面會の時は通譯を外に立たせて、自分は幕のかげに不自由な身をかくして話すのださうだ。記事の一節に恁んな事が書いてあつた。戰爭のあとで佛蘭西に男子が少くなつては美しい佛蘭西の女に獨身の人が多くなるでせうと記者が云ふと『なに、其時は立派な亞米利加のかたを澤山にお迎へして、御亭主にすればいゝぢやありませんか』と、此婆さんなか／＼如才ない事を云ふ。記者が強いて幕の間から姿を見ようとすると『あら、いやなかたね』……そして醫者が旣う轄よと云ふから之で御免を蒙ると云つて這入つて了ふさうだ。歩行に不自由な身はホテルの出はいりにも、乘物に乘るのだと聞いた。

古稀の老軀を以てなほ其技を萬里の異域に誇らんとする隻脚の老女優、the divine Sarah' かれが晩年衰殘の日の此雄々しき努力を見て、誰かまた義な

しと云ふ者があらうぞ　（大正六年四月「大[illegible]」所載）

Albert Samain
(Vallotton)

女の表情美

表情美といふ點から云へば、日本人は遠く西洋人に及ばない。これは人々の談話してゐるところを傍で見てゐても直ぐ氣の付く事である。西洋人の場合は顔面は勿論のこと、動作身振などのすべてに感情の極めて自然の儘な――或は多少誇張された表現があるから、談話が如何にも賑かで生き〳〵してゐる。内容を聞かなくても、嬉しい事か悲しい事か、或は樂しいのか苦しいのか、傍觀者にも大抵の判斷はつく位である。ところが日本人となると追從や愛嬌の爲めに、可笑しくないのににや〳〵笑ふやうな不自然な眞似はするが、眞の表情といふ者が甚だ乏しい。僞りなき眞情が顔面や動作などのすべてに現はれてゐない。意識的にもまた無意識的にも、それが蔽ひかくされてゐるため、同じ談話も殺風景になり無味乾燥になり、淋しくなり冷淡に

なつて了ふ。これを一言にして云へば、表情の乏しいと云ふ事はそこに全く美しい「詩」といふものの失はれたことを意味するのである。

日本では美人と云へば、先づ目鼻だちの整つた所謂「道具」の揃つた美しいのを第一の條件にするやうだが、この點はよほど西洋とは異うやうだ。こないだも米國の桑港大博覧會に招待するため各州から一人づつ美人を選出したとき、その採點の標準なるものが面白い。即ち第一に表情二〇で、之に最も重きを置いてゐる。次が容姿一五、齒一〇、髪一〇、口一〇、鼻一〇、性質智識一五、恁ういふ標準であつたと聞いてゐる。

おもふに日本人に表情美の缺けてゐるのは、むかし佛教ことに禪宗の影響をうけて出來た武士道といふものが、喜怒哀樂を色に現はさずといふ事を手柄のやうに敎へた其餘弊である。いかに嬉しい事があつても平氣でゐろとか或は胸に堪へられない程の苦痛があつても顔には笑みを湛へてゐろとか、愚

にもつかぬ不自然な虚僞を貴むだために、現代の日本人は遂に此美しい「詩」を失つた一種の不具者のやうになつて了つたので、吾輩は此點に於ても祖先が傳へて呉れた武士道とかいふ頗る結構な教に對して大に感謝すべきわけである。西洋人の目に日本人が兎角陰險なるかのやうに見ゆるのは、全くこのDemonstration の足りないのもたしかに其一原因であらう。

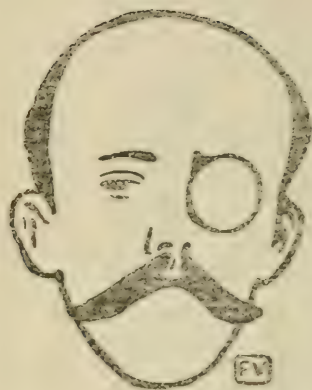
しかし男子の場合はともかく、婦人にあつては表情こそ實にその美の生命である、全部である　如何に目鼻だちが美しくても、衣服が立派でも、この表情の乏しい女には、肝腎の生命といふものが無いのだから、その美しさは全く人形のそれと擇ぶ所はない。日本の女は西洋人にくらべると實に此點に於てひどく劣つてゐるので、之れは忽ち繪畫の上に最も明かな證據を殘してゐる。日本の人物畫、ことに美人畫にはとても〳〵、西洋畫にあるやうな微妙な美しい表情は見られない。現にこのあひだの文展の所謂「美人畫室」の出

品を見ても矢張り此國にはあるだらう。大抵が皆女の表情と云ふ點に於て、實に甚しく物足りない心地のする作が多かつたやうに思ふ。日本では在來風景畫のやうに人物畫の方が發達して來なかつたと云ふやうな色々の原因は別にあるにもせよ、とにかく之はたしかに寫さるべき日本の女その者に表情の美が缺けてゐる事が、重なる原因だと私には考へられるのである。

日本では昔から普通の婦人よりは遊里の女の方がこの點に於て遙にすぐれてゐた事は、德川時代の戲曲小說や浮世繪などがよく證明する所である。因襲道德の束縛をはなれた自由な美しい感情生活は、德川時代に於ては殆ど之を遊里といふ一區域に求める外はないのであつた。また現代に就て、地方的な見かたで云へば、東京の婦人にくらぶれば、京大阪の女は表情に乏しい人形のやうなのが多く、また概して云へば田舍の女が都會の女よりも表情に乏しい事は今更いふ迄もない事實である。表情美に乏しいと云ふことはつまり

表情筋の發達してゐないことを意味するのである。獨り顏ばかりでなく、身體各部の筋肉に感情の波動は現はれるのだから、これが在來長い歷史の結果として日本の女には殆ど遺傳的に缺如し不足してゐた一面である。一朝一夕に今それをどうしようと云つたつて、とても無理な話ではあるが、私はこの點に於ても、かの女優の問題などのまだまだ前途遼遠なことを思はずにはゐられない。遺傳的にさういふ缺陷を有つてゐる日本の女に、何よりも表情の大切な俳優といふこと、――殊に隨分極度に誇張された表情を必要とする西洋の芝居なぞをやらせるのが、そもそも無理な注文ではなからうかとさへ思つてゐる。

しかし是は單に外觀のみの問題ではなく、實は婦人の內部生活の問題である。內に豐富な自由な熱烈な感情生活の美がなくて、どうして外に花やかな表情の美があらうぞ。賢母良妻主義の教育家なぞが夢想だも及ばない眞平や

かな、豊な内部生活の「詩」であつてこそ、そこに初めて女の眞の生き〳〵した表情美が生ずるのではあるまいか。（大正四年一月）

Henri de Régnier
(Vallotton)

戲曲「亡靈」に序す

叙事詩よりも抒情詩よりも、亦散文小説よりも、藝術としては遙に進步したる形式と複雜なる內容とをそなへたる劇に於て、世界の文藝史がながく人類の光榮として誇り得べき偉大なる作品が、其發達の主要なる三つの時期を劃して現はれた。先づ古代に於て希臘ペリクリズ時代の古典劇を舉げ、中ごろ古典法則の繫縛を離れて、更に奔放の新意を創めたる英國處女王朝の沙翁劇を數へるならば、近代に及むで人は誰しも皆、北歐劇壇の將星イプセンの諸作を以てこの新時代の代表なりと認めるに躊躇しない。かれの問題劇社會劇は藝術上最も大膽なる峻烈の態度を以て、前人の未だ曾て踏まなかつた新しい道を行つた者であつた。

戲曲「亡靈」は、此イプセン劇を代表する大作の一つである、之を思想上よ

り見れば、近代文明の裏面に潜み思潮の根底にわだかまる暗黒の影を捉へ來つて、通俗の生活に安むずる樂天家の夢を破らむとしたものである。また文藝史上、悲劇としての地位より云へば、之を古典劇「エディパス王」や、或は沙翁劇「マクベス」「リイア」の如き大作とならべて、必ずしも甚しく價を失するものでは無からうと思はれる。

西歐諸國の新劇壇はその創立の初めに當つて、殆ど皆申し合はせたやうに劈頭第一この「亡靈」を上場した。即ち獨逸の自由劇場は千八百八十九年九月二十九日に、佛蘭西の自由劇場は翌九十年五月二十九日に、英吉利の獨立劇場は翌九十一年三月十三日に、みな最初の公演或は私演に此劇を用ひて一世の人心を聳動し、之によつて劇壇革新運動の第一歩となした。この事實は一個の近代劇として「亡靈」の眞價のある所を、最も明瞭に、また剴切に、吾々に向つて語る者ではなからうか。

元來イプセン一代の作品は其初期の浪漫的傾向から、中ごろ徹底的破壞的の自然主義に移り、更に晩期に及んで漸く圓熟の境に入つて神秘象徴の風格を帶ぶるに至るまで、その間の發達變遷の徑路に極めて自然なる連絡があつた。各篇みな悉く其前後の作との間に緊密な關係を有する點に於ては、彼の全集は實に終始を一貫せる一大連鎖たるの觀がある。或時は人物の性格に於て、或時は作全體の基調に於て、或時はまた其中心思想に於て、一作は一作ごとに序を逐うて、そこに何等かの連絡を保ちつゝ、開展して行くその推移のあとが如何にも鮮かに吾々研究者の目に映ずる所が、尠からぬ興味をそゝるのである。そこで今「亡靈」に就て云ふと、是はイプセンの破壞的否定的態度が激烈の頂點に達した折の作である。だから此作に對するとき、吾々は先づ孤軍奮鬪の勢すさまじく因襲と權威に反抗して、一世を痛罵しつゝ、獨往邁進せむとする戰士（ファイタア）としてのイプセン其人を想はねばならぬ。

いまこの頃の作物で、「亡靈」を中間に挾むで、その前後との關係を考へると、

千八百七十九年作　「人形の家」

千八百八十一年作　「亡靈」

千八百八十二年作　「人民の敵」

といふ順序で出來てゐる。先づ「人形の家」に於て、イプセンは例の隨分思ひ切つた態度で婦人解放問題のために絶叫した。慣習道德が命ずるところの「義務」の束縛を脱して、眞の自我中心の生活に入らうとする女主人公ノラの氣焔には、世の道學先生は勿論のこと、いくらか新しい氣運を理解し得るものさへ、尠からず驚かされた。一般の社會はイプセンの此作を目して世道人心を毒するものなりとして、猛烈に攻撃を加へた。そこでイプセンは翌年の夏を南歐ソレントオの海岸に送つて、更に新曲の稿を起した。飽く迄も世と

戰はむとする彼は恁う考へた。ノラが一朝自己といふものに覺醒して家庭生活を放棄するのを、世人は異口同音に不道德だと云つて非難するが、若しそれならばノラがあの儘で、卽ち覺醒せずに、虛僞の生活を續けて行つたらばどうなるだらうか。此結末は或は頗る慘澹たる者があるでは無からうか。是に於て唯だかの漫然舊道德の立場に在つて攻擊を逞しうしながら、この明白なる疑問にさへ逢着し得ざる衆愚の蒙を啓くべく、イプセンが彼等の面前に今之を見よとばかりに投げ出した作が、卽ち悲劇「亡靈」であつた。あゝ道學先生の講釋にはとくに既う聞き飽いた、理屈や說教は何とでも云へようが、唯だ此恐るべき冷たる赤裸々の事實に面して、卿等は如何せむとはするぞ、恁く問はむとするのが、イプセンの眞意であつた。

「亡靈」のアルキング夫人は、不品行な放縱の生活に身を持ち崩した男の妻として、虛僞の家庭生活をつゞけた女だ。因襲道德の權化とも云ふべき牧師

マンデルスの言に從つて、彼女は心ならずも母たり妻たるの「義務」を果して世を送つたその最後の悲慘なる運命こそは、要するに彼女が多年覺醒し得ずに續けて來た生活の當然の歸結に他ならなかつた。そして此戰慄すべき悲劇を構成するに至る根本の力を何かと云へば、それは近代の自然科學が吾々に提示したる恐ふべき遺傳の現象であつた。わが文壇の或る新作家が所謂「歡樂の鬼」であつた。父の亂行は生理的に、其子オスワルドをして、救ふべからざる病弱の青年たらしめ、彼は遂に絕望の極「われに太陽を與へよ」と叫びつ、悽愴暗澹たる此曲の大團圓をなすに至つたのである。(醫家の說によるとオスワルドの症狀は Syphilis hereditaria tarda「慢性遺傳梅毒」か、然らざれば Dementia paralytica「麻痺性痴呆」でなくてはならぬが、いづれにしても、之にはなほ疑ふべき點があると云ふことだ。)

英國現存の評家ハヴロック・エリス氏は、嘗て此劇を評するに當つて Ro-

bust naturalism の語を用ひた。かの浪漫主義の美しい、されど果敢ない夢を根本から一掃し去つて、醜悪な人生の暗黒面をかくまでも遠慮なく曝露した作物は、さしも豊富な近代の文藝に於ても、類は甚だ少い。さきに「人形の家」を攻撃した世人は、こゝに至つてまた更に聲を大にして「亡靈」を非難した。亂倫なり、悖逆なり、汚穢なりと罵つて、遂にこは藝術の圏外に逸し去れる醜劣の文字なりとさへ嘲つた。そこでまたイプセンは更に奮激して、社會に向つて次の矢を放つた。それが即ち其翌年に出た「人民の敵」であつた。今は衆愚の世だ、思想家或は先覺者が眞實を語つて、かれら俗衆の蒙を啓かうとすれば、世は却つて此先覺者を敵視し、遂には之を責めて死地に陷れ、ようとする。敢て身を挺して民衆の敵たらむとせる其人こそ、眞に一代を警醒すべき貴き豫言者である事に彼等は氣付かないのだ。イプセンは此意味に於て自己の立場を明かにすべく、「人民の敵」の主人公ストックマンを描いた

温泉場の缺點を曝露して、果ては大に市人の攻撃を受けたこの侃諤の士ストックマンが、「世界に於ける最强者は最も孤獨なる一人である」と叫んだのは作者自から自己を描いて、世の嘲罵に報いた者であつた。

以上述べたやうなわけで、悲劇「亡靈」は問題劇社會劇として、實にイプセン作中の最大なるものである。かれが現實の問題に觸接して、最も激越な非妥協的の態度を持したる頃の代表的作物である。從つて藝術品としては、なほ完璧を以て許すべからざる缺點のある事は認めねばならぬ。即ち彼の作物は此頃よりして以後漸くその色調を變じ、次て出た「野鴨」や「ロスメルスホルム」に至つて、益々圓熟の境に入つたのである。だから私共は純藝術家としてのイプセンの傑作を以てむしろ之等よりも後の晩年の作にありと見做しつゝも、なほ同時にこの「亡靈」を以て、眞に讀み苦しきまで苦味(にがみ)の勝つたるまた痛ましきまで深く現實味の底に徹したる稀世の大作である事を、信ぜざ

るを得ないのである。戯曲「亡靈」を讀んで唯そこに「詩」の乏しい事や、或は極端な誇張のあとを見、露骨な一本調子の作風に慊らずとのみ思ふやうな人は、いまだ共に問題劇を語るべからざる人であらう。かつて丁抹の評家ブランデスが此作を評して、是れイプセンの最大作にはあらざれども、確かに彼が最高の功業なりと云つた言葉の眞意は、讀者が深く思ひを致すべき所であらう。（高橋氏譯「亡靈」序）

英國思想界の今昔

（ヴィクトリア朝と現代と）

一

外交關係と思想問題と、此懸け離れた二つの者を强ひて私は結び付けて考へようと云ふのではない。二者の間には何の關係もなく交渉もないと唯だ一概に否定して了へばそれ迄である。しかし私は最近十數年の英國の國情を考へる時、その最も著しき特徴が、外交の上にも思想の上にも益々大陸に接近して來たといふ顯著な事實にある事を思はざるを得ない。そしてまたたとひ偶然にせよまた必然にもせよ、此同一現象が外交上と思想上との兩方に現は

れた事に特に興味を感ずるのである。かの能文達識を以て知られたフランシス・グリアスンが昨年世に公にした論集『無敵同盟』などには、現に國際關係を說くに氏一流の神祕思想を以てした如き極端な例さへある。また前世紀の後半自然主義の勃興時代から世紀末の象徵派文藝の盛であつた頃にかけて、思想上藝術上に於ける露佛二國の間の密接な關係を以て、その外交上の親善な間柄と對比して考へる時は、外交史と思想史との間に不思議な一致のあつた事に誰しも注意を促がされるであらう。恁ういふ現象を思ひ返せば、今私がここに英國の外交關係を最近思想史の上から見て、二つの間に一致を見出さうとするのをも、あながち牽强附會とのみは云はれないだらうと思ふ。

前世紀の丼クトオリア朝の末つかた、英國々運の隆昌はまことに前古に比なきものがあつた。その頃歐洲大陸には獨墺伊の三國同盟に對し、露佛同盟

が出來て、勢力の均衡（バランス）が保たれた。唯だ英國のみは獨り自ら高うして、所謂「名譽の孤立（グロオリアス、アイソレイション）」「花々しき孤立（スプレンデイド、アイソレイション）」といふやうな地位に在つて、國威を誇つてゐた。それが二十世紀になつて先帝エドワアド七世の御宇に入り、英國の外交は從來の孤立の態度を棄てて頻に大陸に接近しはじめた。千九百〇二年に成立した日英同盟は相手が東洋だから姑らく別問題として、次で千九百〇四年の英佛協商となり、千九百〇七年の英露協商となつたのは讀者の知らる、所である。おもへばかの歐洲の「平和建設者（ピイスメイカア）」と呼ばれ、或は「平和の國王（パシフイカテユウル、ロア）」と稱せられた先帝エドワアド七世は少壯の頃より下情に通じ給ひ、人心の機徴を察し世相の曲折を解せられたる、謂はゞ苦勞人とも云ふべき英明の君であつた。登祚の後は殆ど年ごとに大陸に行幸せられて、大陸諸國との親善の度を增し給ひ、在位十年の間に世界の國際關係は爲に著るしき變化を生じた。英佛露の三國協商に日本其他を加へて聯合國とし、以前の三國同

盟より伊太利を脱したる獨墺同盟と對戰するに至つた今次の大戰亂は、要するに近時英國の外交政策が孤立を棄てゝ、大陸接近の態度に出でた事に基因するのである。

さて之を思想史の上から見ても、ヸクトオリア女王時代の英國は大陸諸國の近代思潮と殆ど沒交涉の觀があつた。特に先づ著るしく露佛二國に現はれた自然主義の文藝も、またかの現實暴露、因襲打破、偶像破壞等の言葉で云ひ現はされたる澎湃たる新思潮の勢力も、皆遂に英國海峽を越ゆるには至らなさつた。前世紀の後半大陸諸國の民が社會主義の運動に狂奔した時にも、英國の下層民は依然として貴族や富豪に對する一種の傳説(トラディショナル)的な服從に甘むじてゐた。佛蘭西あたりの矯激な社會主義の宣傳者さへ、英國のみは遂に全く侵し難き別天地なりとして絕望した程であつた。かくてヸクトオリア朝盛期の英國は極めて穩健着實なる常識萬能の俗衆に滿たされた。妥協と中庸との

外何事をも知らない道學先生の國であつた。一代の民衆はゾラやフロオベエルやイブセンの文藝には目も呉れず、平穩無事の詩人(テニソン)の諸作に隨喜の涙をこぼし天下太平を謳歌した。氣早な日本文壇の批評家などが、一概に英國を以て時流に後れたる保守頑冥の國なりと誤解し速斷したのも、要するにヸクトオリア朝の思想界が大陸に對して「名譽ある孤立」の狀態にあつたからだ。

妥協調和を重むずる思想の流れはやがて必ず凝滯し沈衰して、何等かの變化を要するの時機に到達する。是が即ち過渡時代の危機(クライシス)であり、大變換期(グランド、クリマクテリク)である。殊にその中庸平凡思想の流れが長ければ長きほど、また强ければ强きほど、その後に現はれる破壞的革新の新思想新氣運は一層急激であり猛烈である。殊に英人は昔から保守的な一面と共に急進的の一面を具へ、實際的なると共にまた夢想的である特色を有してゐる。是は全く保守的冥想的な北

歐獨逸民族の氣風に加ふるに、南方拉句文明の感化をうけ、またケルト人種特有の熱情空想の分子を多分に加へてゐる結果である。佛蘭西革命よりも約二世紀前にクロムヱルの如き政治家を出し、自然主義の破壞思想よりも幾十年先んじてシエリイやバイロンの絶叫を生じた英國を目して、誰か保守一邊の國なりと云ひ得ようぞ。

果然危機は來た。今まで思想上に孤立の狀態であつた英國は、世紀の終、女王治世の末年に近く、先づ千八百八十年代からして漸く動搖變化の兆候を呈しはじめた。かくて色めき渡つた思想界は世紀末より今世紀に至つて益々著るしく變換期の特色を現はした。それは澎湃たる大陸の自由解放思想の流れが、一時に大河を決するが如くにこの島帝國に侵入し來つたからである。

二

思想界に於て輓近英國の大陸接近の事實は、最も著るしくその民本的傾向(デモクラティク、テンデンシー)の上に現はれた。

遠い昔のアングロ・サクソンは、もと自由な海上生活に、權威の壓迫を知らなかつた眞の放たれたる民であつた。それが十一世紀の「ノオマン・コンクエスト」以來貴族といふ一階級に壓迫せられて、近代に至るまで九百年間には、遂にそれが强大なる因襲の勢力と化し、傳説(トラデシヨナル)の權威(オオソリテイ)とまでなつた。勿論その半面には此民族に固有なる自由解放思想の絕ゆざる反抗の歷史があつたには相違ないが、とにかくヰクトオリア朝の中頃こそは、一般民衆が貴族富豪地主などに對する一種の保守的崇拜熱の最も熾であつた時だ。當時の文豪サツカレが名著『スノツブスの書』を公にして此病弊を罵つたのは實に千八百四十八年であつた。然るに大陸殊に佛蘭西、露西亞では、人の知る如く前世紀の中葉以後が、破壞革新の思想や個人主義自然主義の文藝の極盛期であ

つたが故に、英國の思想界は獨り時潮を離れたる孤立の狀態を呈してゐたのであつた。

鎖國主義や孤立主義は民族生活としては到底不自然の態度たるを免れない。外交上にも思想上にも、「花々しき孤立」は果して長くは續かなかつた。先づヸクトオリア女王朝の終、所謂世紀末(ファン、ドウ、シエクル)の頃に動搖しはじめた英國の思想界は二十世紀に入つて急轉直下の勢を以て大陸の思潮と同一方向を指して、更に一層の勢を加へて驀進しつゝある。すべての方面に於て因襲や傳說の勢力を破碎し、「ノオマン・コンクエスト」以來養はれ來つた貴族の勢力も、最近數年間いまの自由黨內閣の急進的社會主義的政策に壓せられて、果敢なくも漸く衰頽の色を呈してゐるではないか。

千九百〇五年バルフォア內閣が一たび關稅改革(タリフ、リフオオム)の問題に蹉跌してより今日に至る約十年間は、實に全く自由黨內閣の天下で、さきにキアメル・バナアマ

ンに次いで、アスキスが首相となつてからは、更にその働き振りが一層目ざましい。言ふまでもなく統一黨は保守的な貴族や地主や富豪や銀行家や資本家の利益を代表し、自由黨の方が勞働者や平民の味方である。この統一黨が最近に於て黨勢甚だ振はず、全く政權に遠ざかつて在野黨たる事殆ど十年、愛蘭自治案に關聯したアルスタア問題などを利用して頻にあらゆる辛辣なる手段を用ひ、如何にかして自由黨內閣を顚覆しようと焦慮(あせ)つても、遂にそれが效を奏しないで、益々苦悶し懊惱してゐるといふ現象は、果して何を意味するのであらう。勿論いまの黨首ボオナア・ロオの其器に非ざるを始めとして人材の缺乏も一原因ではあらうが、時代思潮の大勢が既に統一黨の帝國主義を離れて、全く現內閣自由黨の社會主義的政策に一致して來た事が、其大原因であるのは云ふ迄もなからう。

現內閣の花形役者たる藏相ロイド・ジョオヂは、文壇におけるバアナアド・

ショオと共に、私は之を、最近英國の民主的社會主義的因襲打破の大勢が生み出した時運の寵兒だと見なすのである。彼が苦心慘澹の餘に成つた有名なる千九百〇九年の豫算案は、最も露骨にまた最も突飛にその急進政策を現したるもの。勞働者や平民が歡呼萬歲のうちに之を迎へたと共に貴族や富豪に加へられたる其大打擊は、彼等の心膽を寒からしめた。その餘りに極端なる急進的態度には、さすがの大陸諸國と雖も一驚を喫せざるを得なかつた。而かもこの豫算案が遂に議會を通過するや、彼はなほ勢に乘じて更に懸軍長驅、敵の本壘を奪はむとする者の如く、上院の否認權(ヰイトオ)廢止案を以て更に其牙營に肉薄した。この突擊はまたもや見ごと效を奏して、今では英國の貴族院は驚くべきほど其權力を失墜するに至つた事は、讀者の旣に知らる、通りである。

ヰクトオリア朝の中頃には、資本家に對する勞働者、貴族に對する平民の關係は、多年因襲の力によつて殆ど動きなきものであつた。それが近年漸く

大陸思潮との接近と共に先づ職工組合主義（トレイド、ユニオニズム）となり。また同盟罷工の運動となり、今日では遂にかの佛蘭西のソオレル等によつて創められたサンディカリズムの色彩をさへ帶ぶるに至つた事は、注目すべき現象ではないか。實際近年の英國ほど同盟罷工の頻繁なのは全く他に例の無いところで、印刷職工、鐵道就業員、炭坑々夫、海員等一としてこの同盟罷工をやらざるなしである。一例を云ふと、千九百十二年の一月から九月までの間に、同盟罷工の回數實に五百一回、罷工勞働者の數百三十四萬人を算するに及んだと傳へられてゐる。文藝の方では、ゴルズウアシイが千九百〇九年の作『爭闘（ストライフ）』は、坑夫の同盟罷工を背景にして、その巨魁と會社の重役との衝突を描いたもので、全く英國現代社會の此大問題を取扱つた劇である。

三

世紀末以後の英國が思想上に於て露佛と接近するに至つた現象は、わが日本が日露戰爭以後歐洲の自然主義を輸入してよりこのかた、思想界に大動搖を生じ、それが遂に大正の初めに至つて外部の實行的方面にあらはれ、かの憲政擁護の騷ぎなどを始めとして、種々の政治上社會上の動搖となつた其間の徑路に酷似した點が多い。

新思潮が最初なほ未だ具體的活動の形をとらず、茫漠として捕捉すべからざる隱れたる力であり、人心の內部に兆した氣分であり情調(ムッド)である間に、早くも之を感じ之を表現するものは文藝に他ならぬ。從つて政治上社會上の現象は、多くはそれに先きだつこと十年二十年、時に或は半世紀一世紀以前に於て、既に文藝上の新運動として現はれたる例が甚だ多い。大正の政變に先だつ約十年にして既に我邦の文壇に新思潮が現はれてゐた如く、英國現代の民本主義社會主義的傾向は今より約二十年前、ヸクトォリア朝の末期に近く、

詩文藝術の上にあらはれたる大陸思潮との接近が、實にその先驅をなしてゐたのである。

テニソン、ブラウニングの詩歌、ディッケンス、サッカレの小說によつて代表せられたヸクトオリア女王朝盛期の文藝は、かのラファエル前派の藝術が勃興した頃から漸く變化の色を呈して、大陸のデカダンスの傾向に接近し始めた。ロゼッティ一派の詩歌や繪畫には、既に一種病的の色morbidezzaが現れてゐた。かれ等は文藝上一切の法則や因襲を棄てゝ、放たれたる自由の藝術を起さうとした。例の道學先生一輩の徒からは早くも亂倫なり肉感的なりとの攻撃をさへ浴びせられた。更にこの一派と密接の關係あるペイタアは、その『文藝復興論（ルネツサンス）』中の諸篇に希臘系統の異教思潮の美を讃嘆し、更にその有名なる結論（コンクルジヨン）の一篇に、刹那々々の官能生活の意義を說き、一種の美的享樂主義を以て當時文壇の耳目を聳動した。恁くて既に動き始めたる新氣運に

促がされて起つたのが、即ち詩文に於てはオスカア・ワイルド、繪畫に於てはオオブレ・ビアヅレを以て代表者とする純然たる頽廢的世紀末（ファン・ドウ・シエクル）風の耽美主義（エツセテイシズム）であつた。（本書『わかき藝術家のむれ』の條參照）この一派の運動は其後かのワイルド入獄事件（一八九五年）によつて一頓挫を來したとは云へ、英國思想界の根柢に與へた激動は決して輕少なる者ではなかつた。

遠く源に溯れば、キイツやシエリイの昔から流れてゐた英國本來の敍情詩（リリシズム）的傾向に養はれ、また南歐伊太利の脈を承けたるラファエル前派の熱烈奔放の藝術に肥された沃土に、今新しく此頽唐（テカダンディズム）の傾向の種を播いたものは、即ち佛蘭西のボドレエルからヹルレイヌに至つて成熟した象徴派（シムボリスト）の詩文であつた。云ふまでもなく佛蘭西は近代のあらゆる新思潮の發祥地で、露西亞藝術の豪放痛烈なる態度と相呼應し相俟つて、常に全歐文藝思潮の根柢となる絶大の力を生んでゐる。英吉利のワイルド等が新文藝の運動も、要するにまた

この大陸思潮の輸入と影響とに他ならないので、ヸクトオリア朝の因襲傳說が根蒂から破壞せらるゝに至つたのは、全く此佛蘭西新思潮の勢力があつたからだ。だから耽美派の系統に屬する人々は、皆悉く、英吉利に生れたる佛蘭西人とも云ふべき風があつた。ワイルドは固より、ビアヅレも、アアテスト・ドオソンも、アアサア・サイモンズも、リチャアド・ル・ガリアンも皆おほかた、大陸の藝術の都巴里を以て精神上の故鄕とした人々であつた。從つて英國の頽唐派（デカダン）の藝術には、强く異邦趣味（エクゾテイク）が含まれてゐたのは當然の結果だ。

近頃の英國政界に愛蘭國民黨（アイリシユ、ナシヨナリスツ）の勢力めざましく、首領レドモンドの鼻息の荒いと同じく、かのイエイツを旗頭としたる愛蘭詩派（アイアランド）は、現今英國の劇壇や詩界の一方に侮り難き一大勢力をなしてゐる。が、之なども大陸殊に佛蘭西から來た象徵主義や神秘思想の感化が、たま〳〵ケルト人たる愛蘭人固有の神秘的傾向と相合して出來た結果であつて、大陸思潮との接近は此點に於

ても見られるのである。

頽廢（デカダンス）の時代は其半面に於てまた再生（ルネツサンス）の時代である。老いたる者の若きに返らむとする時代、古き力の廢れて新しき力の興らむとする時代である。人心の動搖思潮の混亂は、人々が如何にかして新生活に入らむとして、how to live の問題に何等かの解決を與ふべく努力しつゝある現象である。其國固有の思想が外來思潮の刺戟感化を受くる事最も大なる時は、常に恁かる時代に於てである。かういふ時期に於て英國に大陸の自然派文學が輸入せられた事は我日本に於ける同じ思想の影響と對比して極めて興味ある事であつた。即ちゴッスの批評が始めてイブセンを英國に紹介したのは千八百七十九年であつて、アアチャアの筆に成る英譯も之に次で續々上梓せられた。ヸゼッテリがゾラの自然主義の作品を英譯出版して遂に獄裏の人となり、ジョオヂ・ムウアが盛にゾラ張りの小説を書いて、當時まだ因襲の夢から覺めなかつた樂天

的の英人を驚かしたのも、皆この前後の事であつた。恁かる風潮に促がされて英國の文壇には、モオパッサンに似たるクラッカンソオプやフランク・ハリス等の短篇が出で、アァサア・モリソンは貧民窟(スラム)描寫で成功し、近頃は劇壇で名を成してゐるサマアセット・モウアムが『ラムベスのリザ』といふ工女の生活を描き、リチャアド・ホワイテイングが『ジョン街五番地』の名作に、自然主義の代表的作品を出したのも、皆この女王治世の末ごろであつた。

此自然主義輸入に關聯し、はやく大陸から侵入して英國の思想界に潜流浸潤してゐた社會主義が、遽然として勢を得るに至つた。殊にそれが著るしく文藝界にあらはれG.B.S.（即ちGeorge Bernard Shaw）はフエビアン協會の中心人物として活動し、自然主義の新作家また多く之に加盟し、當時の智的(ジユネス・)少壯階級(アンテレクチユエル)の大半は其會員であつた。今日に於てG.B.S.は云ふ迄もなく、アァノオド・ベネット、グランビル・バアカア、ゴルズウァアジイ、エチ・ジイ・ヱル

ス等新時代の諸作家が皆等しく社會改良家(ソオシアル、リフオオマア)であるのも怪むに足りない。

四

二十世紀の英國が女王朝中期(ミド、ヸクトオリアン)の樂天觀(オプテイミズム)を棄て、保守的道學先生の態度を一變したのは、おのづからなる時勢の推移なりとは云へ、以上述べた外來の大陸思潮を輸入した事が其最も有力な原因である事は疑を容れない。從つて此事實は著るしく文藝界に現はれて近頃の英國文壇に於ける外國文學の流行、殊に露西亞佛蘭西の戲曲小說の流行となつた。久しくアルマ・タデマの月並な繪畫を賞翫してゐた英吉利人が、近年グラフトンの展覽會に後期印象派の作を賞し、或はニジンスキイ等の露西亞舞踊を喜んだりするのを見ると、誰しも此國に於ける時潮の推移に驚かされるだらう。デイツケンズやサツカレに隨喜渇仰の涙をこぼしてゐた小說讀者は、今ドストエフスキイの深刻沈痛な

る作品に、近代思想の暗影を辿つてゐるではないか。『罪と罰』や『死人の家』の作者は、既に約三十年以前から英國に紹介されてゐて、而かもながく顧みられなかつたのが、此頃になつて急にすさまじき流行となつたのである。英國近時の出版界に、大陸殊に佛蘭西近代の名著の飜譯が如何に頻繁に出るかを見た人は、此頃の日本に於ける飜譯流行の現象と對比して、思想界の要求が那邊に在るかを知り得べきであらう。

この風潮は直に、劇に於てG.B.S.やゴルズワアシイの作物に反映されてゐるのは勿論のこと、小説に於てはH.G.(エチジイ)エルスとアアノオド・ベネツトとの二家の作物に最もよく現はれてゐる。このエルスとベネツトが、果して眞の藝術家として第一流の人であるかどうかは別問題として、とにかく英國近代の社會を活寫してゐる點に於ては、今から五六十年前のディツケンズと當時の英國社會との關係に髣髴たるものがある。エルス氏の健筆は殆ど毎年の新作に

世間の注意を集めてゐるが、近年の物では『新マキアヹリ』(一九一一年)に最もよく現代の世相を寫してゐる。是は主人公リチァアド・レミントンといふ政治家の生涯を自叙傳風に書いたもの、劍橋(ケンブリッヂ)大學を出てから後、代議士となり、最初は極端な社會主義の意見を抱持したのが、後には統一黨の方の關稅改革論者になつて了ふ迄の筋道を書いたものだ。その變遷の徑路は作者ヱルス其人の思想とは正反對の徑路を取つてゐるが、實は之によつて英國現代の政界を活寫し、作者が周圍の人物を諷罵した者である事は、一讀の後誰しも氣の付く點である。

またベ子ットの作では『一里塚(マイルストオンズ)』といふ劇が一昨年頃から英米兩國に演じられて、未曾有の大喝采を博した。是は「三代にわたれる芝居」と銘打つた通り、或る一家の人々が三つの時勢に對する關係を寫して、近代英國の時潮の遷移を描いたものである。即ち

第一には千八百六十年より………ビクトオリア朝中期

第二には千八百八十五年より………ビクトオリア朝後期

第三には千九百十二年より………現代

この三つの時代に於て、人々の結婚問題、貴族平民の社會階級問題、親子の關係などに對する思想が、如何に轉化して來たかを示したものだ。この第三幕即ち現代のところに、ムリエルといふ二十四歳のお轉婆娘が、結婚問題に就て母親に反抗し、戀人のリチャアドと一緒に加奈陀へ飛出さうとする。母親がどうしても許さぬと云へば、舊弊なことをおつしやい、そりや時代が違いますよといふ調子で、

「覺えてゐらつしやい、今は千九百十二年さいふ時代に居るんですよ。リチャアドさんには既う結婚の約束もしたんだから、わたしは結婚しますよ。「許されろ」も何もあつたものですか。」

なぞと氣焔を吐く。今度は、も少し物柔かに、やはり母親に向つて

『……私はあなたを snob（貴族崇拜病者）だとは云やしませんよ、そりやもう、どのみち幾何（いくら）かスノッブで無い人は無いんだから。しかしあなたは新思想（ニウスピリト）といふものが全然お解りなさらないのよ、お氣の毒ね。貴族なんて厄介な話は既うとつくに濟んで了つた事よ。』（以上『一里塚』第三幕、刊本九九頁）

ビクトオリア朝の因襲が打破せられてそこに現代の英國が新しく出來た事が、此生意氣な一少女の口をかりて云ひ現はされたのである。

なほ文學の外に、繪畫などに於ても、大陸ことに佛蘭西印象派の影響を受けて、所謂アカデミイ風の官僚藝術に反抗せむとするグラスゴウ派の諸家、たとへばガスリイ、ペプロオ、ブライドなどの輩出するあり、また『新英國藝術倶樂部（ニウ、イングリシユ、アアト、クラブ）』一派の新畫風が俄に勢を得て、かのボインタアやアルマ・タデマ等の舊派に反抗したのも、要するに大陸との接近に基く時潮の推移を示す者に他ならぬであらう。

外交上にも思想上にも、孤立（アイソレエシヨン）の態度は、たとひそれがグロオリアスであ

らうともスプレンデイドであらうとも、到底永續きのしない不自然の態度である。殊に近代思潮の大勢は、世界文明國の一部に、斷じて思想上の鎖國主義を許さない事を注意しなければならぬ。かの世上動もすれば保守頑冥の論に左袒せんとする人々の如きは、かつて世界最大の保守國だと見做されてゐた英國の僞くの如き近狀に、深く鑑みる所ある可きだらうと思ふ。（大正四年二月『太陽』所載）

ケルト文藝復興概觀

一　民族の覺醒

前世紀後半のヰクトウリア女王朝の英國のみを知つて、あの常識的な道學風先生の、妥協調和を重んじた中庸道(ヰア、メディア)をのみ行かうとする思想傾向を見て、あれが英國の眞相だらうと勘違ひをした人、或は、日本文壇の一部に在りがちなる氣早なまた頗る聰明な批評家のやうに、英國は大陸近代の思潮に獨り起(た)ち遲れて、今もなほディッケンズの小說か、さもなくばテニソンの詩歌をのみ難有がる保守頑冥の國だらうと早合點をした人たちは、世紀末から現代へかけて殆ど目まぐるしいやうな變化をつゞけて、大陸近代の思想と同一方面に向つて更に勢を加へて驀進しつゝ、思想上にも實行上にも殆ど面目を一新した今日の英國の眞相を見るならば、今更のやうに驚駭の眼を瞠る事であらう。

自然主義や社會主義の思想、次では神祕象徵主義の文藝を輸入し、或はいま後印象派や未來派の繪畫をさへ盛に歡迎しつゝある現代英國の此急激にして突飛なる變化は、如何にもかのヸクトウリア朝以來の因襲傳說が崩壞したる必然の結果には相違ない。また、不思議に保守的一面と共に急進的の他の半面を有し、實際的なると共に極めて夢想的なる英國民の特質が、こゝ思潮の轉換期(クライマクテリク)に際會して、ひときは色鮮かに現はれた者であるとも言はれ得るだらう。

しかし此急激な變化の裏面には、政治上、思想上、或はまた藝術の上に於て、かの愛蘭やウエイルスを根據としたケルト人種が民族として覺醒したといふ一大事實の存する事に、特に注意を拂はねばならぬ。在來の因襲や權威に反抗する事によつて、新しき生活に入らんと努力しつゝ、ある今代の英國に於て、この新しき時代思潮を代表せるふたりの人物が、

際(さい)だつて吾々の注意を惹いてゐる。それは政治界に於て、貴族富豪の勢力を壓迫せる中心人物たるロイド・ジョオヂと、文壇に於ては、先づイブセン一流の思想と藝術を高調して、英人の僞善的態度を罵倒し、社會主義的革新策を絕叫したるバアナアド・ショウその人である。前者は生れはマンチエスタアであるが、ウエイルスのカアテヴォン選出の代議士だから、ケルトには特に緣が深い。後者は言ふまでもなく愛蘭の人、二十歳までダブリンで育つた男である。恁う考へて來ると、あの佛蘭西の頹廢的傾向を英國に移植して耽美派運動(エッセティク・ムウヴメント)の中心となつた、オスカア・ワイルドも、やはり愛蘭生れのケルト系統の人であつた。少しく誇張した言ひかたをすれば、英國で近頃の新思潮に關係ある人物は、大抵みなケルト人の國愛蘭の出身者だと云ても差支はない。

元來愛蘭人と云ふのは、昔英人のために放逐されたブリトン人の子孫で、ケルト民族に屬する舊敎徒である。ところが十七世紀の中頃に新敎徒たる英

人に反抗し、クロムエルのために征服されて了つた。それ以來英人は愛蘭人を見ること奴隷の如く、愛蘭人は小作人として英吉利の貴族たる大地主の利益を謀るために生存するが如き有樣であつた。それが近代になつてから佛蘭西革命以來の自由民權の思想に動かされ、政治上に於ける自由解放を要求してやまない樣になつた。近頃の政治史上の大問題である愛蘭(アイリシユ)自治案(ホオム、ルウル)も之から來たので、虞翁(グラドストン)以來、今の歐洲戰亂爆發の前まで、是が英國政界の難問題の一つであつた。實際いまの英國內政の上に於て、首領レドモンドを中心とした愛蘭國民黨(アイリシユ、ナシヨナリスツ)の勢力は非常なもので、政府黨たる自由黨と、在野黨たる統一黨(ユニオニスト)との間に介在して、英國政界を左右するに足る勢力を有つてゐる事も、畢竟これケルト民族が覺醒の結果に他ならない。文壇に於てショオは詩人イエツの需に應じて、千九百〇四年愛蘭文藝座に於て演ずべく、『ジョン・ブルの別の島』(即ち愛蘭を云ふ)といふ一篇の戲曲を草して、愛蘭自治問題

のために萬丈の氣を吐いた。

一民族の覺醒は、それが政治上に現はれると共に、必ずやまた文學藝術の上にも現はれて居なければならぬ。

二　詩的なる民族性

ケルト人種は、アングロ・サクソンなどの實際的なのとは反對に、極めて詩的な空想的な、或は多情多感とも云ふべき性質を有つてゐる。殊に其思想の一面には、本來甚しく神祕的な傾向のある事も著るしい特色である。それは、この民族に固有な傳說民謠の類が、如何に歐洲一般の文藝のために豐富なる詩的材料を供給したかといふ事によつて明かに證明されると思ふ。たとへば前世紀の浪漫派文藝の上に絕大の影響を與へた『オシアン』の歌も、またワグネル其他近代の歐洲文藝の題材となつたアアサア王の傳說も、それらは皆此

ケルト民族の富贍な想像力と纖細微妙(デリケエト)な感情性とが、世界文學の上に致した貢献に他ならないのである。

近世に於てケルト思想の美を説いた第一の人は、佛蘭西近代の名文家『基督傳』の著者ルナンであつた。次いでは英吉利のマシウ・アアノオドの『ケルト文學の研究』(千八百六十七年出版)が、最も多く世人の注意を此方面に促がした。アアノオドは英國の詩歌がケルト思想に負ふ所いかに大なるかを説いて三つの點を擧げた。即ち第一には「スタイル」、第二には哀愁(メランコリ)、第三には"natural magic"これらの三點に於てケルト思想の流れは英國の文藝に絶大の感化を與へてゐる事を説いた。

私はいま便宜上、アアノオドが列擧したこの三つの特徴を土臺にして、ケルト思想の美に關する自分の所見を簡單に述べよう。

第一、第一の「スタイル」とは詩文の風格である、韻致である。また風韻である。す

べてのすぐれたる藝術には、内容と外形との渾然たる一致調和がなければならぬ。ケルトの文學には、その優婉の思想を盛るべく、また纖細の情趣を傳ふべく、それに相應した外形があつた、それが即ちアアノオドの所謂「スタイル」である。希臘羅馬の詩文は言ふ迄もなく、ダンテや沙翁やミルトンにも皆この「スタイル」が具はつてゐた。獨り獨逸文學は之を缺いで、大詩人ゲエテと雖も此點に於ては少しも誇るべき者を有たなかつたとアアノオドは云つてゐる。とにかく英文學に「スタイル」といふもの丶出來たのは、ケルト思想の混入に負ふところ尠からざる者あるは事實だ。

第二には哀愁、または鬱憂、これがケルト民族性の大なる特徴である。讀者がよく知らる丶かのワイルドの『獄中記(デ、プロファンディス)』の中にも、ケルトの傳説では、人生が『涙の霧を通ほして』見られ、また人の一生が散る花の一生のやうに觀じられるなどいふ句があつたやうに思ふが、確かにこの沈鬱な情調、悲哀鬱

憂の分子は、ケルト文學の重要なる一面である。しかしこの悲哀といふ中にも自から二種あつて、スカンディナヸアとか露西亞あたりの人のは寧ろ態度の上の悲哀で、鬱憂といふ中にも哲學（フィーロソフィカル）的な或は理智的な分子が强いが、ケルト人のは寧ろ情調の悲哀である、空想的詩歌的の茫漠として捕捉すべからざる哀愁である。是は日本の或る時代の文學が「物のあはれ」と云つたあの心持と稍々相似たところがあるので、人生を果敢ない夢や或は朝露のやうに觀じた人の胸の中を絕えず去來する一種の暗愁である。わが英文學の師ラフカディオ・ヘルン先生の或る書物に、嘗てこの「物のあはれ」といふ言葉を英語に移すべき適當の語が無いといふので、ahness of things と譯されたのを見たが、ケルト人の鬱憂もやはり恁ういふ種類のものかと私には思はれる。さきに云つたルナンの論文には下のやうに書いてある、『かれ等は勝利を歌ふよりは、多く敗殘を嘆く。その歷史は唯だ一つの長い慟哭の聲である。いつも

流謫を想はせ、海のあなたへの逃亡を想はせる。時としては愉快に見ゆる事はあつても、微笑のかげには間もなく涙の露が閃めく。かの不思議にも人生のすがたを忘れ運命を忘却したる快樂といふ事を、かれらは全く知らないのである。その歡樂の歌は、やがてまた悲歌となつて終つてゐる。』

第三に、ケルト人の自然觀には、一種の神祕的な靈趣とも云ふべきものが見られる。アアノオドが所謂 natural magic の意も亦この點にあるので、ケルト人は森羅萬象すべてを觀じてそこに神を見出す處の汎神論（パンセイズム）の傾向を有つてゐる。行く雲、流るゝ水、また一草一木の末に至るまで、自然の風物は皆悉く不可思議な生命と個性とを具へてゐると云ふやうに考へる。つまり古代人そのまゝの自然崇拜（ネエチユア、ウアシツプ）のこゝろを、今もなほ失つてゐないのである。愛蘭は紀元五世紀の頃に、聖（セント）パトリツクによつて基督教化されたのであるが、其以前はかのドルウイツド教といふ、一種の魔法のやうな事をやつたり、神木

を拜んだりする原始宗敎の國であつた。靈魂の輪廻轉生を信じ、日月星辰を崇拜した其古代宗敎の遺風を、かれらは今もなほどこか胸の奧の奧に祕めてゐる。天地萬物すべての上に美しい不思議な影を附けて觀ること、英語でいふ "glamour" が即ちケルト思想の美をなしてゐるのである。たとへば櫻草の花を見ても「可愛い黄金の人たち」'dear golden folk' と云ひ、山川草木すべてを「不思議な同胞」'the mystical brotherhood' と呼ぶやうな類である。だからケルト人の物語には、「エルフィン」とか「ゴブリン」とか「フエアリイ」とかいふ變化や妖精の類の非常に多いのは勿論、そのほか例へば、死人があると戸の所に來て哭く Banshee といふ魔物だの、首無しの騎馬武者 Dullahan といふ化物だの、色んなものが數へ切れないほど澤山に出てくる。また大きい湖水を見ても、その底には市街が沈んでゐるといふやうな事を考へたり、山にも谿にも皆化性の者が住まつてゐると實際信じたりしてゐる。前世紀の

愛蘭の詩人井リアム●アリンガムの『フエアリイズ』と云ふ詩に、

"Up the airy mountain,
Down the rushy glen,
We daren't go a-hunting
For fear of little men."

（山越えて、谷越えて、獵(かり)には行くまい、小鬼がこはい。）

といふ句があるが、之なぞも實際さう信じてゐるのである。そのほかイエエツの詩なぞによくある飛行自在の天魔シイ Sidhe だの、不老不死の國或は常若の國 Tir-nan-ge などの實在を、かれらは信じてゐるのである。

ケルト思想の中心には、だから一種の神祕說(ミスティシズム)がある。ケルト人には夢の世界と現實の世界が全く一緒にごつちやになつてゐる。目に見えるすべての物は、目に見えざる或物の象徴(シムボル)に過ぎないと考へて、絕えず其の見えざる何物

かにあこがれる。ルナンの言葉で云へば、『知られざる或物を求め、とこしへに願望を離れて逃れ行く或る物を求めてやまざる心、これがケルトの詩的生命の根源である。……この民族は無窮にあこがれ、それを渇望し、あらゆる犧牲を拂つて、墓のかなたにも、地獄のかなたにさへも、それを求めてゐる。』また現代の詩人イエッツが『詩は夢である』と云つた言葉も、やがてこのケルト文學の特徴を言ひあらはしてゐるのであらう。

ケルト思想のこの傾向は、前世紀の末ごろ、大陸、殊に佛蘭西に於て自然主義の唯物思想に反抗して起つた神秘象徴の文學と相結ばれた。マラルメやヹルレイヌ等の詩歌、或はマアテルリンクの神秘哲學や戲曲と相合して、そこに英國文壇の一方には愛蘭文學の新聲が起つた。A・E・（本名はジオヂ・ラツセル）の汎神論的（パンセイスティク）とでも云ふべき風の詩や、イエッツの神秘的な戲曲や詩篇が急に文壇の視聽を聳つるに至つた事も、畢竟このケルト固有の思想が、世

紀末の歐洲思想界に著るしくなつた「靈の覺醒」といふ大勢にうまく投合した結果に他ならないのである。

三　民族藝術また鄕土藝術

國民に自覺を生ずるとき、また民族に覺醒があるとき、そこに潑溂たる生命の力に滿ちた新興藝術があらはれる。政治上に於て盛に地方的運動が起ると共に、國民の熱情は更に、際立つて地方色（ロオカルカラア）の鮮明なる鄕土藝術となつて外に發するのも、恁かる時機に於てゞある。

元來この鄕土藝術（ハイマアトクンスト）といふ言葉は、獨逸の文學に用ゐられる名稱であるが、近代の千篇一律な物質文明に支配される都會生活を離れて、田園自然の儘なる鄕土の特色ある生活をなつかしむ藝術といふ意味に於ては、是はいづれの國の新文藝にも見出さるべき性質のもので、輓近に於けるケルト人種の覺醒

が生み出した文藝復興(ルネッサンス)の現象の如き、最も著るしく此郷土藝術の本質を發揮したものであらうと思ふ。人工的な近代の都會生活には、民族の個性といふものが全く現はれてゐない、地方的特色といふものの少しも出てゐない或意味に於て單調な生活である。さういふ生活に飽き果てた人は自然の結果として、まだ野性を脫しない自然生活を慕うて、所謂「土のにほひ」Erdgeruch をなつかしみ、佛蘭西人の言ふ「泥土を懷かしむ望郷の心」la nostalgie de la boue を生ずるのである。唯だそれは、昔から云ふやうな簡單な田園趣味の文藝ではなくして、強く鮮かな地方色(ロオカル、カラア)を發揮し、民族固有の特色を重んじた藝術を謂ふのである。この意味に於て、近頃英文學の一隅にあらはれたケルト一派の新興文藝は、郷土藝術たると共に、また民族藝術(スタンメス、クンスト)たるの名に最もよく相當するものだらうと私は信じてゐる。

このケルト民族の新藝術は先づ第一に愛蘭に現はれた。かの千八百九十一

年といふ年に、愛蘭自治問題の驍將であり、「無冠の王」と呼ばれたパアネルが死んだ。そこで今まで政治問題に集注されてゐた國民の自覺と元氣とは、この頃から民心の更に奥深く潜める內生活の要求に向けられた。情緒生活、心靈生活の方面に、かれ等の注意は促がされた。英國風（イングリシュ）の趣味を排斥すること即ち de-anglicisation によつて、愛蘭固有の文學や傳說を貴び、昔のゲエリツク語を復活しようとする企てが起された。愛蘭の英雄時代（ヘロイク、エイヂ）、即ちクフウリン Cuchulain が國を治め、勇將フイン Finn (或は Fingal, Find) か武功を樹てた民族傳說の時代を回想し研究することによつて、鄕土の特色を明かにしようとする努力も始められた。

文藝に於ける此新運動の旗頭は、詩人ヰリアム・バトラア・イエエツである。かれが最初に世に認められた詩集で愛蘭の古傳說を材とした神祕な作『ユシインの漂遊』"The Wanderings of Oisin and Other Poems" (「オイシン」は「ユシイン」と發音する。)

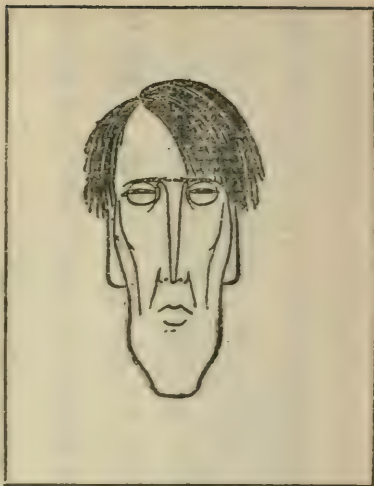
昔の「オシアン」と同じものである。）が出たのは、千九百八十九年であるから、文藝史上先づこの年を以て愛蘭新派文學復興の時と見なして可からうと思ふ。次で千八百九十一年にイエツは首府ダブリンに國民文學會を設け、後二年更に愛蘭文學會が倫敦に於て發會式を擧げた。

イエツによつて導かれたこの新氣運に乘じて、今や愛蘭には文人が雲の如くに起つた。或る英吉利の評家は近頃の愛蘭を目して鳥の巣だと云つたが、神來の靈興に觸れて歌ふ人の俄に多く集まつたといふ意である。文筆の士は單に男子ばかりでなく、女詩人にもすぐれた人が甚だ多い。これ等新派文士の名は、今私が記憶してゐるだけを列擧しても、殆ど三十人に餘るほどである。たゞ徒に片假名の固有名詞を多く陳列するの煩を避けて、今は省略する事にした。

ケルト人の第二の根據地はウエイルスである。しかし此方では民族の覺醒

は寧ろ主として政治運動の方面に現はれ、文藝の上には何等これと云つて名指す程の運動を見なかつた。唯だ先づアアチスト・リイズの『ウエイルス歌集』を以て最も注目すべき物と云ふべきであらう。日本によく知られてゐるアアサア・シモンズもウエイルス系統の人であり、また小説家のメレデイスも父母が此地方のケルトの血を承けてゐるといふので、ウエイルス文學に縁があるやうに説く人もあるが、シモンズやメレデイスの藝術は決して恁ういふ民族的地方的の特異な色を帶びたものではなく、寧ろひろく英文學といふ全體の上から見らるべき性質の者だと思ふ。

第三には蘇蘭に起つた新文學がある。それはエデインバラから出た『常盤』'The Evergreen' といふ機關雜誌を中心としたもので、この草紙は今から十八年ほど前に既に廢刊した。この雜誌は圖案插畫等すべてに奇抜なケルト一流の意匠を凝らしたもの、この雜誌の寄書家のうちでケルト文藝復興の新

W. B. YEATS.

運動のため忘れられない大切な人は、フイオナ・マクラウドといふ女の名を用ゐた文士である。本當は井リアム・シャアプといふ男子の小説家批評家であるが詩(時には小説の方にも)にはいつも此女名前を署して、文壇では全く男女別人であると思はれてゐた。今から十年ほど前に死んだ時初めて同一人であつた事がわかつて人を驚かした。この人の作品は純粋なケルトの神祕思想を書いたもので、殊にその劇や短篇小説の類を見ると、全くマアテルリンクなどと同じ脈の物である事がよく解かる。若い時からロゼツテイと親交があつて、其方のラファエル前派からの感化も加はつてゐる。

しかし此蘇蘭（スコトランド）の方で、特にケルトの郷土藝術の特色を發揮してゐるのは、小說界に於て Kail Yard School と呼ばれてゐる一派の作品である。ケエル・ヤアドといふのは菜園のことで、ケエルといふ言葉は獨逸語の Kohl と同じくきやべつのやうな野菜を云ふのだ。特に蘇蘭（スコトランド）田園の農民生活を描き、地方（ロオ）色（カル・カラア）の特に鮮明な小說であるから此名がある。先づ、死んだ人では「イアン・マクラレン」の作物を第一として、現存の大家ではバリイの物がこの一派の最も代表的なものである。かの佛蘭西のモオパッサンがノオマンデイ地方の俗語を寫し、獨乙のハウプトマンがシユレジエンの方言を用ゐ、ハアデイがウエッセクス地方の方言を用ゐて、よくその地方特有の空氣と色調を出したのと同じく、この蘇蘭（スコトランド）一派の小說家は、極端にあの邊の田舍言葉を使つて小說を書くのだから、私どもが字引を繰つて見ても、解らないやうな言葉がいくらもある。

以上三つのうちで、最も重要なのは、云ふまでもなく愛蘭にあらはれたケルトの新文學であるから、それに就て極めて簡單に述べよう。

四 愛蘭の新文學

愛蘭新派の文學で、先づ第一に批評論文なぞの方は割合に振はない。才人行く處として可ならざる無きイエツのほかには、小説家のジオジ・ムウアや「ジョン・エグリントン」(本名はマギイ)などが草する評論の類に、時々文壇の視聽を聳てるものがあるばかりだ。情緒と空想とに、すぐれて美しい長所を有つてゐるケルトの人には、評論といふやうな事は餘り得意ではないのであらう。

第二に小説では、愛蘭は昔からふざけた滑稽趣味のものが可なりに多かつた。古いところで、チヤアルズ・レヴアとかサミユエル・ラウアの作に就ては

大抵の文學史の類に評說があるから、私が今更こゝに云ふ必要もなからう。唯だ近頃の覺醒してからの愛蘭人の氣分は、ひどく緊張し興奮してゐるから、不眞面目な道化た種類の文學を喜ばない。その趣味は寧ろ嚴肅な眞劍な悲劇的內觀の方面に向つてゐると云つて可からう。さて恁ういふ風に銳い自覺が起つて情熱が興奮狀態に在るとき、新しい美感と靈的向上の精神が目ざめたとき、この內生活の表現は、色々の文學のうちで先づ抒情詩といふ形をとるのが最も自然である。散文でならば短篇小說か或は一幕物の類で、所謂そつがなくて無駄のない引締つた形の文學でなければならぬ。だら〳〵と長たらしい動もすればだれ氣味になりがちな長篇小說などは、到底此緊張した氣分にそぐはないからである。愛蘭の新文學が詩歌、殊に抒情詩の類に豐富なと共に、グレゴリイ夫人やイエツなどの一幕物に秀拔の作品の多いのも、短篇小說に於てはゼエン・バアロウ女史やジョオヂ・ムウアを始めとして名家の甚

だ多い事も、全く以上云ふやうな原因に基くのであらう。

しかし最近に至つてはこの緊張した氣分、引締つた內生活にも、多少のにこり、が出來たのか、近頃は徐々に筋(プロット)を展開して行くやうなのんびりした種類の文藝も續々と現はれるらしい。たとへばこの頃愛蘭の代表作家として英國文壇の注目を集めてゐるジョオヂ・バアミンガム（本名はハチイといふ牧師）の長篇小說などは其一例で、此人の書く物は大抵愛蘭西海岸の寒村の風俗人情を書いたもので、やはりシングの劇などと同じ題材を用ゐたものだ。唯だ此作者の『ハイアシンス』とか『不幸(バッド)なる時代(タイムス)』とか云ふ作は傑作には相異なからうが、あまりに宗教上政治上の問題が主になつてゐるため、愛蘭や英吉利の人に興味ある丈けそれだけ私ども日本人などには面白くない感じがある。

第三には飜譯事業、是はわかりにくい愛蘭の古語で書かれた物語の類を近代英語に移し或は口碑傳說を蒐集して、鄉土の特色を明かにしようとする者

である。此事業はダグラス・ハイドが主になつて自分で the Gaelic League といふ團體を組織し、愛蘭固有の言語文學を保存しようとしてゐる。

ハイドは詩人として勿論不朽の名ある人ではあるが、別に其著『愛蘭文學史』にあらはれた樣な研究で偉大な功績を遺してゐる。なほこの方面の事業で特筆大書さるべきものには、グレゴリ夫人が極めて詩的な幽婉な散文を以て昔の愛蘭說話を書いた二卷の物語集がある。是はアアサア王傳說に於けるマロリイの如く、英文學のあらん限り不朽の名著である。即ち『ミユルテ國のクフウリン王物語』"Cuchulain of Muirtemne"（一九〇二年）と『神々と戰士』"Gods and Fighting Men" といふ二卷である。

第四は最も大切な詩歌、即ち愛蘭思想の特色たる神祕象徵風の抒情詩や、古い物語を材料にした叙事詩の類があるが、之を詳說する爲めには別に長論文を要するから今は全く省畧する事にした。殆ど二十人に近い新詩人の各々

に就てその作品を評隲する事は、到底この雜誌の紙幅が許さない。そこで最後に第五として、劇に就て一言してこの簡單な概説を終らう。

五　愛蘭文藝座

いろ／＼の文藝のうちでも劇は、他の抒情詩などのやうに唯だ少數の高級趣味の人々の鑑賞をのみ待つといふ譯には行かない。勢ひ多數の觀客といふ平俗階級を相手にする民衆藝術（デモクラテイク、アアト）となるのは、劇そのもの、性質上自然の結果だ。そのため、動もすれば凡俗趣味に媚び、藝術の圏外に逸して、ひたすら入りの多きをのみ望む商賣本位（コムマアシアリズム）に墮して了ふ。殊に十九世紀の英國の演劇に至つては、全く藝術として無價値なる、殆ど寄席藝人の遊戯に過ぎなかつた者だ。當時の英國は、劇に於ては、何と云つても、獨逸や佛蘭西の大陸諸國に比して遙に遜色があつた。之を革新して、よく世紀末の英國に近代藝術

としての演劇を興したものは、愛蘭人としては、ショウやワイルドがある。しかし劇壇のこの二大天才が盡した所は、愛蘭といふ一地方、一郷土の藝術の爲ではなくて、寧ろ英國——否な歐洲全體の劇道のためであつた。純粹の郷土藝術としての愛蘭劇を起して、近代劇の史上に特筆大書すべき功績を遺したものは、詩人イエッによつて創められたる愛蘭文藝座（アイリッシュ、リテラリ、シアタア）である。

この新劇團の目的は、云ふまでもなく、思想上藝術上に意味ある演劇を起し、特に愛蘭特有の氣分空氣（アトモスフィア）を出し地方色（ロオカルカラア）を鮮明ならしめんが爲めに、愛蘭農民の純朴簡素の生活を寫し、口碑傳說の類を材料として用ゐると共に、また特殊なる演出法を用ゐた。最初イエッと共に此愛蘭文藝座を創立したものは、グレゴリ夫人とエドワアド・マアテインであつたが、後にジョオヂ・ムウアも之に加はつて、千八百九十九年五月八日ダブリンに於て最初の興行をやつた。

一代の新氣運に促がされ、之に乘じて起つたこの劇團は、藝術上にもまた物質上にも、忽ちにして偉大なる成功を收めた。この劇團は後二年にして一先づ解散し、改めて千九百〇三年に愛蘭國民劇協會(アイリツシユ・ナシヨナル・シアツア・ソサイエテ)として文藝座の事業を繼いだ。最初設立の際には資金わづかに四十磅で始めたこの劇團は、漸次發達して經濟上にも餘裕を生じ、倫敦は勿論、遠く米國にも興行して、非常の喝采を博した。それといふのも一座の俳優、殊に女優としてはサラ・オルグツド、男優ではアアサア・シンクレアなどが、眞の藝術に對する熱誠な努力がこの功果を致したのであつた。

愛蘭劇の特色は、要するにその自然な、沒技巧的な點にあるので、藝術上に「自然にかへれ」といふ言葉の通りを行かうとしたものだ。在來の劇が餘りに洗錬された技巧に滿ちて、全く自然を逸してゐるのに反抗しようとしたのである。昔からの舞臺上の因襲や、或は筋や場面の變化によつてつくられ

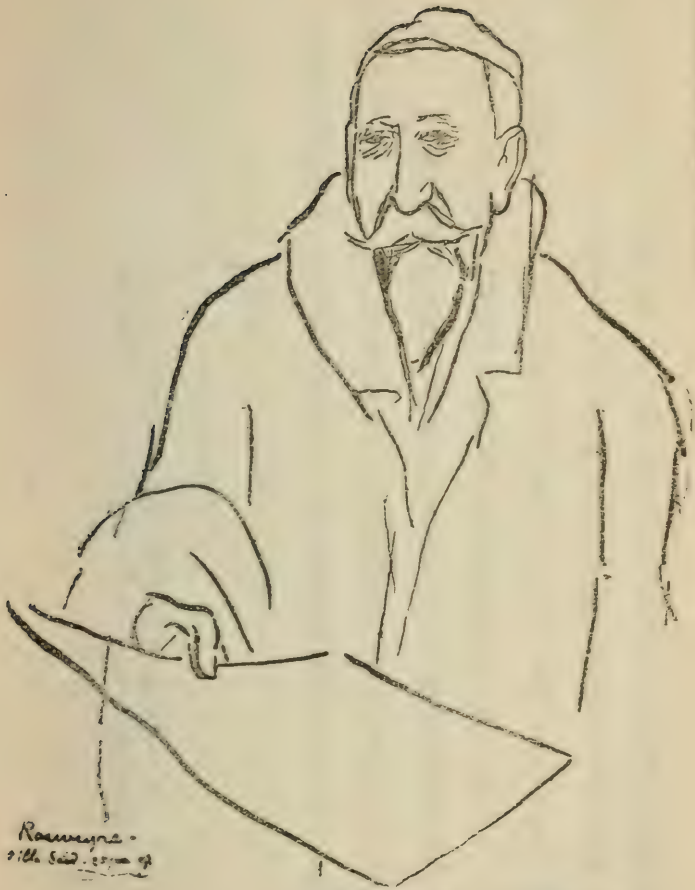
る興味を一掃してしまつて、たゞもう有の儘に「人生の斷片」を觀客の前に出さうとした。その爲めには誇張した表情法や言語を棄て、日常談話のやうな芝居をやつた。そしてこの自然を重んずるといふ點に於ては、殆ど現代文明の風に觸れて居ない愛蘭の寒村僻地の、所謂「郷土」生活や、或はまた古來のケルト傳説の類を題材として用ゐたことが非常な成功であつた。そして之等に交ゆるに、マアテルリンクやストリンドベルグなどの大陸劇を以てし、或は愛蘭の作者エドワアド・マアテインやジヨオヂ・ムウアやヘドライク・コラムなどの近代劇を上場して、ほゞ獨佛の自由劇場と同一の方法を以て演出したのであつた。（大正四年一月『文章世界』所載）

アナトオル、フランス

この一篇は、ブランデスの著『アナトオル・フランス傳』を紹介せむとて、數年前『讀賣新聞』に連載したものである。

一

近代の文學には、徒に眞率を名として實は蕪雜醜陋の文字を聯ねる者多きに堪へぬが、獨り拉甸民族の詩文は確に獨露の趣味と反して、今もなほ昔ながらに、都人が高雅華麗の風を失つてゐない。現に英文學の如きは、其古今を通じて之が感化に輔育せられたる事最も著るしきものである。

同じ拉甸民族のなかでも常に西歐思想の急先鋒たる佛人には、すぐれた特性が多い。うちにも著るしいのは其滑稽諷刺の機才である。今のアナトオル・フランス氏の如き即ち最もよく此一面を代表し得た人であらう。淵博の學殖

ANATOLE FRANCE
Rouveyre, Carcasses Divines

に加ふるに縦横の才を以てし、輕快にしてしかも精緻なる筆のあとには、一語一句の末にも無限の味がある、奥行がある。破顏微笑の裏には骨をも刺す鋭い諷誡が潜んでゐる。其作に見はれたる「アテイカの鹽」こそは眞に近代文藝の異彩だ。氏が一時歐洲の文壇に於て、大膽なる人生の批評家として、トルストイ伯と盛名を競うた所以は、必ずしも識見群を拔くが故のみではあるまい。

此頃氏の盛名は遙にわが絶東の文壇にも喧傳せられ、又其著書四五種の英譯本が、尠からず讀書界に歡迎せらるると聞くのはまことに嬉しい。若し眞に此人の作品が味はれ、萬一わが文壇にも移植せらるゝの日あらば、日本文學のため眞に賀すべきである。

曩にハイネマン社の『現代文豪』叢書中の一卷として、フランス氏の評傳が出た。著者は評壇に名高きかのブランデス氏、沙翁もイブセンも十九世紀文

學も、ひとたび此評家の筆に上ぼされては、めざましい光彩を添へた觀があつたが、今度新に得た此一卷も、勿論こちたき主義論や空漠たる人生論の類では無く、巧にフランス其人のおもかげを髣髴し來つて、作物の品隲にも深い用意が見られる。決して枯淡無味の繇文字ではない。自分が此頃讀んだ評論書のなかでは最も會心の書の一であつた。近頃盛にフランス氏を持囃せる英國文壇も亦た、新に丁抹の評家が此明快暢達なる論述を得て之を歡迎する事であらう。今此一冊より何人にも興味ありと思はれる數節を採つて次に抄錄しよう。

『此女は四人の夫の寡婦であつた、恐ろしい女だ。戀といふ事の外は、何事にでも嫌疑をうけてゐる。――それなればこそ尊敬せられてもゐるのだ』。然んな事を書きさうな人は今の世にひとりしきや居ない。社會は婦人に向つて、愛情以外の事ならば何でも容赦するといふ事實を、冷評半分に言つたのだ。

眞綿で首をしめる筆法だ概して誰の作を見ても、毎頁必ず其人でなければ惡んな事は書くまいと思はれるやうな文句が、少くとも一つ位は出て來る。

フランス氏のやうに鋭い反語(アイロニイ)を使ふ人は稀だ。氏はいふ、

『シセロは、政治上に於て、最も激烈な種類の温和派だ。』

富者が貧人の爲に作り、男子が女子のために作つた法律よりは、先づ平等といふ事の方がさきだ、などといふやかましい論が出る。すると下のやうな事を云ひさうな人は唯の一人しきや居まい。『橋の下で眠つたり、街で食を乞ふたり、麵麭を盗む事などは、貧者にも富者にも併せて之を禁ずる。是が法律の立派な平等である』

この唯だの一人こそはアナトオル・フランス氏である。その文章で目ざましい特色は反語(アイロニイ)だが、どう見ても是はルナンの衣鉢をついだ者だ。併し同じ反語(アイロ)でも兩者の種類は非常に異つてゐる。ルナンの方は歷史家としても批評家

としても、常におのれ自ら語つてゐる。たとひ彼が哲學的戯曲のうちに假作の人物の口をかりても、ルナンその人が直接に讀者の目につく。ところがフランス氏の反語（アイロニイ）に至つては、全くナイイヴな性質の裏に隱れて見えない。ルナンのはほんの假裝だが、フランス氏に至ては全く自己といふ者を變じて仕舞ふ。時には自己と正反對の見地からすらも書く。そしてよく思ふ所を吾人に傳へるのだ。此點は全く他に類例を見ない。

氏が作中の性格で最も生氣躍動せる者でも、或はまた氏の文章でも、皆このナイイヴだといふ點に著るしい特色がある。素朴で無邪氣で、肉的な無邪氣な處に非常な面白味がある。そして其裏面には極めて鋭い諷刺が藏めてある。たとへば其作『ベルジエレエ』のなかに出て來るリケエといふ飼犬などは、最も巧く描き出されたものだが、其一節に、此犬が自分の『思想』を述べた所がある。いかにも巧く犬の無邪氣さと、簡潔な反語（アイロニイ）とを結合したものだ。い

ま其中二三を引用する。

『人でも動物でも石でも、近寄るに從つて大きくなる。そして全く接するに及んで非常に巨大なものになる。が吾輩はさうではない、どこに居ても同じ大きさだ。』

『吾輩は喋舌りたい時に喋舌る。吾輩の主人の口からも意味のあるらしい音が出る。併し其意味は吾輩の聲で言ひあらはすのよりは不明瞭だ。吾輩の聲で發するものは皆何かの意味があるが、主人の口からは多くわけの分らぬ音響が出る。』

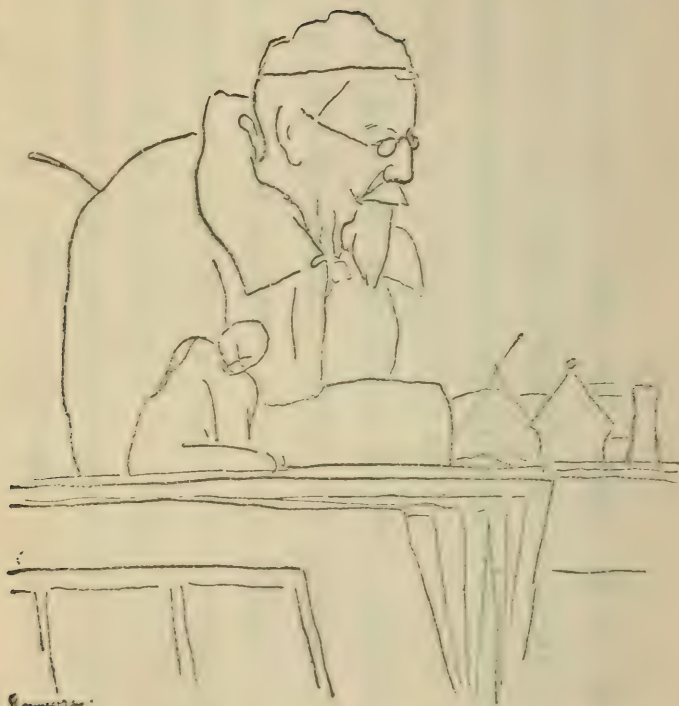
『街には馬が曳いて行く車がある。恐るべき奴だ。又ぼッぼとゐらい音をさせて獨りで動く車がある。這奴はまた惡性極まる奴だ。』

『それを爲たから或者が打たれると云ふやうな行爲は惡い行爲だ。そのために可愛がられ食物でも貰へるやうな行爲ならば、善良な行爲だ。』

こんな調子でフランス氏の反語(アイロニイ)は、常に他の何物かに蔽はれて、其裏面に潜んでゐる。

作家としてフランス氏は、人を動かす二大要素を具へてゐる。第一は實直な事である。爲に作中の性格が操人形(あやつり)風の造り物にならず、人物が皆作者を離れ、作者に煩はされずに、勝手次第に躍動してゐる。そしてナイイヴな處があるため、夫れが極めて自然に出來るのだ。第二の要素はそのアアトに在る。フランス氏が呼んで佛國作家の三大性質だと言つてゐる點は、氏自らが之を具へてゐる。即ち先づ第一、明亮、第二に明亮、第三に、そして最後に、また明亮。しかし是は氏のアアトに於ける一の根本的性質に過ぎない。また氏の筆致には常に控へ目な處がある。小説家としてのゾラを氏が厭うたのも、畢竟この適度といふ事を全く缺いだ點にあつた。

フランス氏は寧ろ情熱を缺いだ人だ、作中には隨分肉感的な處はあつても、

アナトオル、フランス

Rouveyre.

ANATOLE FRANCE
Rouveyre, Carcasses Divines

それは寧ろ智的な分子に壓せられてゐる氣味がある、大體から見て哲學的傾向の人だ。感情よりは觀念の方が勝つてゐるのだから、あらゆる事物、――單に人事のみならず、自然その者に對しても批評を下すのだ。其一例として、氏が自然を攻撃した面白い例がある。夫れはかうだ。自然は「青春」といふものを餘り早く人間に與へて仕舞ふ だからそれから以後の生は、此「青春」といふもの無くして送らねばならぬ、是が甚だ不都合な次第で、「青春」はまさに人生の最高極致として、最後に來るべき筈のものだ。恰かも虫が幼虫や繭の時代を經て後、はじめて蝴蝶の美しい時代に入ると同じだ。そして是が發達の最高最終の處だから。それから直ぐに死といふ者の來るのが當然な筈だ。實際かくいふフランス氏其人の生涯がまた此通りで、年老いて後勇猛の戰士として現はれるに及んで、機鋒益々鋭く、光彩更に燦たるの觀があるのも面白い。

二

フランス氏が生れたのは一八四四年だから、今では隨分老人の方だが、其名高くなつたのは比較的新しい事だ。翰林院(アカデミイ)に列せられたのも、今から漸く十三年以前だ。

若い時から文學、歴史を論じ、詩作もやつた。かの『黄金詩集(レ、ポエム、ドーレ)』(一八七三)などは、明に高蹈派(パルナツシアン)の詩風を帶びた者である。併し此方はあまり得意でもなかつたので、以後は全く散文の方に赴いた。今日まで小説だけでも約三十卷の作がある。しかしかの『シルヴエストル・ボナアル』の物語で、初めて世人の注目を惹いたのが三十七歳の折だ。

氏が名を成す事の晩かつたのは、第一其完全な個性の發展が遲かつたからだ。併し他にも理由がある。今は既に歿したモオパツサン、ドデエ、ゾラなど

の小説家が、當時なほ文壇に覇たるの地位を占めてゐたのも原因だ。のみならずまた、ブルジエやヒユイスマンスが宗教の方に、ジユウル・ルメイトルが國家主義に、エルヸユが劇界に未だ赴いてゐない頃であつた。ことにまた最も大切な原因は、文章に於て實に氏の先進者ともいふべき懷疑家エルネスト、ルナンが、其頃まだ存生中であつたからだ。

ドデエ、ゾラ、モオパツサン、ルナン、エルヸユ、ブルジエ、ヒユイスマンス、皆揃ひも揃つて田舎者だ。プロヴアンスだの、ノルマンデイだの、アミアンだの生れだが、フランス氏に至ては實に生粋(きつすい)の巴里ツ子だ。プロヴアンス、ノルマンデイ生れの人などに比して、蠻的な硬い所の無いのは、さすがに巴里生れだけある。

巴里で生れ、巴里で育つた人だ。拉甸街(カルテイエ・ラタン)の家ごとに配達(くば)つてあるく牛乳屋も石炭屋も、子供心に見てゐたのだ。巴里の職人や小さい店番もよく知つ

てゐた。繪草紙屋の店さきで、我を忘れて立つてゐた事もある。殊にかのセイヌ河畔の古本屋で書物をいぢくつて、こゝに氏は最初の敎育を受けたのだ。否氏自らも本屋の息子である。書物のなかに生れ、書物のなかで育つた人だからゆかしい。僕等が、氏の作中に屢々見ゆる愛書家の事を讀んで、さて作者の幼時を想ふと、興趣更に一段の深さを覺ゆる。

今日の佛人中恐らく、フランス氏位に佛人的な人は他にあるまい。中世以後傳統ある佛國の文化は、眞に此文豪の一身に現せられてゐる。大膽にもその名に『フランス』の國名を取つたのは無理も無い。話は違ふが、ロゼッテイの名に冠した『ダンテ』の文字と同じく、想へば共に深い意味がある。(氏の本名はアナトオル、ティボオである)

セイヌ河畔の街こそは、凡ての智の人趣味の人が第二の故郷であると氏は言つた。また

「自分は此河畔に育つた。ここには古い書物が景色の一部をなして居る。げにわれを喜ばすものはセイヌであつた。………その河景色、晝は流れに空を映じ舟を運び、夜には寶玉を飾り、燦たる花もて粧ふ。」

氏は昔も今も愛書家である。佛國の他の作家とは、文藝の素養に於て全く趣を異にしてゐるのが第一の特徴だ。獨逸民族を除いての歐洲の文化に、博大深遠の造詣がある。英語も知らねば獨逸語も知らない。是がルナンなど、よほど異つた點で、ルナンは東邦の文獻學に精しく、希伯來の語に通じ、獨逸の科學で頭を養つた人だが、フランス氏は拉甸希臘の古文に造詣深く、また能く中世の拉甸伊太利文學に通じてゐる。徹頭徹尾、これ純粹の拉甸趣味の人だ。

「若し此方面の研究なくんば、佛國天才の美は失はれるであらう。吾等は拉甸人種である。牝の狼の乳こそは、吾等が血統の要部である。」

と氏は喝破した。（羅馬の祖先ロミユラスがパラテインの丘の麓で狼の乳で育つた古事を云つたのだ）

作家としてまた人物として、氏は近代といふものに重きを置いてゐない。

或日のこと、氏は客に自分の書物を見せてゐた。意外にも其書物の數が少く、中に近刊の書が丸で無いのに、客は不思議に思つた。そこで氏は

「私は新しい本は持ちません。寄贈をうけたのも手許には無いんです　皆田舍に居る友人に送つて仕舞ふんです。」

この田舍の友人とは、恐らく例の佛人一流の婉曲語法で、實はお馴染のセイヌ河畔の古本屋へ遣つたのだらう。

「しかし貴下は新刊書を知らうとはなさらんのですか。」

と客が訊く。

「現今の人のですか。なに、今の人の謂ふ位の事なら、私もちやんと知つてゐますよ。マンデスを讀むよりも、ペトロニアスからの方が得る所は多い

のです。」

だからフランス氏が、「ルタン」新聞の文藝欄に數年の間、新刊批評の筆を執つてゐたのも、半ば氣が進まなかつたのだ。然し此評論を集めて今は四卷の書物になつてゐるのを繙くと、非常に面白い。この書中には、終始一貫して下のやうな主張が見られる。即ち純粹な非個人的な批評は到底不可能の事だ、評家がつまり自己を語るに過ぎない。——從つてホレスや沙翁の事を語るとすれば、之れはホレス沙翁に關して、評家が自己を語つてゐるに過ぎない、といふ。だから評家としてのフランス氏は、常におのが個人的印象を書いてゐる。但し自分の作がよくうれるやうになつて以來、氏は全く批評の筆を棄てゝ仕舞つた。

「私の家には新刊書はありません」

とフランス氏が答へた其友人は、微笑を湛ゑて更に訊いた。

「では、あなた御自身の作もお手許には無いのですか」

「はい、自分で建てた物は——たとひそれが宮殿だと想像しても——自分にはよく分つてゐますから、見る氣がしないんです。自分の作を手許に置くのは大嫌ひで、どうして夫れを見るもんですか」

「重複を避ける爲にですか」

「いや私はいつも自己を繰返してゐるんです」

いかにも是は實際だ。フランス氏は自分の作中に、同じ思想を、殆ど同じ言葉で何度でも書く。時としては一冊の書中にすら、前と後とに同じ事を平氣で繰返してゐる。

『赤き百合(ルヽリイ、ルウジュ)』のなかに出て來る彫刻家は、明に作者フランス其人を描いたのだ。

右の話と下に掲げる一節とを比較すれば、すぐ夫れがわかる。

「あなたの作は、彫像でも凸彫でも、まだ一つも拜見しません」

とマダム・マルタン・ベレエムがいふ。

「自作を並べ立て丶、その中で暮すのを愉快だと、あなたは思ひますかね。自作は餘りよく知つてゐるんで、……見るのも五月蠅い位ですよ」

ドウ、シャルトルが、フランス氏の假面に過ぎない事は下の文句でも知られる。

「私は惡い像を幾個か造つて見たが、自分は決して彫刻家では無い――寧ろ哲學者風だ。」

三

氏の作には前後二期ある。その間には非常の相異があるため、殆ど別人たる二人のフランス氏があるかと思はれる位だ。

第一期に於ける氏は氣品の高い諷刺家だ。白眼にして世を睥睨すると云つた風だ。自己を群衆よりも一段高い地位に置いて、其努力葛藤を觀、靜に微笑を洩らしてゐた者だ。それが第二期に入つては、直に戰鬪者として現はれた。單に自ら一個の黨派に與するに至つたばかりでなく、今迄は嘲つてゐた事物そのものに對して自信を確說する。民衆の健全な本性、多數者の意義、進步の增して行く實相、また以前には思想家として斥けてゐた民主說、社會主義、是等に對して氏は自己の確信を發表するに至つた。

氏は其前半生に於て、常に多數民衆を輕侮嘲笑するの態度であつた。自己が既に民主々義者たるを公にして後すらも、猶ほ下のやうな事を書いた。ベルジユレエ——假に氏が此人物の口を藉りて言ふのだ——が其犬に向つて、

「お前は明日巴里へ行くだらう。そこは實に立派な高尙い都會だ。が、眞實その高尙いといふのも住民が悉く然うだといふのでは無い。單に市民の少

數者にのみ限られた事だ。併し一つの市府とか、全國民とかいふのは、畢竟他の人々よりも有力な正當な考へ方をする少數の個人に存するのだ。」

それからまた、

「國民を高くするものは、街上に大聲疾呼する愚な叫びでは無くして、屋根裏の室で出來だ沈默の思想である。それがいつかには世界を動かす。」

とも云つてゐる。たとひ三千六百萬の聲が擧つて之に唱和しようとも、愚なる叫びは依然として愚である。眞理には不可抗力がある。たとひ唯だ一人によつて觀破せられ唱道せられようとも、またたとひ幾百萬人が聯合し協和しようとも、眞理は遂に終局に於て世界の支配者であると氏は信じてゐた。

氏は決して樂天觀の人では無い。佛蘭西に於ても、また歐羅巴全体に於てもまのあたり墮落し沈湎して、主義を棄て去る者多きを見、不斷の進歩といふやうな事は信じ難くなつたのだ。一般の人が無頓着無感覺になつて、いかに

鋭い刺衝(ステイング)を與へても、渠等を考察に導き、況んやまた活動に導くに足りないやうな時代を、氏は通つて來たのである。人々の精神が不正を求めて飢にてゐる時には、敎化の清新な飮料を之に與へても何の効も無い。これを氏が作中の語もて云へば、

「渇してゐない驢馬をして、飮ましめんと欲するまた難いかな」

である。

さりとてまたフランス氏は悲觀の人でも無いのだ。世界は必ずしも、武裝したる蠻勇者流の獨壇ではない。孤立し身に寸鐵を帶びずして起つ眞理は何者よりも力強い。暴力が之に反抗しようとも、そは甲斐なきわざだ。強き道理と貴き思想と、此二者の相合するところ、天下また恐るべき無しである例の作中人物に云はすれば、

「どの時代に於ても哲人の見は、活動の人を喚起し來つて遂に之を實現せし

める。吾人の思想が未來を造り出すのだ。爲政者たる者は吾人の遺した方策に從つて仕事をするのだ。」

いかにも未來といふ者は隱れた者だが吾人は、フランス氏の謂ふ如く、ゴブラン織を造る機織が、其織り出さうとする模樣を全く見ずして織つてゐると同じ樣にやらねばならぬ。況んやまた未來と云ふものは全く隱れてゐる者だとは限らないでは無いか。

以上二つの方面から述べたやうな見解を抱く人は、急進派としてもまた保守派としても、立派に立ち得る筈だ。恰も北歐のイブセンが或る時期に於ける立場と同樣だ。現にフランス氏は保守黨に加盟してゐた。そして後には同志となつた人々をも、以前は酷く攻擊してゐた者だ。ゾラなども其一人で、初めは趣味の點から大に排斥してゐたが後には共に提携するに至つた。現にドレイフユス大尉事件の折などは、氏はゾラの味方であつた。

果然、氏は突如として其態度を改め、遂に戰士として現はれた。今や道徳の危機に際して、佛蘭西全體の文化、及び正義の保護者たる佛蘭西在來の地位が、危きに瀕したと、氏の眼中に映じた事が、確に其一原因だ。しかし若しも外部から之を慫慂する者が無かつたらば、氏は竟に動かなかつたかも知れぬ。それは、多年氏と無二の親交あつた一婦人の感化によるのだ。

氏の作には歴史的の物語が多いが、さすがは古典に造詣深き人だけあつて、その寫してゐる時代の精神を能く呑み込んで書いたものだ。恰も其時代の人が話したり、考へたりすると同じ樣に描いてゐる。是は特に『クリオ』と題した物語集などに著るしい。此中にはホオマア、ダンテ、シイザア、那破翁（ナポレオン）といつたやうな史上の大人物が澤山出てゐるが、明にそれと分るやうに書いたのは、ホオマアと那破翁とだけだ。外のは大抵かすかな影繪（シルエツト）のやうに出來てゐる。いづれも作者が素直（すなほ）に、其時代や國の信仰思想などをよく味つた上で、

それらと現代精神との對照を強く現はした處に特色がある。例へば『ファリナタ』と題した對話の物語などにも、古人と今人との物の考へ方を比較して、其見解の全く正反對なところを見た點に趣がある。言ふまでもなくファリナタは、ダンテの『神曲』地獄界にあるかの興味深き人物を取つたのだが、戰爭に關する其說が最も面白い。即ら今日ならば或國の人が外國の軍隊と戰ふのは甚だ立派な事で、內亂なぞは決して褒めた話では無い。ところが、ファリナタの說は正反對で、恁う云つてゐる。

「吾等フロレンス人に取つては、爭ひを終まで仲間同志の間でやつて仕舞つた方が善かつたらう。內亂こそは實に立派なことで、外人を此中へ卷き込むやうな事は、出來得べくんば避くべき筈なのだが、……他國との戰爭に至つては決してさうでは無い。或は國境の防禦擴張とか或は商業發展の爲とかで、外戰も時として有用でもあり、又必要でもあらう。併し先づ概して

言へば、這んな卑しい外戰などをやつては餘り利益も得られず、さりとて名譽でも無い。聰明な人ならば外戰には雇兵を使ひ、率ゆるに經驗に富んだ將帥を以てする。そこでよく小勢(こぜい)を以て偉(えら)い事がやれるのだ。」—

今と昔との此對照は、無論ダンテの作などで全く見られない興味ある點だ。

巴里人の近代生活を寫した短篇集「クランクビイユ」(一九〇三年)は、確に氏が傑作の一つだ。此書の表題となつてゐる卷頭の一篇は、單純で而かもよく人の肺肝を突くやうな鋭い筆法で行つたものだ。

街(まち)を賣りあるく青物屋の老人、是は元來謹直な男だが、非常に繁華な通の或る店先で、荷車をとゞめてゐた。いま賣つた葱の代價を貰ふのを、待てゐるのである。そこへ巡査が來て、早く行けといふ。老人は小聲で『お錢を受取らうと思つて』といふが、巡査は夫れにお構ひなく、矢も楯もたまらぬやうに嚴命を繰返す。そしてクランクビイユを「法權抗拒」だと言つて捕縛し

た揚句には、官吏侮辱といふ譯で、法官の前に引きづり出した。勿論老人には更に覺への無い事だ。法官は可憫な此老人の言よりも、寧ろ巡査の斷言に信をおいた。青物屋の老爺は恁くて遂に、拘留二週間、罰金五十フランといふ宣告を受けた。

さて老人が監獄から出て見ると、得意先は皆他の商人に取られてしまひ、それにまた、前科者といふので誰も相手にしなくなつた。益々貧窮に陷つたその擧句の果、遂に一策を案じた。即ち、前に不當にも處罰を受けたあの通りの文句を今一度巡査に吹きかけて、雨露を凌ぐ場所を得ようとする。ところが巡査は降りしきる雨のなかに、街燈の柱に凭れながら、今度はいくら侮辱を受けても、平然として、全然相手にして吳れない。可憫の老人もかくて竟に百計盡くるに至つた、といふ筋だ。話は簡單だが、現代社會の缺陷を諷して痛ましく人の心を動かす所に妙味がある。

氏は科學としての歴史に信を措かない人で、其說は恁うだ。歴史は過去の事件を書き表はしたものである。併し事件とは何だ。著るしい事實をいふのだ。さらば或事實が著るしきと然らざるとは、果して誰が決めるか。それは歴史家が勝手次第に自分の考へで決めたんだ。それからまた、一の事實は非常に複雜なる集合性(コムポジット)のものだ。歴史家は果して其集合的なものを、洩れなく描くかといふに、それは無論出來ない相談だ。從て夫れを摘剪り手入れした上で、吾々に示すのである。更にまた、歴史的事實は全く世に知られない種々の事實から出た最後の結果である。其連鎖を歴史家が何うして表はす事が出來よう。

說の當否は暫く措き、氏は此論法で同じ懷疑說を二度まで其著書に述べたこ過去を知らうとするのは到底不可能だ、讀む必要ある物を悉く讀まうとしても駄目だ。氏が此論を次の寓話に託したのが、二度迄も出てゐる。

若き王子ザミィルが、父王の後を繼いで波斯の王位に即いた。さて國中の學者を集めていふ。

「王者たる者、もし過去の歴史に通ぜば、過つ事少からむとは、わが師の教へだ。卿等わが爲に世界史を作り、その完備を期せよ」

と。それから二十年を經て學者は再び王の前にあらはれ、十二頭の駱駝の一隊を率ゐて一頭に五百卷宛を積み、すべて六千卷の書を王に獻じた。國政に忙殺せられてゐる王は、深く學者の勞を謝して後いふには、

「朕は既に中年である。たとひ老ゆる迄生きようとも此浩瀚な歴史は讀めぬ。之を短縮せよ」

と命じた。それからまたもや精勵二十年學者は之を千五百卷に約めて王に捧げ、要點は毫も省いて無いといふ。王は

「さうであらうが、朕今は既に老いた。更に之を縮め、出來うるだけ早く仕上

げよ」

と命じた、今度は十年を經てから、學者は一頭の若き象に僅か五百卷を積んで持て來た。王は

「まだ不十分だ。朕の餘命は幾何も無い。更に縮めよ」

といふ。また五年經つた。今度は學者が杖にすがつて、一匹の驢馬に大きな書物一冊を載せて持て來た。王は此時すでに臨終の床に在はすと。或る官人が告げると、王の云はるゝに

「朕はいま逝く。遂に人間の歴史を知らずして」

と、老いたる學者の答、

「陛下よ。あなた、唯これを約めて三語となさむ。曰く。生と苦と滅と」

フランス氏が、研究家としての偉大なる試みを有しながら、歴史家たらずして小説家となつた所以は、即ちこゝに在る

以上いふ歴史に對する疑は、よく氏の懷疑的性質を代表した者だつた。科學宗教政治道德等あらゆる方面に於て、氏は懷疑の人である。是は「エピキュラスの園」「わが友の書」などに於て、明に自分の口から告白してゐるのみならず、他に作中人物の背後に隱れて此懷疑を吐いたのは甚だ多い。

五

今から殆ど四年前、即ち一九〇四年十一月の或る夜、巴里のトロカデロで氏は朗讀演説をやつた。此時フランデス氏も聽衆の一人で、當夜の印象を興ある筆で書いてゐる。フランス氏演説の一節に、極東問題を論じた處がある。例の皮肉な諷刺で黄禍論を說いたあたりは、我邦の讀者に最も興味あらうと思ふから、そこだけを抄錄する。氏は歐洲と東亞との關係を論じて、下のやうに云つた。

「支那に何か騷動が起ることに、歐洲列强は軍隊を派遣する。一國が獨立てやる事もあれば、數ケ國聯合の場合もある。そして其軍隊は强盜暴行虐殺放火などの手段を用ひて秩序を恢復し、砲火を以て國を鎭めるのだ

「武力なき支那人は防禦はしない。また爲た所で駄目だ。男など殺されて仕舞ふだけだ、渠等は丁寧で禮に厚い。併し正直なばかりに渠等が歐洲人に對する好意を缺くと云つて非難する。即ち渠等に對する吾々の苦情は、恰かもデユセイリユ氏が大猿に對する苦情も同樣である。

「デユセイリユ氏が牝の大猿を擊つた。擊たれた猿は、胸にしかと子猿を抱きしめて死んで仕舞つた。そこで子猿だけを無理に母の腕から離して、それを歐洲で賣るため、亞非利加を通つて遙々と引つぱつて來たが、之が即ち正當な苦情の出るもとであつた。猿は毫も馴付かない。馴付いて生きんよりは、寧ろ餓死した方がよいのである。餌も喰はないのだ。そこで渠は怒

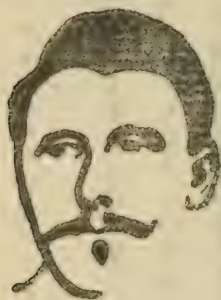
アナトオル、フランス

ういつた性質(たち)の悪い奴だから、何うも手に合はぬ。

一此人が若し猿に對してかゝる苦情がいへるものなら、吾々も支那人に對して苦情を云つてよからう。

フランス氏は進んで歐洲に對する黄禍を論じ、是は亞細亞にとつての白禍とは比較にならぬと喝破した。黄色人は、巴里、倫敦、聖彼得堡などへ、未だ曾て佛教の宣教師は送らない。黄人の軍隊が佛國に上陸して、治外法權の地を要求した事もない。また東郷大將が艦隊を率ゐて我國に來り、日佛貿易を改善せん爲のブレスト軍港を砲撃した事も無いんだ。優れたる文明と道德とを名として、ヹルサイユに火を放ち、或は、ルウヴルより繪畫を奪ひ、磁器をエリゼイ王宮に取つて、之を東京に運び去つた事も更に無いのだ。

フランス氏は此分り易くて而かも反語的な論調で、頻に聽衆の心を奪つた。

演說を聞いてゐるのも勿論面白いが、聽衆が之を上にして心大に動き、熱心

なる賛同を以て傾聽する所を見るのも、亦甚た興味があつた。

氏の言が斯く迄も深く聽者を動かすのは、其辭句のいかにも巧妙な爲のみでは無い。フランス其人の人格の力である。作家の背後には「人」がある、大なる作家の背後には勇猛な「人」がある。氏の講演も文章も、すべて最も能く此事實を示した者である。

Maeterlinck
(Vallotton)

蘆笛（散文詩）

―マルセル・シユウォブ―

Sicilia（シシリア）の沃野、海より程遠からぬところ、美しき巴旦杏（にだんきやう）の林ありて、そこに年經たる黒き石の床あり、むかし牧人はいつもこゝに座を占めたり。

こまかき燈心草にて造れる蟬の籠と、魚を入るゝが常なる篠の籠とは、眞近なる樹の枝に懸りぬ。

石の床に、眠れる女、足を紐にて纏ひ、頭は尖りたる赤き藁の帽に隱したるが、歸り來らざる牧人を獨り待ちわびぬ。

牧人はかつて手に白蠟を塗りて、しめりがちなる叢（くさむら）に、蘆を摘まむとて出で行きしなり。かれは蘆もて七つの笛を造らむと欲しぬ、パアンの神が敎へし如くに。

時七つを過ぎて、先づ第一の調はいま眠れる女の、眺めゐたりし黒き石の床に近く競ひ起れり。その響は近く清く、銀のごとくなりき。

更にまた七つの時を經ぬ。日影うららかなる野を過ぎて、第二の調はさゝきぬ、樂しき黃金のひゞき。

時七つを經るごとに、けふ眠れる女は、新しき笛の調、一つ宛を聞くことを得たり。

さて第三の調は遠く、また錚然たる鐵の響のごとくに荒々しかりき。

第四のは、更になほ遠く深くひゞきて、青銅の音にも似たりき。

第五のは切れ〴〵の斷音にして、錫の器の音、

されど第六のは、鈍りたる、忍びねの、冴えざるひゞき、さながら綱につけたる鉛の錘の打ち合ふがごとし。

第七の調をこそ、けふ眠れる女は待てるなれ。されどそは遂に響かず。

日は白き霧もて、夕闇は薄墨いろの霧もて、また夜は紫紺の霧もて、巴旦杏の林をつゝみぬ。

恐らく牧人は、光明の海の濱邊、暮れ行く夜と歳とのかげに、第七の調を待てるならむ。

牧人を待てる女は、また黒き石の床に座して、眠にしづみぬ。

——Marcel Schwob の散文詩集 'Mimes' のうち XI. Les six notes de la flûte の譯

附録　平和の勝利

平和の勝利

一

俗衆が『流行』と名づける一切のものに超然たらうとする私も、人なみ今度の流行感冒には襲はれた。襲はれたところが四十度の高熱に惱まされて、十日餘りを床上に呻いたのは我ながら心外に思ふ。まいふんだ記けなかつた日記帳を見ると、幾頁かゞ餘白として殘つてゐる。床を上げた日に平和の報を聞いて餘りの嬉しさに感想の二三を其餘白に書きつけようとて筆を執る。まだ腰が痛くて机に凭る事もならず、苦しい腹這ひの儘で。

久しく暗澹たる戰雲に鎖された歐洲の一角に、突如として一道の光明が認められてから間もなく、そこには世界の人々が待ちに待つた女神『平和』の

美しき姿が現はれた。倫敦にダウニングの街頭に喜び狂へる群集ありと聞けば、我も提燈行列とやらに狂奔して見たくなる。光明が暗黒を、正義が私慾を、秩序が擾亂を、自由が専制を、心地よくも拂ひのけて現はれた此『平和』の勝利を見て、誰か狂喜しない者があらうか。

株式相場を人生の最大事と心得、領土擴張、利權獲得を民族生活の至上の幸福と心得てゐる者がある。彼等は世界戰亂と云ふ文明の破壞人間屠殺の慘劇をよそごとに見るは愚か、是はまた『何んて間が好いんでしよ』、機に乘じて私腹を肥すはまさに此時ぞと勇みたつた。そのくせ正當に先進國の商工業と競爭する實力もなければ勇氣もなく、戰前には氣息奄々たる連中であつた。平和は成るべく遲いが好い、もう二三年も戰爭が長びけば配當もうんと殖ゑよう、此上日本はまだ〳〵金が儲かるものを。さう云ふ事を言つて、此平和の吉報に眉を顰めてゐる火事場泥棒が、どこか其邊に居やしないだらうか。血

を見て微笑むは惡魔のこゝろ。彼等は人類共同の敵である。

今は何事にも速力第一の世の中だ。戰爭もさうだ。昔の鐵砲で十發打つ間に、今の機關銃では百發千發を打つ。從つて同じ丈けの時間に與へる戰爭の慘害は昔のそれに十倍百倍してゐる。僅四年間や五年間の戰と云へば、昔から歷史上に前例はざらにある。然し現代の戰爭の破壞力が敏速であり猛烈である丈けに今の四年五年の戰は、昔の五十年百年の戰よりも更に恐る可き慘害を人類に與へる。殊に規模が大きくて、世界のあらゆる強國を災禍の渦中に捲き込んだ點から云つても、この度の戰亂は人間の歷史あつて以來の最も悲慘な、最も不吉な、そしてまた最も馬鹿げた現象であつた。

さう云ふ戰が今終つた。否、少くとも終結に近い所まで漕ぎ付けた。あれだけの大きな犧牲を拂ひながら、今も猶は永久の平和による人間生活の根本改造に氣付かないほど、人類は愚かな動物ではない筈である。若し愚かな者

がありとすれば、私利私慾に目が眩んでゐるからである。此戰によつて內生活思想生活に與へられた貴き敎訓に氣付かずにゐるからだ

獨帝の蒙塵は一箇の悲劇の大團圓を見るやうで面白い。自己の滿々たる野心に驅られて中歐大帝國の建設を夢想して、事遂に成らず。最初先づ自分が牢屋に叩き込んだ社會黨首領リイブクチヒトを、やがて四圍の狀況に迫られて釋放し、今度は逆に其リイブクチヒトから退位を要求せられたあの前後の經緯なぞは、派手やかなスコットの筆にでも寫されたならば、さぞ面白い歷史小說にならう。同じ樣な事でも、露西亞のロマノフ王家の末路はよほど趣を異にしてゐた。皇帝ニコラスの境遇や態度が全然受動的であり、其性格が詩人的であつた爲に、陰森凄慘の氣全幅を蔽うて、主人公が沒落まで行く間の事件の進行にも、戲曲的のやまが少しもなかつた。之を描くには、どうしても矢張、露西亞近代作家の寫實的な筆に待たねばならぬ樣な氣がす

る。

二

獨帝最後の悲運は決して彼の力量が足りなかつたからではない。また必ずしも獨逸の國力が世界を敵とするに不十分であつたからとのみは云へない。如何なる英傑の力を以てしても如何ともし難き時代精神の力が然らしめたのだ。いつも政治外交經濟などの表面的事實の背後に動いてゐる澎湃たる思潮の大勢が然らしめたのだ。

一將功成つて萬骨枯るに戰場に花やかな功名を樹てむとする一人の英雄の前に、千人萬人が跪いて我身を捧げたのは、昔の浪漫的時代の事であつた。前世紀の偶像破壞、幻影消滅の自然主義時代以後には、英雄と云ふ者の存在の眞意義が根本から無くなつてゐる。個人銘々の自我の覺醒に伴うて、昔の

人の心にあつた英雄崇拜の殘夢は拭ふが如くにかき消された。今は一人の英雄の事業を千八萬人の凡人が爲てゐる時代である。民本主義の優勢は他の一面から云へば、十萬百萬の群小衆愚の方が、一人の英雄よりも遙に力强くなつた事を意味する者である。たとひ成吉思汗(ジンギスカン)やシイザアやシヤアレマンや那翁(ナポオン)ほどの男でも、若し現代の如き時代思潮の前に立たしめたならば、恐らくあの半分の仕事さへも出來なかつただらう。之に反して若し獨帝をして、たとひ中世封建の世ではなくとも、せめては前世紀浪漫主義(ロマンテイシズム)の勃興時代たる那翁(ナポオン)の頃に出でしめたらば、一度は歐洲大陸だけを席捲するか、或は其宿望であつたバグダツド伯林連結鐵道の半分位は實現し得たであらうに。嗚呼もし世が世ならば、これが恐らく英雄王維廉二世の最後の嘆きの聲ではなからうか。

獨帝は其祖父維廉一世が帝業を拓いた頃の、まだ浪漫主義(ロマンテイシズム)全盛期を距る遠

からざる時代を夢みてゐたのか、彼の爲には千慮の一失であつた。主戰派の頭目たる皇太子も亦極端なる獨逸崇拜者であつたと云ふではないか。其腦裏にこびり附いてゐた唯此一つの時代錯誤のために、彼等は遂に今日の悲境に陷つた。聰明なりと云ふ英雄王も、案外に目の見えない氣の毒な者である。

歩が金に化けたのを成金と云ふならば、獨逸のホオヘンツオルレルン王家の如きは大名が成り上がつた「成王」と云ふ可き者だ。もとより高が知れたブランデンブルグの一選擧侯ではないか。そして此度の悲運も身から出た錆だと思へばそれ迄だ。そんな者が亡びたとて顚覆つたとて別に驚くにも足りないが、墺多利のハプスブルグ王家の末路に至つては、あれは何とした事だ。苟くも神聖羅馬帝國の正系を傳へて、歐洲の君主のうち一番系圖の立派であつた王家のあの憐れな最後には、さすがに人の涙を誘ふに足る者がある。

ロマノフ王家といひ、ハプスブルグ王家と云ひ、またホオヘンツオルレルン

ン王家といひ、これ等の悲慘な末路を見るにつけても、わが同盟國たる英國のハノヴァ王家が依然として民本主義の上に立つて、歐洲に於ける最も光輝ある王統であらせられる事は、アングロサクソン民族の、今もなほ昔の如くなる隆運と光榮とを象徴する者のやうで、如何にも貴い。

平和は嬉しい。しかし是が若し萬が一にも中歐側の勝利に歸したか、或は五分五分の引分けにでもなつて出來た平和であつたならば奈何だらう。其結果が思想上に與ふる惡影響から見て、人類の不幸は戰爭その者よりもなほ一層甚しかつたかも知れぬ。今更事新しく云ふ迄もなく、今度の戰亂は思想上から見れば、人類進歩の前に横はれる危險思想と目すべき專制主義、利己的國家主義、武力萬能思想に對して、民本主義、四海同胞主義、平和思想を旗幟とする者の戰であつた。若し之が獨逸側の勝利に歸して居たならば、世界の人心は猶ほ暫らくはかの保守頑冥の舊思想危險思想に執着して、武力を信

じ侵略主義を謳歌する者が多かつたであらう。現に日本などには獨軍の戰場に於ける優勢を讃嘆して、獨逸は偉い、どうしても國として立つにはあの態度に限る、敵ながらも感心だなぞと、馬鹿な事を云つてゐた普魯西文明心醉の徒があつたではないか。そして英米系統の健全なる思想を目して、あべこべに之を危險思想視してゐた者さへ多かつたのは事實ではないか。

然しまあ好かつた。聯合側の勝利によつて世界は文明の逆轉退步から免れ得たのだ。斯くてこそ世界の人類はまさに其進む可き正しき方向に向つて進み得られる。思うてこゝに及べば、此の芽出度き平和には平和以上の大なる喜びがある。

三

わたくしは支那の思想史に何等の造詣ある者ではない。しかし讀者にして

若しわたくしの一知半解の言を許さるるならば、かの戰國時代の思想家墨子が非攻篇に述べた所說の如きは、立派な近代的の平和思想ではないかと思ふ。それには現代のソシアリズムの色彩すらもあると、西人は評してゐる。しかし固より東洋の事だから、墨子の兼愛交利の說は禽獸に等しなぞと途方もない事を言つて、誰も相手にしなかつた。孔孟の說に對して是は外道扱ひされた者だ。西洋でも大哲韓國(カント)の永久平和論が出た時代には、政治上に何等の實際的影響を及ぼさなかつた。あれは哲學者の寢言か空想位に、多數の俗衆は思つてゐたのだらう。それが前世紀の末からは歐米に於ける平和運動となり、微力ながらも海牙(ヘェグ)の仲裁裁判の形を取るに至つた。日本も勿論贊成して、あの裁判所の建物に壁掛の織物か何かを寄贈したやうだが、サアベル萬能の迷信を脫し得ない國民全體は、實は甚しく此平和思想に對して冷淡極まる者であつた。日清日露の大役にだいぶ純益があつたと云ふので、まだ武力萬能の

迷夢から醒め得ないのであつた。戰爭をすれば國が榮になる者の樣に思ひ込んだのだ。稀に平和論を唱へる人でもあれば、意氣地なしの腰拔か何かの樣に皆が嘲つてゐた。私の友人に某博士と稱する男があつた。其男は帽子の下にチョン髷を隱してゐるかと思はれる程、頭腦の古い男であつた。わたくしが外遊中に永久平和論の事を彼に話した時、彼は罵つて言つた。馬鹿な、そんな事が出來るものか、空想だ。ちつと恁うして息だけ爲てゐりや空氣中から食物が吸取される時代が來るだらうと言ふのも同じだ。第一日本の樣に小さい國は奈何する。さう云つて彼は永久平和說を一嗤に附した。恁んな男なぞはどうでも好いが、世界平和に對する日本人多數の理解は、先づざつと此程度の者かと思ふと心細い。

否、日本ばかりではない、歐洲人も矢張り左樣であつたればこそ今度の大戰は突發したのだ。開戰以前から此の平和思想に最も熱心なのは米國であつ

た。極端なる絶對平和の空想説をすら信ずる人の多かつた米國が、最後に舊思想打破の爲に劍を拔いて漸と今次の大戰亂も終を告げたのである。

恁うなつて見ると平和運動は既に單なる思想問題の域を脱して、實際上の政治問題になつて了つた。英米が熱心に提唱してゐた國際聯盟や平和強制同盟など世界永遠の平和策が、講和談判の最も重要な部分を占める事になつた。つい此間まで人切庖丁を二本腰にさしてゐた日本人、そして今まで此系統の思想に最も冷淡に殆ど全然無理解無頓着であつた日本人が、今や後れ馳せながら時運の大勢に強ひられ、此四海同胞主義に基ける永久平和の問題を眞面目に研究しなければならぬ時が來た。支那（或は露西亞も）と云ふ何だか將來の巴爾幹半島の樣な列國競爭の地に接壤してゐる丈け、日本に取つて此問題は一層困難な重大問題である。英米の政治家とちがつて、少しも思想家としての色彩なく、驅引と巧智とのほか何者をも知らない我國の政治家

に、百有餘年前韓圖が提唱した此思想上の大問題が、果して理解し解決し得られるだらうか。米國には、學者にして理想主義の政治家たるヰルソンがある。佛蘭西には偉大なる愛國的理想家クレマンソーが一國の宰相である。そして英國には、文筆の士として優に一家をなし、かのベルグソンの説に批評を加へる程の哲學者バルフオアが現在の外務大臣である。日本の政界には誰があるか。

四

西洋人は平和思想が史上に現れた例として色々の者を擔ぎ出す。うんと古い所では約二千五百年前の希臘時代に、十二の國民がデルフアイの神殿に奉仕する宗教的意義を有つてゐたアンフイクテイオン會議を擧げたり、また希臘羅馬の文獻に見れる片言隻句を拾ひ出しなどしてゐる。が古くして而かも

立派な思想體系を有つてゐた點から云へば、憚りながら東洋の墨子の說の方が紅毛碧眼の人たちよりはずつと先輩である。具體的の事實としては、遙に後れて十六世紀末に於ける顯理四世の平和同盟案や、或はユトレクト條約當時に出た同盟案などを擧げるが、何れも皆云ふに足る程の者ではなかつた。是が眞に西洋で大思想家の考察に入つたのは矢張り韓圖以後の事だらう。

近世哲學の開祖韓圖が十八世紀末戰亂の慘狀を目擊して書いた『永久平和論』が、約一世紀を隔てて大西洋のかなたにヰルソンの政策になつて現はれてゐる所に、思想界と實際界との極めて興味ある交涉が見られる。理想主義の濃厚な色彩を帶びてゐる米國の政治家は、此哲人の思想を遂に世界政策の上に持ち來した。はじめ衆愚によつて空論なり迂遠なりと嘲けられた大思想は、十年の後、百年の後、時に或は千年の後に於て、或大なる外的事件と自然が促す氣運とに觸れて、それが遂に現實界の大運動となる。是は藝術家し

オナルド・ダ・ヴィンチが四百年以前に既に考へてゐた飛行機が、二十世紀の今日實戰上の最大武器となつて立派に實現せられてゐる事よりも、更に驚く可き文明史上の事實ではないか。英國の詩人テニソンが其名作『ロックスレ館』のうちに明に飛行機を豫言し、同時にまた

Till the wra-drum throbb'd no longer, and the battle-flags were furl'd
In the Parliament of man, the Federation of the world.

軍鼓は鳴りを靜め、軍旗は捲かれぬ、
人類の議會、世界の聯合遂に成る。

と歌つたのは、今より八十年前早くも既に彼が燃犀の詩眼に映じた國際聯盟の豫言ではなかつたか。新聞雜誌のほかは平素文學書哲學書の一冊も繙かず、唯だ眼前、送迎遑なき軍事、政治、外交、經濟の上つつらな事實だけを見て、根抵に深くも潛める思潮の進轉に思ひを致さない淺薄な實用的人物の如き、今日に於ては既に新時代の新生活を語るの資格なき者である。

爭議決せずして將に開戰しようとする兩國民が共に興奮し切つて眞赤になつてゐる。一寸した事件から夫れが爆發して一たび火蓋を切つたが最後、引くに引かれぬ破目になつて遂に屍山血河の慘劇を演ずる是が戰爭の常態だ。だから其眞赤になつて今火蓋を切らうとする矢先、横合ひから國際裁判か、仲裁か、或は之を制する他の方法を以てして一時その氣勢を拔きさへすれば武力に訴へずとも濟む場合は實際甚だ多い。現に數年前一時某々二國の關係が急迫した折などにも之に類した事があつたと聞くが、危機一髮と云ふ其機を逸せしむべく、多くの第三者が共同して何等かの方法を施しさへすれば、それで雙方とも劍を鞘に納めて、事は意外に落着する場合がある。平和強制同盟や國際聯盟なども、要するに此熱し易く冷め易き群衆心理の作用を利用しようとするものに外ならない。今度の大戰爭も其動機となつた者は巴爾幹半島に突發した一小事變に過ぎなかつたが、あれが遂に幾千億萬の財幣を費

消し千有餘萬の人命を損ふ世界的悲劇になつたことに、獨逸の當時歐洲の政治家は誰一人として之を考へてゐなかつたのが事實だ。

群衆心理の研究で廣く日本に知られてゐる佛蘭西のギユスターヴ・ル・ボンは今度の大戰に就て新著『戰爭の心理』を公にした。其中に大戰爭の根本には三つの内的素因がある事を論じてゐる、第一は生物學的素因、即ち飢餓慾望に促されて起り、第二には感情的素因、即ち憎惡復讐など、第三には精神的素因、即ち如何に智性の發達した人にでも免れ難い推理以外の力があつて、今度の戰爭の如きも實に此最後の者が最も重きをなしてゐると云つた(同書第一篇第一章、第五節參照)で此精神的素因を同盟内の第三者が共同の武力又は經濟的壓迫によつて取り除からうとするのが、心理狀態から見た國際聯盟の目の付け所だらうかと思ふ。若し夫れでも構はず火蓋を切る者があらば、同盟内の第三者が巡査の役目を勸めて之に共同の制裁を加へようと云ふて聯盟の主唱者たる英國の前外相

虞禮子爵（グレイ）の言葉を借りて言へば、「此の點に於て各の國家は自ら主權を制限して聯盟の義務に服從す」る必要が出來るわけだ。人としても國としても利己主義ばかりが盛な今の世界文明の進度では、實際甚だ姑息な是位の事より以上は出來ないのであらう。

世界の大戰を終つた今にして始めて、ひし／＼と人々の胸に思ひ當る一事がある。それは外でもない、前世紀末から今世紀の初めにかけて歐洲の視聽を聳てた名著ブロッホの『未來の戰爭』や、ノオマン・エンゼルの『大なる錯覺（グレート・イリユーヂヨン）』に現はれた戰爭不可能論である。即ち今日の如く交通機關の發達した時代外交經濟關係の複雜な時代に於ては、對等國の間の戰は唯だ雙方の自滅を招くに過ぎない。一國の利益となる可き昔の樣な戰爭は不可能であると云ふ論であつた。所が間もなく今度の戰爭が突發したので、それ見た事か、エンゼルやブロッホの說は空論であつたと云つて多くの人は冷笑した。しかし今となつ

て世界大戰の結果を見よ、講和會議がたとひ如何なる結末を見るにもせよ、また非併合非賠償と民族自決主義が奈何なるにもせよ、あれ丈けの生命財産を蕩盡しては、差引勘定の上に交戰國が何等得る所のないのは、十分事實の上に證明されたではないか。あんな慘劇を演じ損害を負うてまで、ブロッホやエンゼルの所説を確める實驗を、御丁寧にも演つて見たことかと思へば、悧巧さうな西洋人にも似合はない愚な事をした者だ。が、そこが即ちル・ボンの所謂神祕的素因の在つた所で、今となつては彼等と雖も後悔する他はないのである。

　この幻滅時代に、己の英雄的功名心に驅られて開戰しようと云ふ程まで時代後れな誇大妄想狂も、さう〳〵は出もしまい。また開戰を大なる罪惡なりとする觀念も、日一日と深く世界の人心に泌み込んで行く。是はかの獨帝の樣な男でさへ、如何に苦心して開戰の責を英國に塗り付けようとしたかを見

ても明かではないか。然し、斯の如くにして戰爭の原因が漸次少くなつて行く以上、永久平和の大理想を地上に實現する事は、必ずしも空中樓閣の類では無いと思ふ。

一口に愛國心と云つても、其發達には色々の段階がある。最初は先づ他國に對して無闇に好戰的態度を執り、從つて尚武思想を中心にした極めて幼稚な野蠻時代があり、次いでは利己的國家主義即ち自ら富み自ら榮え、自らのみ威張らんとする時代、自國あつて眼中他の國家なきは二者共に同じい。最後に最も進歩した者は自國を愛すると共に他國の利益をも尊重せんとする愛國心、換言すれば他國を重んずる事によつて自國を大にし、自國を益せんとする愛國の精神だ。即ちコラムビア大學のバトラア總長が所謂「國際的精神」の上に確立せられた愛國心であらねばならぬ。かの幼稚なショヸニズムやジンゴイズムの如き、既に遠い／＼過去の時代に屬す可き者で、然んな者を現

代に高唱するなどは、十字街頭に出刃庖丁を振廻すよりも危險な藝當である。自ら大ならむとして却て自國の衰滅を招く外なき事は、獨逸が既に之を事實の上に證明した。愛國の眞精神は慾張親爺の妄想でもなければ、田舍者のお國自慢でもない。

嘗て丁抹の文藝批評家ブランデスの平和論を讀んで、其一節を今も猶ほ記憶してゐる。夫れは個人と個人との間の爭議解決のために遠い昔から行はれてゐた決鬪と云ふ蠻行が、近代の文明國に於いては全然禁止されて了つたではないか。人に正義の思想が發達すれば國と國との間の決鬪も、個人間に於けると同じく、之を除去し得る日がいつかには來るだらうと云ふ意味の語であつた。決鬪は無くても暴漢を取押へる巡査に武器の必要があると同じ意味で、永久に陸海軍の必要は勿論あるだらうし、唯だそれが今迄の陸海軍とは、甚だしく存在の理由を異にした者であらねばならぬ。また各國の軍備制限か

當然必要條件となる事も豫測し得られる。

しかし恁ういふ計畫の完全な實現に至つては前途なほ遼遠だ。之には多大の困難がある事は固より云ふ迄もない。我利々々亡者の多い今の世界では或はなほ一片の空想に終るかとさへ疑はれた。しかし空想と思はれた事が、文化の進歩人心の開發によつて今日までいくらも立派に事實の上に實現せられてゐるではないか。不可能と見ゆるまで困難な仕事であればこそ、萬人が萬難を排して努力する甲斐があるのだ。人間殺戮といふ慘劇を再び演じない樣に、また此世界戰亂を以て歷史の頁を彩る恥づべき最後の血痕となす可く、各國各人が專心一意に努力する事、此努力によつて後代に誇る可き二十世紀文明の特色を造りあげる事は、現代人の最大任務であらねばならぬ。之がまたこの度の戰亂が吾人に與へた最大の教訓であつた。所謂『戰爭を終る戰爭』の代價としては三千五百七十二億の戰費、千數百萬の人命は寧ろ廉なるに過

ぎたかも知れない。

五

日本では國際聯盟の困難や不可能を言ふ人の聲のみが甚だ高い。特に日本の立場としての利害關係から打算した說を最も多く聞く。白人が人種的偏見を以て黃人に臨み、寧ろ之を壓迫するの策なるかの樣にさへ言ふ人もあるが恁くの如きは偏見を以て偏見に報ゆるもので、此流儀の態度では、未來永劫いつ迄經つても相互の間に完全なる理解を生ずる日はあるまい。他の有色人種の事はいざ知らず、日本人に對する西人の偏見は、吾々自らの精神上道德上の進步によつて、他日必ず之を根絶し得るの日があると私は信じてゐる。此點に於ては遺憾ながら吾々自らの方にもなほ十分反省の餘地がある。また實際の手段としては、今度の講和會議の如き好機會に於て何故平等の待遇を

要求しようと努めないのであるか。更に又かの米國が口に平和を唱へつゝ、海軍擴張の企畫ある事を指摘する人も多いが、あれなどはもと〳〵勢力ある一部の造船業者が、尤もらしい理窟をくつ付けて私腹を肥さんとする企てゞ、あれを目して直に米國の軍國主義化なりと斷ずるが如きは、稍速斷に失する嫌ひは無からうか。私利を營まんとして邦家百年の計を誤らしむる者は何處の國にもゐる。

更にかの一般的不可能論、例へば同盟の監督者が無いとか、原料や食物の關係から植民地の爭奪戰は免れないとか云ふ種々雜多の反對論は、西洋人殊に軍國主義者であつた獨逸人などが、開戰の前にも後にも、日本の論者よりはずつと巧い議論を澤山聞かして呉れてゐる。それらは英米の新聞雜誌を讀んでゐる間に、專門家ならぬ私の目にさへ屢とまつた。讀んで見ると如何にも皆尤もらしい說である。

去年の秋、雜誌「四回評論（ウオタリ・レビウ）」の紙上に「眞の大戰」と題した面白い議論が出てゐた。それは日本の論者が今まで餘り受賣してゐない人口問題から永久平和の不可能を說いた者であつた。地球の表面は一億九千六百五十萬平方哩、そのうち五千五百五十萬平方哩が陸で、あとは水ださうだ。そして地球に生息し得べき人口總數を六十億萬人だと見積ると、現在の增殖率から考へて、先づ紀元二千一百年には此數に達する。即ち今から二百年ばかりも經つと、地球上にはそれ以上の數の人間が生きて行かれなくなる。勢ひ强い奴が他の同胞人類を殺戮して其地を奪はなければ立て行かぬ。だから戰爭は避く可からずと云ふ論旨であつた。

わたくしは之を讀んで、なるほど數字といふ者は馬鹿々々しい者だと思つた。俗物を脅かす道具としては便利だらうが、數字はいつも半面の眞だけしか語つてゐない。たとへば或國の政府が自分に都合の好い時だけ統計表を

發表する樣に、時々眞赤な嘘を吐くには至極重寶な者である。何でも天文學者が數字で計算すると、ハレイ彗星と地球とが數年前に衝突してゐて、人類は今頃もうとくに絶滅してゐた筈であつた。たとひまた此人口論を眞だとしても、之から百八十二年さきの戰爭に、今から何も刄を研ぎ澄まして置く必要も無からうではないか。今度の大戰に拂つた程の犧牲を惜まずに、また今から百八十二年かゝつて世界の全人類が懸命に智慧を絞り出して工夫さへすれば、さう云ふ恐ろしい世界の『末日』に、野獸の噬み合ひだけは爲なくても濟みさうな者ではないか。ちやうど全世界の石炭を消費し盡した揚句、これが代用物に心配した人が多かつた樣に、數字ばかりを土臺にして心配し始めたらば、物價騰貴の昨今、貧乏人の節季なぞは到底越せるわけの者ではあるまい。窮すれば通ずで、刄物三昧だけは又としないと云ふ殊勝な心掛さへあれば、數字の威嚇なぞ必ずしも驚くに足りないのである。

まるで不勉強な生徒を試驗場に引ぱり出したやうに、出來ない、出來ないの一天張りで、この世界文明の大理想の實現の爲に勇往邁進しない者は、惰に非ずんば則ち怯である。

しかし軍國主義の滅亡を象徴せる普魯西の末路を見て、直に地上に永遠の『羅馬の平和』（パクス・ロマーナ）が出來ると思ふのは、餘りに單純だ。また國際聯盟によつてたとひ武力による蠻人の蠻劇は無くならうとも、それで世界が平和になるとは思はれない。まだ吾々には大きな敵がある。個人としても或は國家としても益勢を逞しうせんとするかの淺薄なる利己的唯物思想こそ、更に恐る可き人類共同の敵ではないか。吾々が行住坐臥一日一刻も忘る可からざる最大の勁敵は是だ。

武力の爭鬪なからしむれば、是に代る可き者は即ち陰險狡猾なる猾智の徒であらう。理想主義者たるウヰルソンが、秘密外交をやめたいと云ふのも是

あるが爲めだ。また平和や人道を唱ふる外國政治家を疑つて、單に利己心を蔽はんとする者の虛構の言だと嘲笑し、自己を以て猥に他を忖度せんとするが如き猜疑心も、亦大なる障害である事は云ふ迄も無い。

人生は永久の戰ひである。生れ落ちた其瞬時から吾々は幾千幾萬の黴菌と戰つてゐる。吾々は兵器や猾智以外の新しい力を以て、國際的にもまた個人的にも、なほ多くの新しい戰を戰はねばならぬ。そして生活改造と新文明建設との爲に努力せねばならぬ。

六

口は重寶なもの、泥棒にも三分の言分はある。獨逸は神の國、超人の國、吾等は世界の選民だ。獨逸が世界を統一するは天意に出づるが故に、吾等が戰場に流す血汐は神に捧ぐる血だと、途方もない事を云つてゐた獨逸人も、

今度はいよ／＼目を醒ましたらう。むかしエナの戰に奈翁の鐵蹄に蹂躙せられて辛い目を見せられた其あとから、あの軍國普魯西が生れたのだから、今度の失敗だつて當てにはならない、第二のカイゼルがまた出ないにも限らぬと心配する人もあらうが、時勢の全く異れる今日、私はそれを一片の杞憂に過ぎないと思つてゐる。未來の獨逸政體が何であるにもせよ、獨逸人が民本化して普魯西主義の再び起つ能はざる事だけは疑はれまい。然くして成れる獨逸文明の將來は如何なる者であらうか。

獨逸人には露西亞人ほどに激烈な感情性が無い。たとひ變轉期に會しても露西亞人の樣に歷史の階段も踏まず國家をも超越して一足飛びに一本調子に熱中狂奔する者とは思はれない。理智に秀で秩序に慣らされ、科學的組織性に富む獨逸國民が、一朝にして今の露西亞の樣に收拾すべからざる無政府狀態まで急轉直下しようとは、先づ考へられない。

わたくしは普魯西の專制を離れた獨逸の聯邦が、是からまだうんと內輪揉めをした揚句に、各自由獨立を享有して、今日の米國四十八州の樣になるのではないかと思ふ。是は單に外面的な政治組織などに就て云ふのではない、其將來の文明の性質に於て、特に其形而下的文明に於いて米國と極めて近似した者となり、歐洲の中原に新しき合衆國文明の出現を見るの日の、必ずしも遠からざるを信じてゐる。

一口に獨逸文明と云つて北獨逸も南獨逸もごつちやに云ふ事は出來ない、普魯西思想を代表してゐた伯林(ベルリン)文明と共に巴威(バイエルン)の首府『藝術の都(クンストシュタット)』と云はれるミュンヘン文明のある事をも考へて見ねばならぬ。獨逸が惡いのではない、普魯西によつて統一せられてゐた獨逸が惡かつたのである。ワイマアの詩聖ゲエテが兇暴の民なりと罵つた普魯西人が怪(け)しからぬ者であつたのだ。伯林大學の講堂から歷史家トライチュケが宣傳した普魯西主義が世界文明の敵で

よりたのだ。その普魯西主權の憐れむ可き末路によつて、獨逸は、今や新しき民族生活を營むべく再生したのである、新生に入つたのだ、救はれたのだ、また致されたのだ。その未來には必ずや大なるを輝かさねばならぬ。普魯西統一の以前に歸りて、再び韓圖やゲーテの大天才を生むの日が無いと誰が云はうぞ。

獨逸人の堅剛な意志と組織的な頭腦によつて將來自由な民主制の下に建設せらるべき其新文明は、米國のそれと殆ど同一方向を取つて而かも尚更に一段の光彩を加へた者となるだらう。殊には勤勉性を以て國力恢復に注ぐ努力は眞に中外を驚歎するに足る者があらう、物質的方面に於ても、また精神的方面に於ても。

將來米化する獨逸は果してどんな者に成るだらうか。その見本が現在一つ既に立派に出來上がつてゐるのである。それは米國の市俄古である。また邊

一帶は米國中で最も獨逸人の多い所で、開戰後殆ど獨探の巣窟だと云はれた者だ。あの市俄古と云ふ市の猛烈な急速な進歩の現狀を考へると、わたくしは未來の獨逸も遂にあの樣な風になるのではないかと思つてゐる。市俄古の空氣がボストン紐育と全く異り、また南部諸州の都會とも著るしき相異ある所に將來の獨逸文明が聯想される。

米國が今日の國力を養ひ國際上の地位を得て、世界史上に類例なき急速偉大な進歩をしたのは、其特有の民主政治のもとに、完全の自由を享樂し、各州各個人が縱橫に驥足をのばし得た結果である。そして全く專制的劃一主義によらず、複雜のうちに歸一あり變化のうちに調和ある眞の國民的統一を全うし得たからだ。換言すれば米國は民主政治を以て專制政治の爲し得た事を完全に行つたからだ。殊に開戰以來の米國の狀態は、其國民生活が、何等の束縛制壓なしに各人をして自發的に能動的に結束せしめ、軍國主義的態度を

執るに極めて便なるを證して餘ある者があつた。

獨逸人には昔から驚くべき蠻勇があつて、意力があつて、また其國民的結束力が如何に強大であるかは五年に亘れる大戰によつて疲弊困憊の極に達してゐながら最後の一瞬まで結束を固うし歩調を亂さなかつた事で知られる。此蠻勇を揮ひ、此意力を用ひ、此國民的團結力を提げて、民本主義平和思想の文明を建設しようとする時、彼等の民族活動は眞に文明史上に一新時期を劃する事だらう。普魯西主義の滅亡によつて新しく獨逸人に與へらるべき新生活は、是こそ洵に鬼に金棒である。蠻勇を以て平和文明の活動に從事し、民主政治によつて軍國主義の實を擧げたこと、是が米國發達の素因であつたと同じく將來の獨逸國民も亦是と略ぼ同一の徑路を取つて進む事は今日に於て既にト知し得られる。

列國文化の發達と國力の現狀とを竝ぶれば、英吉利はまさに大學卒業後三四十年も經つた老先輩、金もあれば勢力もあるが、漸くその決斷こそが習ひの世の樣を見ては、さすがに老境を喞つ一片の憂心はあらう。光榮ある羅馬文明の正統を傳へ、中世の「ロオランの歌」以來の勇猛心を失はず、今も猶ほ明徹の智性と典雅優麗の文化を世界に誇れる佛蘭西も既に老熟の境に入つた。己の青年學生時代の花やかさを回顧しては、何となく物足らぬ心理もするだらう。また伊太利は其國民生活が既に頽唐の色を帶びて、氣焔揚らざる五十男の類か。このたび墺匈國を破つて少しは元氣づいたらう。露西亞は高等學校か大學の學生時代に、うつかり革命騷亂の放蕩に身を持崩して、是から果して改心する者か廢物になる者か、友人さへも心痛の種である。獨り米國に至つてはまさに是れ優秀なる新卒業生、親ゆづりの自然が與へて呉れた國富もあれば、自己の天分も豐かだ。年は三十歲前後の新進氣鋭の士、殊にかれ

自らの民主政治と人種寄合世帯の組織によつて、世界將來の新氣運と四海同胞主義との好標本を自ら示しつゝ、はては世界全體を一纏めにして各州獨立の合衆國組織にしようなど、云ふ途轍もない大望を抱いてゐる。後世最も恐るべきは此男だらう。現に此度も先づ主として自分の力で獨逸の軍國を破碎して置いて、直ぐ其あとから窮乏を救はんが爲め今度はまた二千萬噸の食料品供給を聲言し、フウヴアを歐洲に遣はしたあの遣口などは、正々堂々博愛人道を標榜して而も寸分の拔目なき此男の特色を遺憾なく發揮したもの、支那や露西亞にも此手で行かうと云ふのだ。彼は先づ他を利して己を利せんとする者。耶蘇坊主の法衣を纏うて前垂掛の機敏な商ひをする所は偉い。昔マホメットは片手に劍片手に經典で行つたが、二十世紀のアンクル●サムは、右手に聖書左手に算盤で世界を壓しようとしてゐる。ちよと他人には眞似の出來ない藝だ。さてまた獨逸は之を譬ふれば、大學の優等生、彼の頭腦が好く

て仕事も見事なのには久しく教師も學友も舌を捲いてゐた。が惜いよ／＼卒業論文と云ふ段になつて、一つ根本となる重要な判斷を誤つてゐた爲、論文全體が出來損つて了つて通過しない。もう一年原級に留めて論文は遣り直し。しかし此次にはさぞ見事な製作が出來よう。そしていよ／＼卒業の曉には彼の働き振りは、さぞや先輩師友の耳目を聳動するに足る者があらうと豫期せられる。

若し夫れ年若き新進國わが日本に至つては、こは是れ大學生か將た中學生か、優等的か劣等生か。勉強もするし品行も正しく、亂暴もしない代り、平和文明の戰後に神經衰弱の青瓢箪たらずんば幸ひである、

筆の序に書き添へたいのは、今度の騷ぎで著るしく男振を上げた米國大統領である。成程ヰルソンは偉い、偉いには偉いが、決して東洋人の東洋流の目に映ずる樣な、拔山蓋世式の英雄でもなければ豪傑でもない。前にも云つ

た通り。近代は一人の英雄や天才の仕事を千人の凡器凡才が補ふ時節だ。米國の如き特に其の極端なる者で、斷じて英雄の存在を許さない國柄である。すべてを群小衆愚の判斷と黄金力と機械力とで運轉してゐる國柄である。現に米人自身がヰルソンを以て當代第一の人物と考へてゐない事は、二度目のヰルソン選擧の時、私は米國に滯在して當時の事情を見て識つた事である。米國式民主政の國では、何と云つても群衆が總ての力の根源で、之れを左右する者は少數の親分である。此ボッスの力が更に一人の代辯者を動かしてゐるのだ。ヰルソンの背後には餘り世間の目に附かない此偉大な親分的勢力がいつも後押をしてゐる、それに又例の米國一流の囃子鳴物入で宇内に呼號するのだ。つまりヰルソンは賢明なる代辯者に他ならぬので、學者として頭腦が明敏な上に、口が達者で、おまけに文章が巧いと來てゐるから、代辯者として眞に申分がない。だから若しあの男だけを一人離して、例へば日本の樣な

國に置くならば、矢張りジョンス・ホプキンス大學の研究室で演習をしたり、プリンストン大學で憲法財政の講義をやり、文學歴史に關する著述をしてゐる一學究で終つたのである。さう云ふ學者をいつも最も巧妙に手際よく、あらゆる方面に利用してゐる者は米國だ。ヰルソンばかりではない、前大統領のタフトだつて、今はまたもとのエイル大學に歸つて、村夫子をしてゐるではないか。

米國はずつと昔から自由民主正義人道と云ふ立派な旗印を持つてゐる。殊に現代の世界の大勢に乘ずるに最も適合した、そして今世界中どこへ出しても一番幅の利く此旗印を、建國の初から幸ひ持合はせてゐた。即ちヰルソンは此旗印を掲げる旗竿となり、また旗手となるには最も適當した人である。それ以上の人でもない、またそれ以下の人でもない。政治家としては、英國を除いた歐洲の舊國や或は日本などに、多く例を見ない新型である。

獨國の降服に始まつた中歐側の土崩瓦解は思つたよりも急速であつた。また此冬をも越す事かと思はれた戰爭が意外に早く濟んだのは、いくたび思ひ返しても喜ばしい。殊に此戰爭の結末が勝利の平和でなくして『平和』の勝利であつた事に、大なる文明史的意義の存する事をも喜ばずにはゐられない。

歷史の軸は急速に廻轉する。平和同盟の聲を聞き、眼前に獨逸ユンカアー味の凋落を見るにつけても、嗚呼世昔日に非なり、澆季の世に、げにすまじき者は長生きよ。昔祈りし武運の長久も今はあだなれど、腰なる長劍うち眺めつゝ、喞ち給ふらむ翁(おきな)たちよ、幸ひに健在なれ。（大正七年十一月中旬稿）

大正八年二月十五日印刷
大正八年二月二十日發行
大正八年二月廿五日再版發行
大正八年三月一日三版發行
大正八年三月五日四版發行
大正八年三月十日五版發行
大正八年三月十五日六版發行

定價金壹圓七拾錢

著作權所有

著作者　厨川辰夫

發行者　大阪市南區安堂寺橋通三丁目五十三番地
株式會社積善館
代表者取締役　佃要三郎

印刷者　大阪市東區南本町二丁目三十八番地
澤田要藏

發行所
大阪市南區安堂寺橋通三丁目
振替大阪二九八一番
電話船場七十六番
株式會社積善館